

奇譚クラブ

新しい風俗文献誌

1965・1

絵物語「美女決斗吉田御殿」

川上米子
滝れい子 画



絵物語「今日と明日の報酬」

宇丸紫郎 作
四馬 孝 画

1 月 号

奇譚クラブ



1 月 号



定価 三〇〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



1 月 号

¥ 300

刺青女性緊縛フォト

モデル 山原 清子
塚本鉄三・撮影

先月号で始めて刺青女性の口絵グラビア並に分譲品を発表しましたところ、非常な好評で次々と発表してほしいという要望が強くありましたので、ここに其の後の作品を分譲品として掲げました。

入墨の高手小手

大手札印画紙焼付
三枚一組 三〇〇円
略号(いち)

華麗な刺青を目の前に見ながら後手小手の厳しい細目の女体を、ほしいままに視線で凌辱することのできる入墨女性の美しくも見事な背面裸像。

縄に悶える入墨

大手札印画紙焼付
三枚一組 三〇〇円
略号(いへ)

刺青を施したあらわな肌をうねうねとくねらせて二の腕に喰い入った高手小手縛りのままで足の指をくの字に曲げて悶える女。

足吊り三態

大手札印画紙焼付
三枚一組 三〇〇円
略号(いと)

後手縛りのまま両足を交叉さして両の足首を括って吊り上げた痛

さに、転々ところがつて逆エビの形となり、尚も身もだえする有様をキャッチした三態です。

剥れた腰巻

大手札印画紙焼付
三枚一組 三〇〇円
略号(いは)

腰巻一つで柱縛りをされていたモデルが、一つの間にやら熱が入ってきて、その腰巻もむさんにも剥ぎとられて、大きなお尻をふりまぎまのポーズをとるところ。

女一匹御意見無用

大手札印画紙焼付
三枚一組 三〇〇円
略号(いお)

白晒六尺褌一本の裸で、どっかとアグラを組んだ刺青の女の姐御っぶり。両手を胸で交えて、さあ女一匹、どうでもしてくれと居直って凄んだところ正面から。

玉取姫が凄む

大手札印画紙
三枚一組 三〇〇円
略号(いる)

目のさめるような鮮かな玉取姫の入墨が背中いっぱいに見事に彫られていて、その立派な背中の胡坐、膝立、立位と三通りのポーズ

にて凄んで見せてくれた。

全裸緊縛立像

大手札印画紙焼付
三枚一組 三〇〇円
略号(いに)

ライトに映える真白い全裸の肌にマニヤ垂涎の入墨がくつきりと浮かび上っている。すくく立って惜しげもなく身体の秘密を隅から隅までさらけだした緊縛像。

入墨ヌード

大手札印画紙焼付
三枚一組 三〇〇円
略号(いよ)

縛りなしの正真正銘の入墨を見せたヌード。はつきりと鮮明な構図を見せた刺青マニヤにとっては何ものにも替え難い珍品。

後手吊りの構図

大手札印画紙焼付
三枚一組 三〇〇円
略号(いは)

全裸の豊かな肉体に嚴重にかけられた高手小手の細目に吊縄をかけて引き上げようとすると、背中の入墨が、そのたびにまるで生きているようにあえかに動く。

黒細帯の裸身

大手札印画紙焼付
三枚一組 三〇〇円
略号(いわ)

入墨マニヤと黒フンドシマニヤ

日本髪愛好者などを目的に作成した分譲用専用フォト。鮮鋭なレンズによって背中の刺青も刻明に描き出しました。

黒褌を誇る

大手札印画紙焼付
三枚一組 三〇〇円
略号(いか)

細身の黒フンドシ一本にて、すらり立ち上った日本髪の入墨姿の粹なこと。特にこの種マニヤのために撮影した記念写真。

入墨自慢

大手札印画紙焼付
三枚一組 三〇〇円
略号(いり)

お尻の割目にまで彫り込まれた刺青を二つに割って喰い込んだ真白い晒フンドシ。堂々と腕をくんで、くると背中を見せた今年二十才の姐御の心意気。

〔後記〕——今月新しく分譲品として加えました「刺青女性」の写真は極めて文獻的価値も高い趣味性に富んだもので、十二月号と今月号のグラビア・フォト、並に十二月号の本文カメラ・ハント(辻村隆)新年号の緊縛フォト撮影の実際(塚本鉄三)にも詳細掲げておられます故御参照の上、お気に召しましたら、何卒お注文下さるようお願いしております。



奇譚クラブ 1月号 目次

K氏邸での撮影

塚本鉄三撮影構成
モデル：山原清子

- 一、外出着姿のモデルを庭園の樹に括る
三方よりの異ったカメラ・アングル
- 二、植込みの中の引直し風景と縁側より眺めた
庭園の緊縛女体風景
楓の樹幹にさらされるモデル
- 三、軒下での縛られ艶姿
- 四、縁側にての長襦袢緊縛模様
- 五、庭先での遠、中、近景並にアップ
- 六、室内にて後手吊りにて弄ぶ
- 七、緊縛表情スナップ集
おすまし「いやだつてば！」はにかみ「くすぐったいたら！」
ながし目「どう？このポーズ」放心忘我「大分疲れたワ」
- 八、樹間に美態をさらす女

◆奇クサロン◆

編集部編 (25)

○読者の会々……結果子 (25) ○女優感動物「野淵晴子の逆さ吊り」……東山
映史 (26) ○映画通信「日本拷問刑罰史」を見て……砂川益夫 (27) ○私の描っ
た写真八巻をモデルとして……小川明 (28) ○オリンピックと洗腸……洗腸好
手……高橋秋良 (31) ○サロン実我記……辻村隆 (32) ○夢のアルパ
ム△SM夫婦の友を求む△……高松志朗 (33) ○11月号グラビヤ難題……沼
田……○世相診断……木戸川健 (35) ○同好夫婦の方々へ「私達はSMプレイ
夫婦」……長谷好志男 (36) ○洗腸に憑かれて……白鳥英雄 (37) ○女性美から
みたビニールとよんどし……闘士野太 (38) ○落城の女「腰元たちの切腹」……
飯森漢○辻村隆先生に会うの記……M七〇生 (40)

絵物語 美女決斗吉田御殿

川上 米子 (41)

絵物語 今日と明日の報酬

宇丸 孝郎 (53)

小説にあらわれた「殺し」の場面……黒田 寿 (68)

異常体験記 一つの転記 (珠江抄)……保藤 久人 (74)

〔告白体験〕 嫁母という名のサジスチン……白木 近子 (86)

SMカメラハントM七〇生「鼻責の記」辻村 隆 (92)

△体験△蛇のような革帯……福田 久文 (111)

新連載サディズム小説 心傷たむ遍歴
婦人留置場の女達……西条 操 (118)

女性鼻責考……生田 二郎 (131)

兄と妹の手紙 娘相撲について……海野美津男 (139)

団鬼六先生へ 続「花と蛇」に関して……佐土 良志 (136)

ガン作マニヤのノート 濡れにぞ濡れし……芳野 眉美 (144)

(体験記) 睡眠薬洗腸……栗瀬 長 (146)

切腹研究夜話……中康 弘通 (151)

女子寮とテープレコーダー……高木紀久枝 (155)

女体解剖異聞……高野 原美 (158)

連載小説 花と蛇 (続篇第三回)……團 鬼 六 (171)

私のゴムプレイ 嵐の中のゴムマント……梅川 幸子 (181)

かすひこのノートから
私はこの味覚に屈伏する……とやま・ かつひこ (191)

緊縛フォト撮影の実際

K氏邸での撮影……塚本 鉄三 (199)

読者通信……編集部選 (200)

四馬孝画

倒錯美絵画集

大判判印画紙極鮮明焼付秘蔵版画集

今まで発表しました四馬孝描く分譲画集の好評に刺戟されて、ここに三度、口絵として掲載できない各傾向マニヤ待望の秘蔵版を追加発表いたします。

「花と蛇」画集

大判判五枚一組 一〇〇〇円 略号(えに)

京子に芸を仕込む鬼源

椅子の上に立縛りにされた京子は、坐りもならず歩きもならず中腰のまま鬼源に美しい鼻を摘ままれて可愛い口を開けた。

静子令夫人の汚辱

豊かに脂づいた輝く裸身を床の上にじかに投げた静子の顔に、嘗ての使用人であった川田の汚れた足がべったりと掩った。高い鼻を足の指で弄ぶのだった。

擦り責めにあう美津子

両手を揃えて吊られた美津子は腋の下を男の目の前にさらけ出して、ハゲでそろりそろりと擦られる全身燃え上るような擦ったさ。

片足挙げ縛りにされる桂子

鉄平石を敷いた冷ややかな土間に身動きもできぬ厳しい後手の高縛りで片足を挙げさせられた桂子は、さつきからたまらない激しい尿意と必死に戦っていた。

粗相を強要される京子

恥しいオシメカバーをはかせられた京子は、その中へ粗相をせよといたぶられている。限界まできた排泄を耐えている京子の苦悶。

女体吊責め特集

大判判五枚一組 一〇〇〇円 略号(えほ)

弓吊りローソク責め

両手と両足をそれぞれ左右に振り分けて弓なりに反るように吊られた女体の背中には、数本の火のついた蠟燭が立てられている。

エビ縛りの吊り

捕えて括られた両足首が顎につくほど折り曲ったエビ縛りのまま背中と鼻の先とで宙高く吊り下げられた女体の嗜虐的な美しさ。

股間縛り吊り

一本の棒のように頭から足首までガンジガラメに縛られた女体のタテに掛った股間縛りの縄で高々と吊り上げた素晴しい吊責め。

舌の先吊り

炭火がカンカンにおこった石油缶の上に両手を吊られた美女の舌の先を挟んでじりじりと吊り上げて、ゆく。上と下が同時に責められて、尚美しさを失わぬ女性。

鼻孔吊り

太いシニコ縄で後手首股間縛り吊られた美女の鼻孔に通した鉄線を吊って、女の顔を上へ向かせる素晴しいシーン。

浣腸と排泄画集

大判判五枚一組 一〇〇〇円 略号(えい)

恐怖の浣腸台

身動きもできぬように四肢を固定することのできる浣腸台に据えられた美女は恐怖の眼を大きく見ひらいて、目の前に釣ってあるイリガートルをにらんだ。

浣腸のあとの楽しみ

たっぷり浣腸液の御馳走を与えた上で、両足をいっぱいひろげて吊られた美女。男はそのあとの楽しみでわくわくとしていた。

百CCの浣腸

ガラスのシリンドラーでグリセリンを注入した男は、床の上に敷いたビニール布の上に美女をかかまて時の経つのを待った。

塩水をヤカンで飲ます

後手に縛られた美女は、只男たちのなすがままだった。鼻をつままれ、開けた口には塩水がヤカンから無理矢理注ぎこまれた。

排便を耐える美女

両手を万才の恰好で吊られていないので、もうどうすることも出来ない。煮えくりかえるような便秘が彼女の全身をふるえさせる。

美貌汚辱と鼻責

大判判五枚一組 一〇〇〇円 略号(えは)

鼻をなぶる

いい恰好の鼻だなあ、と両手の自由のきかない美女の顔を左手で抱え込んで、右手の指で女の鼻を粘土細工のように弄ぶ。

鼻毛を抜く

美しい女の鼻の穴を上向けさせて一本一本鼻毛を抜く。これで五本だなあ、あと何本抜けるか。

口中をほじくる

可愛い子だ、おとなしくしていろんだ。舌の先で美女の口中をさぐる。可愛い舌に真白い歯。咽喉の奥まで老人の触手は隅なく腔中をほじくる。

泥絵具の顔

お前の美しい顔は、俺のキャンパスだ。白い顔に、俺の命である顔面に、男の手にしたチューブから赤の泥絵具がべったりとつけられる。鼻から口へかけて。

ラーメンを食わす

仰向けに縛られた美女の顔の上の、男は箸にはさんだらラーメンをのせる。口から溢れて鼻の穴へまで入りこんでゆく。



































ここ数カ月のあいだ、私は数多くの読者のかたがたと、親しく逢う機会を持つことができた。今年の秋に刊行する予定で準備をすすめていた臨時増刊が、四囲の情勢から中止ときまって、幾分時間的に余裕ができたので手始めに、一人二人と逢っているうちに、いつの間にかやらかぞえて十数人になつてしまった。

二部上場会社の経営者や私立大学の教授、或は多くの作品を発表している有名な画家、開業医や病院勤務の医師、女性では家庭の主婦やビジネスガール、芸妓にバーのマダムといったところ。やはり若い男性では、会社員とか店員それに公務員とかが多かった。中には中小企業の経営者で十数年もおつきあいしている方もあるが、多くは最近新しく通信をいただいで

から知り合いになった人たちである。

手紙では大変詳しく書いてくれたのに逢ってみると無口であったり、通信で予想しているのと違つて饒舌の方であったり、通信とか手紙とかいう文章から受けとるのと違った啓発を受け、大いに参考になったと喜んでゐる。一様に皆、眞面目だと思われくらゐ眞摯で、明るく常識的だという感じを受けた。そして、平常鬱積したものを吐きだすように、いろいろと隠しだてなく話してくれた。他の人だったら、こんなことは話せないのだが、貴方にだけはと

胸襟をひらいてくれたので、初対面でありながら、十年の旧知のようになつてゐたものだ。

本誌を毎月楽しみに読んでゐるという二十三年になるBGの方なんかは、特に気に入つた写真や絵それに文章なんかについて、自分の読後感をまじえて語ってくれたときなんか、自分の考えてゐるのと予想外のことがあつて、今までの編集態度を一考させられたものだ。毎月雑誌を求めに行くときの苦労などを直接聞かせられると、微苦笑を禁じえなかつた。

僅か十数人ではあつたが、読者の方々と直接膝をつき合はして語りあつた経験が、ほんとうに人間の温かい気持の触れあいというものが感じられて嬉しかったので、一つ身近かの人達の会合というものを試みたら、どうだろうかと思つてみた。どうだろうかと思つてみた。

静かな喫茶店の一室を借りて、四、五人の会合を持つのも楽しいし、お茶とお菓子だけで二、三時間の余暇をさいて煩瑣な世事を忘

れて趣味の話題に没頭するのも、又有意義だと思ふ。それを記事にするとか、いうのではなくて何の目的も持たない雑談は肩がこらなくて愉快なものだ。大人数であるといろいろと準備も大変だし、出席者各人の発言の機会も少くなることだから、小人数が望ましい。

先ず手はじめに、私がお逢いした人達の意見をきいた上で、気心の合つた者たちだけで会合を持ちその成績を見た結果によつて、漸次いろいろなグループの会合に及ぼして行きたいと思ふ。

君子の交わりは水如し、ほんとうの意味での紳士淑女の集いとして、何の野心も持たない酒なしの読者の会合といったものは、どうだろうか。中には酒がないとうまく話ができないと言う方もあるかもしれないが、酒の勢で喋つたことなんか、どうせ大したことはいだらう。

その下ならしの意味からも、私はこれから時間のゆるす限り、読者の方々と接触する機会を持つと思ふ。そして、それらの人達の間で楽しい会合のひとつときが持たれるよう努力したい。直接記事にならなくとも、必ず本誌のためにプラスになることを信じて――。

読者の会合

編集子



女優残酷物語

鰐淵晴子の逆さ吊り

東山映史

鰐淵晴子といえば、日本の女優界の清純派の代表。ところが、松竹京都作品「コレラの城」

(監督菊池靖)では、筒そですがたの男装の姫君役で登場、そして宙づりにぶらさげられてゴウ問を受けるというまさに美女残酷物語である。

ナゾの秘宝を求めて、コレラの城下町にやってきた浪人者(丹波哲郎)が、山の中で不思議な少年(鰐淵晴子)に出会い、女とわかって正体を白状すためにゴウ問する。水車小屋の天井より荒らナワで逆さにつるし、逆さ吊り責にする。このウソの許されぬゴウ問という激しい場面だから、菊池監督も丹波も

「ここは晴子ちゃんには無理だ。吹き替えてうまく処理しようよ」

と最初からあきらめていた。ところが、当の鰐淵は「大事な場面ですし自分でやります」といったという。

かてて清純派、鰐淵に、逆さづりの刑が執行された。鰐淵の両手は荒縄で前手縛りにされ、その縄で、両足も縛られた。そして、その縄をハリにひっかけ、丹波はぐいぐいと引いた。それにつれて、鰐淵の身体は、足の方からぐいぐいと吊りあげられていった。そして、ついに、頭を下に逆さづりにされた。

本人よりまわりの方が心配して「大丈夫かい」とワン・カットごとに心を痛めながらの撮影ぶり。ことに、執行人の丹波は「どうも腕がすぐむよ、男なら平気だが女性をいじめる弱いね」と、フェ

ミニストぶりを発揮していた。それでも、いざ本番となると、手をゆるめず、ぐるぐる回したり左右にふったり、ハラハラするゴウ問ぶり。

「丹波さんがナワをゆるめて頭を床におっつけるところでは、三回くらいゴンゴンといっちゃってどうしようかと思いましたが……」と、けなげな女優根性ぶりだった。

それだけに、そのシーンは迫力があり、じっと、そのゴウ問にたえしのんでいる痛々しさは観客の胸を打った。

この作品では、鰐淵のゴウ問のほか、二、三の惨虐シーンがあった。

最初のシーンの汚ない女郎屋で一人の女郎が、まっばだかにむかれて、地面の上にころがされている。そして、ムチ打たれ、ふみにじられている。これは逃亡しそこなうて捕えられた女郎のリンチである。まだこれからという所へ丹波が現われてやっと思けられる。ついで、秘宝のありかを知っている城大工に白状すために葵京子の扮する、その娘が縛りあげられ、スマキにされて馬に縛りつけられて運ばれてくる。馬からおろ

され、ムシロをほどかされると、前手縛りの女がころがり出てくる。そして、コレラで死んだ老若男女の間に閉じこめられ、ついに狂女になってしまう。

そして、最後の美女大量吊り下げシーンは、女郎屋での四人の美女緊縛吊り下げである。悪党どもが、城へ秘宝を取りに行っている間に、彼女らが逃亡しないように腰巻一枚の半裸にむかれて、天井から両手を荒縄で縛られて吊り下げられている。

一寸ハッとさせられるシーンであつた。豊満な乳房をプリプリさせながら吊り下げられているシーンは見たえがあつた。

次の企画作品に、芥川竜之介作の文芸作品「地獄変」がある。

これの見せ場は、御所車の中でクサリで縛りあげられた十二単衣の美女が御所車とともに、焼き殺されるシーンである。それを、その娘の父の老絵師が、芸術家的良心で描くという。監督は大庭秀雄。この焼き殺される女優はまだ発表されていない。「三匹の侍」の桑野みゆき、「暗殺」の岩下志麻の石抱きのゴウ問、ムチ打ちなど、女優残酷物語はつづきそうである。

「映画通信」……砂川益夫

「日本拷問刑罰史」を見て

今までにK誌上の映画通信欄で見た映画はすべて見に行きました。が、見たいシーンはほんの一寸でいつも期待を裏切られてきました。が最近の映画では「白日夢」のシーンに満足して二度も見たいものです。而し、「日本拷問刑罰史」は今までのものとは格段の差があり、今でもあの場面を思い出すと胸が高鳴ります。

映画が初まると同時に戦乱の後捕えられた城主が磔にされ、股からのどにかけて串ざし、口の中に槍の穂先が出ている様は、見ていて気分が悪くなる位でした。同時に捕われた奥方は家来や子供と一緒に生埋めにされます。勿論きびしく縛られたまま首だけ出して泣き叫び、その前で家来が鋸で首をひき切られるシーンがあり遂に奥方は舌を嚙んで死んでゆきます。一方では捕えられた武将が戸板に仰向けに大の字にされ、手と足を五寸釘で止められ口の中に刀を突っ込んで殺されます。キリシタン教徒に加えられる残酷な責めは

磔を初め数多くありますが、その中に逆さ磔の刑が見られます。又火付けの容疑を受けた娘が拷問されるのがあり、これは美しい娘が腰巻一つの裸で太いロープで後手に縛られ、その縄尻を二人の侍が左右に引張りもう一人の侍が割竹で打ち据えます。娘は転げまわって苦しみなながらも「火を付けたのは私じゃない」と言い張りますので次々と変った残酷な拷問が加えられます。先ず逆エビの吊り責めが初まります。厳しい後手に足首も縛られ、その上背中中に大きい石を縛りつけられて、じりじりと滑車で吊られ青竹で打たれます。それでもまだ白状せぬとあって、吊ったままの娘をぐるぐる回して吊り縄をよじり、手を放すと一段と早く逆に回りひどい悲鳴を上げるシーンなどは正に最高といえましょう。(駿河問いという)

次に石抱きの刑といってK誌でも発表されましたが、腰巻一枚の裸女が乳房もくびれる位にきびしく縛り上げられ三角の木を並べた上に坐らされ、ひざの上に大きな石が一枚二枚とのせられ、その上侍二人がその石を揺するのです。遂に苦しさに堪えかねた娘が無実でありながら火付けの罪を認めるのです。刑が決って本縄姿の女が裸馬にのせられて江戸市中を引回され、火あぶりの刑に処せられます。火刑の時の縛り方は特に念入りで、前から横から後からと、はつきり写し出されます。火を付けという役人の命令で非人が三人、縛られた女が見えなくなるほどワラを積み上げて火を放ちます。

場面が変わって、これも腰巻一つの裸女が高々と後手のまま天井に吊られ滑車の音と共に下ってきます。その下には三角の横木をのせた木馬がおかれてあり、その木馬を跨ぐようにのせられます。そして両足首を縛って大きい石を吊り下げられ一段と大きい悲鳴を挙げて苦しみます。この場面など実に凄いです。そしてそのままの姿で長い間放置されます。

又強盗に入った若い男女が共に捕えられてエビ責めにあうのであります。男女共素裸で後手縛りでアグラを組んだ足と顔とが一つになる位に前に曲げられて太いロープで縛られ青竹で打ち据えられます。次に主人の留守に手代の若い男と密会しているところを突然帰ってきた主人に見つけられ、男はその場で斬り殺され、女は腰巻一つで両手を高く吊り下げられ、ワキの下や乳房をローソクで焼かれ果ては不義は御家の法度とかいつて三段斬りにされてしまふ。

ラスト近くになって幕末の頃、勤王派の侍を逃した女が居所をいへと責められる場面があり、これも腰巻一枚の裸で後手に縛られ割竹で打たれ腹部を棒の先で突かれたり、次には腹に二まきしたロープを二人がかりで左右に引張り腸が飛び出すかと思う位締め上げられたり井戸ばたにつれてゆかれ仰向けにされ水をかけて責められ、猪吊りにされ遂に打首になって翌日は生首をさらされます。

この映画はK誌ファンの好みの場面が、はつきりとしかも一時半の長時間たのしませてくれます。拷問あり私刑あり、串ざし、磔、火あぶり、生首さらし、エビ責、逆エビ吊り、猪吊りとあらゆる責めが若い美女の腰巻一枚の裸身でにくりしいまでに楽しませてくれます。あんまり私の胸を打った映画だった為、K誌ファンにお知らせいたします。

私の撮った写真

妻をモデルとして

小川 明

毎月奇クお送り下さるため、書店へ出向く煩しさがなくなり感謝いたしております。責詰は色々な制約のために、グラビヤ写真にかつてのような生彩を欠いているのは残念ですが、読者の皆さんの体験発表は楽しく拝見させていただいております。

私も先輩諸氏をまねて、SMフトなるものを作っておりますが庭も満足にない町中のこととて、庭でバックを変化させて撮ることも出来ず、狭い室内で妻をモデルにお茶をにごしている次第です。幸い妻(二十四才)も協力的ですし、写真の仕上げはすべて自分



37年10月撮影

フジカ6、ストロボF8、ミクロファイン現像、月光3号コニトーン



38年3月撮影

フジカ6、ストロボF8、ミクロファイン現像、月光3号コニトーン



39年5月撮影

マミヤレフF56 1/25 ミクロファイン現像、月光3号コニトーン

史上最大の東京オリンピックも無事幕を下ろし、連日テレビの前で、その勝敗に一喜一憂し、その

浜 浣 好

オリンピックと浣腸

若々しいエネルギーに陶醉し、そして若人達の逞しい肢体に見惚れていた私もホッと一息。その疲れを一夜のエネマ・プレイで癒しつつ、オリンピックと浣腸について考えてみた。古橋広之進が続々と水泳の世界新記録を樹立していた当時に、氏の談話に「千五百米の競泳中、七・八百米位になると、

肛門が弛み水がゴボゴボと浸入してきた、浣腸をされている様な気が持た。」とあったのを憶えている。後日、サトウ・ハチロー氏が天皇陛下に、その話を申し上げ「その水を最後に肛門より噴出してロケットの用をなすから、彼は早いのだ。」と語ったそう。又ボクシングやウエイト・リフティングや柔

道等計量を要する競技では、減量の為、蒸し風呂や食事制限をするのだが、最後の計量に際しては浣腸もするのでは無いだろうか。又明日の競技を控えて、練習の後、たっぷりと浣腸し、すがすがしい気持ちで決戦の日を迎える選手もいるのではなからうか。

でやれますから、気がねなく写しております。最近8ミリで動きのあるものを写していますが、現像所へ送付する関係上あまり大胆な

のは気がひけて撮れません。室内ですので、多くストロボー発式で写しましたが、ムードが欠けるため、最近では自然光で写す

アサヒペンタックスF4、自然光、1/25 月光3号



39年2月撮影

ように努めております。

同封の四枚の写真はここ三年間に撮影したものです。妻の意向もあり、いずれもバックスタイルばかりになりましたが、変わったものは次回にでも送付したいと思っております。

(一)、は初めて腰ヒモで縛ったものですが、妻も初めてでもあり馴れていず堅いポーズのものになりました。(二)、は白い荷造りヒモで縛り、SMフォトラしい雰囲気にしらえた最初のもので、この頃になりますと、妻も大分馴れてスムーズにゆく様になりました。(三)、は無理にメンスの時にパンネットを着用させたまま写したものです。(四)、は自然光で撮った最初のもので、以上四枚、バックは同一で、モデルは貧弱な体の子供だま

しの様なものですが、初歩の作品として割引いて見て下さい。

最近号でモデル嬢が革製のパンツを着用しているものがありましたが、私も妻に着用させたいと思いますので、良心的に作って下さる方を御紹介下さいませんか。余り高価では手が出ませんが、新しい試みとしてやってみたいのです。作る方に直接お会いできれば当方に気に入ったものが出来ますが、遠方の方なら、サイズや図で示しそちらにおまかせしてもよいと思っております。

当方の希望いたすものは、革製のパンツ、バタフライ、サルグツワ、乳房を締めつけるもの。

(名古屋市八小川明)

戯筆

牧 高志 文・画

『振袖のオリンピック』



兎も角、世紀の東京オリンピックも無事に終了した。身近かな東京に居って2週間の間朝から晩まで、あの競技この競技と、が鳴りくり立てられるにはいささか閉口したが、その中でシートと一瞬静

まる静寂なひとときが必らず一つ加えられてあった。それは申すまでもなく表彰式というシーンで、しかもこれにはご承知の通り、ぐんと日本的な四人の振袖姿の日本女性(すなわち誘導役一人、メダ

ルの盆持三人)が出演して、うやうやしく奉仕したのである。専門家の眼ではないが私なりの批評を下すならこのアイディアは往年の御大典の五節の舞姫の如く熱ぼったい競技の熱をさますのに大いに役立つ只一つの優雅なものであり、オワシス的なオブジェであって私は終始文句なしに好感を抱いた一人である。

処が残念なことにカメラでとらえた彼女らの振袖姿は後ろ姿は別として余り上等なものではなかった。第一に長い振袖の袂から見えつかくれつする長襦袢は白系統なものであり、折角胸高に背負い上げたふくら雀結びの帯もひどく控え目に結んだアクセサリーの帯揚げで、一向に引立ってはいなかった。どうせ着付が自分で出来ないのなら、思い切ってお正月か結婚式のおよばれに出席するような派手さが欲しかったと思う。

確かに某外人選手の眼はメダルを授与する老骨の禿頭よりも、メダルを捧げ持つ振袖を着た黒髪の日本女性にひかれていたように見えたとし、ごった返えす選手村でも不用意に着て来たきもの姿の日本女性に彼等は反射的に「おお、ワンドフル！」を繰り返していた

——という事実から逆算すると、私はオリンピックの施設が驚嘆に値する画期的なものだけに初登場したこの動く日本女性の美術品は是非とも全世界にアッピールするものにしたかったのだ。

成程風の吹きまくる屋外競技場には振袖には大いに不向かも知れない。白い脛を惜しげもなく大股に活躍して勝利台に立つ快漢も女性なら、一陣の風に裾のひらくのを右手で押え、左手でメダルの盆を捧げてくるのも同じ女性なのである。よしんば着物の裾が無常の風で乱れ赤い鹿の子の長襦袢がひらめき、ピンクや赤の裾除やお腰に包まれた白い内股の脛が万余の観衆の前にチラつく……といった風景だっけ決して野卑なものではなくアトラクションとまで行かなくとも、大いに歌麿調であり日本色豊かにフィールドの花となったのではないかと心中秘かに思ったことである。

その根柢の一つとして蛇足を加えるなら、今日的な日本女性は一〇〇%パンティの所持者であり裾除はあくまでキモノのためのものであって江戸時代に羞恥の極であったいわゆる肉体のための腰巻を毫も意識しないからである。否、

序でにもう一つ重ねて蛇足が許る
されるならば、いかめつく筋骨も
たくましい優勝選手その毛むくじ
やらも物かは、振袖姿の二の腕も

あらわに四人の乙女で空高く胴上
げする……そんな馬鹿な——と仰
言れば反対に今度は胸高帯の振袖
姿の乙女の代表を手を取り足を取

って三人の優勝男が手玉に空中に
ぶっ飛ばすシーンだってあっても
いいんじゃないかと至極不遜にも
思うのである。何故なら由来天女

の羽衣は何も三保の松原に限った
ものでもあるまいから……。



〔高橋秋良〕

ジョッキングな鎖の大陸

—裸と鞭—

雨にも負けず、風にも負けずと
いう詩があるが、雨が降っても槍
が降っても見たい様な映画が、新
に公開される総天然色イタリヤ記
録映画「鎖の大陸」だ。

尚奇ク愛読者の為に一言いえば
「勇者にのみ佳人はふさわしい」
とするサドファン必見の映画なの
でもある。

先ず、文明の発達した現代社会
において、何故人間が水汲みなる
動物以下の重労働の機械として、
或は性的快楽の道具として売買さ

れるか、奴隷制度存在の意義をこ
の映画は、絵で見る如くりアルに
然も非情に回答している。即ち一
部石油成金どもと、大多数な貧し
い原住民の極端な対照が原因なの
である。

殊に教育設備に恵れない原始社
会では富の支配が絶対的なので、
そこから鎖でつながれた人間の首
を切り落すジョッキング・シーン
も日常茶飯事として現れる。その
奴隷制が今も生き続けている地域
はアラビアを中心とする回教圏と

アフリカ大陸で、奴隷を買うこと
が実に容易なら、値段も品物同様
まちまちで一人前のグラマーにつ
いて塩パン百個だとか、空ビン八
十本だとかいうような途方もない
安値が通用しているばかりか、セ
リ売りされる新妻を夫に代って抱
く事も可能なのである。

全て背に腹は代えられぬとする
無知のせいであるが、最も悲惨な
実例として描かれたポロロの遊牧
民プール族は、どこか金と地位を
得る為には何でもする根っからサ
ラリーマン気質の日本人と良く似
ている。

プール族はアラビア人の家畜の
番人として採用して貰う為に、お
互い鞭打ち合い、最後まで耐え抜
いたものが、主人の前で跪まづき
奴隷として奉仕させてくれと懇願
する権利を得るので、「百聞は一
見に如かざる」鞭打による条痕、
みみず腫れ、時には死をさえ厭わ
ない。

その他アフリカの様な未開の地

でなくとも、ネオンが輝き、ビル
が立ち並ぶ所、中近東のベイルー
トやその他の都市に、ストリップ
や奴隷売買は公然と生きている。
然も買漁りは、ハレム用の妻妾に
女なら白黒を問わない。結果スト
リップ劇場に見せかけた「奴隷市
場」では裸に剥かれた娘が体を限
なく点検され、更に唇から白い歯
並迄確められる。

一方皮肉な事にハレムに自ら志
願する白人女もあれば、奴隷輸送
やメツカにユダさながら暗躍する
奴隷商人もいる。

以上はいずれも暗い残酷な事実
なのだが、反面鞭に責められる美
しいストリップパー、年中固い蕾の
処女を満腹する太守等優しく明る
い素材もある。

かくして巻末、鎖の大陸インド
に象徴される閉された黒い魂の叫
び、路上で人体火葬された彼等祖
先たちの苦しみは、今や救い難き
人類の罪を白日の下に曝したので
ある。

サロシ楽我記

(第七回)

辻村 隆

「ショック」というドキュメント映画を見ると、サジスト陳列館のシーンにのみ「ショック」の名を冠した様なもので、このシーンを除いては、「ショック」らしいシーンとは殆んど皆無といってよい。つまりショック、イコール、嗜虐趣味ということになるらしい。

この映画の圧巻は、矢張り何と云っても、大きな回転木車に、両脚を縛られて両手で把手を握った女が、木車の回転と共にぐるぐると転回するシーンである。木車の下には、鋭い歯が一面に植えつけられていて、手を離すと、女の体は忽ち歯で引裂かれてしまう。苦悶と恐怖がありありと女の顔に現われており、豊かな胸スレスレに歯が迫り、手をゆるめても、皮肉に歯が突きささる仕組である。

首吊りの瞬間シーン。絞首刑の俯かん撮影。籠の鳥同然の、極に閉じこめられて宙吊りにされた女に、容赦なく腐った卵を投げつけるワンカット。後手に縛られたマ

ゾ男が、床を舌で舐めはいづり廻るシーン。椅子に縛りつけられた男に、見物の女達が、松明の炎を裸身に近づけて、肌を灼くシーン等——。こんな、嗜虐、被虐を堪能させる陳列館が、日本にもあれば、嗚かし愉快だろうと思った。

× × ×

青木順子「ショック」刺青女性

鼻責めに憑かれた男M七〇生

と斯うした、一連の私のカメラ・ハントを、多少の潤色を加えて、シネに編集して行けば「奇譚残酷物語」も決して夢ではない。むしろ、前記のサジスト陳列館のシーンで「ショック」という題名をつけたこの映画より、遙かにショックなシーンの連続であることは間違いないと自負するのですが如何ですか——。

× × ×

青木順子さんの後援会のお申込早速沢山あって、私自身、反響の大きさにと迷っているのですが、五日間から一週間ぐらいで、旅か

ら旅をかける二人の、現在の旅廻りの環境では、連絡も途絶え勝ちになり、どの様な方法、形式で後援会を作ればよいかと目下思案中です。十月中旬、仙台市のリド・ミュージック劇場出演中との連絡があったが、関西へ来次第青木順子さんの意志を十分尊重した上で決定して、詳細をこの欄に発表致します。

× × ×

十二月号で発表した刺青の女性山原清子さんのレポートで、肝心のあの華麗な刺青の故事来歴を説明するのを忘れていましたので、一寸附言します。

既に御承知の如く、図柄は「玉取盤」ですが、一勇斎国芳や芳年の浮世絵でも有名(但し、国芳、芳年の絵は竜でなく大蛇になっているが——)。

天武天皇の頃の物語で、藤原不比等が、唐の高宗皇帝から贈られた珍宝を奉じて、唐からの帰途、大嵐に遭遇し、海神を鎮める為、讃岐の志度の海にこれを投じた。しかし失なった珍宝を取戻す為、志度の下ったが、三年の歳月を経ても海底の玉は戻らず、途方にくれていたが、いつしかその間に、志度の浦の海女と結ばれていて、

二人の間には男の子まで生れていた。最愛の夫やいと子の為、浦きつての練達の海女の彼女は、健気にも死を覚悟して海底に潜った。玉を掴んだ時命綱を探し求めやがて合図があつて上つて来た彼女が息も絶え絶えに白い肌を鮮血に染めていた。胸は無惨な傷でえぐられていた。竜神から奪い取った宝玉を、われと我が胸をきり裂いて隠し、やがては彼女は夫の腕の中で息絶えたのだった。

屋島寺には「玉とりの像」があるし、志度寺には二人の間の子、房前が建てた塔と経塚が遺っている。

こうした、故事来歴を知って、この華麗、ゴージャスを極めた極彩式の刺青を見て戴くと、山原清子の刺青は、更に一段と興趣を添えていただくのではなからうか——。

国芳の浮世絵に賛をした、花笠外史の模詞を、山原清子にその俣贈ってその刺青をたたえよう。「玉の盃底なしとぞ。色に迷うが玉の瑕瑾(きず)、出世をねがう玉の輿、おくる玉章玉りつみ、玉の家号の玉揃い、玉を欺むく顔、(かんばせ)は、あたりまばゆき光にて、竜の腮(あきと)の玉よりも、意を得るこそ難かりけれ。」

夢のアルバム

高松志朗

SM夫婦の友を求む

毎々奇クを愛読し楽しい日々を過しております。私達は夫三十四才妻二十六才の夫婦ですが、人知れずSMプレーを楽しみ、結婚以来数年、未だに倦怠期を知らず、変化と愛情に溢れる希望ある生活を送っております。

その生活の芯になるのが、矢張り奇クであるのは、言うまでもありません。幸い独身時代から二人共カメラが好きだったので、結婚以来六年間、写したフोट作品も今では大型アルバム三冊に、ぎっしりと埋まっております。いつも

ポーズは奇クがお手本になっております。

このアルバムは私達のみが知る愛の作品だと自負しております。現在

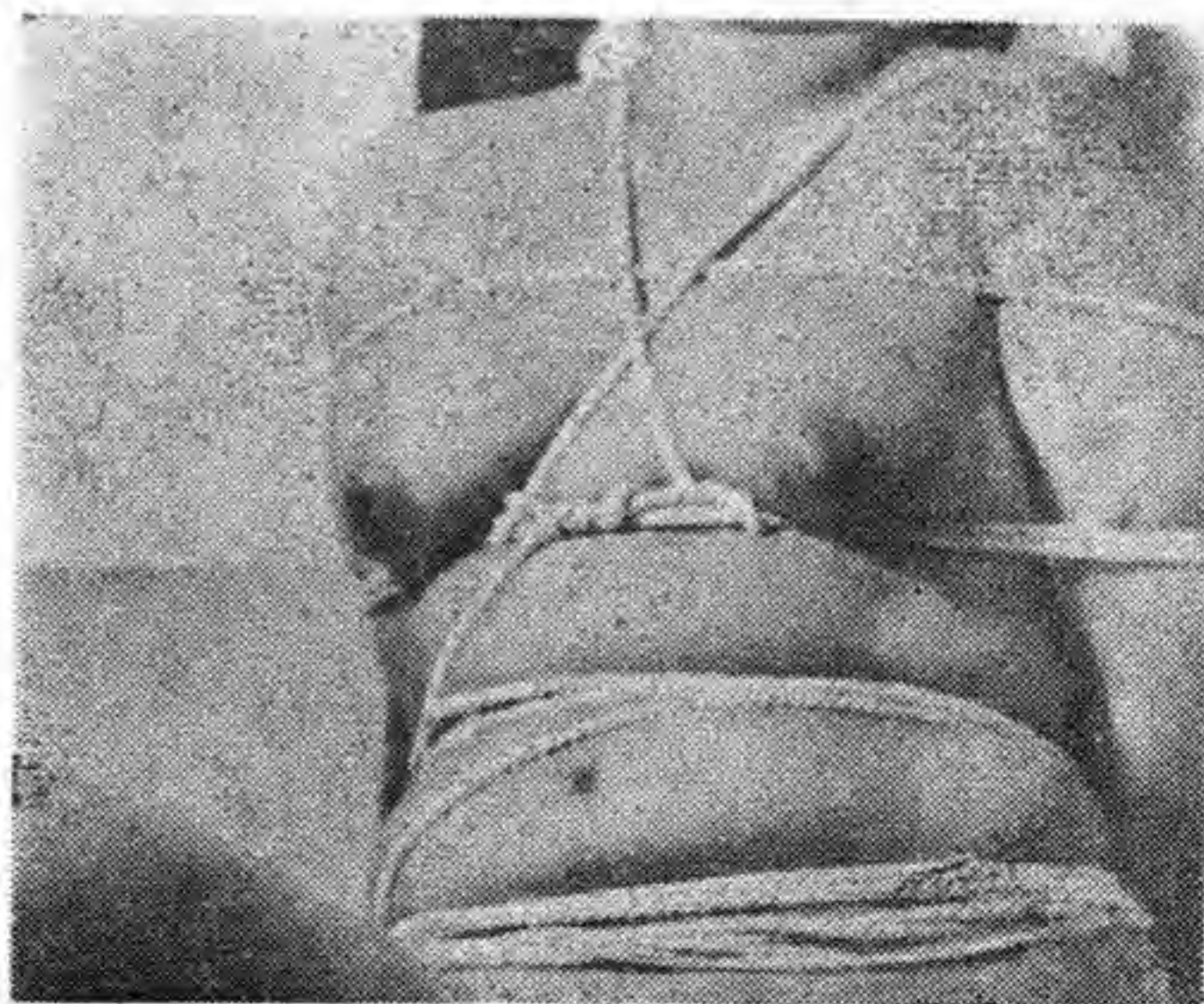
私達の最も希望致しますのは同じように仲良く御越しの御夫婦や恋人同志の方々と同じ立場で、この深く愛のあるSMの世界を心ゆくまで語り合い、打ち明け合ってみたいということ。本当に秘密の守り合える善意の方々なら敢て私達のプレーをテーマにした作品

をお見せしてもかまわないとさえ存じております。只私達夫婦の二人きりの愛のアルバムとて、あからさまな誰はばからないものも大分ありますので、いざとなれば恥しいことでしょうけれど、信用できる方々とだったら、勇気をもって実行するつもりです。

同封しました二葉の写真は、私

達のアルバムの中から選びだしたものです。拙い出来ですが、若しよろしければ掲載して下さい。尚通信の方法は最初は編集部経由か局留で、それ以後は直接文通といった方法は如何なものでしょうか。

(香川県八高松志朗)



11月号グラビヤ雑感

八尾市 沼章

しばらく御無沙汰しましたが、愛読者の皆さん、その後御変りありませんか。

11月号のグラビヤを見て、いろいろ感じたことを下手な文ですが又書いてみます。

第一グラビヤ

「答のある座敷の女」「可憐な乙女の風情」ちゃんと服を着て縛られた大塚さんは、いつもと違った味を出していますね。何か特別の人ではないという近親感を持たせます。私は大塚さんの頭を足で踏みつけ、背中を広げて答をふるいます。

「縛られた青木順子」梯子をまたがせるなどアイデアとしては良いが、全体に少しほけている。青木順子さんの脚はいかす。私も一度舞台を観たいものだ。

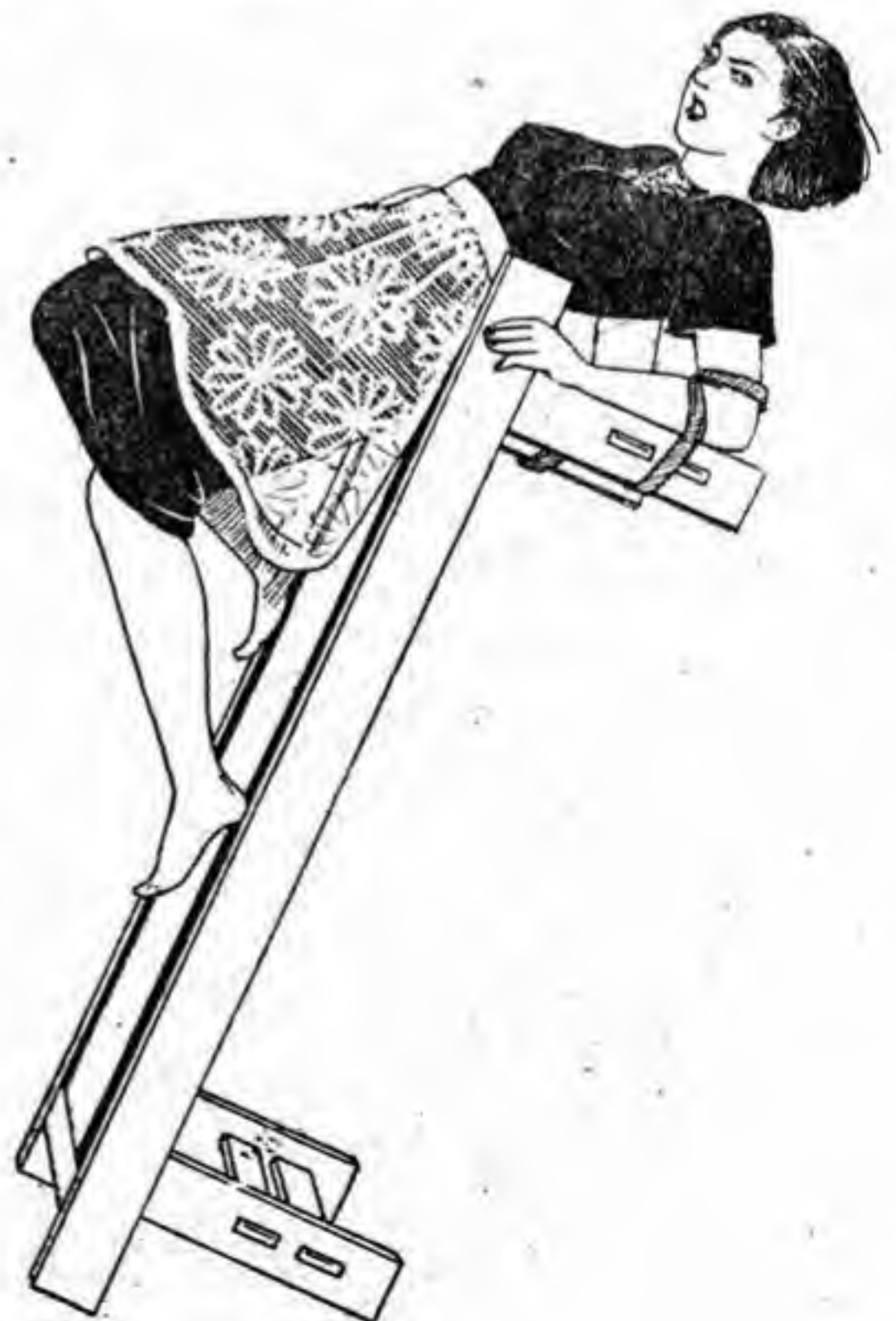
「足吊りによる表情の変化」私は妙にうっとりした顔よりも、苦痛に耐えている方が好きである。その点、この大塚さんの表情は素晴

しいが、左上の一番痛そうな顔が逆光になって、はっきりしないのは残念です。

「襖越しに見る隣室」足を吊るのは、全裸よりもこの方が、ずっと悩ましい。殊に片足吊りの場合、股が開くので恥しさも倍加する。

この大塚さんは、太股を出して如何にも恥かしそうだ。私の大塚さんの足の動きを、ゆっくり楽しみながら、ゆっくりと吊り上げてゆきます。頭がタタミから離れると余りの苦痛に恥しさも忘れ、自由な片足をばたつかせます。やがて大塚さんは股を大きく開いたまま動かなくなるでしょう。

「うごめく芋虫」と「首縄と足縄のポーズ」は失敗作でしょう。全体にぼんやりしているものがいけません。「夏の陽に白肌は映えて」絹川さんの白肌に黒紐がよくマッチしている。これまでの絹川さんは縛られて正面を向いていたが、



あの目はM男性を尻に敷くときと同じ気がしていやだった。やはり縛られるのなら、苦痛と羞恥をあらわしてほしい。絹川さんは恥しい姿で自由を奪われながらも、私をじっとにらみ返していたが、夏の太陽に肌を灼かれて悶えはじめた。

「椅子に晒されて」さあ、どうにでもして！と観念しきった東浦ひかるさん。まずチョークで、お前のオッパイは、こんな恰好だったな。とか、下腹がたるんでいたなど言いながら、椅子に落書きを

して足を自由にして歩かせます。

第二グラビヤ

「喘ぐビキニスタイル」生きていくゴムのような豊満な女体は「答のある——」の大塚さんは、まるで別人のよう。この女は少々手荒く扱っても大丈夫ですよ。と、私は大塚さんのお尻をポンと叩いてみせた。妖しく光る男達の眼が大塚さんの肌をなめ、その中の一人が肉のつきぐあいを手で触れて調べている。男の手は乳房をあらわにし、腰の紐にかかろうとした。おっと待って下さい。それはこ

世相診断室

木戸川 健

の女を買った人だけが見る権利があるのです。さあ、いくら」
 「皮手套に可愛がられる」大塚さんのポリウムは、よく出ています。が、頭も足もカットするのは、構成上好ましくありません。「操り責めにあう美女」ズボンをはいての開股はあまり感心しません。
 「大人しき白日夢」五月さんの均整のとれた肢体は素晴らしいが、奇ク愛読者としては、これだけの縛

りでは満足しない。この人はもう新人ではないはず、縄にも馴れたことでしょうから、もっと活躍してほしい。五月さんには乳房責めをしてやろう。私が柔道をやっていた頃、筋肉痛の塗り薬にヒナルゴンという薬を使っていた。それは患部に少量塗るだけで、そうとうの熱をもってくる。今日はそのヒナルゴンを五月さんの乳房に、たっぷり塗ってやろうというわけ

である。きっと乳房を真赤に染めて、もがき苦しむであろう。
 「魅惑のバックスタイル」この縛りは恥かしくて痛い。大塚さんはすっかり大人しくなった。
 「赤いシュミーズと縄」赤いシュミーズはモノクロ写真ではあまり美しく感じません。私なら足など責めないでバックにある基石で責めてやろう。梨花さんみたいに上品な顔立の女性には、羞恥責めが

一番である。白と黒の基石を梨花さんの腹の中に全部押し込んでしまい、そして白黒をちゃんと分けて排泄させるのである。
 話は変わりますが北九州市の門田澄子さん。大阪にもう一度出て来なさい。私の手で食中毒で死んだ男以上の責めを加えてやろう。年下の男に責められるというのも、一つの精神的苦痛ではなからうか二人でアパートを借りて満たされた城を築こうではないか。

人間誰しも、他人がかくしているものは、見たいものである。そのくせ、自分がかくしているものは、絶対見せたくはない。見たいという欲望と、見せたくはないという願望とは、もとより両立はしない。
 八宴のあとVという小説は、元外相で二度に亘って、社会党の公認候補として東京都知事選挙に出馬して、苦杯をなめた有田八郎氏とその離別した夫人とをモデルにしたもので、三島由起夫氏の作品の中では、決して出色のものではなかったが、有田八郎氏の「プレイ

バシイの侵害」の訴えで俄然有名になり、「あと」をひいた小説である。
 私「あと」で読んだくちで、なるほど、これでは有田さんが怒るのも無理はないと卒直に思った次第で、果して有田さんの「プレイバシイ（私事権）」が第一公判で認められた事は当然の結果だと思っている。いや、まだ結果ではなく裁判は最高裁まで「あと」をひくだろうけれども、とも角、わが国において私事権というものが法的に認められたということは画期的な出来事である。

K誌に小説を書かれている方々は、或は三島先生の立場を、創作活動の自由という論点で支持されるかもしれない。しかし、K誌の愛読者としては、私事権が法的に確認されたということは、その立場上派手に拍手は送れないものの「ほっと、安堵」の観迎である。何としても、われわれ個人のプレイバシイは侵害されたくない。
 そういう意味で、われわれは、この裁判の帰趨には、決して無関心であってはならない。私事権が確立されて、それが慣行され、お互いが、その「秘」とする部分を覗く事を禁止されれば、この世の中はずっと住みよくなるし、K誌のような傾向誌が指弾される事も

もはやなくなってくるだろう。K誌のような傾向誌が指弾されるのは、われわれの社会に、まだ本当の意味の「個」が存在しないからである。
 「個」の存在しない社会は、強い掛声一つで、左にも右にも傾く。オリンピック東京大会の大成功は掛声如何では、戦争にも通ずるのである。オリンピックも出来るが戦争も出来る。そういう不安な社会に現在われわれは住んでいる。
 この欄、これで三回目になりましたが、こういう固いものを書いていくのは、K誌の品位を高めた一歩心なものです。私はSです。だから編集子の尻を叩いているのです。

同好夫婦の方々へ

私達はSMプレイ夫婦

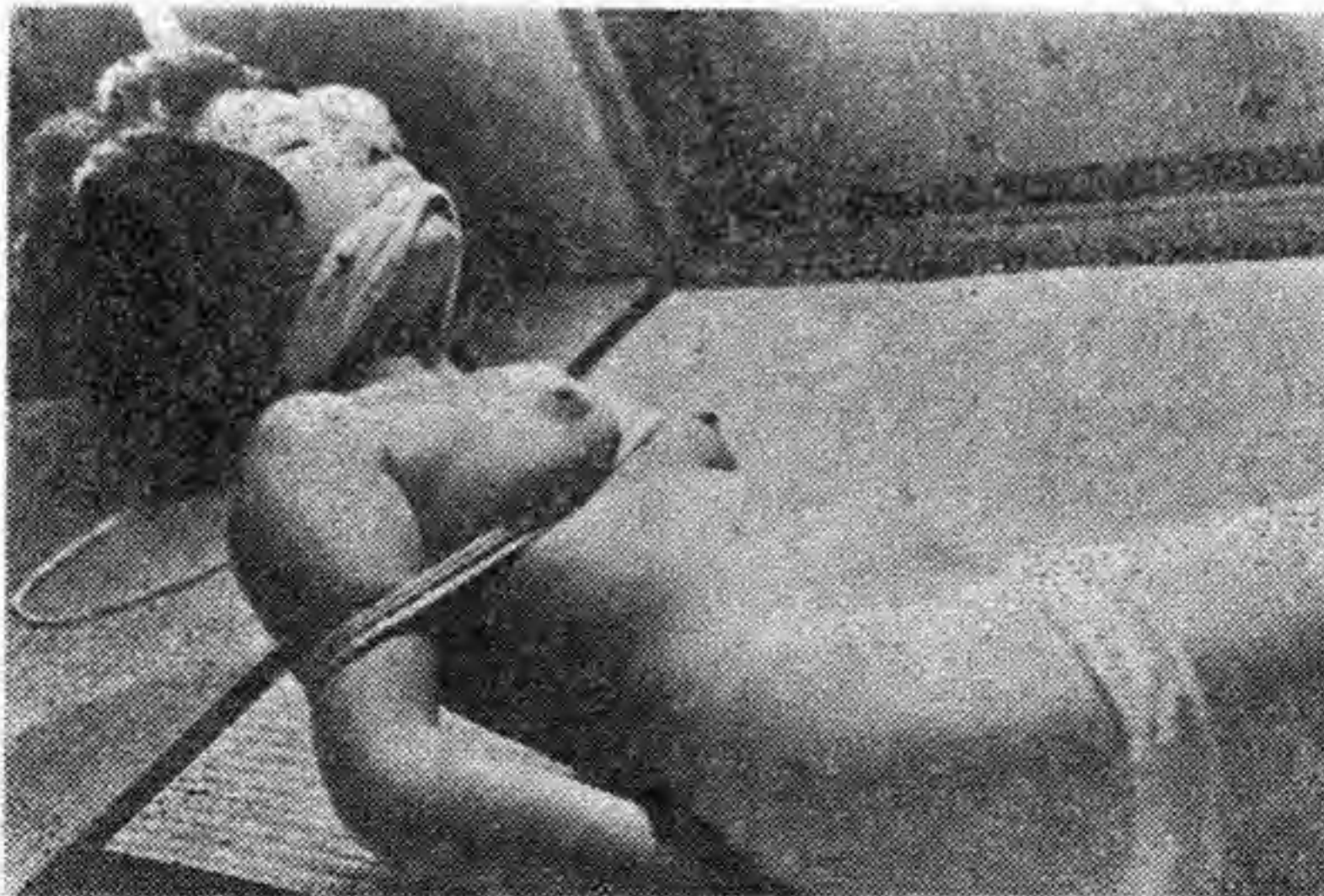
長谷好志男



「皆さまの共通の広場としてのこのサロンはどなたでも叩けば開かれる……奮て御投稿をお願い致します。」

「奇クサロン」向原稿募集の項を読んで数年来胸に秘めおさえていたものが一気に発散した様な気持ちになりました。私共は、未だ二十代の青臭い夫婦ですが、お互いが生れつきの同好者でマニヤ同志が夫

婦になった様な恵まれた夫婦と
思っております。写真も四年程前
から始め二人で楽しんでおります
が、二人だけの意見では限りがあ
り撮る写真にも行きづまりを感じ
ます。さてどうしたものかと思案
しておりますが、
「奇クサロン」の呼
びかけや諸先輩の写
真手記等に勇気付ら
れ、決して人前に出
せれる様な作品では
御座居ませんが、同
好諸兄の御意見御批
評をいただければと
思い切って投稿させ
て戴きました。夫婦
ですから、どんな写
真でも撮れますが、
掲載の都合も御座居
ますでしょうか、
作品の中から選んで
下さい。又同じ様に
御夫婦で撮影等なさ
れている方、是非共
意見、作品等交換し
たいと思います。又
遠近にかかわらず御
一緒に撮影等出来る
方お便り下さい。又
妻は他人様に撮られ



るのが好きですので妻でよければ
色々な姿体にして撮って頂いて結
構です。二人三人と集って色々作
品を製作してみたいと思っております。尚最初のお便りだけ編集部
経由でお願い致します。好志男V

浣腸に憑かれて

白 島 英 雄

奇クサロン向原稿募集の所に、どなたでも叩けば開かれる身近かな集いとして、マニヤ通信、短通信、呼びかけ等々何でも結構と書いてあります。十一月号も悪書追放とかのヘンテコリンな風当たりが強いにもかかわらず、無事手に入れることが出来ました。

確かに最近では貴誌が置いてある書店は少なくなった様に思います。しかし幸いにも私の住む近くの書店は以前と変わりなく置いてあります。いつも三冊位ですが必ず売切れております。勿論一冊は私が買うのですが、残りの二冊は、どんな人が買ってゆくのか、一度そうと買う所を見たいと思って気をつけているものの、まだその機会にめぐり合いません。

り、せっかく集めた貴誌を文字通り涙ながらに手離したのでした。病氣は結局二年半も長びきました。そして再び大阪の土をふむ事が出来、昨年からは集め始めましたが、もう以前の様には簡単にゆきません。いくら駆けずり回っても古い号は手に入りません。

私は幼少より病氣勝ちで浣腸の世話に度々なり、そして二年半の療養生活が私を決定的に、浣腸の二字で縛ってしまったのです。以前に比べて、貴誌は其の風当りの強さにもよりましうが、やや浣腸関連の記事が減少した様に思われます。そして特に女性のペンになったものが少い様に思え、一沫の淋しさを覚えます。

れませんが、両性の性感が大きく違っている様に浣腸に際して受ける感覚も又、男性と女性とは違っていると思います。

だからこそ、私は異った感覚を持った女性の、しかも同性向である浣腸に関しての手記には強く引かれるのです。どうか、読者の女性の皆様、女性の立場からなる浣腸手記をどしどし発表して欲しいと思います。

同時に私は其の記事が浣腸に関してであれば、男性のペンになるものも大歓迎です。それならお前が書けといわれましようが、私には残念ながら上手く表現する能力に欠けている様に思えるのです。私は現在浣腸の記事が見当る貴誌が一番楽しみなのです。

十一月号では久しぶりに、北沢操、宇都奈緒美氏の文が浣腸関連記事としてのっておりまして。浣好生氏にも、もう少し長い記事をお願い致します。私は浣腸一辺倒ではなく、オムツやゴムにも強い興味を持っています。奇クは浣腸記事を目的にだけ買うのではなく全頁を楽しく読みます。十一月号では私の一番好きな五月亜紀子さんの写真二葉が素晴らしいムードをただよわせていました。

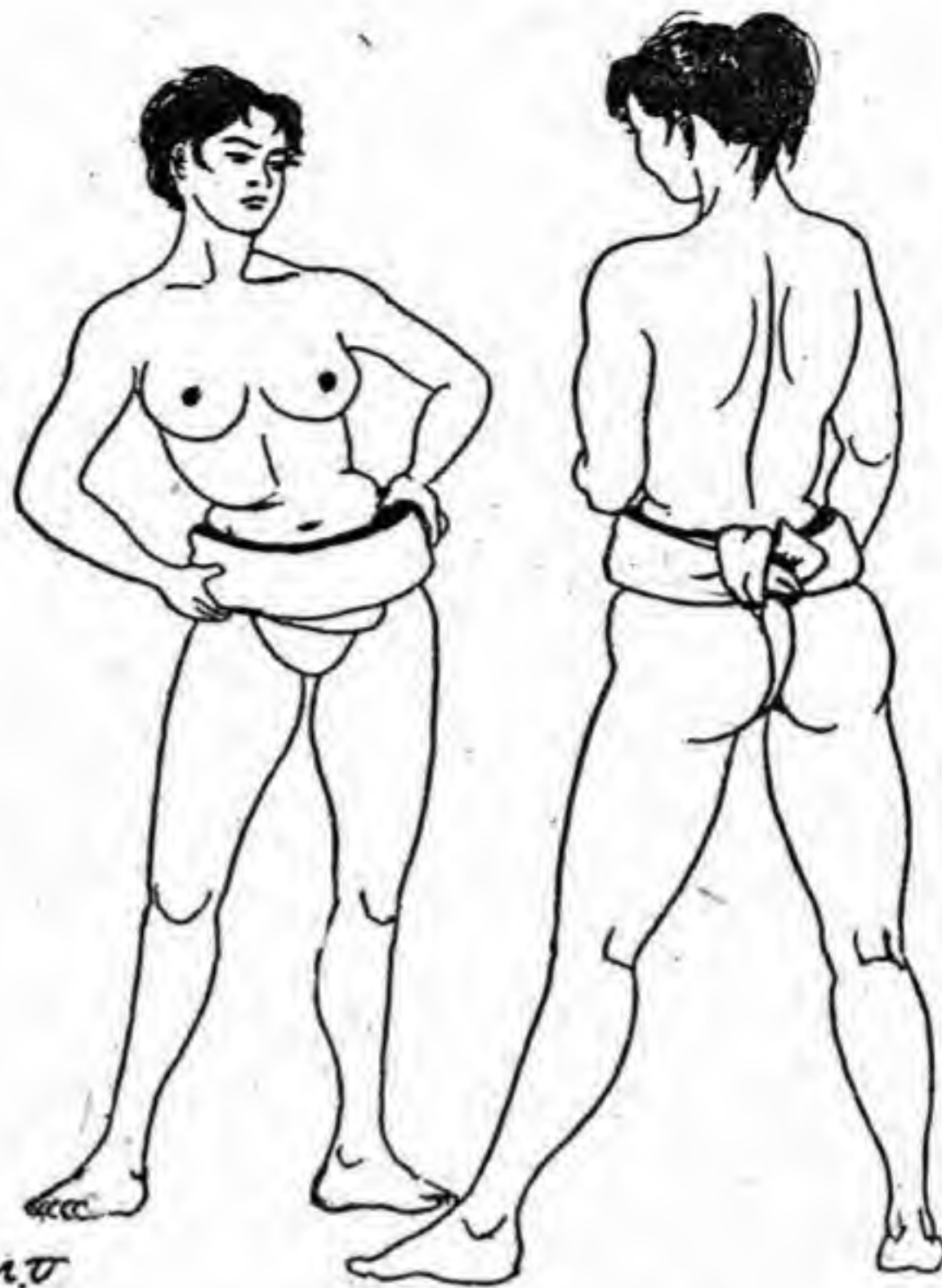
本文では勿論「花と蛇」です。私の好きな文章は、なんといっても芳野眉美氏です。十一月号でも私の好みでこそないものの、ネクダールを一片の不潔感を抱かせずむしろ幻想的な美しさをさえ抱かす表現力を、とても素晴らしいと思います。浣腸を描いたら、恐らく最高のものとなるでしょう。

最近私は二年間交際していた女性と別れました。私の文庫に置いてあった奇クもその間接の原因でした。私はその女性と結婚するつもりでしたが、此の様な完全な精神的不一致では仕方がないと思ひ諦めました。今度こそ奇クや浣腸に理解のある女性を見つければいいという夢を抱いています。

浣腸が介在すれば最近では施術者としての立場だけでなく、三十過ぎの女性から、やさしく責められたいと思う様にもなりました。只今、私の愛用している浣腸は、「ハート浣腸L」という三〇〇Cの大きいイチジク型で主成分はグリセリンではなく、塩化ナトリウム、タウリン二〇%、グリセリン五%です。イチジク浣腸、オムツゴム好きの女性の皆様。文通だけでも私をなぐさめて下さい。

女性美からみた ビキニとふんどし

奮斗士 好太



裸とビキニの夏も過ぎて、いよいよオリンピック東京大会。いづれ劣らぬ世界各国のグラマータちによる、けんらんたる女斗美が展開されます。レスリングや相撲といった本格的？ 女斗美の

見られないのは、愛好家にとって全く残念ですが、その点空想の力を借りて存分のストリーを楽しむことにしましょう。ところで今年の夏は、例のトップレス水着なるものが話題を呼び

ました。しかしあんな男の水泳パンツに吊りヒモをくつつけただけという奇妙なものは、正にグレッツの見本としか言いようがないものでデザイナーのおツムのおヨワさかげんを披露してくれただけで終ったようです。

大体女性の腹部というところはその裸体美において、もっとも美しい部分の一つです。このことはかのミロのビーナスについても語られていたところで、乳房の谷間から解放された流れが、広々とした腹部に展開し豊かな起伏と陰影の変化にくめども尽きぬ楽しさを味わせてくれます。

そしてその美のしめくりとしてのオヘソを打ち込んだあたりは造化の神の傑作です。トップレス水着なるものは、この美しい芸術品をおおいかくしてしまえばかりか、目ざわりな吊りヒモで乳房の丘のあたりまでをけがしているのですから、女性美の破かいとでもいうべきでしょうか。

この女性の腹部の美しさを十分に楽しませてくれるのは、何といってもビキニです。ふんどしも悪くないのですが、変化に富んだ腹部の曲線をより簡明な形でトリミングするという点で、ビキニに一

歩をゆずるようです。ふんどしの良さについては後で書きます。さて、そのビキニですが、腹部の豊かな面積を支えるためには、ある程度の面積が必要です。申しわけほどに三角型をつけたバタフライなどは論外で、あれは単にセックスを誇張したにすぎません。

また逆にオヘソがかくれてしまふほど大きくなつては、トリミングのやりすぎで腹部の美をそないます。腹部の中心はオヘソなので、その附近の表情を十分に見せ、またセックスを美的に象徴するには、どうしてもオヘソから、かなり下へさがなくてはなりません。これらの条件を満足させるためには、必然的に横へひろがった扁平な逆三角型が良いということになります。そして三角型であることがわかる程度において扁平であればあるほど、ビキニの効果が発揮されるようです。

このことはイタリアやフランスのグラマー女優たち、例えばS・ローレンとかR・スカッフィーノあるいはB・バルドーやM・ドモンジョたちのつけているビキニを見ればわかります。しかし、ビキニの欠点は背面にあります。前面と同じような、むしろそれより大

きいくらいの逆三角型が二つの半球をムザンにトリミングして、その美を破かいしているからです。これはデザイナーがサボったのかも知れませんが、全く無神経だなあとあげかせます。だからビキニに色あざやかなのが多いのは、このツマらなさをごまかすためなのです。

これに対して、ふんどしの美しさは、正にこの背面にあります。二つの丘を割って股間をキリリと締め上げたたてミツの動感と、これをガッチリと受け止めたよこミツとが構成するあのT字型の結び目は、緊張の極における静止感ともいうべき古典的均整美をたたえています。

近代相撲といわれる動きの激しい最近の相撲でも、どこか静的な美が感じられるのは、このふんどしの背面の美しさによるものだと思うのです。そして若い女性の張り切った二つの半球の魅力を百パーセント生かすのには、ふんどしにまさる装いはないと断言できます。ただし相撲のマワシの場合、女性にとって具合の悪いことがあります。それは女性の体の構造上、臀部が張り腰がくびれていることです。

このためマワシをいくらかきつく締めこんでも、すぐにゆるんで、おなかの辺りに帯を巻きつけたようになってしまう。おなかの息苦しいというほど強く締め込んでもやっても、少し大きな動きをすると、じきに上へズレてゆるんでしまうのです。ですから、女性がマワシを締めたときは、なるべくマワシを引き合わないようになければならないようです。

ともあれ、ビキニは楽しくふんどしは美しいものです。最近はおパンティとかスキヤンティとかいうふんどしふうの下着も、いろいろ発表されているようです。社会の風むきが大幅変わりつつあるとはいえ、これらのささやかな楽しみくらいは、誰にはばかり必要もないでしょう。

愛する女性たちの肉体をビキニやふんどしで装わせ、一しよにその美しさを味うのは、男性の義務であるともいえましょう。

東京都内には、この種の下着の通信販売専門の店があつて大繁昌しているというのは御同慶のいたり。どなたか、その店の名前とくわしい住所をお知りでしたら、この誌上でぜひお知らせ下さい。

(新潟市八奮斗士好太)

落城の女「腰元たちの切腹」

飯森 潔

昨夜来の戦い、城方にとって「すでに御討死」との知らせに、利あらず、夕刻になって「殿様 殿の寵愛を受けた腰元たち、我



れ後れじと白装束に身をかため、城中の大広間に屏風をはりめぐらして覚悟の切腹。真白い肌を惜しげもなく晒らして双肌ぬぎになると、膝を固く扱帯で縛りあげて、思い思いに下腹を掻き切つて相果てる壮絶な腰元たちの切腹。題して「落城の女」



辻村隆先生

に会うの記

M七〇生

私は皆さんと同じく長年の奇クファンです。時々貴重な頁を汚しております鼻専門のMです。

九月中旬の或る日。思いもかけぬことが起きました。辻村先生からお手紙を戴きました。夢かと疑いました。若い頃恋人からラブレターを貰ったと同じ気持ちです。胸がワクワクして、お恥しい話ですが夜も中々寝つかれない有様でした。いざお招きを受けました時はうれしいやら不安やらで、落着きませんでした。

私はスタイルは零で、最悪の場合鼻穴で埋め合せようと心に決めました。その日、上六駅に到着し出札口を出ようとした時、一見学者風の方が近づいて私の名を呼

び、私辻村ですと自己紹介されました。途端冷汗をかきました。

先生は立派な体格の持主で私は思わず圧迫されてしまいました。先生は仕事のことと箕田編集長と打合せするからと駅前のコーヒードンに入りました。勿論私も一緒に一時間余りして、箕田様の車に乗せて頂き途中鼻責めの話などで先生に穴をお見せしました。途中古道具店の前で停車し、私は車中で待ち、お二人はロープや鼻責めの小道具、くさりなどを購入されました。

箕田様は今から電話してS女性を呼ぼうかと言われましたが、先生は今日はいいかと断わられました。私は心の中でプレイにS女

性がいてほしいと思いました。言葉に出してよう言えず、淋しかったです。旅館まで送って頂きそこで箕田様と別れました。

先生は和室が有る？と尋ねましたら、全部補修改造中とかで、やむなく洋室へ入りました。和室では吊りに使用するつもりだったと思います。卓上に責めの小道具の太い鎖、錠、針、ワイヤーなどをずらりと並べ、いろいろ責めについて雑談しました。

プレイ開始宣言で衣類を脱ぎ、生れて初めて他人から受ける責めを体験しました。鼻穴にロープを通し、それを後小手に足も一緒に緊縛されました時、頭がぼうとなり冷汗が出てきました。先生は心配そうに近づき、大丈夫かと再三尋ねられ、縄をはずされベッドに横になりました。三、四分で元に戻りました。失神の原因は緊張の余りだと思います。

十分位でプレイ再開。元気になり先生にプレイを請求する有様でした。貴重な時間を有効にと、両手前縛り鼻穴ロープで腕を括り、一端を開股した太腿を椅子に、眼口と鼻穴をもぐるぐる巻きに高手小手縛り。両手前縛り椅子に開脚鼻穴にワイヤーを通し椅子の両肘

にかけたり、鼻穴に鎖を通し前方に引き括り顎が前に出る有様。鼻穴にロープを通し四つ這いになって引き締められたポーズ等々。

私は最初の失神もふっ飛び楽しくてたまりませんでした。先生は疲れたといって休息されました。窓の外は暗くなっていました。それでも私は再三先生にプレイを請求しました。次は舌責めです。舌に針を刺し貫く私の得意中の一つですが、これは舌裏の血管に注意が大事です。約束の時間超過間近かで最終にトイレを利用しての緊縛を行い終わりました。

出来れば逆さ吊り、宙吊りに緊縛して肌にもローソクの蠟を垂らすプレイもやりたかったのですが、道具も梁もなく駄目でした。心残りのまま一服し旅館を出てハイヤーで上六へ向いました。駅では名古屋行き急行の発車ベルが鳴っています。並んでいる切符売場へ先生が走ってきて、すぐ乗車するよう言い、車掌に事情を話し車中購入を言われ、先生にお別れの言葉をいう間もなく発車しました。

最初から最後まで、御迷惑の掛け放しで本当に申し訳なく思っております。

絵物語

美女決斗吉田御殿

川上米子 (瀧れい子画)



一、
「吉田通れば……」で知られる徳川千姫の御殿に一騒動があった。千姫との結婚に破れて家を滅した坂崎出羽守の家老、牧村三左エ門の遺児百合姫、瑠璃姫の姉妹が、仇と狙う本多新三郎を討つべく、その寝所を襲ったのである。

新三郎は坂崎の家臣であったが、主人出羽守のことを謀叛の罪をもって幕府に内通し、坂崎家襲撃に当っては、家老牧村三左エ門を討ち取り、その功によって三百石の直参にとり立てられ、更にその美貌が千姫の眼をまどわかせてからは、トントン拍子に出世し、遂には吉田御殿随一の権勢を誇るようになった。

二人の姉妹は、いずれがあやめか、かきつばた、共に匂うばかりの美しさ。世が世なら高貴の武家娘として、蝶よ花よともてはやされたであろう天成の麗質に恵まれながら、不幸主家の没落にあつて、恋よ色よとかえりみるまもなく、ただ父の仇を討たん一心で、姉は手槍、妹は小太刀とか弱い女体を、ひたすら鍛錬にあけくれること、ここに八年。

二、

年積って姉は十九才、妹は十七才。かねて

手をつくした探索に、仇本多新三郎の寝所をつきとめて乗り込んだのである。

時に寛永四年秋九月――。

やわ肌を覚悟の白装束に固め、黒髪はわざと後に長く垂らして、襷、鉢巻姿も凛々しい姉妹は、仇の住む闇の吉田御殿を前にして最後の訣別をするのであった。

「いよいよ、待ちに待った大事の日ですが、討つも討たるる戦の運、たとえ、いずれになろうとも、牧村の名を辱しめぬよう、見事な振舞いをしましょう」

と、姉が言えは、

「何の卑怯な裏切者の首一つ、八年の間鍛えに鍛えた腕で討つのに、何の雑作がありましたようか」

と、妹は勇み立つ。

「万に一つ、新三郎は討ちもらすまいが、いずれ二人は逃れられぬ身。これが今生の名残りかも知れぬ。瑠璃姫、今一度よく顔を見せて下さい」

「姉上様」

互いに見合せた美しい顔と顔。さすが十七才の妹の両眼に涙が溢れるのを、姉は気強く目を外して、

「いざ！」

と先に立つ。

三、

このように、美しい姉妹に仇と狙われていようとは、つゆ知らぬ本多新三郎は、今宵も千姫の御前でお相伴の深酒。

したたかに酔って寝所へ戻ると、そのまま褥の上に大の字にひっくり返って高いびき。

折こそよしと姉妹は仇の逃げ口をふさぐべく、姉は廊下正面の障子をおし開け、妹は右手に遮る部屋の襖をおし開けて、一斉にふみ込むと、

「本多新三郎、よく聞け、八年の昔、汝よくも主家坂崎家を裏切って、幕府の手で滅させ、その上わが父牧村三左エ門を討ち取った





な。牧村のわすれ形見百合姫」

「待った妹瑠璃姫！」

「父の無念晴らさんが為、今宵参上致した。尋常に勝負しや」

と、鈴を振るような声で名乗りをかける。寝耳の水にあわてて、蒲団をけっちはね起きた新三郎。

「な、なんと、牧村三左エ門が娘どもと……？」

「覚えがないと言わしはせぬ、主家の仇、父の仇、姉上、早く」

「おお、覚悟しや」

一しこきしこいて、さっと突き出す百合姫の手練の手槍。

四、

「うぬっ、気狂者奴等、血迷ったナ」

危うく、槍先をかわして枕元の太刀をつかんだ新三郎。

「身の程も知らず仇呼ばわり、片腹痛いわ、まして恐れ多くも千姫様御殿を汚す曲者達。返り討ちじゃ、それっ」

と、二度目に繰り出す百合姫の手槍の穂先をパチンと刎ねあげたので、さすが手練の姫だが、男の力に負けて、タタタとよろめいて合の襖にぶつかって止まった。

小娘のくせに、しゃらくせいとばかり太刀をふり下ろそうとする新三郎の脇へ、姉を助けるように、すかさず斬り込む妹瑠璃姫の切先の鋭さ。体をかわして、太刀をふりかざしたが、狭い部屋とて太刀の先が天井に当るのて充分に振りきれない。

小太刀に斬り込まれて受太刀になった新三郎、窮余の一策、咄嗟にツバ元で受け止めて引きはずれて身を退く。妹姫は思わず畳に足を滑らせて膝をつく。えたりと新三郎の劔が横なぐりに、あわやと見えた間一髪。その時百合姫の手槍が太刀を受けとめた。

戦場の経験もあり、場馴れした場所という気安さから、なんの小娘二人ぐらいと考えて馬鹿にしていた新三郎も、ここで初めて二人は容易ならぬ相手だとさとした。

百合姫の手槍をひっかけて、たぐり寄せ、千段巻をつかんで、ぐいと引きつけた。男の

力で圧倒しようというのだ。槍を引きつけられた百合姫、あわや新三郎の刃の錆かと思われたが、この時咄嗟の機転で、百合姫がパツと槍を放したからたまらない。

五、

不意を打たれた新三郎、おのれの引いた力が余って、どつと後によろめいて褥に足をとられて尻餅をついた。丁度瑠璃姫の前に崩れた身体を横たえた。得たりとばかり妹姫の小太刀が頭上に襲ってくる。

かわしもならず新三郎、握った手槍で受けて起き上り、前へ逃れようと泳いだ刹那、すかさず姉の百合姫、片膝ついたまま、帯にたばさんだ小太刀を抜き討ちざまに一閃、

「えいッ」

と横に払った。女ながらも腕は充分の百合姫、その烈刀はまともに新三郎の脇腹に喰い入った。瑠璃姫の奇襲で態勢がくずれていただけに、受けもかわしも出来ず、したたかに右脇腹を切り裂かれて、

「ギャッ！」

絶叫と共に棒立ちになり、一旦は刀を杖に身を支えようとしたが、それも束の間、

「無念ッ」

と一声挙げると、ドスンと褥の上に横倒し

になってしまった。

「お見事！」

仇を斬り倒した喜びに、美しい頬を輝やかして姉を見る瑠璃姫。百合姫もホッと一息を入れて、乱れた髪をかき上げながら、

「そなたも、恨みの一太刀を……」

とうながす。

「はい」

と、小太刀を鞘におさめて、懐剣を抜いて近寄る妹へ

「油断しやるな」

「大丈夫でございます」

六、

斃れている新三郎の襟をぐいと引き上げて「如何に、本多新三郎、主家を裏切った天罰思い知ったか」

右脇腹の深傷に、右手の自由を失った新三郎は、左手で畳をかきむしりながら、苦悶の形相で二人の美しい姫を見上げる。纖手一閃その咽喉笛に止めの一刺し、

「うう——うむ」

と呻めきながら、新三郎は息絶える。

「首級は姉上が……」

「心得ました」

同じく懐剣を引き抜いた百合姫は、大の男

に打ちまたがって、刀さばきもなまめまかし

く

「父上の霊も御照覧あれ」
見事に新三郎の首級を斬り落す。血のしたたる仇の首を前に、姉妹は手を取り合って、しばし嬉し涙にくれていたが

「見事仇を討ったからには、もはや思い残すこともありません。いずれ逃れられぬ身、潔く名乗りを挙げて、討手を迎えましょう」

と姉が言えは

「この勢で奥御殿にふみこみ、あわよくば主家の仇、千姫様の御命を……」

と妹も勇み立つ。

百合姫は縁に走り出て、新三郎の首を高く掲げ、

「御殿の方々、よく聞け、千姫様のお身内本多新三郎を、坂崎出羽守の家臣牧村三左エ門の娘百合姫並に瑠璃姫が討ち取ったり。恨みに思う者は出合えや、尋常に勝負せん」
透き通ったその声音に、寝込みを破られた吉田御殿は上を下への大騒ぎ。

七、

かくて、吉田御殿は牧村姉妹を囲んで、昔の曾我兄弟の討ち入りさながらの血斗に彩られたが、二人の決死の勢いに、武士や小姓、

それに腕自慢の侍女達が次々と討たれて、庭や廊下も屍の山。

「女ながらも手剛いぞ、油断すな」

「千姫様の御身が危い。加勢を呼べッ」

あわてふためく侍臣たちを前に、当の千姫

は柳眉を逆立て、

「ええい、不甲斐なき者共、この上は妾自身

自ら出向いて、姉妹を成敗し新三郎の無念を

晴らしようぞ」

と、いきりたっている時、その前に跪ずい

た妙齡の美女一人。

「百合姫の討手、この妾に仰せつけ下さりませ」

見ると、それは日野の局といって、今年二十三になる若後家。夫を亡くしてから、ずっと千姫の傍につきそって、侍女達に武芸を指南していた男勝りの女丈夫で、本多新三郎とは相愛の仲でもあった。

「おお、日野か、そちが向うか？」

「はい、姫様に代って新三郎殿の仇を討たして頂きとうございます」

「よくぞ申した。そちならば、よもや後れはとるまいが、相手は命知らずの手負の獅子じや、心してかかれ」

「御意！」

一礼した日野は、襷、鉢巻の身仕度も凛々しく、得意の薙刀をとって馳せ向う。

八、

百合姫は丁度、八人目の敵、葛城小四郎を討ちとってホッと一息入れた所。手槍はすでに使えなくなっていて、代りに抜いていて小太刀の血のりを押し拭いながら

「お次、九番目の方は？」

と誘った時、

「千姫様のお傍つき、日野の局」



叫んだ声に、千姫側の人達もハッと目を瞪る。それ程、その名は彼等の期待の人であったのである。百合姫の方も永らくつけ狙っていた御殿内のこととて、女剣士日野の局の名は、すでに耳に入っていた。

「日野の局とは、よき敵、尋常に勝負！」

武者振いして刀を構える。

かくて秋風わたる深夜の吉田御殿に、無双の美女同志の一騎打ちの幕が切って落されたのである。日野の局はまさに女盛り。五尺三寸、十四貫の豊艶な肉体が、武術に鍛えられてキリッとひきしまっている。

目鼻立ちも大きく咲き匂った牡丹の花を思わすようなパツとした明るい美しさ。これに對する百合姫は、背丈こそすらりとして、日野の局をも凌ぐ程だが、成熟しきらぬ処女の身体の細さは掩うべくもなく、その絶世の容顔にも、どこかあどけなさが残って、こう豊麗な局と相對させてみると、いたいたしい感じをかくしきれない。

九、

日野の局の勝を祈るもの、思わず百合姫に同情を覚える者、各人各様に固唾をのんで見守る中に、二人の美女はためらう色もなく、「エイッ」

「ヤッ」

と烈白の気合を飛ばして、丁々発止と激しく刃を合わせて斬り結ぶ。

細腰をくねらせ、袖を舞わして美しい肉体と肉体とが織りなす曲線美の乱舞。

一上一下とわたり合う妖艶さには、天もおのき、地もすくまんばかり。しかし、始めは互格に、この大敵と斗っていた百合姫も、流石に長びいてくるとこれまで十人近くも相手にしてきた疲労は、かくすすすべもなく、加うるに体力の差は、いかにとすることも出来ない。

次第に柳の肩の喘ぎも、局より激しくなってきた、遂にじりじり





と押されだした。それと気づいてあせる百合姫が捨身の反撃。

必死に力を揮って敵の手元へ躍り込んだが、早くもこれを察した日野の局は、十分に間合いを見切ってかわすと、今度は逆に左へ回って踏み込んで「やっ」

と横にないだ手練の薙刀一閃。あわれや年少の百合姫、かわされて一旦泳いだ身体を十分に立て直すことが出来ず、左の細胴をしたたかに斬りさかれて「ああッ」

魂切る声と共に、しなやかな長身をぐっと反らしたかと思うと、よろよろとよろめいて小太刀を杖に膝をついた。

十、

手応え十分と見た日野の局は、薙刀を投げすてて帯の間からキラリと懐刀を抜き放つとなおも痛手に屈せず、起き上ろうとする百合姫の胸元にのしかかってゆく。

「あれッ」

流石に同性に組み敷かれる口惜しさに、百合姫も必死の抵抗をする。それを捻じ伏せて首を掻き切ろうとする日野の局だが、死力を尽す抵抗はおそろしく、華奢な乙女にも似ぬ凄い力に、危うくはねかえされそうになって今は局も懸命である。

外聞も平素のたしなみも忘れて、胸をはだけ裳裾を乱しながら揉みあう、二人の姿の妖艶さ。見物の人々も思わず手に汗を握ったが、しかし、それも時の問題で、こうなっては、傷を受けた百合姫の敗勢は、挽回するには至らない。

始めは、その凄まじいばかりの斗魂に戦慄していた侍女達の目にも、今や百合姫の姿は猛禽の爪を逃れようとする瀕死の白鳥とも映って、それは次第に同情の色に変わってゆくのだった。やがて、

「くくくく」

という悲鳴が百合姫の紅唇から洩れた途端

そのふくよかな下腹の上に、局の身体が馬乗りになって、姫の四肢をピタリと抑えつけてしまったのである。

十一、

同時に左手で百合姫の襟がみを、ぐいと引き上げた日野の局は、右手の懐刀を切尖三寸ピタリと、その雪白の咽喉元に押し当てた。

「……………」

そのまま突き刺せば、た易く刺し得た止めの一刀であったが、もはや観念しきって目を閉じた少女の、余りにも気品のある美しさに流石に女心、局の腕も鈍ったか、引導を渡す気で、

「如何に百合姫、御身の武運もこれまで、花の盛りを散らすのは不愼ながら、新三郎殿の仇、千姫様の命により、そなたの首級、日野の局が申し受けまする」

と呼びかけると、その声にパチリと黒い瞳を見ひらいた姫は、悪びれもせず局の面を見上げてホッと一息。

「音に聞えた貴女様のお手にかかるのは、この身の本望。いざ早う、この首を刎ねて千姫の御覧に入れて下さい」

「さすがは牧村殿の御息女、よい御覚悟。して、お申し残しのこととは？」

言われて初めて起る肉身の情、姉の今まさに討たれようとしているのも知らず、なおも戦っているのであらう妹の心情を思つて、俄かに両眼に溢れ出る玉の露。

「妹瑠璃姫には、姉は一足先に両親の御許へ参つたとお伝え下さいませ」

思わずそむける滑らかな頬に、ハラハラと白い涙が散りかかる。心弱つてはならじと、刀の柄を握り直す日野の局。

十二、

「妹御のことは引き受けました。御心安く御成仏なされ」

言いながら、今度は左手で姫の乱れた前髪をつかみ、逆手に持ち変えた懐刀の刃先を、白くて長い百合姫の頸筋の真中へあてがう。

と、局の手の動きにつれて、重い黒髪にたえかねた如く、そのしなやかな頸筋が、ゆらゆらと揺れるなまめかしさ。

気丈の局も思わず顔を仰向かせると、衆目環視の中、これ以上ためらっているわけにはゆかない。

「御免」

と、左手で百合姫の顔を仰向かせると、右手の鋭い刃先を、後に引かれてのびるだけのだいた、その若々しい皮肉に、ぐさりとばかり

斬り入れる。

ピクッと苦痛の衝撃に姫の五体がのけぞろうとするのを、臍下丹田に力を込めてグッと抑えた局が

「エエイッ」

と烈白の気合諸共、白い纖手を右に一閃させる。女ながらも、腕に覚えの局の執刀に、何んでたまろう、草花の茎よりもおもろく百合姫の細首は、プツツと掻き落されて、あたりは一面の唐くれない。

「新三郎様、御無念は、この通り日野がお晴し致しました」

今斬りとったばかりの、輝くような美女の生首を左手にかざして、じっと見入る局は、まさに凄艶そのもので、並いる侍女達もただ呆然と見守るばかりであった。

十三、

かくて、稀有の美女対美女の決斗も終りを告げ、あわれ牧村三左エ門の姉嬢、百合姫は日野の局の手に討たれて、二十を待たず花の蕾を散らしてしまった。

百合姫の首級を抱えた日野の局は

「方々、鎮まりませ、今宵の曲者、牧村百合姫は日野の局が討ち取りましたぞ」

と呼ばわりつつ千姫の許へ引き上げてくる



のだった。た。「おおさすがは日野の局、百合姫を討ったとは天っ晴れ」

小袖を開いて、血にまみれたままの百合姫の首級をとり出して、型の如く実見に供する。「ほほう、これが牧村の姉嬢か、首になっても美しい娘じゃのう」

平素は傲慢で惨忍な千姫も、流石にこの眠れる美女のような乙女の死首には、憐憫を催したらしく、

「新三郎を殺めた憎い女ながら、討たれてみると不憫じゃ、して妹姫の方は？」

「まだ討てぬ模様でございます」

「フム、姉が首級を授けたる上は、妹まで討つに及ぶまい。日野、まいって助命してつかわせ」

「有難き御心、心得ましてございます」

局は勇んで立ち上る。千姫は更に侍女たちへ指図する。

「そち達は早く百合姫の首級を洗い清めて、局に持たせてつかわせ」

十四、

一方、手傷を負いつつも、なお健気に戦っていた瑠璃姫の耳にも、日野の局の勝ち名乗りは聞えてきた。

「ひえっ、姉上には御最期を！」

心も動揺した彼女は、当面の敵をふりすて、我を忘れて声のした方へ走り寄る。

「まさか、あの腕達者の姉上が、局風情におくれをとる筈はない」

心に打ち消しながらも

「姉上ッ、姉上ッ」

と狂気のように呼びつつ、死屍の間を探し回る。吉田御殿の男女も、百合姫討死と聞いては、我から瑠璃姫に挑む者もない。

「あッ、姉上ッ」

折柄明るくなった朝の光の中に、白鳥の打ち伏したような白無垢姿の女人の屍を見出して、思わず駆け寄る。首を討たれて、それははっきりとしないが、投げだされたスナリとした両の腕を始め、こんな美しい女体が、姉百合姫をのぞいて、他にあらう筈がない。

がっくりと膝を折った瑠璃姫は、変り果てた姉のむくろにすがって、よよと泣き伏す。しかし、ややあってキッと涙をぬぐうと

「姉上様、さぞや御無念でございましたでしょう。この仇は必ず瑠璃姫が、この手でお晴し申し上げます」

小太刀をとって立ち上ろうとする所へ、スラリとあらわれたのは、日野の局の凛々しい姿であった。

十五、

「おのれ日野の局、姉の仇、いざ、尋常に勝

負しや」

血相を変えて躍りかかろうとする瑠璃姫。

それをあわれむように見やって、局は静かに声をかけた。

「待ちや、如何にも、そなたの姉上を討ったのはこの局。相手をするは、いとたやすいが暫く心を落ちつけて、妾の言うことをお聞きなさい」

「卑怯な逃げ口上、聞く耳は持たぬ」

「そうではない、そなた達も仇討を遂げ、しかも姉の百合姫は天晴れ討死、この上無益の殺生を重ねて、どうしようというのじゃ」

「問答は無用、姉の仇のそなたと、主家の仇千姫様を討ちとるまで……」

「はほう、そなたも、そして斬り死をしやるのか？」

「もとより斬り死は覚悟の上のこと」

「その心も健気じゃが、お互いにこの上傷つかず、そなたも命を永らえて、姉上の後生を弔ったら、どうじゃ」

「そのようなことは聞くも汚らわしい。いざ勝負、勝負！」

「しからば、今申したこと、そなたの姉が申したといたしたら、何とする？」

「なんと、姉上が……」

一瞬ためらった瑠璃姫が

「何んで姉上が、そのようなことを……」

なおも討ってかかろうとする時、

「局の申すことは嘘ではない」

意外な声と共に、右手の襖を開いて、それに姿を現わしたのは、外ならぬ千姫。数多の侍女を従えて、それへ座をしめると、局をはじめ、並居る一同跪つく。

十六、

「そなたが瑠璃姫か？」

「はい」

憎い千姫とは思っても、流石の威厳に打たれて、彼女の足も思わずすくむ。

「姉を討たれて逆上致すのも無理はないが、局の言葉をよく聞きや。そなたの姉は、いまわの際に、そなたの助命を局に嘆願致しておるのじゃ」

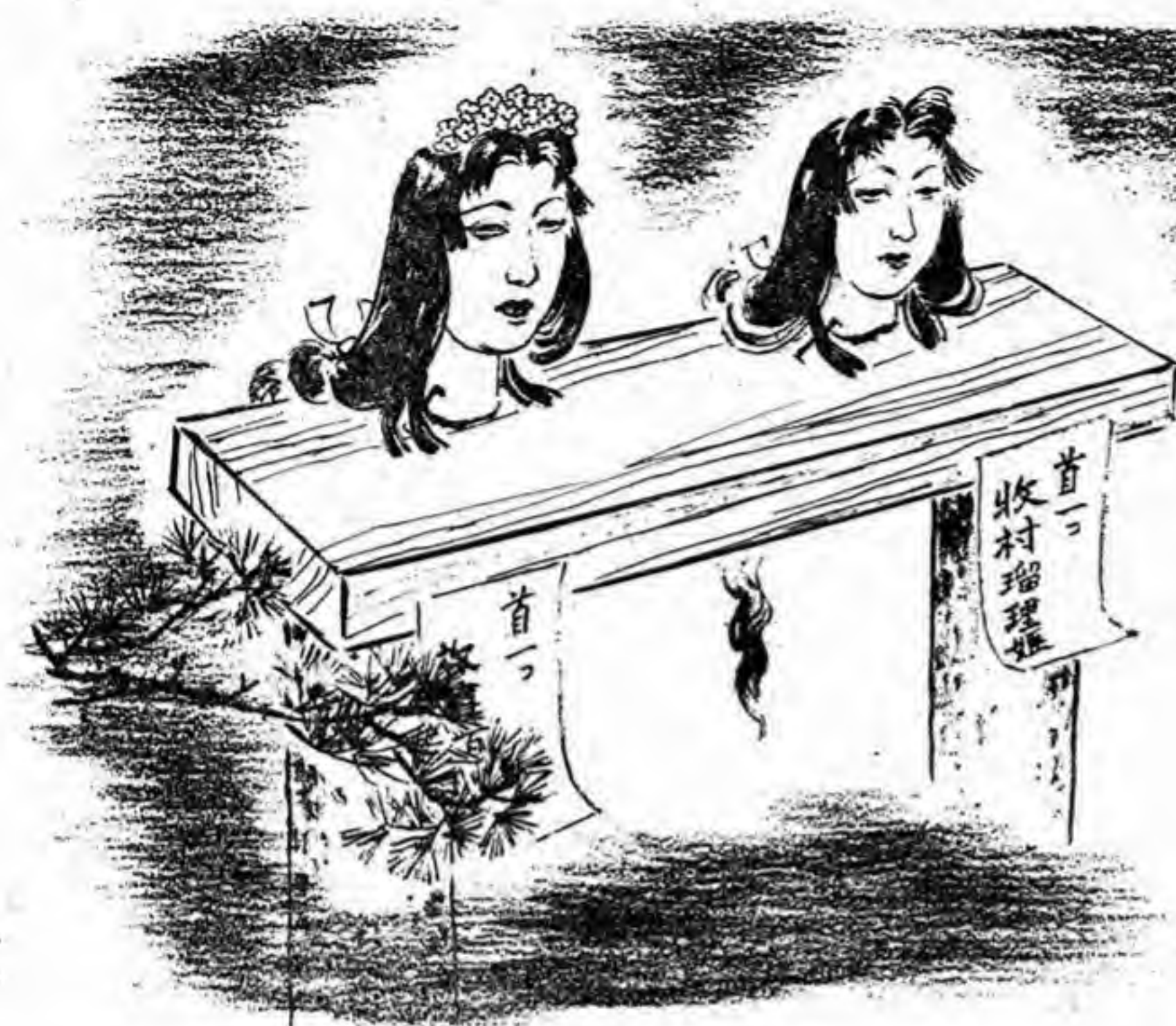
「妾の助命を？」

「そうじゃ、その証拠は百合姫の死首じゃ、観念して討たれたが故に、何の怨恨も憎悪も藏しておらぬ筈。そなたの目で、しかとたしかめてみや」

「姉、姉上のみしるしを……」

「局、見せてつかわせ」

「はい、賢しこまりました」



千姫の後に控えた侍女の手から、白絹の包を受け取って、それを日野の局が瑠璃姫の前に重そうに運ぶ。包の下からのぞく房々とした黒髪に、いわずと知れた女人の首級と知って、瑠璃姫はつかれたように膝を折る。

「千姫様特別の思召しにて、姉上の首級を見せる程に、ようくたしかめてみや」

バラリと開かれた包の中の首級を、一目見るなり

「あッ、姉上様ッ」

悲痛な声を挙げて、それをかき抱くと、そのまま、よよと泣き伏す。無理もない、ついに美しく颯爽としていた姉のあまりにも変

り果てた面影。ひとしきり身をもだえて泣き入るのを待ってから、千姫は、

「どうじゃ、妾の申したことは？」

十七、

言われて涙を払った瑠璃姫は、健気にも心を取り直して、ジッと姉の死顔を見てみると、たしかに白蛾のように変色はしているが、そこには、なんら苦痛の表情もなく、化粧されたせいでもあろうが、花唇などは今にも開いて話しかけるかと思われる程の瑞々しさである。

（美しい、ほんとうに美しい！）

見守っているうちに、瑠璃姫の心も次第に澄んできて、局や千姫に対する怨みの念も消えてきた。

（妾も姉上と同じく潔よく……）

そう覚悟がきまると、もはや何等ためらうこともなかった。

「恐れいりました」

と千姫に一礼して

「これ以上のお手向いは致しませぬ」
手早く襷をはずしにかかる。

「うむ、姉に劣らず見事な振舞い」

局と顔を見合せてホッとする千姫に

「この上の願いは、この場にての生害をお許

「下さいませ」

意外な言葉に驚いて、

「生害とな？ そなたまで死んで何とする。

生き永らえて、百合姫の回向をしてくれた方が、姉も喜ぼうし、我々も満足なのじゃが」

「お志は、まことに有難うございますが、姉を討たれて、おめおめと生き永らえては居れませぬ。死なば共にと誓いました姉妹二人、一刻も早く、姉のあとを追いつつございます故、何卒お許しの程を……」

言う間も早く、双肌をおしひらき、小太刀に袖を巻きつけて覚悟の態。

十八、

「天晴れ、死なすには惜しい女丈夫だが、それまで覚悟をきめたとあれば、致し方あるまい。心おきなく自害されよ」

思いきわめた少女の様子に、もはや止めても無駄と千姫も局も、静かに見守るばかり。

並居る男女も前代未聞の娘剣士の切腹というので、思わず目を瞠はる中は、まぶしいばかりに白く匂う処女の清純な柔肌を惜し気もなく衆目にさらけだして、いよいよ健気な自刃が行われようとしている。

小太刀の切尖を左脇腹に擬した瑠璃姫は、「えいッ」

気合諸共、したたかに突き立てた。白い肌

が一瞬朱に染まって、美しい顔が苦痛にゆがむ。気丈夫にも、更にきりきりと臍の下を右へ切り進む。血は下腹一面に溢れる。

「なんの、これしき」

なおも十文字に切り上げようとするのを、見かねた千姫が

「局、介錯をしてつかわせ」

と、うながせば、局も今はと太刀を提げて背後に回る。それと察して瑠璃姫は、一きわ力をこめて引き回した刃を深く突き刺し、首を振って長い黒髪を左右にふり分け

「御介錯を！」

と、白い衿あしをさしのべる。

「南無——」

局の振り上げた太刀が、朝の光りにきらりと光った瞬間、バサツと鈍い音と共に、美少女の首は、紅い椿の花の落ちるが如く、無惨にも畳の上にとろけた。

かくて、あわれ牧村姉妹は、いずれも二十を待たないで、花の命を吉田御殿に散らしたのである。その男まさりの健気な働きに感じた千姫は、事を内分にすまして、姉妹の亡骸を手厚く葬ろうとしたが、幕命もだし難く、二人の首級は、江戸城に送られた上、小塚原

に梟された。

揃いも揃って、美しい二つの曝し首は、物見高い江戸の町の人々の口の端に上り、この首級を一目見んものと集った群集は物凄く、果ては怪我人まで出る始末だった。

この曝し首によって、かえって牧村姉妹の嬌名は永く後世に伝えられたということである。

〔あとがき〕

「生首シリーズ」を楽しみにしていましたがその後一向に続かず、又女人決斗の説物も、「女武者の討死と生首」や「霞ヶ城女合戦」など傑作が出ながら、挿絵が伴わないので絵入りの女体決斗図を描いてみました。最初題名を「女曾我」とするつもりでしたが、偶然四月号で牧氏の「駿府城女曾我」が出ましたので題を改めました。これは実際に明治十八年に刊行された煙雨亭晴香の「新編名取草」という草子からヒントを得たもので、それには、ふんだんにさし絵も載って居ります。私は全然絵の素養はありませんので、構図だけを描いてみました。

(川上米子)

■ 絵物語 ■

今日と明日の報酬

宇丸紫郎・文 四馬孝・画

(一)

初めての時は、それ程気にも止めていなかったが、二度、三度となると美沙子の胸に諸岡という男の存在が妙に気になり出して来た。

まだ、この『風月』に出るようになってから、一カ月足らずであったが、出て間もなくから彼女目当ての客が急にふえ出した。

酒の酔いにまかせてあけすけにいい寄る男もいれば、それとなく素振りや態度で彼女の意を引く男もいた。まずたいがい、そんな男達であった。勿論ここへくる客筋は、おか

みの須満子にいわすれば上客の部類だそうだが、たしかに身成りや金払いは一応それにふさわしいが、中身はそれ程でないのが多い。

そんな客の中で諸岡という四十年配のやや渋みがあったこの男だけは、他の男とは違っていた。

たしかに美沙子に対して好意を寄せているには違いないが、変に浮ついた所もなく、たいがい座敷へ上ると決った時間に決った酒量を飲んであっさり帰って行く。そしていつも笑顔を崩した事はない。美沙子はそれとなく気になり出してから、須満子に聞いて見た。

それというのも、どうやら諸岡は、かなり前からこの『風月』の客らしかったからである。

「諸岡さんはあんたを気に入っているらしいわね。いい人よ、あの人お金持だし、家には前から時々お見えになっていたのよ。商売は美術品を扱って、かなり手広くやっているらしいわよ。お店は青山にあるわ。綺麗な所よ」

何度か其処へ行った事があるらしい須満子の口ぶりであった。

しかしだからといって別段諸岡とこの店に

特別に深い関係がある様子ではないらしい。

須満子とは年令に少しの差はあっても、古い知合いであるから遠慮なく何んでも話し合える美沙子であつたし、大体この店を手伝うようになったのも、須満子の方からどうせ働くなら家の方を手伝ってほしいと頼まれたからであつた。

だから他に大勢いる女中や使用人とは、おのずから違った立場で働いている美沙子である。もっとも須満子にして見れば美沙子の美貌は『風月』にとって、どれだけプラスになるか、ちゃんと計算しての上で、かなりの給料と我儘とを与えているのであろう。

美沙子が働かなければならなくなった理由は、二カ月前、夫である尾関が突然の自動車事故で重傷を負い、どうやら命だけは取り止めたものの頭をやられた為、ほとんど廃人同様になってしまい働く能力を失ってしまった為である。一カ月余りの入院から、現在はアパートで寝たきりの療養生活を送っているのだが、それ程の貯えもなかった生活は、嫌でも美沙子が働かなければならなくなってしまったのである。

働く事自体は何んの苦にもならなかったがこれから先の尾関の事を思うと、ふと暗い気



持にならざるを得なかった。しかし何んとかして元の身体に返してやりたいと思った。たとえそれが不可能であつたとしても、その希

望だけは失いたくない美沙子だった。

勿論、その事は須満子は知っていたが、他の使用人達は誰も彼も美沙子を独身だと信じ

ていた。おかみさんの親戚筋に当る人だと皆んなは思いこんでいたし、そういうせたのは須満子であった。

一週間に一度、折を見て美沙子はアパートへ帰って尾関の面倒を見ていた。留守の間は手伝いの婆さんに月々何がしかの金を払ってみとりを頼んでいた。

或る日、丁度アパートから帰ってくると美沙子は須満子に呼ばれた。奥の桜の間に諸岡がきているらしかった。

「あんたの帰えるのを待っていたのよ。頼むわ、美沙ちゃん」

そういわれると、何んもなく面映ゆい気持ちだったが、美沙子は替りの銚子を持って足を運んだ。

諸岡は相変らず、その顔に微笑をたたえて一人で酒を飲んでいた。この頃ではかなり親しく口もきくようになっていたし、その意味では二人の間の固さは、かなり取れていた。

客としての諸岡は、決して好意の持てない男ではなかった。もっとも、それが好きだとか嫌いだとかの話になれば、美沙子には急にはちよっと判断がつかかねる事には違いないだろうが。

諸岡は好意ある態度は示しながらも、それ

以上の事は匂わせもしなかった。しかし静かにじっと美沙子を観察しているらしい目付は真剣であった。そんな眼が時々痛い位に美沙子には感じられるのであった。

今日もまたいつもの調子で決った時間に腰を上げると思っていた諸岡が、しばらくすると幾分改まった態度で美沙子にいった。

「実は折入って話したい事があるんだがね、これはれっきとした商談なんだが、もしも貴女が気に入らなかつたら、はっきり断ってくられてもいいんだよ」

諸岡は、そう前置きしてから、

「私の出入りしている或るお邸で、女の人を探しているんだがね。その名前は今いえないが、れっきとした家である事には間違いないんだ。支度金は十万、後の報酬は貴女次第という話だが、どうですか。考えによっては悪い話ではないと思いますが、ただ貴女が割り切れるか切れないかの問題だが、お金儲けには全然興味がないというのなら、話は別ですがね。どうですか」

いきなり、そう切り出されると、美沙子はちよっとの間、あっけにとられて諸岡を見つめた。

全く意外であった。これは何んの事はない

つまる所は妾の話ではないか。この人がまさか、こんな事をいうとは、そう思うと美沙子はその場にいたたまれない気がして腰を浮かそうとした。が、諸岡はすぐ

「貴女は今すぐにでも、お金はほしくはないんですか。立派な病院で治療すれば、あの人の身体も元通りになるかも知れませんよ。貴女だって、こういう処で安い給料でいつまで働いたって、今の生活から浮び上れますか、私は少くとも、そういう貴女の為を思っているんですよ」

美沙子はそういわれると、キューと唇をかみしめた。諸岡はちゃんと何もかも知っていたのだ。恐らくそれは昨日今日調べたのではなく、かなりの時を掛けて調べ上げたのに違いなかった。

諸岡にいわれるまでもなく、今の美沙子にはたとえ幾らかの金でも咽喉から手が出る程はしかった。今日もその事でアパートでは、嫌な思いをしてきたばかりだったのだ。

「美沙子さん、私は初めに断ったように、商談として話しているんですよ。勿論、貴女が嫌なら無理には決して勧めるものではありません。また私も貴女だから、この話をしたんですよ。誰でもいいというわけには、いきま

せんからね」

美沙子はこの諸岡が初めからこの目的の為に自分に近づいてきたのを、改めて知った思いだった。自分に好意を寄せてきているとばかり思っていた諸岡が思ってもいなかった意外な目的を持っていたのである。

「勿論、この事は二人だけの話ですよ。他人には聞かせる必要のない話ですからね。貴女の気持次第で決めるのです。どうですか美沙子さん。もっとも、今すぐといっても何んてしようから、考えとて下さい。そして、どちらでも決心がついたら電話して下さい」

諸岡はそういうと名刺を置いて、いつもと変らぬ表情で帰っていった。



美沙子は複雑な気持だった。はじめ話を聞いた時は思わず腹が立ったが、落着いてみると諸岡の話は今の彼女にとって、考えようにな

である。

その夜の事は須満子にもいわず、美沙子はどうしようかと考えあぐねた。忙しく雑用に

よっては大きなチャンスのような気もするのである。この儘の状態では満足な尾関の療養も出来ない事は目に見えていたし、さりとて他に手段のありよう筈もない美沙子だったのである。須満子にだって金銭上の事は、これ以上無理もいかなかった。時には美沙子自身金を得る為なら或る程度の事ぐらい、と考えるいはなかった事もあったのだ。それを思えば諸岡のいうように割り切れない事もないのだが、しかし、とまた心の隅では何かそれを振り切ろうとする塊りがあるのも事実だった。

青白い顔で寝たきりの尾関の表情が、そんな時決って美沙子の脳裡を横切るの

追われている時でも、仲々その事は頭から離れようとしなかった。断るのは簡単だったがもしそうしたら、こういう条件の機会が再び巡ってくるかどうか判らない気がしていた。

そうしている中、二日ばかりして、まだ心を決めかねている美沙子に手伝いの婆やから電話があった。尾関の様子が変だからすぐきてくれというのである。美沙子は驚いて仕度くもそこそこアパートへ帰った。

前にも一度、退院してから発作を起した事があったのだが、今度もそれと同じ症状だった。その時は、すぐ医者にきてもらって手当を受けて幸い治まったが、二度の発作に医者は出来たらもう一度、設備の整った病院へ入れて徹底的に治療した方がいいといった。美沙子はそれを聞くと細い肩を震わせて死んだように横たわっている尾関の顔を、じっと見つめたまま動こうとしなかった。

(一)

青山に在る諸岡の店は須満子のいった通りそう大きくはないが、二階建ての如何にも美術商店らしい綺麗な家だった。

約束の時間に美沙子は、そこを尋ねると諸岡は例の微笑を浮べて応接室に彼女を案内した。事務員らしい女の子が紅茶を運んでくる

と、丁寧に頭を下げ出ていった。諸岡はそこで改めて、

「いや良かった、良かった。よく決心してくれましたね。これでほっとしましたよ。実の所、貴女に断られるんじゃないかと思つて心配していましたんですよ」

そういわれて美沙子は黙って顔を伏せた。今日はいつもと違って念入りに化粧しているその顔は薄い紺地の着物に映えて一段と美しく見えた。諸岡はそんな美沙子に如何にも満足そうであつた。

もうこの場合多くを語る必要もなかった。

ただ諸岡は

「これはどこまでも貴女の気持次第ですからね。それを忘れないで、いつどんな時でも貴女が嫌になったら、その儘自由に引取って解消しても構わないですよ。この意味はお分りでしょうね」

「ええ分つてますわ、私もよく考えて心に決めた事ですから、今の私には必要なものは一つしかないんです」

それを聞くと諸岡は大きくうなづくように首を振った。

「では早速、これからご案内します。先方にも連絡して置きましたから」

諸岡は美沙子をうながして立ち上った。店の前にはすでに用意されてあつたらしく黒塗りの乗用車が待っていて、運転手が二人の姿を見るとあわててドアを開けた。

二人を乗せた車は薄日のもれる舗道を静かに走り出すと方向を南へ向けていった。

諸岡は無言だったが、運転手は行先は知っているらしい。

これから何処へ行くのか、美沙子はちょっと不安な気もしないではなかったが、しいて尋ねようとしなかった。どうせすぐ判る事なのだと思つたからである。

不思議に一度心に決めてしまうと、気持も落着いていた。諸岡は何かいおうとして一、二度美沙子を見たが、そのまま黙って煙草をふかし続けていた。やがて車はにぎやかな町並を通過して閑静な住宅街に入ると、ちょっとした坂道を二度ばかり上って、しばらく人通りのまばらな道を行ってから、とある古風な門構えの中へ入っていった。

小石の砂利道を車輪が音を立てて進むと間もなく止った。車を下りて美沙子はビックリした。この場所は何処なのか、ちょっと見当がつかないが、東京の真中にも、こんな静かな所があるのかと思う位、闊葉樹の青々とし

た木立に囲まれた見るから広々としたその構えは、まさに諸岡のいうお邸と呼ぶにふさわしい立派なものであった。

玄関先から母屋と、相当の年代を経ているらしい造りだが、どっしりとした重みを持っていた。

諸岡は勝手知ったもののように、その中へ入ると美沙子をうながして磨き上げられている廊下を通して、十畳ばかりある一室に彼女を案内した。そこは応接間になっているらしい。

すぐ出ていった諸岡と入れ違いに一人の中年の女性が茶盆を持って入ってきた。色の白いかんりの美人である。その女性は静かな物腰で美沙子に茶をすすめると、二言、三言挨拶の言葉を交して出ていったが、美沙子はその女性が、じっと探るような眼差しで自分を見ていたのを感じていた。

一体あの人はこの家の女中かしら、それにしても、ちょっと女中らしくない所もないし何になんだろう。そんな疑問がふと湧いてきたが、疑問といえ、この家の主人とはどんな人なのか、その方が美沙子には気になっていた。

さすがにこうしていると、胸の中は平静で

はいられなかった。

しばらくして諸岡は戻ってくると、黙ってどうぞという風に自分で先に立った。幾つかの居間につながっている廊下を通して、奥まった一室に案内されると、美沙子はそこで初めてこの家の主人に諸岡から紹介されたのである。

その主人は何枚か重ねた絹布の布団の上に片肘を脇息にもたしてじっと坐っていた。

老人である。美沙子が想像していたよりはるかに年を取っているその人は、しかしその割には案外顔に艶があった。病気で寝ているのではないらしい。

諸岡は何度も頭を下げ丁寧な口調で話をした。老人はその都度ウムウムと低くうなづきながら眼はじっと美沙子を見つめていた。

やがて頃合いを見て諸岡は美沙子の方に後は宜敷くといった顔を向けると静かに会釈して帰っていった。

老人は黙って美沙子の前に分厚い紙包みを出した。

「約束の仕度金と、それに手当を含めて三十万入っている。手当は明日と明後日の二日分じゃ、取って置きなさい。三日目からはまた貴女の気持次第で帰るもよし、残るもよしじ

や。改めて、その時の希望で話に乗りましよう。それでどうじゃな、ハハハ、わしはな、我儘で少々癖が悪いでな、辛抱出来んと可哀想じゃから、それでつまり二日間のそれをいったのじゃ、お解りかな」

そういわれても美沙子には、どんな事かよくは分らなかったが、要するに自分が試されるのだという事は大体察しられた。

どんな事でもいい、一旦決心してきたのだから、少し位の苦勞はたえる覚悟は出来ていた。それとすぐ眼の前に置かれてある分厚い包みは、今の美沙子にはかえがたいものである筈であった。

美沙子は老人を見てうなづくように頭を下げた。老人は満足そうに眼を細めると、両手を鳴らして人を呼んだ。

すぐ襖が開いて入ってきたのは、先程の応接間にきた女性であった。老人はその女性を杉江といって紹介すると、この杉江はわしの手足のようなものだから、そのつもりでと付け加えた。

「貴女は別に何も家事の事はせんでいい。食事の方も一切これがやってくれるでな、貴女はいつも綺麗になっていれば、それでいいのじゃ、ハハハ……」

早速杉江は美沙子をうながすと、彼女の室に当てがわれる事になった一間に案内した。

奥の老人の室からは少し離れているが綺麗に整理されたその室は調度品も至れりつくせりであった。しかし室全体が少し暗いのは窓のないせいかも知れない。

杉江は奥から真新しい着物一揃を持ってくると着替えをすすめた。

彼女の口から出る言葉は何か感情を押殺した冷たい事務的なものだけだった。そしてあの探るような眼差しは依然変らなかった。

しかし美沙子は強いて、それを気にしない事にした。その夜はゆっくり休むようにといわれ、美沙子は手足を伸ばして豪華な夜具の中でぐっすり眠った。

(三)

翌朝、目をさました美沙子は、食事の前に杉江から入浴するようにいわれた。朝といっても時計はすでに昼近かったが、いつもこの屋敷は朝が晚いらしい。

入浴して身づくりを整えた所で杉江が食事を運んできた。美沙子はすぐにでも老人から呼ばれると思っていたが、仲々それらしい気配はなかった。どうやらちらちらと奥に人の影がするのは客がきているらしかった。

その客らしいのが帰ってしばらくすると、杉江が廊下伝いにやってきた。そこで美沙子はもう一度入浴するようにいわれた。

一旦身仕度くを解いて再び浴室に入った彼女は、今度は簡単に湯を二、三杯流しただけで出るつもりだったが、その時思いもかけぬ杉江が浴室に入ってきたので、ハッとして美沙子が何かいおうとすると、杉江は

「旦那さんのお言付けですからね。いわれた通りにしなければなりませんよ。いいですね」

そういうと手に持っていた手錠をガチャガチャさせながら、いきなり美沙子の両手をサッと後ろへ廻して、素早くそれを嵌めてしまった。余り突然な事で驚いて声も出ない美沙子に、もう一度念を押すように杉江はいった。

「いいですか、旦那さんのお言付けですからね。これから私のする通りになるんですよ。解りましたね」

「でも、こんな事なさらなくても私……」
「だからいつてでしよう。何事もいわれる通り素直にいう事を聞けばいいんですよ」

美沙子は急に湧き上った不安に戦いて、今にも泣き出しそうな顔になったが、杉江はそ

んな事はいさい構わず、後手錠を掛けた美沙子を抱えるようにすると浴室を出た。そしてそのまま美沙子は別の小部屋に入れられてしまったのである。

その薄暗い室には杉江の手でちゃんと用意が整えられていたらしく、小さな朱塗りの丸卓のわきには大小様々な麻縄や皮紐、バンド類が雑然と置かれてあった。

杉江は早速、それを手に取ると、改めて美沙子をその場に押え込むようにして縄をしごいた。

「アフ……アッ痛いッ……許して下さい。そんな事許して、アッ……痛いッ……許してッ」

小さく悲鳴を上げる美沙子に杉江は遠慮しなかった。手錠を掛けられた儘の細いしなやかな両手をぐいと背中に押し上げて置いて、ギリギリと縛ると、二の腕からふくよかな腕へ、すべすべした白い肌に幾重にも縄のくびれを作っていた。

そうして手をきっちり縛り上げると、今度は皮バンドで前から両乳房の間を通した縦縛りである。所々バンドによじれを作って、その一本のバンドは背中に廻されて首の所で結ばれた。美沙子はそうされる間中、何度か身をよじり声を上げたが、所詮それはただの

あがきにしか過ぎなかった。

こうして上半身を厳しく縛り上げられた美沙子は、そのまま立たされて一旦自分の室に連れて行かれると、そこで杉江の手によって念入りに、化粧をされた。

大きな三面鏡の前に坐らされて、惨じめに縛り上げられている自分を見ると、美沙子は涙がこみ上げてきた。そんな顔に杉江はせつせとパフを叩き、口紅を引いていくのであった。

やがて、その化粧が終ると、美沙子は杉江に抱えられるようにして奥の老人の室に連れて行かれた。

老人は前と同じように分厚い絹布の布団の上に坐って静かに葉巻をくゆらせていた。



杉江がその前に手をついて頭を下げると「ウフフフ、これは美しい、よいよい」と、さも満足そうにうなずいた。

「わしは少しばかり人とは変った事が好きな

のでな、いきなりで驚いただろうが辛抱して下さいや」

そういつて笑った。言葉は優しそうだが、その裏には有無をいわせぬ強引さがあるようであった。

「わしは左手がちょっとばかり不自由なのでな、それがなければ他の手を煩わせたくはないのだがどうもこれは仕方のない事だな」

美沙子は、縛り上げられて坐らされている恥づかしさもさる事ながら、縄目の痛さに肩を震わせていた。特に皮バンドをよじられて縦に締め上げられている事が一層美沙

子をみじめにするのだった。それと同時に美沙子は、こうされる事が初めからの約束事である事をその時知った。これは今までに彼女にとっては、全く経験のな

い事であり想像すら出来ない事であった。

少しではあるがさっきまでの恐怖心は薄らいだが、不安な気持と切つなさは消えなかった。この場合、こんな事をされるのならすぐにでも帰らしてもらいたい、とそういいたかった美沙子だったが、不安と苦痛を噛みしめながらも、それを口に出す事はしなかった。

老人は口から葉巻の煙りを出しながら、しばらく美沙子を見つめていたが、その中、杉江に目配せすると、杉江は心得顔に立ち上って美沙子を先ず立たせた。

老人のすぐ目の前で縛り上げられた美沙子はきちんと立たされ、前や後ろとゆっくり眺め回されるのである。

すらっと伸びた美しい肢体は、すべすべと輝いているようであった。そんな肌にきっちり喰い込んでいる縄目が、美しい美沙子だけに余計痛々しい。

もっとも、それが老人にはこよなく楽しいのかも知れなかった。彼は眼を細め薄い唇を時々上下に動かしながら、如何にも陶醉の面持であった。

立たされた身体は更に横に倒されたり中腰にされて歩かされたり、果てはえびのように身体を曲げられるのであった。美沙子はその

都度、小さく叫んで哀願するように老人を見たが、かえって老人はそれを喜んでいる風であった。

その中、杉江は美沙子の片足を左手で握ると、右手で背中の方の皮バンドを掴み、足を上げさせるような恰好でバンドをぐいぐい引締めた。美沙子が思わず悲鳴を上げ身をよじろうとするのを構わず、引きずるようにしてぐるぐる回した。老人は身を乗り出すようにして、そんな恰好にされている美沙子を凝視した。

余りの人もなげな仕草と苦痛に、思わず大きく悲鳴を上げる美沙子は、すぐ杉江の手で無操作に猿轡を嵌められてしまった。光沢のあるその布切は固く頬に喰い込んで、もう声も立てる事は出来なくされたのである。

それからゆっくり片足を上げさせられ、倒されたり、そり返されたりして様々なポーズをとらされて、それを眺め廻された。

こづかれてごろごろあたりを転がされ、そのあげく老人のすぐ目の前に、尻を天井に向けて両足を折られて、丸くなった姿をさらされじっくり鑑賞されるといった風であった。

さすがに杉江の顔からも汗の光りが目立ちはじめると、責められている美沙子の方は余

計苦痛に喘いで、美しいその顔は涙と汗でじっとりぬれていた。形のいい鼻の穴をピクピクさせ荒い息が聞えるようであった。

老人はそんな美沙子を見ると、さらに眼を細めて、あれがよい、こうせいと杉江を指図しながら、まるで猫が鼠を弄ぶように、美しい美沙子の身体を色々の恰好にさせるのであった。

その時の眼の光は、とても老人とは思えぬものだった。杉江が丁度赤児に小用をさせていると、そっくりな恰好で美沙子を抱きかかえると、それが老人には気に入ったらしく、自由のきく右手で彼女の泣きぬれてうめいている顔を突つきながら、

「フッフ、いい子じゃ、いい子じゃ、こうすると益々綺麗じゃよ、ウッフッフ」

それは獲物を前にして咽喉を鳴らした猫を思わせる一種の無気味さを持っていた。

艶のないたるんだ皮膚に太い静脈の浮いた顔と、美しく喘いでいる美沙子の顔とが重なると、そんな空気が一層強くなるようであった。

老人はしばらくの間、そんな美沙子をじっくり視線で眺めていたが、その中、杉江をど苦勞だったといって室から下がらせると、今

度は自分の手で美沙子を抱え、分厚い布団の上に置いた。

「フッフ、少しばかり手荒な事が続いたようだから今度は優しくしてやろうかの、ええフッフ、どうじゃ、その方が良からうが、可哀想に大分縄のくびれが痛そうじゃな。色が変ってきたが、まあもうちょっと辛抱せえ、こうせんと可愛味が薄れるでな」

老人はそういうと、美沙子の猿轡だけは外した。それから老人はゆっくり顔を美沙子の顔に近づけると躊躇なくペロペロとなめはじめたのである。

汗と涙で光るその美沙子の綺麗な顔をまるで甘い果物でもしやぶるようにペロペロとやり出したのだ。顔から眼、頬、鼻、唇とそれ



は丹念に、そして執拗を極めたものだった。

美沙子は夢中でもがいたが、そんな事は意にも介せず、顔が終ると更に首筋から胸、背

中と老人の顔は静かなテンポで、徐々に下に下がっていくのであった。

苦痛にのたうちその美しい身体から吹き出た若い女の分泌物こそ、この老人にとってはまたと得がたい回春の妙薬にも勝るものなのだろうか。老人の異様ともとれるその仕草は、たしかにそうだといって狂わんばかりにもがいているとしか見えなかった。

時々息を深く吸い込んで顔を上げる事はあっても、その動きは止まらなかった。そして老人は時のたつのも忘れて美沙子の足の先まで余す所なく丹念にしやぶり尽していったのである。

(四)

何か白い霧のようなものが動いて、それが大きく何度も波になって押し寄せたり引いた

りしながら薄れてゆくと、美沙子は遠くで尾関の呼ぶ声を聞いた。

ふわりふわりする身体を、懸命に押さえて行くと立派なベランダに尾関の顔が笑っていて、遠くには広々とした町の屋並が見えた。風通しのいい立派な室にいつの間にか自分も笑っていた。すぐそばに尾関の笑い顔があった、しきりに何かを指差していた。

美沙子はそれが何人であるか、一生懸命見ようとするのだが、どうしても見えない。しまいには身を乗り出してベランダの外の手スリに手を掛けると、その手スリがいきなり崩れてポツカリ足元には大きな穴が開いた。ハッとして思わず声を上げると、あたりは急に暗くなり、ぐんぐん自分の身体が穴の底へ引き込まれていくようだった。

美沙子は手足をばたばたさせてもがきにもがいたが、どうする事も出来ないのだ。息が乱れ眼が回り恐怖に胸も塞がって、思わずあらん限りの叫びを上げた。と、その時ハッとて彼女は我に返った。ああ今のは夢だったのかと思う間もなく、今度は現実の苦痛が、すぐそこに横たわっていたのである。

気がついて見れば、裸のまま後手錠にされ、両足にも錠を掛けられて寝かされている

のである。

あたりを見回すと自分の室である。そうだあの老人の室でさんざんいたためつけられた後で杉江に引立てられ、縛り上げられたままで浴室に連れて行かれたのだ。そこでやっと縄は解かれたが、手錠は掛けられたままで、身体を洗われたのを覚えている。

杉江はわざと邪慳に胸の丸味をゴシゴシこすり、これ見よがしに長い間浴槽につけたりした。そしてぐったりしてしまった彼女は、足にも錠を掛けられて此処へ寝かされたのだ。

泣くにも、もうその力すらなくなってしまう彼女、いつの間にか寝不足と疲れのため眠ってしまったらしい。

美沙子はもうどの位の時間が経っているのだろうかと、首をねじ向けて時計を見ると針は十時を過ぎていた。

美沙子の胸にあの老人のいった二日間だけという言葉が、その時、現実味をおびて浮んできた。そうだ、今日一日なのである。が、その今日がまたどんな事をされて責めさいなまれるのだろうかと思うと、切つなくなつて涙が溢れそうだった。

きつとあの老人はまた酷い事をするに違いないのだ。その時の事を想像するだけで、たまらない気持だった。

しかしそんな美沙子の思いをよそに、それから間もなくすると杉江が室に入ってきた。「あら、目がさめていたんですね。それはようございました」

この女はいつも表情を崩さず言葉も決して事務的だった。朝の食事の仕度くをして、そこに美沙子を坐らせると、手錠も解かず杉江はいった。

「私が喰べさせて上げますからね、遠慮なくおあがんなさい」

それを聞くと美沙子は顔をそむけた。いくら何んでもそんな事、と杉江はああそうとばかり二度とはいわないでせつと、それを片付けてしまった。

それからすぐ、美沙子は杉江に引立てられるようにして奥の老人の室に入れられた。

「おう、どうかね、気分は。ハハハ、そういうても良い筈がなさそうじゃな、わしは至極良い方じゃが」

そういう老人は、さも待ちかねていたようだった。杉江はすでに指図されていたのだから。ツと立って隣の室に入ると、其処から手に一束の縄とかなり大きな箱を持ってきた。

すぐ老人の前で美沙子はまた後手にぎりぎりと縄を掛けられ縛り上げられた。今度は皮バンドの縦縛りはされなかったが、両足は固く縛られた。

その次にはまた緊縛によるあの苦痛が待っているのかと、美沙子は早くも胸を震わせるのだった。

だが老人はそんな美沙子を例によって笑いながら見つめていたが、やがて自分から抱き上げると布団の上に横たえた。

しばらくはすべすべした美沙子の肌が縄にくびれているのを眺めていたが、やがて杉江に目配せした。

杉江が箱から取り出して老人に差出したのは、五〇CCのポンプ式浣腸器である。

それを見ると美沙子は「アッ、アアア！」と本能的に身をよじってあがいた。老人はそれに目を細めると、自由がきかないといった左手で美沙子の足をぐいと顔の方に曲げ、出来るだけ尻の方を高くさせる恰好にさせて押え付けた。美沙子はあがくようにピクッと身体を動かしたが、自由がきかないそれは、なすが儘になるより仕方なかった。

早くも切つなそうな息が荒かった。

「よいかな、身体の中を綺麗にして、すっか

り掃除をするだけじゃ。浣腸をすれば本当に綺麗な身体になるでな」

老人の手にした浣腸器の先からポタポタと浣腸液のしずくがたれると、やがて美沙子の身体がククッと動き、切なそうな悲鳴が起った。そしてそれは一度でなく二度、三度とその度に美しい顔が左右に激しくゆれるのだった。

老人の息も少し早くなったが、やがてそれが終ると大きく一つ肩をゆすった。すぐ杉江に顎をしゃくると、替って杉江は手早く美沙子の足の縄だけ解くと、その場から抱え込むようにして彼女を浴室へ連れていった。

浴室へ連れ込まれた美沙子は、そこで可哀想にも今度は片足を吊られてタイルの上へ横たえられてしまったのである。

「アッアッ！ 許してッ、お願いだから許してッ、許して下さい」

間もなくそこでどんな風になるか、それと思うと余りの事に美沙子は夢中で叫んだ。杉江はそれを見ると待っていたように、容赦なく固い猿轡を噛ましてしまうのだった。その時老人は葉巻をくゆらせながらゆっくり浴室に入ってくると、椅子を持ってきさせて美沙子の喘いでいるすぐそばに腰を下ろした。

やがて短い時が過ぎるとかすかなうめきと一緒に美沙子の悲しみを込めた屈辱の響が、ある時は高くある時は低く断続的にあたりに広がっていったのである。

それを眺める老人の顔には不気味な位静脈の筋が浮いて見えていた。そうしてひとわり浣腸の始末がつくと、杉江はザッとタイルを流してから、美沙子の猿轡を外した。

と、すぐその口へ息つく間もなく太いゴム管が突込まれ、長く伸びた反対側は水道の蛇口に嵌込まれた。その管を通して今度はまた容赦ない水がドクドクと美沙子の口へ注がれていくのである。

無理に飲まされはじめた彼女の口からおびただしい水が洩れ、縛り上げられているその裸身は苦悶に震えうめいた。

傍では杉江がじっと頃合いを見ていた。

みるみる美沙子の腹部が大きくせり上っていった。もうその位でよしとばかり水を止めると管を抜き美沙子の吊ってある片足の縄を解いて再びその裸身を抱きかかえるようにして起した。

老人が先に立つと後ろから杉江が美沙子を抱えて浴室を出ていった。

無理矢理に大量の水を飲まされた美沙子は



もう口もきけない位の苦しさに気も遠くなる程だった。が、しかしこれで責められる苦痛は終ったのではなかった。

再び老人の室に入れられると隅にある一本の柱に、まず縛られている上半身はそのまま更に動けないように、そこへぎったりと縛り

つけられ、更にそれから片足をかるく太い竹棒に括り付けられると、そのままぐいと思いい切りそれを上にあげさせられて固定されてしまったのである。

「アアッ、アッ、アアア」

それは何と哀れな痛々しい恰好だろう。だ

が美沙子はもう苦痛の激しさに今は悲鳴を上げる力もなくなっていたのだった。

そんな可哀想な美沙子の前に、杉江はこれ見よがしに大きな鏡台を置いた。そのそばに老人は例によって葉巻をくゆらせながら、じっと美沙子を見つめて坐ったのである。

先程の水責めの効果が、こうする事によってどんな風になって現れるか、老人はそれが待ち遠しくてたまらない風であった。

やがて時間がたてば苦痛に喘いでいる美沙子の顔が更に激しくゆらいで、新しい涙が更にその頬をぬらしていくに違いない。そしてその時美しいその身体からほどばしるものは、それにふさわしい綺麗なものに違いないのだった。

それを思うと、知らず知らず老人の目は細められていく。そしてその事は間もなく事実となって、そこに現れたのである。

苦痛の上にこらえこらえていたものが、とうとうこらえ切れなくなつて、哀れな美沙子は泣きながら、あたりをぬらしていったのである。そしてそのまま彼女は深い闇の中に意識を落していったのだった。

……

静かな木立の中でかすかに鳥の鳴声がして

朝の太陽は明るく照り輝いていた。

広い屋敷の中はいつもの通りひっそりとして、此処だけがまるで別天地のような感じだった。決った時間になると必ず玄関先から門までの玉砂利を敷いた道を一人の女性が清掃するのだが、今日はその姿はまだ見えていなかった。が、しばらくすると、そこを美しい和服姿の女性が現れ、静かな歩調で門に向かって行った。

真新しい足袋の白さが目にしみるようである。

心持ち伏せ気味にしたその顔は幾分青ざめてはいるが、美しい美沙子のそれにまぎれもなかった。彼女は門の所までくると足を止めて、その古めかしいが威厳のこもった門柱に掛けてある標札をじっと見た。そこにはかなり薄れてはいるが躍るような文字で「海部」と記してあった。

美沙子はそこを離れ、しばらく行った所でもう一度顧った。何んの為に顧ったのか解らないが、しかし、もしかしたら、もう一度あの門を、と、そんな気が少しでも早く此処から離れたいと思う気持の中に幾らかでもあったからなのかも知れない。玉砂利に彼女の足音だけが、すがすがしかった。

(終)

圧倒的人気！ 注文殺到！ サディズム文学の最高峰、S派必読の書

臨時増刊 花と蛇 小説、絵画、写真▽特集号

四馬孝画「花と蛇」各章クライマックス・シーン巻頭口絵十六葉
グラビヤ・フオト「花と蛇」各場面描写特別撮影写真三十六頁
長篇サディズム小説「花と蛇」第十五回完結まで一挙登載
オフセット印刷緊縛写真／縛られた女体オンパレード▽

(乞直接お申込) 定価一部 五〇〇円 略号(花)

満天下Sファンの血を沸かせた団鬼六作の傑作サディズム長篇小説「花と蛇」は、皆様の声援により、ここに全篇一挙掲載の特集号として、堂々完成いたしました。冒頭に掲げ

ました巻頭口絵、グラビヤ写真の外に、豊富なオフセット写真を加えて、文字通りS派垂涎の特集号をお贈りします。未見の方は一刻も早く直接お申込みを――。

内 容

第一グラビヤ

【花と蛇】幻想 新作写真集

本誌写真部 特 写

柱に縛られた美体……

玉田美佐子

厳しき縛しめに喘ぐ……

玉田美佐子

浣腸器による責めの幻想……

大塚 啓子

美貌醜弄(鼻責めの幻想)……

大塚 啓子

禪裸女緊縛の幻想……

大塚 啓子

両手首くさり吊りの美女の幻想……

大塚 啓子

美女手吊り晒し悶々の幻想……

大塚 啓子

ガラスシリンドラーと裸女責め幻想……

玉田美佐子

柔肌と麻縄の織りなす幻想……

玉田美佐子

△花と蛇▽画集 四馬孝・画

玉田美佐子

一、静子夫人捕縛る

玉田美佐子

二、静子夫人と桂子の対面

玉田美佐子

三、静子夫人に迫る魔手

玉田美佐子

四、川田の悪どい企らみ

玉田美佐子

五、桂子と静子夫人のオシメ責め

玉田美佐子

- 六、令夫人に対する浣腸の洗礼
七、深窓の美女夫人の晒しもの
八、あぐら縛りの特別席
九、カメラに向けられる苦悶する美貌
十、京子探偵への惨忍な報復
十一、田代と森田にいたぶられる静子夫人
十二、美人探偵京子頑張る
十三、静子と京子の後手吊り
十四、捕われた美津子の姿
十五、京子と妹の美津子
十六、受難の静子令夫人

私のアルバム

私の緊縛フォト・コレクション

- 私の可愛いペット……………梨花悠紀子
明眸のいましめ……………大井小夜子
美女の柱しぼり……………絹川 文代
二女連縛 美しき羞らい……………大塚 啓子
着衣剥奪と緊縛シーン……………絹川 文代
算盤責めのお仕置……………竹野ひろ子
乱れ裾緊縛絵模様……………大塚 啓子
荒縄と竹竿の責め……………愛川 悦子
扉 淫蛇に襲われる美女 四馬孝・画
絹川 文代
団鬼六作、四馬孝画

長篇「花と蛇」

第一章 発

端…静子令夫人―誘拐
された令夫人―送られた着衣―ズ
ベ公の本拠

第二章 陥

穿…二度目の嫌がらせ

第三章

―運転手の正体―地獄の結婚式
美人探偵…落花紛々―美人探
偵京子―浣腸地獄図

第四章

浣腸 図…浣腸強制―屈伏
救 援 者…羞恥地獄―観念の
座―京子の活躍

第五章

救援の失敗…逆転―囂りもの
好 餌…京子の屈伏―淫獣
の餌

第六章

悪魔の哄笑…毒牙は迫る―新鮮
な生贄―悪魔の笑い―遂に美津子
も

第七章

地下室…悪鬼の饗宴―美津
子のおとり

第八章

翻 弄…屈辱と羞恥―身代
りに立つ夫人

第九章

蛇の執念…裸踊り―おしめを
使う夫人―屈辱の挨拶

第十章

姉妹危し…屈辱の猿ぐつわ―
浣腸競演

第十一章

調 教 師…遂に京子も―土牢
の中―調教師来る

第十二章

美津子受難…二人の美女―調教
師―狂乱の美津子

第十三章

結 末…美津子の屈伏―二
つの肉塊―絶対絶命―美しい童女
―スター誕生

第十四章

花と蛇 グラフィック・ファンタジー

第十五章

第二グラビヤ

花と蛇 グラフィック・ファンタジー

女体緊縛アルバム

- 責めに悶える女体の幻想……………大塚 啓子
浣腸器の恐怖につかれた幻想……………大塚 啓子
玉簾越しの女体非情の幻想……………玉田美佐子
両手首両足首連縛の幻想……………玉田美佐子
苛められ尽した女体の幻想……………大塚 啓子
羞恥さらし責めの幻想……………大塚 啓子
柔肌に喰い込む縄の幻想……………大塚 啓子
着衣剥奪と浣腸に悶える幻想……………大塚 啓子
光と影による浣腸器の幻想……………大塚 啓子
渾美といましめに泣く幻想……………大塚 啓子
怨嗟と愁嘆、苦痛と忍耐……………大塚 啓子
足吊りに至る過程の幻想……………大塚 啓子

美女姉妹仲よく縛られる……………絹川 文代
手吊にもだえる八態……………桜井 葉子
美しき捕われの餌物……………絹川 文代
雨中泥まみれの折檻……………大塚 啓子
伸びやかな四肢と縄目……………絹川 文代
緊縛女体の優美ポーズ……………熱海 容子
柱しぼり女体悦虐模様……………絹川 文代
縄に憑かれた陶酔境……………梨花悠紀子
ショート・パンツ哀感……………絹川 文代
カメラに全身を晒して……………絹川 文代
レインコートのかがやき……………絹川 文代
紺色の囚衣をまとい……………絹川 文代
団鬼六先生の力作、長篇小説「花と蛇」の
麗筆は息もつがせず皆様を魅了するのは勿論
のこと、特写フォトの華麗な緊縛写真と相俟
って、四馬孝画伯描くところの画集が更に一
層、この特集号の真価を高めております。未
見の方は略号「花」とお書きになって今すぐ
お申込み下さい。

小説にあらわれた「殺し」の場面

黒田寿

またまた処刑マニヤの小説の読み方を御紹介します。世界の名作も殺しの場面がなければ、私にとっては三文小説以下。空想がどれだけ混っているかは私にもわかりません。

クレイグ・ライスの「すばらしき殺人」で新婚第一夜の花嫁が、花ムコの外出中にベッドの中で首を斬られている。警察医がやっとその首を胴体に縫い合わせたところに彼氏が帰ってくるが、なんとその首は花嫁とは別人だった。（すると、どうなったんの、これ）

つまり何者かが、もう一人の美女の生首をホテルに運びこんでから、もがきあばれる花嫁の首を斬りとり、そのかわりに自分の持つ

てきた生首をおいて、しかるのち斬りたての血の滴る生々しいやつを持って行ったのだ。

（話せるじゃありませんか）

ともかく、最低二人の美女が早いとこ殺されたわけで、この調子なら一ダース位生首が並ぶのかと思わせたが、期待にそむいたのは残念。

同じ作者の「矮人殺人事件」では、美女が絹のストッキングで首を絞められ、戸棚の陰に吊るされる。ドアをあけて入ってきた女探偵の目に、戸棚のドアごしにダラリとぶらさがっている二本の素足が見える。ところが、殺された女は実は女探偵のにらんだホシの方で、護衛しようとした女が真犯人であった。

「幸運な死体」では、いきなり女死刑因が登場し、三時間後に電気椅子につくという。この第一章だけはすばらしかったが、御想像の如くあと一分という時に無罪が判明する。以後彼女が主人公となるのだが、ろくに読まなかった。

スピレーンの「裁くのは俺だ」のラストシーンで、御存知マイク・ハマー君が、全裸のブロンド美女の下腹に、愛用の大型拳銃を押しつけて一発ブチこむ。彼女がのたうちまわってもだえ苦しむのを、彼はタバコをふかしながら見物するのだ。絶命するまで何時間楽しんだことだろう（うらやましい）。

彼の作品では必ず全裸の美女が登場し、手

吊り足吊り、トランクに押しこんで刺し殺したり、あげくの果ては、胃袋をとられたりする。是非一見されたい。

ハメットの『マルタの鷹』でも同様非情極まりない探偵が登場し、自分の愛人が泣いて許しを乞うのもかまわず殺人犯として警察につきだす。その時の最後の言葉は「君が絞首刑になっても覚えていてやるよ」(イカス)

作者不明の『死後の恋』で、十八才の元王女は、男装してのがれようとするが及ばず、哀れ顔にハンカチを巻かれて、木の枝に結ばれ、足首が辛うじて地についたので絞首刑はまぬがれたが、無惨にもむきだしの下腹に、

宝石を散弾のかわりに大口銃銃につめて射ちこまれる。バックリあいた傷口から、ひとつかみ程のはらわたが、ダラリとたれさがり、それに宝石が喰いこんでキラキラ輝いているのだ。美しい王女の血汐を吸った宝石……さぞかし高価に売れたことだろう。(欲しい人は手をあげて)。

『フランケンスタイン』の原作は映画でおなじみのものとはかなり異なる。しかしそんなことはどうでも良い。まず殺されるのは幼児だが、その犯人と誤られて、若い女性が死刑の判決をうける(しめしめ)。

彼女は運命とあきらめ静かに死をまつのだ



が、最後の瞬間となると猛烈に泣き狂い、無実を絶叫しつつ哀れ絞首台で死んでゆく。しかも主人公の

妻までが、この怪物に襲われ、細首をぐいと絞められる。たったこれだけで、彼女の頸骨は砕けてしまい、胴体も四肢もズタズタに引き裂かれ、ベッドの四隅に投げ散らされ、生首は持ち去られてしまう(愛い奴、愛い奴)

『魔人ドラキュラ』の犠牲になり、死後吸血鬼と変えられた美女は、その豊かな左の乳房に、先を鋭く尖らした棒杭を打ちこまれ、すさまじい悲鳴と共に鮮血を噴きだしつつあの世でも死んでゆく。あげくの果て美しい首は切断され、口のなかにニンニクを一杯詰めこまれる。こうしないと呪いが消えないそうだから(念が入ってる)。

『切り裂きジャック』は実話だというが、美女たちはことごとく喉を断ち切られて殺されたのに、下腹部を切り裂かれ、女性特有の臓器を持っていた。犯行は殆どが屋外でたった一例だけ屋内だったが、運の悪いその女は、さながら解剖学教室に於けるが如く、ありとあらゆる内臓が部屋中にばらまかれたという。例によって子宮が紛失していたことは言うまでもない。

しかし、ビート族やナントカ族の手にかかると、それ以上の話もある。

「彼女は若く美しかった。しかし、今やそれ

は、メチャメチャに破壊された物体にすぎない……彼女は乳房と性器をえぐりとられ、血の海のなかに横たわっている。もっと悲惨なことに、彼女はまだ生きていて、もがき苦しんでいるのだ……」

「彼女は二十五才位だろう。雛様のもので、左右の乳房と下腹部を主として約三十カ所。致命傷となったのは心臓部に対する二カ所であるが、更に充分な止めが刺されていた。即ち、もっと正確に言えば、彼女の首が斬り落されていた……」

もっとすさまじい話もありますが、実話とあつては遠慮すべきでしょう。

「孫子」の主人公が始めて仕官した時、王はからかい半分に、自分の侍女たちを訓練せよと命じた。孫子が命令を下しても従う筈がない。すると彼は即座にその隊長をやっていた二人の美女Ⅱ王の愛妾Ⅱの首を刎ねたので、以後彼の号令は一声で全軍にひびき渡った。王は一時は悲しみにくれたが、なにしろ美女は三千人も居るし、お陰で全国を従えたのだから、名声を得た孫子と共に満足した。結局哀れをとどめたのは、斬首された二人の愛妾である（アーメン）。

歌川大雅氏の作品も面白い。美女をエビ縛

りにして、喉の前においた半月刀と足首とを結ぶ。足をのばせば半月刀が喉に喰いこむわけだ。足の裏をコチョココチョとやれば、どうなるだろう。

同じく両脚を、せいはいっぱいにひろげ、弓ヅルを張って鋭い矢をつがえる。彼女が少しでも動けば、矢はそのまま股のつけ根にグサリ。今度はおへソでもくすぐってやるか。

最近のものには、女子高校生の一団がジェット・コースターに乗っている。その前方に鋭い刃のついた柱が待ちかまえており、高さはちょうど首のあたり。こうして悲鳴と共に二百個の生首が一瞬のうちに転がった。題して「或る日首が飛ぶ」

江戸川乱歩もよく美女を殺してくれるので感謝している。「人間豹」では美女が豹に襲われて、生命のみか肉体まで何一つ残さず失ってしまう。ラストにももう一回、美女対豹の格闘があるが、この方は探偵（モチ、明智君）の恋人だから助かるのも止むを得ない。「獵奇の果」で美女の生首がもてあそばれ、「地獄の道化師」で崖から突き落とされるなどものはものたりないが、一々名をあげたらきりのない程美女が殺される。ハリツケにされるもの、全裸のまま人形のかわり博物館に並べら

れるもの。水族館に人魚がいると思ったら、被害者の死体であったなど。一応二つだけ紹介してみます。

「魔術師」で、主人公の恋人は誘拐され、サーカスの人体切断の見世物の人形がわりに、大勢の見物人を前にして殺される。まず右手を次いで左手を、そして両足と斬り落され、最後に首を刎ねられるのだ。犯人は全く意外な女性で、やがて死刑になることは間違いない。

「盲獣」でも七人の美女が惨殺されるが、その一人は風呂場のなかで（とすると全裸ですね）犯人に馬乗りになられ、頸をぐいぐいと押しつけられて息絶える。しかもそのあと、出刃ボウチョウで、首も手も足もちょん切られて、浴槽に投げこまれ、犯人はその血の湯の中で心地よく楽しむのだ（ゾクゾク）。

雄山閣発行、名和弓雄氏の「拷問刑罰史」は真面目な本だが、私にかかつてはかなわない。書名を明記すれば転載は自由と言われているのを幸い、勝手に引用させていただきます。

八百屋お七嬢については言うまでもありません。彼女の火あぶりに際しては薪を二百把、茅は七百把、使用したというから相当のもの

だ。しかも後世になってからは、執行の前に首を絞めて殺してから焼いたのだが、お七君の頃はそんな情は与えられず、充分に焼かれたらしい。しかも止め焼きとして、鼻孔と乳房と下腹部を茅四把づつで焼き、完全に黒焦げになった死体は三日二夜晒しものとしてから、刑場の隅に無造作に投げすてられ、やがて野犬や鳥の餌食になるのだから、いかなる美女でも浮かばれまい（だから幽霊となってあらわれる）。

同じ火刑だが、慶応年間というから、そんなに昔ではない。三島宿で原のおせきという妙齡の美女が、衆人環視の白昼の河原で焼き殺された実話がある。

彼女は見せしめのため全裸にされ、宿中引きまわされてから、刑場の柱に縛りつけられたのだが、必死の乞いが入れられて半紙一枚を下腹部にあて、周囲に茅をおいて焼きたてた。

見物人が黒山の如くおしよせて、この残酷ストリップ・ショウの草分けのような処刑を見物したが、三島神社の祭礼よりもにぎやかだったという（そうでしょうね）。

嫉妬に狂って同僚七名を殺害した女が、大きな木の箱の中に、裸のまま大の字にされ、

手足を釘で打ちつけられて、生きたまま海に流される話もある。

永禄十二年、北畠具教が叛臣の娘を殺し死体を串刺しにしてハリツケにかける……。これは文章だけなら大したことはないが、次頁にその挿絵があるから嬉しい。二本の柱に美女が手足をせいっぱいにひろげたX型に縛られ、その股間から体内をつきぬけた槍の穂先が、上を向いた苦悶にゆがむ顔の口から真上につきでている。この挿絵だけでも苦心して手に入れただけのことはあった。

次の挿絵は海岸に逆さハリツケになった美女で彼女の息の根をとめるのは槍にあらずして汐である。即ち汐が満ちてくると首が海水にひたり、息もつけぬ苦しみとなる。完全に浸ってしまえば死ぬから、そうならぬように絶命寸前で息がつけるように加減されている。全く念の入った話で、彼女は八日目にもたえと見られぬ、水ぶくれの惨状を呈したまま息を引きとったという。

斬首刑は皆様すでに御承知だから、珍らしい三段斬りをご紹介します。

金沢藩にみられた死刑だが、美女を後手に縛って立木から宙吊りとし、頭が上に脚が下を向いている腰から下を一刀で斬りおとすと

宙に残った頭と胴はバランスを失って、頭が重いクルリと半回転し、頭が下に胴の斬口が上になる。その瞬間を狙ってタイミングよく首を斬りはなす。これも見せしめのため野外の刑場で行ったというから、鮮やかに美女が三つになった時は、満場の見物人から「お見事」の声がかかるわけ（殺される美女の方はたまったものではない）。

挿絵がまたすばらしく、下半身は地上におちんとし、胴体は乳房をむきだしにしたまま後にまわされた手首によって横木からぶら下がり、首はとみると恐怖のため目をいっばいに見ひらいたまま胴体と脚の中間にとんでいく。このあと獄門に梟け晒しものとなるのだから、ふんだりけったりというわけだ。

元来金沢藩は惨刑が好きらしい。小山竜太郎氏の作品によれば、特に隣国より入りこんだ女スパイに対しては極刑に処している。刑場に運ぶ時は云うまでもなく全裸とし、裸馬にまたがらせたり、もっとひどい時は荷車に脚を大きくひらいた形で、見世物の様にして連れてゆく。その途中槍の穂先で大事なところをチョイチョイ突いたりするのだからたまらず、舌をかみ切って死んだ美女もあらわれた。以来処刑前に歯を全部ぬくことにしたと

いうからすさまじい。甚しい時は火刑に処す前に大事なところをえぐりとりたりした（焼くのは惜しいから）。

美しき女忍者は、水中にのがれようとしたが、追跡者の放った短筒は彼女の左乳房に真赤な花を咲かせた。もはやこれまでと覚悟した彼女は、せめて死体を敵に見せまいと水中深く沈み、水底の岩に四肢でもってしっかりと抱きついたまま息絶える。一方敵方では是非彼女の死体なりともハリツケにして晒そうと、水練の達人を水にもぐらせ、この死体をはがそうとしたがどうしてもはなれない。止むを得ず首だけを斬りはなし、獄門に梟けるだけで我慢した（作者黒田寿）

清水正二郎氏の某国対某国のスパイ合戦がある。捕えた敵方の十六才の美少女を全裸にし、大きな穴を掘らせてその傍に立たせ、後頭部に拳銃を一発射ちこむ。美少女は一回転して、両脚を大きくひろげた形のままあおむけに、自分の掘った穴の底に横たわる。

この女スパイも運がつけば、飛行機から投げ落されて花びらのように地上におちてゆく（一巻の終り）。

ブラントームによれば、中世の頃、処女は尊いものとされ、死刑をうけることがなかつ

た。ところがある一家が反逆罪に問われ、全員死刑の宣告を受けたが、なかに十八才の処女が居た。罪が罪なのでどうしても殺さねばならず、どうするかと見ていたところ、王は彼女を召して一夜の伽を命じ、翌朝その首を刎ねさせた。まるで千夜一夜だ。助命、あわよくば寵妃……と期待した彼女はさぞ失望したと見え、悲鳴をあげて逃げまわったが、とうとう捕えられて、無惨にもバツサリと片付けられてしまった。

十八才未満には死刑を禁じていた国があった。革命がおきた時、数多くの女性が捕えられ、次々と絞首台の露と消えていったが、六人だけは未決のままでおかれた。彼女らはいずれも死刑に相等する罪だったが、十八才に満たなかったからである。

二年後この六人はあらためて裁判にかけられ、もうこの時はすべて十八才に達していたため、全員死刑の判決を受けた。しかも執行方法が斬首と変っていたため、前に殺された方がよかったと泣きながら首を刎ねられた。

書いているうちに殺しが処刑になってしまった。やっぱり私は処刑マニヤだ。今度は例によってモデル嬢をバラします。題して「七人の女死刑囚」何だか聞いたことがありそう

な名前ですね。

茂美、百合子、マリ、亜紀子の決死隊は、深夜ひそかに敵地に上陸をくわだてた。小舟から砂浜に降りたが、そこには鉄条網が張られてある。

亜紀子が用意のハサミで切り開こうとしたが、刃が網にふれた瞬間、ぱっと火花が飛び散り、彼女の身体は激しくふるえだした。高圧電流が通じていたのだ。こうして数秒後亜紀子の美しい身体は炭化してしまい、間もなくかけつけた敵兵が棒でたたくと、哀れ灰となって飛び散ってしまう。

マリも続いて敵の手に捕えられ、砂に顔をぎゅうぎゅうと押しつけられた。必死にもがいてもだめ、細かい砂は鼻孔からも口からも侵入してくる。四肢が断末魔の痊れんにふるえ、ぐったりとなった身体から首が切りとられて一巻の終となる。

百合子は飛行機のプロペラの一枚の羽根に縛りつけよう。一分間二千回転の早さで動かしたら、あっと言う間にオダブツだから、勿論十回転位から始める。遠心力によって体内の内臓はすべて上方に（逆さに縛れば下方に）押しやられ、目鼻口からは鮮血がほどば

する場面が見られるわけだ。何回転で絶命するかは賭の対象となる。

さて茂美が最後に残ったが、これまた発見されて戦車で追いまわされる。百メートル十秒の新記録で逃げまわっても、残念ながら戦車の方が早かった。力ついて倒れたところ、ゆっくりと腹部へのしかかる。

「ギャッ」と蛙が潰されるような悲鳴があが

文献資料を求む

本誌上に紹介して価値のあるS・M・F等各種の文献、資料を御所持の方で御提供可能の方は御連絡願います。誌上発表の分につきましては、出来るだけの謝礼を差し上げたいと存じますので、文献誌としての本誌の価値を高めるためにも何卒新古多少に拘らず御提供願います。

写真、絵画、文章、パンフレット、広告スクラップ・ブック、チラシ等なんでも結構です。御希望により使用後資料は御返却いたします。

「奇クサロン」 原稿求む

「奇クサロン」は大変好評です。読者の皆さまの共通の広場として、読者通信と共に発展させてゆきたいと思えますのでマニヤ通信、短信往来、呼びかけ、モデル通信、文通交際、写真、絵など何んでも構いません。どしどしお寄せ下さるようお待ちしております。

本誌編集部

り、スラリとした二本の脚がピンとはねあがってから、力なくダラリと再びたれさがる。こうして野性美満点といわれた茂美の美しい身体は、一塊の血泥となって地面に吸いこまれてしまう。

次はベテラン・トリオー

秘密書類の安全なくし場所として胃袋をえらぶことはよくある。美しい三人の女スパイは、秘密を小さなカプセルにしこみ、いざという時は直ちに吞めるようにしておいた。

啓子はスパイとして死刑を宣告され、ギロチンにかけられる。だがカプセルは吞みこんだから大丈夫だ。半月型の板の上に首をせいいっぱいにさしのべ、巨大な斧の落ちてくるのをまっている。一気にズシン／＼とくれば幸いなになかなか執行されない。次第に恐怖がまし、その顔がゆがんできた。口が嘔吐でもするように大きくひらき、とたんにカプセルが逆流してきてポトリと落ちた。「しまった」啓子が心で叫んだ時、裏音と共に断首刃はすべり落ち、彼女の首は地上のカプセルを、もう一度くわえようとばかりすぐ傍にころがった。

敵に追われた文代は、もうのがれないと知って、カプセルを一息で吞みくだそうとした

が、その時早くもおどりがかった敵は、そうはさせじと両手で彼女の細首をぐいと絞めつけた。目を白黒させて必死に吞みこもうとしてもだめ、次第に彼女の呼吸は苦しくなり、やがてぐったりとなった。敵は短刀を齒の間に入れてこじあげ、喉のおくを見たがみあたらず、短刀をもちかえると、なんとなく文代の首をかきおとした。髪の毛をつかんでぶらさげると、滴る血汐と共にカプセルは喉の斬口からポトリとおちた。

悠紀子は敵の手がかかる寸前、一気に吞みくだし一安心したが、考えてみれば腹を裂けば容易にとりだせるのだ。かくて彼女は解剖室に送られ、せめてその前に首を斬ってくれの願いも入れられず、生きながら胃袋をぬきとられる悲惨な最期をとげるのだ。

悠紀子のすべすべとした美しいみぞおちが真二つに断ち割られて、胃袋がとり出される光景は、私達の胸をわくわくさせるのに充分である。

モデル嬢の方々、私はこんな風に貴女たちを殺していますが、皆さんも大塚さんに負けずに「処刑される」手記をよせてください。期待しています。

異常体験記

一つの転期 (珠江抄)

保 やす藤 ふじ久 ひさ人 んど

一つの転期

ずいぶん古いお話なのです。もう、思い出すのも憶却な位に……。それなのに、その断片の一つ一つは私の網膜に灼きついて離れません。その影は網膜ばかりでなく、私の心にもまで入り込んで、私の魂を揺さ振り続けるのです。私の思慮や分別までも押しつぶして仕舞うような勢で……。

× × ×

昭和十七年。工業学校を卒業した私は某市に住む叔母の世話で、M製作所の入試に合格し住み馴れた父母の家を出ました。『寮へ入るより私の家から勤めたら。』という叔母の

すすめを断って、私は寄宿舎に入りました。若い頃ですし、親から離れての独り暮らし、という解放感が何よりも魅力だったのです。そして舎監の割合に厳しい時間的束縛を感じながらも、当時としては自由な生活を続けて行つたものです。

昭和十九年の十月、といえば、もう戦争も末期に近く、本土空襲の始まる矢先でしたが、私はその年、徴兵検査に合格し間もなく来るであろう「白紙」を今日か明日かと待ち兼ねていました。

当時、叔父は既に亡っていましたが生前はM製作所の重役であり、従って生活も華美でした。この叔父の始めの妻が私の母の妹で、子供がないので末っ子である私を養子に、通常に希望していたのでしたが、その話は私の両親が反対していた様です。叔母は早くに亡り、叔父は自分より十八才も若い幸子という女性を後妻にしました。だから正確にいうと母の妹(叔母)が亡ってからは、私と叔父達の間には何の血縁的な連がりもなかったのですが、それでも子供のない夫婦は私を自分の子供の様に可愛がって呉れました。

少年時代は、この叔父達に対して両親から受取るのとは異質な親しみを感じ、結構、私も甘ったれていたのですが、青年に成って来ると、この若い叔母が何となく眩しい存在として映って来るのでした。殊に、叔父の亡くなった時、再度、養子に、という話を持ち出されました。その折は私の父母も稍々乗気だったのですが、今度は私自身の気持がまるで怖気づいた様に萎縮して仕舞い、何だか叔母の目から避けたい様な奇妙な心境になっていました。叔母はまだ若く美しい人でした。私より九つ上なのに二人が並べば姉弟の様でした。

人一倍、家庭生活に於て横暴だった、という叔父。その房事過多が子供の出来ぬ原因だ等といわれた叔父。その為に、前の妻を早く失い、自分も又、死を早めた、といわれている叔父。若い中からそういう叔父と暮している叔母は、其の頃、丁度女としての爛熟期だったのでしょうか。その瑞々しい肢態は私の心の中にある本能を挑発し、私はその重苦しい懊悩に顔を赭らめるのがしばしばでした。

叔母も又、叔父の没後三年も独りで暮らして耐え難い淋しさだったろうと想像は出来ます。今から思うと確かに叔母は私を義理の

甥としてではなく、一人の男として遇していたのかも知れません。私が叔母の家に寄宿する事を避けて寮へ入ったのも、こういう一面があった為なのです。併し私は殆ど休日の毎に叔母の家へ顔を出す様にしていました。でないと、叔母の方から私の寮へ尋ねて来るのです。叔母と甥、という間柄なので男女関係に殊の外厳しい舎監も何もいません。私にしても断る理由もなく時々連立って外出したのですが、叔母が綺麗な人だけに、妙な気恥しさを感じ、又、仮令、叔母甥の間柄だとしても、男と女が並んで歩く事など、まるで売国奴の様に言われた時代ですから私も人の噂さが恐しなり、自然、自分の方から進んで叔母の家を訪問する事にしていました。

それが、暫く私は仕事に追われ残業や休日出勤を繰り返して身体も疲れており、叔母への訪問も一月近く絶えていました。ところが叔母も又私を尋ねて来ないので。こういう事は、私が入社以来二年半の間にかつてなかったことなのです。私は気味悪く思うと同時に少し心配にもなりました。併し、後になつて考えて見ると、この一カ月足らずの間こそ、叔母にとって本当に重要な日々だった様です。そして私はこの期間を境にしてまるで

異った二人の叔母を見る様な結果になってしまいました。以下小説体で私の体験を書いてみましょう

◇

二日後、彼は幸子の家を訪れた。何時もの様に玄関から入り、「今日は！」と無造作に声を掛け乍ら、磨き上げられている長廊下を奥へ入ろうとすると、傍の小部屋から不意に見知らぬ少女が飛出してきたのである。

「アッ……」と思わず口に出して立竦む彼を見て少女も又、一瞬驚きの目を瞞ったが、

「誰方？ 貴方は？ 他所の家へ黙って上り込むなんて失礼よ。出て行って……早く！」

可愛らしい顔に似合わぬ激しい言葉を頭から浴びて彼は思わず赤面し、棒立ちになって「やあ！ 失敬失敬。叔母さんは？」という彼の言葉を聞くと緊張していた少女の顔が柔く緩んで、忽ちその頬にポーッと血の色が浮かび上った。羞恥にほてっている頬を両手に挟んで申訳なさそうに、「貴男がああ……。奥済みません。知らないものですから……。奥様奥におられます。どうぞ。」という。

お下髪の熟れた果実の様なスベスベとした丸い顔。染った頬を押えた柔かそうな唇のある手。彼は意外なものを見るかの様に暫くそ

の顔を見詰めていた。若い男の目に射竦められて身動きも出来ずオロオロとする少女。その耳朶までが色づき、彼はそれを「美しい」と思った。「失敬!」言い捨てると彼は奥の部屋に駆け込んでいた。「どうしたの、そんなに慌てて……」息を弾ませている彼を見上げて幸子は笑っている。その艶やかな微笑みに、「おや、この人また綺麗になった」と途惑いを感じ乍ら「御無沙汰しました。」と言って彼はやっと落付いて其処に坐った。「驚きましたよ。突然飛び出されて……凄く叱られました。叔母さん、誰方です、あのお嬢さん?。」

「まあ……。嫌だわ……。ホッホッホ女中さんよ、今度新しく来て貰った……」

「女中?、あの人が……。」と真顔で尋ねる彼に、「可愛い娘でしょう。貴方ならきっと一目惚れする、と思ったのだけど、やっぱりそうね。十七だと言ってたけど、綺麗ないい身体をしてるわ。」

幸子は何時も彼に対してこの様に馴れ馴れしい口のきき方をする。言葉だけを聞いていれば友達の様であり、彼はその打ち解けぶりに閉口し乍ら、尚更言葉を堅くするのが常であった。彼の真剣な表情を幸子は面白そうに

見守りつつ「でも、あの娘は駄目よ。絶対に駄目!!。あの娘には……。」と言いかけて言葉を途切らせた。廊下に足音がしてその少女、「珠江」が入って来たのである。

「奥様。どうしましょう、私、この方に……。」「叱りつけたのだってね。フッフ」笑われて又顔を染め乍ら「本当にすみませんでした。」と頭を下げる珠江に彼は照れた様な微笑を返した。

珠江が立ち去ると彼は幸子の前に紙包を差出した。「はい、これ、頼まれ物……。」その紙包を拡げて見て幸子は、「やっと出来たのね。待っていたのよ。直ぐつけて見るわ。」といそいそとして立ち上り「手伝いましょうか。」という彼を抑えて「いいのよ。私でなくは駄目なの。貴方、今日はゆっくりでしょう。珠江とお話でもしていらっしゃい。」とまるで彼の事など念頭にないかの様子で部屋を出て行く。彼はその後姿を見送り乍ら「あれを、あの人は一体何に使うのか」と審り、改めて彼女の書いた紙切れに目を止めた。

この前、幸子に逢った時、彼女は彼に一枚の紙を示して言った。「こんなもの作って欲しいのだけど、判るかしら。彼が見ると、その紙に奇妙な型のものが幾種類か書いてあり

各部に細い寸法が記入してある。「ネジですね。ボルトとナットだけでも随分変わった形だな。一体何に使うのです?。」

彼の言葉に一瞬、彼女の目元に羞らしい色が浮がんだ様に彼は思い、その表情を奇異なものを見る様に見詰めた記憶があった。「何でもないわ。寸法判るかしら。全部鯨尺よ」「まあね」彼は曖昧な返事をして、その紙をポケットに突込んだ。彼が今日幸子に手渡したのは、その品物だった。

x x x

珠江には両親がなく従って彼女は孤独だった。この街へ縁続きの者を尋ねて来たのだがそれも判らず、工場勤めを嫌った彼女は転々と奉公先を変えたという。長続きのしない何かの原因がある様であったが、どういう経緯で幸子の家に来る様になったのか、彼はそれすらも知らない。

お下髪の可愛い少女、という彼の第一印象は二三度逢う中に崩れて行った。珠江は既に立派な「女」であり、しかも幸子の言う様に「綺麗ないい身体」の持主らしく思われた。銘仙の上っ張りにモンペ姿。粗末なみなりだが胸は形良くふくらんでいたし、モンペの紐で括られた胸は深くくびれて、其処から免角

度に下へ向って拡がっていた。小柄ではあったが四肢は潑刺として健康そうに見えた。

彼は休日が待ち遠しくなった。朝食が済むと寮を出て幸子の家に向う。連れ立って外を歩く事は出来ないで終日、時間一杯幸子を混え、時には珠江と二人切りで談笑する。彼にとって楽しい日が暫く続いた。

それから二十日以上経った或る日、彼は何となく、珠江の顔色の冴えないのに気がついた。そう思っている先週の時も矢張り少し元気がなかった様に思えるのである。

「どうかしたの？。少し元気がないね。」

「いいえ、何でもありません。この通り元気

一杯よ。」

珠江は殊更に微笑み乍ら腕を上下左右に振り動かして見せるのであった。珠江の全身から感じる寒れとは逆に、幸子が女盛りの肢態に妖艶な香りを醸し出し、まるで女体の精の様な熱っぽい気配を、その周囲に撒き散らしているのが、彼にはどうしても納得出来なかったのである。

その日は休みであり、そして明日から夜勤なので彼には二日間の休みがあり、夜は外泊する許可も貰って来て居り、彼にとって最高に楽しい二日間である筈だった。事実、何時もよりゆっくりとした気持で、ゲームに興じ

レコードを楽しみ、夕食にはビールさえ出て幸子は珠江にもそれをすすめたりして、華やいた笑い声が遅くまで続き、彼は愉快だった一日を顧み乍ら、静かな眠りについたのである。

「何時頃か」彼はふと尿意で目覚め、そして腕時計を階下の座敷に置き忘れたのに気付いた。ゆっくりと階段を降り廊下の奥の方を見ると、幸子の寝室から細い光の線が洩れている。「まだ起きているのか」と思い乍ら廊下を曲がり用事を済ませ、再び階段の近くへ来て五六歩、時計を忘れた部屋の方へ歩み寄っていた。そして、その彼の歩みはその終、其処に釘付けになったのである。

彼は、一番奥の幸子の部屋から異様な女の囁き泣く声を聞いた様に思った。ギクツとして、彼は入ろうとした部屋の戸に手を掛けたまま立竦んでいた。確かに、それは女の悲鳴に似ていた。耳をすますと静かな辺りの空気の中から鈍い、底を這う様な呻き声さえ聞えて来るのだ。彼は胸騒ぎを抑えて、そっと忍び寄り鍵穴に目を押付けた。彼の四肢はブルブルと震え、一瞬、スーツと頭から血の抜けて行くのを感じた。

緊縛写真と悦虐絵画満載の超弩級版

臨時増刊 写真と絵画 文献 特集号

直接お申込を 定価一部五〇〇円（送共） 略号（文献）

◎サド、マゾ、フェチ、女体切腹、女体浣腸、フェチ、女斗美、女相撲、とあらゆる趣向を網羅した本特集号は、今後二度と発表できない特殊文献を集録しました。

◎文字通り「文献誌」としての真価を発揮しました本特集号は、発売以来マニヤの方

々の座右の宝典として非常な人気で書店の店頭から姿を消してしまいました。特に直接申込用として発行所に確保しました分がございしますから、未見の方は何卒この際略号（文献）とお書きの上、お申込下さい。一部定価五〇〇円（送共）です。

× × ×

今まで、彼はその部屋に足を踏み入れた事がなかった。其処は叔父と叔母の二人切りの部屋であり、夫婦という名の男と女の内生活の縮図が織り込まれている筈であった。其処はこの家の贅沢な生活を物語るかの様に豪華であった。床一面に暗赤色の絨氈が敷きつめてあり巾の広いベッドが置かれていた。壁や窓にも華麗な装飾が施されていたのだが、その時の彼は、それ等の附属物を見る余猶はなく、床の絨氈の中央へ瞳を吸い寄せられていた。

暗い、凝固した血の色の様な、それでいて光を吸い込んでキラキラとけばを輝かしている床の上に一帖の畳が置かれていて、その上に、珠江の半縛りの姿態が仰臥していた。

珠江の腰は黒いブルマに覆われていたが、それ以外、彼女の身体についている布は何一つなかった。唯、四肢の首に幸子のものらしい紅い扱帯が巻きついていて、その扱帯の余りは畳の下を潜っている様に見えた。そして縊れた胴を堅たそうな帯留が肌に喰込んで一周し、身体の裏で右と左に別れ畳の上に伸び、そして畳の下へ隠れている。

その光景は異常であり彼を動揺させるに充分であったが寸時の驚愕が去ると、彼は高鳴

る胸を抑え乍ら、始めて見る珠江の素肌の美しさに、覗き見するという自己の行動の疚しさも忘れ呼吸を殺し片眼を大きく睜いていた。隅の方に蹲んでこちらに背を向けている幸子の行動に対する好奇心もあった。幸子は派手な寝衣を着ていた。その時になって、少し心のゆとりを持って彼は室内を見廻した。ベッドなどというものは病院以外で見た事もない彼は、その室内で大きな場所を占拠している柔かそうな低いベッドを、まるで奇異なものを見る様な驚きと共に見た。調度品が際立って立派である事も始めて知った。

幸子の後姿が動き、立上って珠江の横たえられている傍に寄ると、畳の上へ手に持ったものを並べ始めた。湯気の立つ湯を湛々た小さな容器。石鹼。剃刀。それ等が何に使われるのか彼には想像もつかなかったが、最早や鍵穴から目を離して立去ろうという気持は失われており、この二人の女の怪し気な行為を見極め度いという欲望が彼の心を支配していた。そして又、彼の心を惹きつけ、彼の胸の中に恋心を芽生えさせた珠江という女の総てを見たいという気持も強かった。同時に、それは幸子という女性、義理の叔母の本当の心を知る機会でもある様に思えた。やがて幸子

は珠江の顔近くに蹲まると何事か囁き、珠江が頷づいて唇を開くと、その口の中へ白い布を丸めて押込み、その上を更に手拭で縛って後頭部で堅く結びつけた。自由な呼吸と声を閉され、珠江の鼻翼が動いた様に彼は思った。胸は早くも喘いで大きく波打ち始めていた。こんもりと形良く盛り上っている二つの隆起が、その度に高くなり低くなる。白い光沢のあるその蠢きを彼は「綺麗だ」と思っていた。

残酷な仕事が始められたのは、その直後である。珠江はブルマの下に白いズロース（パンティ）を穿いていた。幸子はそれも一緒に剥ぎ取ってゆく。彼はふと、剥き出しになつて行く珠江の白い滑らかな肌が奇妙な模様に移られているのに瞳をこらした。其処には咲き乱れる小花の様に薄赤黒い斑点が無数に点綴していた。

そして彼の盛り上った感情を忽ち冷却して仕舞う程の行為が、その次に待ち構えていたのである。幸子は桐の小箱を持つと向う側に廻り、ベッドの上へ腰を落し暫く目の前の喘ぎを見ていたが、元の場所に坐ると箱を開き、取り出した線香に火をつけ、そして箱の中のものを摘み出し、指の先で丸めている。



その時になって、始めて彼は合点したのである。幸子の行おうとしている動作と彩られた珠江の腹に模様の出来た訳を——。

幸子の舌先でチョツと舐められた小粒の艾は、珠江の軀に新しく出来た薄い桜色の処女地へしみの様に置かれていた。

それから何分間かを、彼は狂気の様で憤

りの色を顔中に漲らせて凝視していた。何度か、彼は入口の把手に手を掛けていた。彼がそれを思い留まったのは、不意の自分の闖入によって珠江に与える羞恥の激しさを思ったからである。確かに、展開されているのは許すべからざる清浄な女体への凌辱行為でもあった。灼熱の疼痛に悶える珠江の姿は、彼の

目を覆わせる程凄絶なものであった。そしてその構図の中で、のた打ち乱れる被虐者を、まるで精巧な玩具と戯れるかの様に弄んでいる幸子の、バラ色に輝いた顔を見た時、彼は全身を貫き通る恐怖を感じ、震える足を踏み締め乍ら其処から逃れ布団の中へもぐり込んでいた。彼の見たものは正しく悪夢。そう信じたかった。

× × ×

翌朝、珠江の顔をまともに眺める事の出来なかった彼は、遅くまで、眠れぬ布団の中で転々としていた。珠江が買物に出るのを待って起き出した彼は急いで食事をすませ幸子と相對した。彼女の顔色は冴えていた。それから暫く二人の間でかなり激しい口争いが続けられた。『非人道的だ』と責める彼に幸子は平然として言うのである。『珠江はそれを承知でこの家で暮しているのよ。あの娘にはオネシヨという悪癖があり、その為に何処へ行っても続かない。お灸はその治療の為だし、本人が自分から進んで我慢しているのに、残酷』という事はないでしょう。貴方から女中の事にまで指図を受ける必要はない筈よ。貴方は珠江が好きらしいから心配なのでしようけど……。でも、前にも言った様にあの娘は

絶対に駄目。貴方が考えている程純清な娘ではありません。疑うのなら自分で試して見るというわ。一晚、いや一度位なら……」

彼は自分が羞かしめられたかの様に顔色を変えた。幸子の淫らかさを湛えて笑う目元をいやらしいものを見る様な侮蔑を籠めて睨み返した。併しその彼も幸子が最後に言った言葉に対して、何の反撥も出来なかったのである。「私のすることがそれ程嫌だったら、あの娘はこの家から逃げ出している筈よ。私は其処まであの娘の自由を束縛してはいませんからね」と。そして又

「男の貴方は青年だといっても、まだまだ子供よ。大人の世界なんて、況して女の……」

と、言葉を濁して巧みに彼の鋒先をかわして仕舞う。事実、幸子のいう通り買物から帰った珠江の表情は明るく、その可憐ともいえる容貌の中から、昨夜の、あの凄まじいばかりの苦悶の跡は、何一つ見出す事は出来なかった。

結局彼は、廊下の鍵穴から窃視していた自分の行為の恥しさを思い知らされただけである。幸子は「嫌な人ね。あんな処から、こっそり覗いていただなんて……。」と言って面白そうに声を上げて笑うのである。彼に残さ

れたのは赤面することだけであった。

併し彼は幸子の言葉を信じた訳でない。言いがかりされた結果になったが、彼は幸子を最早や叔母としてでなく一人の女として、その内面に密んでいる淫蕩な気配の正体を曝いて見たい誘惑に駆られた。同時に彼は淫ら心の犠牲となつていられると思われる珠江を、自分の手で救い出し度いとも思った。其の日、彼は二人の隙を見て、そつと幸子の寝室に忍び入った。

昨夜の名残は何処にもなく室内は整然としていた。ベッドの反対側に押入がある。彼は其処も開いて見た。下段には訳の判らぬ道具が雑多の様につみ重ねてあり、取繕った様な室内とは対照的で、明らかに奇異であり、その辺りに、彼はこの家に住む人の秘められた一部を見た様に思った。併し外から眺めた限り不審はなく、上段には夜具が綺麗に重ねてあった。彼は二階の自分に与えられた部屋に戻り、帰り支度をした。何という事なく、もう一刻も早く此処から立去り度いと思ったのである。幸子は、留守であり珠江は台所に居た。

「今日はもう帰るよ。叔母さんに宜ろしく。身体を大切にしなさいや駄目だよ！」

「あら、お夕飯、ご一緒なさいませんの。」

驚いた様な目が、今日は生き生きとしていた。不意に彼は、躍りかかって珠江のモンペを引剥ぎ、その痕跡を確かめて見たい、という狂暴な衝動で思わず握り締めた手がブルブルと震えた。——彼は玄関を出た。

x x x

夜勤明けの日の夕方、彼は幸子の家の広い庭の片隅に身体を蹲めていた。既に十一月に入つて居り冷気が彼の足許から這い昇り彼の全身を押し包んで行く。彼は震え乍ら時の来るのを待っていた。一週間の間に考え尽した結果の行動であった。

日暮れは早く、彼の四囲は闇の中に閉ざれて行く。頃合を見て彼は庭から幸子の寝室に忍び込んだ。遮光幕に閉ざされた部屋の中は豆球が一つ灯っていてぼんやりと室内の調度を照らしていた。ムツと異妖に生暖く何か奇妙な香りさえ籠っている。ベッドの上には派手な模様の夜具が重ねてあった。彼はその夜具の入れたあった押入の中へ入り込んだ。其処で夜半過ぎ、或は朝まで過す心算であった。押入の中は、ほんのりと暖く、可成り長い間、寒気に晒されていた彼の四肢はその暖かさに緩み始め、彼は暫く睡った——。

どの位経ったか、彼は寒々とする冷氣を感じて目覺めた。

板戸の隙間や小さな節穴から、直線的な光が射込んでいた。目を瞬き音を殺して彼はその光の元へ瞳を近づけた。予想通り——のいやそれ以上の無残図絵が彼の眼前に拡がっていた。

彼の視線の行く処、その真正面のベッドの上に、その中央に、珠江の姿は拡がっていた。夜具は床に投げ出されておりベッドの上には焦茶色の毛布が一枚。珠江の軀は際立って白く肌寒い頃なのに、汗でキラキラと光っていた。彼女の足は床についていた。足首にはロープが巻付きその先は別々にベッドの脚に繋がれており、膝は極端に開いていた。仰臥して、彼女の腕は彼女自身の背の下になって見え



ない。胸の上を、押し出す様にして二筋の麻縄が深く喰込み、その麻縄の先は彼女の軀の下から毛布の上に伸びてベッドの枠に引締められていた。額を汗で濡らし珠江は顔をのけぞらして突立った様な胸を大きく喘がしていた。

彼の位置から珠江の顔は見えない。ふくれた胸の向うに、振り返った珠江の顎と鼻先が、のぞいているだけである。併し彼には今の光景で充分であった。彼の求めるものはまるで展示品の様に明るい中に置かれてあり、彼の觀賞を待つかの様に開いていた。無数の斑点がありその処々は黒い小粒の灰が盛り上って附着していた。

彼は幸子の姿を求めた。視界は狭く幸子が入って来るまで暫くの時が過ぎた。床にガラスの容器を置きその横へスタンドが置かれた。珠江は下からも照らされて、一層鮮明になった。幸子は珠江の傍、ベッドに腰を下した。彼女の手にゴムの管があり、その先は容器に及んでいた。

指に摘んだゴムの先は体温計の様な嘴管であり、ガラス製なのか時々キラ

ツキラツと光を反射する。幸子は蹲む様にして手を動かし始めた。

「ウッウーン。ウー。」

珠江が咽ぶ様な鼻にかかった呻きを洩らす。息詰る様な思いで彼は見ていた。頭の中は空虚であった。見る事と聞く事だけが彼の仕事の総べてであった。珠江が、いや、女があのような声を出すのを今まで彼は聞いた事がない。

珠江は悶えていた。

突然、幸子は立ち上って電灯を消した。再び室内は明るくなり今度の光はユラユラと揺れていた。ベッドに上った幸子の手に百匁蠟燭が握られて居り蠟涙は忽ち零となり、その落下地点は珠江の全身であった。蠟涙は珠江の身体中にしたり、珠江は首を振り四肢の動ける部分の総べてを躍らせ瞬間の熱気を含んだ疼痛と必死で斗っていた。向う側の壁に幸子の姿がまるで巨大な魔物の様に大写しとなり、彼はゾーツとする寒気さえ感じた。だが、彼の目に入るのは妖美ともいえる色彩であった。肉付きのよい腿は青い静脈を浮上がらせて戦き、床についた足の指がくの字に掣じ曲り、絨氈の中へ拇指の先がめり込んでいた。

蠟燭の火が消え、幸子は何事か呟き乍ら珠江の顔を動かしている様に見えた。そして再び火が灯った時、彼は大きく息を呑み込んでいた。一体、幸子という女の内部には如何なる魔性が巢喰っているのか。その悪魔的な嗜虐の趣向は彼女の頭の、どの部分から考え出されるのか――。

珠江は首の下に何かを当てがわれ、その顔を動けぬ様に固定されている様であった。そして彼女の鼻孔から二本の棒が斜めになって突出している。「嫌！ いやッ！ 許して……」彼が始めて聞く哀願の聲が珠江の口から吐き出された。「うるさいわね。」舌打ちして幸子は、微かに揺れ動く棒の先へ細い蠟燭を差込み火をつけた。

蠟が垂れその効果を見定めると幸子は再び元の位置、ベッドに腰掛けた形になり先程の続きを始めるのである。しかも今度は片手に太い蠟燭を握り締めたままであった。彼は自分の神経が正常であるのが不思議であった。

× × ×

繋がれていた四方のいましめを解かれた珠江の全身は見るも無残に彩られていた。併し彼女は、手を括り胸を締める非情の麻縄もそのままで、足首のロープを引づり乍ら幸子に

向ってしきりに訴え哀願するのである。途切れつつも聞えるその言葉を聞き、彼は自分の耳を疑った位である。彼にはその様な言葉が人の口から洩れる等とは、想像も出来なかった。幸子は笑っていた。その笑顔は彼が今まで見た幸子の顔の中で最も美しかった。嬌声を部屋中に響かせ乍ら幸子は今迄珠江が仰臥していた場所に寝転がった。

寝衣の裾が割れて肌が見えた。彼の、始めて見る幸子の素肌は艶やかであった。その足許の絨氈に珠江は跪まづいていた。二つ折になった珠江の軀は、お尻を高く突出して顔は床を舐めていた。

頬を上気させた幸子は起上って右手に何処から取出したのか、亡夫の物と思われる皮バンドを振り上げ珠江の豊かにふくらんだお尻の上へ叩きつけていた。鈍い、併し心の奥まで込み込む様な音と共に、珠江の肌に赤い筋が交叉して、地の底を這う様な珠江の呻きが微かに聞えた。彼女の頭は隠れており、その辺りを幸子の片手が抑えていた。幸子の振上げる右手が次第に乱れ、その表情に痴呆の様な硬直が現われるのを彼は見た。心の中で必死に否定し、嫌悪し乍ら、何時の間にか魂まで魅き込まれていたのである。

× × ×

彼が不審に思い知り度いと思っていた彼の作った形の変ったネジ類の使用個所を彼が知った時、突然押入が開かれ、彼は床の上に無様に転がり落ちていた。その直前まで、彼は訴える様な珠江の声を聞いていた。

「あれを……。あれを……。」と。その珠江の言う「あれ」が押入れの下段の雑品の中にあつたのか、と彼が覚った時、彼は女達の驚く

声を聞き、次の瞬間、直立して忿怒の表情で彼を見下している幸子の悪鬼の様な歪んだ顔を見た。押入の中に知らぬ中に忍び込み自分達の秘めやかな狂宴を見ていた男が彼だと判った瞬間から、幸子は狂暴な野獣の様に荒れ狂った。確かに、彼女は他見無用の場面を第三者に見られ、その秘めた内心を見透かされた事実動揺した。そして、その動揺に狼狽し、狼狽が彼女の心を極度に苛立たせた。夜

具を被せられ二人の女に押えつけられ乍ら必死に力を籠めて暴れ、頭を外へ突出した時、彼は幸子の双眼から青い火花が飛び散る様な恐怖を感じた。やがて彼は安楽椅子の中へ埋まる様にして縛りつけられていた。女の力は意外に強かった。

特に珠江は不自由な身体の俤、彼へ全力でぶつかって来た。その無鉄砲ともいえる動作が大分彼の抵抗を鈍らせ、そして幸子の振上げる皮バンドが彼の顔を襲って来た時、彼は顔を両手で覆ってそれを避け、そして足を取られて転び、その上を幸子の重い体重で抑えられ、珠江の足を繋いでいたロープで括られた。

幸子の依頼で彼の作った変形ネジは、底が湾曲しコックン／＼と前後に動く木馬の一部についていた。ベッドの枠にも取付けてあった。肘掛椅子にも机にも……。それは単なる部分品であり必要な用具の「取付」と「支え」の役をしていた。騒ぎが治まった時、突如珠江が啜り泣き始めた。彼の視線から自分の姿を隠そうとして彼女は毛布の中を転げまわる。

「解いて、放して！ お願い！ 奥様!!。」
軀中を真赤に染め、耐えかねる羞恥に悶え

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	二千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

手記、数知な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思えます。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売と同時に、賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「懸賞」とお書き下さい。

泣きする珠江の姿を彼は茫然と眺めていた。

——◇——

明け方になって、逃げる様にして叔母の家を出た私は、寮へ戻ると布団の中へもぐり込んだものです。

以来、私は叔母の家を避け続け、そして間もなく「令状」を受け入隊しました。私には叔母が恐しく、又、「綺麗な人程恐しい」というのが私の感慨でした。必死で首を振って拒否する私に「始めは誰でも嫌だという。だけど、ねえ——お珠ちゃん！」と言って艶笑した叔母の瞳が忘れられません。既に彼女（珠江）は、その魔性に魅入られていたのでしょうか。あの潑刺として健康な美少女が、——全く信じられない事ですが、自分の眼前で行われ、そして自分も感覚で知り得たその事を否定する事は出来ませんでした。それでも私は軍隊生活の間中、彼女の姿を胸に秘めていたものです。

復員した私は秋深い頃、某市の叔母を尋ねていました。丁度終戦一年目でした。叔母の家は春の空襲で無残に焼失されており、私は叔母の移住先を追って山村まで足を伸ばしました。そこで私は元気な叔母の姿を見る事は出来ましたが、とうとう珠江には逢えず、叔母

臨時増刊号……愈々残部僅少……

悦虐小説と悦虐写真特集号

本誌全盛時代の昭和二十七年から昭和二十九年にかけての「悦虐小説」の傑作をすべて網羅して、本特集号の第一集から第五集（但し第一集、第五集は残念ながら売切れしました）までの五冊に収録いたしました。従って「悦特」の五集によって、当時の代表的なS小説をごらんになることが出来ます。更にグラビヤ口絵としては、華麗な緊縛女体をふんだんに掲載しました。未入手の方は是非この際お求め下さるようお待ちいたします。

第一集「女体緊縛特集」（売切）

第二集「悶悦姿態特集」 略号「悦二」

の示す位牌に向って丁寧に頭を下げていました。彼女は家諸共昇天して仕舞った、という話でした。叔母は益々若く、人々の生活苦に対する嘆きを他所に生き生きしていました。

——私は叔母の仮屋に一泊しました。

叔母から逃れる様に私は遠い北の国に走りました。以来六年余。再び私が故郷へ戻った時、既に叔母の消息はありませんでした。私

第三集「嵐を慕う蝶」 略号「悦三」

第四集「拘束美態特集」 略号「悦四」

第五集「緊縛風景一二〇態」（売切）

最近刊行本誌特集号限定版案内

臨時増刊「写真と絵画」文献特集

定価 五〇〇円 略号（文献）

臨時増刊「花と蛇」小説絵画写真特集

定価五〇〇円 略号（花）

限定版「美しき縛しめ」第三集

頒価一〇〇〇円 略号「美3」

限定版「豊満と清楚」写真集

頒価一〇〇〇円 略号「限二」

の聞いた話では終戦後二年で某市に戻り、新築した家で派手な暮らしをしていた、という噂だけです。その噂の中に、叔母の家には可愛い少女が二人いた、と聞いています。大方、浮浪児の中から自分の好ましい少女を探し出したのでしょう。

——私が始めて「奇譚クラブ」という雑誌を手にしたのは、それから間もなくでした。

【新版】 女体緊縛コレクト・フォト集

E組百花選

大手札印画紙 (9×13 ㎝) 焼付

各組一枚一組 (送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

E 1	全裸の悦虐プレイ (愛川)
E 2	仕置を受ける裸身 (大塚)
E 3	荒縄に苦悶する肌 (愛川)
E 4	ムチに耐える美肌 (関谷)
E 5	豊臀と豊胸しぼり (愛川)
E 6	捨身の後手観念像 (大塚)
E 7	足から眺めた裸身 (水本)
E 8	全裸エビ責尻強調 (関谷)
E 9	ハリツケられた娘 (大塚)
E 10	強烈後手高小手 (愛川)
E 11	責め抜かれた疲労 (梨花)
E 12	逆エビにもたえる (大塚)

E 13	拘禁された美囚女 (大塚)
E 14	浴室に覗く股間縛 (愛川)
E 15	海老責に泣く足首 (大塚)
E 16	乳房強烈締めつけ (愛川)
E 17	牢獄で泣く縛り娘 (大塚)
E 18	美しき全裸股間縛 (大塚)
E 19	全身に溢れるマゾ (関谷)
E 20	ベッドにもたえる (関谷)
E 21	身体中に強烈な縄 (愛川)
E 22	放置された海老責 (東浦)
E 23	ゴム衣で縛られる (東浦)
E 24	ローソクで責める (大塚)
E 25	寝台の排便ポーズ (絹川)
E 26	足指先に漂う媚態 (関谷)
E 27	後手吊り正面裸像 (関谷)
E 28	厳重な高小手縛 (東浦)
E 29	女体の全部を晒す (愛川)
E 30	激しいムチ打の果 (関谷)
E 31	若肌も縄にくびれ (東浦)
E 32	投げ出した脚線美 (絹川)
E 33	臍中心の腹部緊縛 (梨花)
E 34	セーラー服の哀歓 (梨花)
E 35	赤いムチ痕の臀部 (関谷)
E 36	仰向けの囚衣の女 (梨花)
E 37	制服の女学生縛り (梨花)
E 38	悦虐にむせぶ若妻 (関谷)

E 39	痛打にくねる裸身 (関谷)
E 40	乳房に加える金具 (大塚)
E 41	鼻責めにあえぐ顔 (大塚)
E 42	あぐら縛りを拒む (大塚)
E 43	浣腸ポーズの裸身 (梨花)
E 44	激烈なエビ責苦悶 (大塚)
E 45	敷布の上ののびて (絹川)
E 46	鼻いじめのアップ (梨花)
E 47	柔肌に喰込む麻縄 (東浦)
E 48	縄にくびれる裸身 (東浦)
E 49	椅子に晒された女 (大塚)
E 50	臍そうじをされる (大塚)
E 51	荒縄のトゲに狂う (絹川)
E 52	火のついた煙草責 (四方)
E 53	踏みつけたれた胸 (梨花)
E 54	裸身をゆだねた娘 (大塚)
E 55	手足猪吊りの美態 (絹川)
E 56	囚女の美しき緊縛 (絹川)
E 57	諦めた観念全裸像 (水本)
E 58	縄にもたえぬく姿 (絹川)
E 59	黒髪を吊られた女 (大塚)
E 60	女奴隷美しく悶ゆ (絹川)
E 61	袋の中の緊縛裸身 (竹本)
E 62	ビニール袋に蒸す (竹本)
E 63	亀甲型の雁字搦目 (大塚)
E 64	緊縛裸像の舞踏会 (絹川)
E 65	野外の後手宙吊り (梨花)
E 66	足首に鎖錠実施中 (四方)
E 67	室内の後手宙吊り (梨花)
E 68	雨装束の悦虐姿態 (梨花)
E 69	乳房いじめ踏つけ (大塚)

E 70	足の裏ハネ操り責 (梨花)
E 71	乳首プライヤ挟み (竹本)
E 72	野外の逆さ吊り責 (梨花)
E 73	梯子責にあう美女 (梨花)
E 74	逆さ吊りに揺れる (梨花)
E 75	娘十六しぼり加減 (花坂)
E 76	踏みにじられた顔 (大塚)
E 77	逆エビニ反る足先 (大塚)
E 78	両手吊りのお仕置 (絹川)
E 79	責折檻に呻く若妻 (梨花)
E 80	豊麗を誇る正面像 (大塚)
E 81	食卓上の縛り人形 (大塚)
E 82	むしられる下着 (大塚)
E 83	月経帯の羞恥縛り (梨花)
E 84	寝台上的若妻狂態 (関谷)
E 85	強烈全裸エビ縛り (東浦)
E 86	禪姿後手縛り吊り (東浦)
E 87	後手縛豊満臀部晒 (関谷)
E 88	黒髪いじめ凌辱図 (大塚)
E 89	令嬢後手高小手 (絹川)
E 90	臍部乳房強調緊縛 (東浦)
E 91	責衣にくるまれて (東浦)
E 92	全裸逆エビ責め (水本)
E 93	ローソク乳首ゼメ (梨花)
E 94	全裸後手縛り悶晒 (関谷)
E 95	強打全裸のあえぎ (関谷)
E 96	肉体美の責衣ゼメ (東浦)
E 97	バンド二ツ折縛り (梨花)
E 98	全裸正坐縛り猿轡 (関谷)
E 99	豆しぼりの猿轡 (絹川)
E 100	強烈縛り臍いじめ (東浦)

【告白体験記】

白 木 近 子

「媒母という名のサジステイン」

終戦直後のあの混乱の時代、地方のある小さな戦災孤児収容所における私の秘密の悦虐の記憶を、私の対象として選ばれた低能の少女、Y子以外には誰も知らない、あられもないその頃の私の行状を、「弱者、劣者にサジズムを感じる女性からの通信」と題して、三十年三月号の誌上に拙い手記を公表した白木近子を、古い本誌の読者諸兄姉は、もしかすると覚えていてくださるかも知れない。

思えばあの頃の本誌は、ちょっとした「馬乗りブーム」で、私の一文が掲載せられると直ぐに、長瀬昭子さんが微に入り細を穿つ表現で執拗に騎乗の快楽を説かれる一方、グラビアでは春日ルミ嬢が大活躍。パンティとブラジャーだけの勇ましい半裸体で、相手の伊

吹嬢を草原の中に捻じ伏せて高手小手に縛り上げ、揚句の果てに、さるぐつわまで嘔ませてしまう連続写真の載っている五月号など、今も大切に保存している私。彼我ともにいろいろのことがあったとはいえ、ずいぶん長いこと御無沙汰したものでございます。

しかし、Y子の話はもう致しません。あの図体ばかり大きくて（椅子に腰をおろした私の腿の間に挟みつけられ両手を後手に縛られて息も絶え絶えにうごめいているY子を小さく描いたあの挿画については、私は今も不満でございます）器量が悪く、しかも知能の劣ったあの少女は、それ故にこそ二、三カ月もの間、人知れず私のために思うがままに責め苛まれたわけですが、もう今はこの世の中に

生きてはいないと思います。

そこで私は、あの孤児院ですこしの間、一緒に働いていた先輩の媒母、斎藤房子さん（仮名）のことを今度は、ちょっと御紹介申し上げます。

何も知らない乙女の私に、尽きることのない騎乗の醍醐味を教え、とうとう罪のないY子に連日連夜、地獄の苦しみを味あわせるまでに導いたのは（もちろん私の体内に、それを好む血の流れていることは認めますが）ほかならないあの房子さんだと、今でも私は固くそう思い込んでいるのですから。

私が、はじめてY子を苛めたのは、いいえ人間の体というものにはじめて馬乗りになったのは、あの手記にも書いたとおりに浴室で

した。それはあの子の髪の毛があまりひどく汚れているので、何気なく洗ってやろうとしたところ、とても厭がって、とうとう力づくで観念させてしまったというだけのこと、前後のことは知らず、この程度の格闘？はあの頃の娼母対孤児の間では当然のこと。大ぜいの子供たちを扱ったことのある人なら、どんな優しい女性だって二度や三度は実力行使して、有無をいわさず服従させてしまった経験をお持ちのはずです。

目立つようなケガさえさせないかぎり、どこからも文句の来る相手ではない。統制上、多少のお仕置は仕方がないと責任者さえ黙認している状態だったのです。これはずいぶんひどい考え方ですが、孤児院の関係者たちの心の底にわだかまっている本当の気持ではないでしょうか。すくなくとも房子さんなどはそうでした。

房子さんというのは三十には、まだだいぶ間のある戦争未亡人で、色がとても白く立派な体格をしていましたが、子供の無いせいか戦災孤児というものに対する同情心などは微塵もなく、ちょっとした過失やいたずらを見つけては、女だてらに手酷い折檻の仕放題でした。あたらしく送られて来た女の子をつい

泣かせてしまった腕白小僧は、いきなりその場に叩きのめされ、俯向けになった頭の鉢を、いやというほどお尻を押しつぶされて地べたに面型をつけられてから、すっかりおとなしくなったそうです。又あるときは、盗み喰いをしている少年を見つけ、夢中でもぐもぐやっているうしろから突如、躍りかかって馬乗りになり、素早く両手で首を締めつけて声の立てられないようにしておいてから、まるで鵜飼いの鵜のように食物せんぶを吐き出させてしまったそうです。もとよりそれだけでは飽き足らず、その子が弱いにつけ込んで唇の端にお灸まで据えてやったという話などを面白半分に語る房子さん――。

私は、ぞっとするような怖ろしさと奇妙な心の昂ぶりとが、まさり合ったときめきを感じながら、

「でも、暴れるでしようね」

と聞いてみました。

「そりゃアね、死物狂いよ。だけど、すぐにくたばっちゃうから安心。じぶんが悪いことをしたんだから、ひどい目に遭わされたって仕方ないわ。甘くすればつけあがるし、しょっちゅう懲らしめてやらなければダメよ。いまにあんただって、そうでもするより仕様が

なくなるわ」

実際、房子さんのいい分にも一理ある。親の無い子供たちは確かに気の毒だけど、みんながみんな良い子じゃない。ひねくれた者、やたらに反抗する者、盗癖のある者など、三度に一度は私だって、ほんとうに思いきりひっぱたいて、ひいひいいうまで踏みこじってやりたいような気持になる厭な子の方がむしろ多いのです。

とくに新しく入所した子供を、お風呂に入れるのが一苦勞。こうした子供たちは、どういふものか頭髪を洗うのを非常に厭がるのです。全然知らないよその女の人に、こういうことをされるのを怖れる児童心理は分っていても、私たちがそこまでかまってはいられません。

それも小さな子供ならば、つかまえておいて立膝の間からだごと捻じ込んでしまえば問題はないのですが、十にもなる男の子の時などは、そうもいきません。第一、そんなことではいうことをきかない。全身の力をふりしぼってようやく上になり、ハアハア肩で息をしながら片膝かけて押えつけるのが私などには関の山。とても外のことを考えるなんて、余裕はありません。Y子を知ってから

同じでした。今日こそはそうしてやろうと思っても、いざその時になると気がくじけて、かえって優しくいいきかせたりして洗髪を済ませてしまうのです。

それにひきかえ房子さんは、はじめから腕ずくです。もっとも、いくらきかん坊といっても、栄養不良で骨と皮ばかりに痩せたのがほとんどなので、女盛りの充実した体力をもてあまして、嫁母さんにしてみれば、文字通り赤子の手を捻じめるようなものだったでしょう。

二つ三つ打ち据えてグロッキーになったところを手許へ引き寄せ、利腕でも捻じ上げてしまえば、もうそれでおしまい。あとは無我夢中で振り廻す片方の手に触れないように背後にまわりこみ、首筋を把え両脚をふんばって力任せに押しつぶしてしまうのです。非力の子供を組み伏せるにはこの方法がいちばんで、私もY子に対したときは、いつもこうして倒していました。こうされた子供は、はじめの中こそ歯を喰いしばってこらえています。が、そこは体力の相違でしょう。嵩にかかって責めつける大人の力に叶うはずはありません。ものの一分と経たない中に、がっくりと床にひざまずいてしまうのです。

両足を踏み開いて、かよい子供を悠々と締め上げていく房子さんの顔を、そしてその豊満な肢態を見たならば、誰でもその心の奥底に眠っている嗜虐の本能を触発されずにはいないでしょう。

「さア、どうだ。どっちが強いか」

そういいながら床に這いつくばった相手の背を跨ぎ、なおも容赦なく両手に力を籠めながら、じりじりと体の重圧を加えていくのだからたまりません。

「うッ、いテテ——」

「声をたてると、もっと痛い目に遭わせるわよ。さア、どう？こうしたら」

「あーッ。ゆるし——」

「くやしいでしょ。男のくせに女の下敷にされているんだから。くやしかったら、さアいくらでも暴れなさい！ 頭をすっかりきれいにするまでは、どんなに泣いたって許しませんからね」

意地わるく自尊心を刺戟された少年は、なにくそとばかり渾身の勇を振って反撥するが、血の通わなくなるほど厳しく片腕を捻じ上げられた上、首筋をわしずかみにされているのだから、どうしようもありません。わずかに自由の利いた片方の腕までも、重くてや

わらかい膝で押えられてしまえば、もう身動きさえできません。その上、十四貫はたっぷりある嫁母さんに完全に馬乗りになられたのでは、おそらく背骨のへし折れるほどの苦しみでしょう。房子さんは、それをよく知っていました。

下敷きにした少年を十二分に痛めつけて、すっかりその反抗力を奪いとってしまうと少し手を緩め、今後の絶対服従を誓わせるのです。組み敷かれた方は息も絶えんばかりになっていきますから、ただはいはいというだけで、嫁母さんの暴力の下に、いくじなく屈伏して許しを乞うのでした。

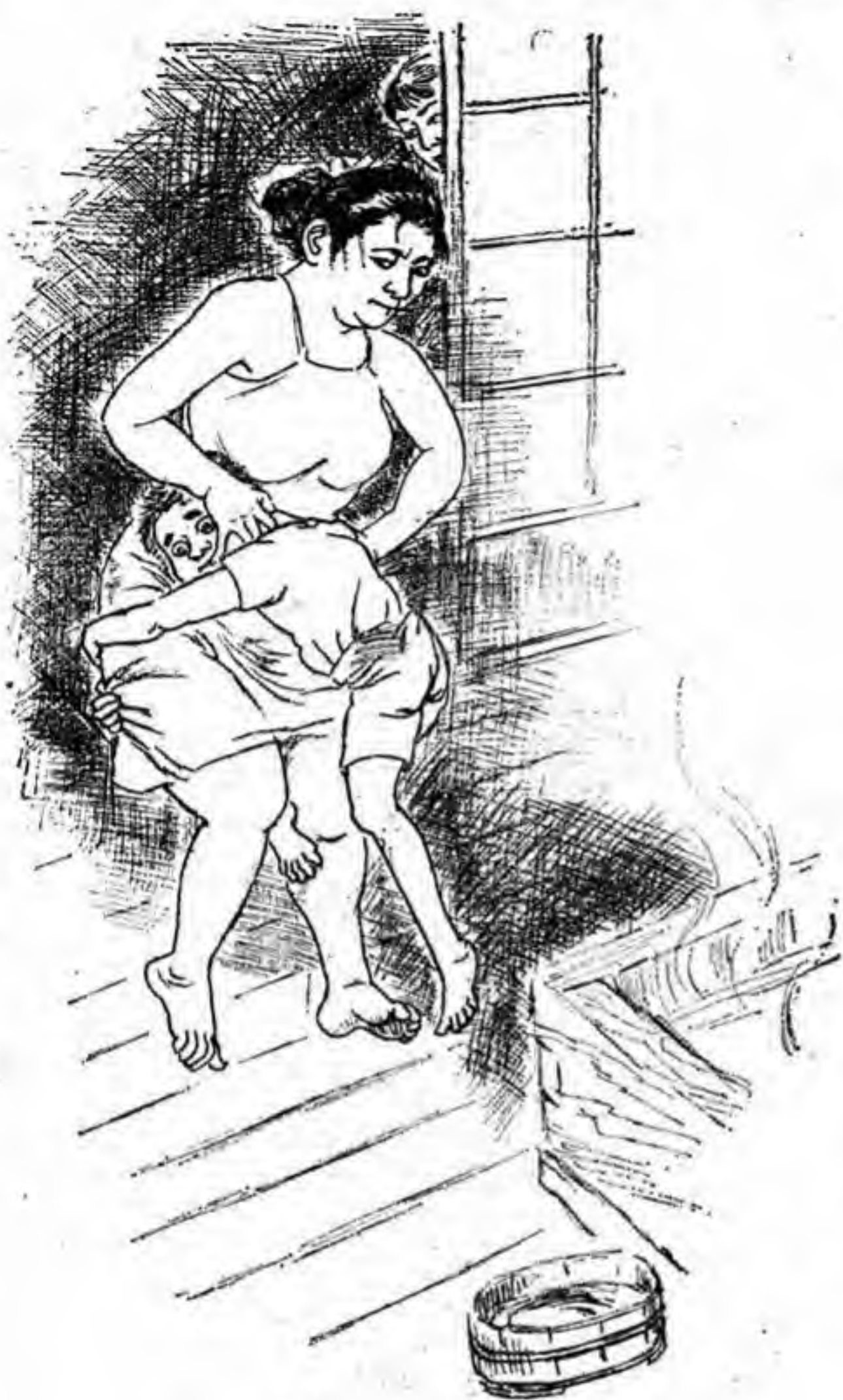
「ほんとうに降参ね。そんなら今日のところはひとまず許してやるから、じぶんでちゃんと頭を洗って早く寝るのよ」

そして何事もなかったように浴槽に浸り、ゆっくりと湯を使いはじめたのでした。

こういう房子さんを私は二、三度、目撃しました。が、私にはなんの手出しもできません。傍で体を洗いながら見て見ない振りをしているより仕方がなかったのです。

しかし、松夫のときばかりは、そうはいきませんでした。

秋の初めのある夜のこと、私が子供たちを



寝かしつけてから、ひとりで湯槽に浸っていると突然、入口の戸がガラガラと手荒に押し開かれ、何か叫ぶ子供の声が聞えましたが、直ぐに押し殺されるような呻きに変わり、やがて、又もとのような静けさに戻りました。

「なんだろう？」

すこし不安になった私は、手拭を腰に巻きつけて脱衣所に通ずる戸を明けました。

「あら、どうしたの？」

一坪ほどの暗い脱衣所の中で、シュミーズ一枚になった房子さんが、少年の髪をもろに両手で掴んで必死に捻じ倒そうとしているのです。そしてその腰のあたりに、しっかりと組みついて体当りの反抗しているのは、その日の午後、入所してきたばかりの松夫という六年生の男の子です。シュミーズの裾が捲れ上って真白な太腿を露わにした房子さんは圧倒的な体重を乗せかけて、一挙に押し倒そ

うとしているらしいが、松夫少年もなかなかしぶとい。どちらも無言で争っているのですが、よく見ると少年は、すでにさるぐつわを箆められているらしい。これは、思うに折檻の途中で声を立てられることのないように、はじめは首尾よく手拭で口を縛り、着ているものをはぎ取ったのですが、いざ浴室に連れていこうとして自分がワンピースを脱いだとき、突如として今度は松夫少年が暴れ出したものに相違ありません。房子さんは目を吊り上げ下唇を噛みしめながら、両手でしっかりと引っ掴んだ松夫の頭髪を、千切れよとばかり、めっちゃめっちゃに揺すぶっています。

私は、どうしていいのかわからず、しばらくそこに棒立ちになったまま、その死闘を見守っていましたが、間もなく「あっ」と叫んでふたりの側へ走り寄りました。

形勢は矢張り房子さんの方が有利で、もう一息で松夫の上半身が崩れ折れようとする時でした。思わぬ抵抗を受けて猛り狂った房子さんが、相手の首筋を脚の間に締めつけて、ウムとばかりに乗りつぶそうとしたとき、苦しまぎれの松夫の右手が、さっと伸びたのです。無理ありません。じぶんの首根っ子を万力のような強さで締めつけている娼母さん

の脚の間から、なんとかして脱け出ようとす
るはかないあがき。私はそう思いました。そ
れに、こういうお仕置を日頃から好んでいる
房子さんに対する反感めいたものもありまし
た。が、しかし、私の体内に得体の知れない
怒りが湧き起ったのです。責めている房子さ
んよりいじめられている松夫の方こそ許せな
いと、咄嗟に判断した私は、だだだどと駆け

縛られた美女ばかりの超豪華アルバム

限定版
写真集

美しき縛しめ

第三集 略号「美3」
頒価一〇〇〇円 (送共)

一般書店売りは一切いたしません。直接天星社へお申込み下さい。

美人モデルの縄にあえぐ姿態が、両面特アート紙にギッシリとグラビヤで印刷されて、皆様のお求めを心からお待ち申しております。内容は次に掲げた百二十態の写真で、いずれも今まで一回も発表されたことのない、とっておきの秘藏品ばかりです。

◎緊縛女体百二十態 △本誌優秀モデル総登場の写真集▽

樹間にさらされる (絹川)	輝く白肌をさらして (関谷)	美貌を踏みつける (絹川)
豆しぼりの猿ぐつわ (絹川)	荒縄黒皮フンドシ (大塚)	悦虐の園にさまよう (水本)
縄目と裸身の羞らい (長野)	野性的な緊縛模様 (絹川)	若肌に襲う白ロープ (若原)
後手首に喰込む縄目 (梨花)	全裸のいましめ (愛川)	蚊群の襲うにまかせ (絹川)
荷造り縛り人形 (大塚)	白晒六尺フンドシ (遠藤)	きびしき縄目に喘ぐ (加茂)
バンド着用しぼり (遠藤)	百CC浣腸器責め (大塚)	麗しき裸身の縄目 (絹川)
替ゴム猿ぐつわ虐め (東浦)	荒縄のトゲに喘ぐ (大塚)	猿ぐつわ黒フン縛り (愛川)
ゴム布に包まれて (梨花)	両手吊りさらし (桜井)	あえぐゴム布嵌口 (大塚)
椅子利用エビ縛り (東浦)	M女性の本領発揮 (梨花)	美しい顔をなぶる (梨花)
厳しき胴絞 (絹川)	足錠をつけられる (四方)	飛び出す双丘と後手 (長野)

寄るが早い、矢庭に右足を挙げて強情な子供の腰のあたりを強かに踏みつけたのです。不意を打たれて松夫はぺちゃんこ。苦痛に歪んだその顔が、房子さんの膝の下で真赤に充血します。房子さんは腹立ちまぎれに、ぎゅうぎゅうの目に遭わせていましたが、ふと顔を挙げると、そこに立ちつくしている私に初めて気づいたように

「あら、あんたそこにいたの」

というと、腰紐で松夫の両手首を後手に、ぐるりと一巻きにしてしまいました。

「これでよしと」

芋虫のように投げ出された少年を尻目に掛けて、房子さんは手早くシュミーズを脱ぎました。

「これから風呂？」

「そうよ、こんな汚い子供、寝かせられやしない」

少年の口を結えた布の両端を握むと、房子さんは開け放した浴室の戸の方へずるずると引きずって行きます。

腑抜けのようになつた松夫は、それから二人のなすままにおとなしく全身を洗わせました。私は松夫の頭の方に両膝をついてかみ込み、ごしごしと洗髪した揚句、冷たい水

首縄胴縛り股間縛り(絹川)
 被虐に耐えた表情(水本)
 生首フオート(新宮)
 祭壇のささげもの(大塚)
 パンプス開股しぱり(大塚)
 越中フンドシ緊縛(大塚)
 飛びだした双丘(加茂)
 塩水を無理に飲ます(大塚)
 胸部と臍窩の魅力(遠藤)
 臍窩を狙う蛇の舌(梨花)
 顔枷の装着中(四方)
 鼻孔ゼムピン責め(絹川)
 鼻孔から薬液注入(大塚)
 豊軀にまつわる黒縄(若原)
 ピンクカバーと豆絞(絹川)
 斬首処刑フオート(新宮)
 両手首吊りさらし(大塚)
 後手足首逆エビ縛り(梨花)
 丈なす黒髪(大塚)
 責衣からのぞく乳房(大塚)
 美貌放心の表情(梨花)
 後手強烈しぱり(梨花)
 従順なるマゾの発散(竹野)
 手錠足錠首くさり(四方)
 白晒六尺フンドシ(大塚)
 ガンジガラメの縄目(絹川)
 首縄胴絞め股間縛(桜井)
 引き回される裸身(絹川)
 豊胸を彩る茶の縄(大塚)
 捕われの女学生(竹花)

被虐のマゾ女性(東浦)
 大きな猿ぐつわ(竹野)
 可愛い足首(絹川)
 黒髪なぶり(大塚)
 喰い込む柔肌に縄(大塚)
 裸身に投げたタオル(加茂)
 緊縛の優美ポーズ(絹川)
 くわえた赤い花(絹川)
 エビしぱり正面(梨花)
 美貌美身の緊縛(大塚)
 首を締めるくさり(絹川)
 手吊りのけぞり姿態(桜井)
 乳首に咬みつく蛇(大塚)
 後手縛りと臀部(絹川)
 ピンクの腰巻さらし(東浦)
 重圧に耐える表情(大塚)
 強烈アグラしぱり(絹川)
 ポリウムの誇り(桜井)
 鏡にうつす裸しぱり(山路)
 惜しみなく晒す裸身(大塚)
 ゴム帽子麗身晒し(梨花)
 首絞めに苦しむ(大塚)
 麗身をもたえさす(絹川)
 猿ぐつわの苦悶(加茂)
 黒縄にもだえて(大塚)
 全裸の手吊り責め(大塚)
 ゴムの猿ぐつわ(絹川)
 汚れた縄と輝く白肌(絹川)
 手首足首椅子しぱり(梨花)
 あえぐ夫人の表情(関谷)

首吊りのプレイ(大塚)
 後手縛り猿ぐつわ(絹川)
 電光に肌は映えて(梨花)
 噛まされる猿轡(東浦)
 柔肌高手小手(梨花)
 高手背高しぱり(水本)
 後手小手股間縛り(絹川)
 柱後手縛りにて(山路)
 下げられたズロース(梨花)
 十文字しぱり(桜井)
 木洩れ陽に白き肌(絹川)
 叫ぶ捕われの乙女(大塚)
 汗まみれの被虐(梨花)
 洋服タンスに吊る(大塚)
 全裸にてもたえる(関谷)
 黒縄地獄(四方)
 るせつの裸身(梨花)
 セーラー服を縛る(梨花)
 首縄から膝縄まで(大塚)
 高々と上った後手(梨花)
 くびれた胸と腹部(大塚)
 カクテルドレスの女(絹川)
 浣腸責め(大塚)
 首のくさりに悶える(絹川)
 黒のズロース(絹川)
 破られたズボン(梨花)
 正面立姿全身縛り(大塚)
 くさりに捕捉される(山路)
 亀甲型股間しぱり(大塚)
 長襦袢と腰巻(館)

を何ばいも浴びせかけました。房子さんが縛しめを解こうとしたとき、「背中流して上げるわ」と何気なくいってそれを遮りました。それがこの場における私のサジズムの、せいっぱいの吐け口だったのです。Y子が送られて来たのはそれから四、五日経った頃でした。それからというもの、私がY子ひとりを対象にして、夜毎嗜虐の炎を燃やしているのを、あるいは房子さんはうすうす御存知であつたかも知れません。

この前の原稿にも書きましたが、このようにして私は、弱者と劣者に対してのみサジズムを感じるようになってしまったのです。いや、先天的に私の身体の中に、そのような血が流れていて、それが房子さんによって眠りがさまたれたという方が正しいでしょう。

Y子に対する私の行為は、そんな私の心の炎を静めるよりむしろ、あふりたててしまったのです。裕福な家庭の子供や大人に対しては何ら私の嗜虐心は起りません。孤児院に住む哀れな子供に対しては、勃然として私のサジズムが頭をもち上げるのです。こんな私の気持は、一体どう解釈したらよいのでしょうか。少くとも、教育者という自分の立場から悩み続けております。

S
M
カ
メ
ラ
・
ハ
ン
ト

M七〇生「鼻責めの記」

辻
村
隆

M七〇生「鼻責めの記」

本年四月号の奇クサロンで、M七〇生の
 II Mへの捕虜IIという告白文を読み、鼻障子
 に穴を開ける方法が克明なので、興味をもつ
 たが、その儘忘れるともなく忘れていた。

続いて六月号では、同志？ 湯谷照夫氏への
 の呼かけの通信。更に十月号で登映治氏への
 フォト、八ミリの懇望と、M七〇生の鼻責め
 の過程は縷々と続き、一貫している。

所詮は男性Mと、私の興味を強くは惹かな
 かったのに、彼の懇望は、計らずも今度は鉾
 先きを変えて私への便りとなった。

読者通信にはのせず、私への便りは、箕田

氏が直かに私宛に直送してくれる。

彼の第一信――

――（三十九夜物語批判と初対面の挨拶は省
 略する）――誌上に、編集部告示で、面会
 などの際は、住所職業用件を記入して出せば
 出来る限り云々との事。私は編集部直接では
 なく、辻村氏に直訴をした訳であります。

（この処よく意味が分らないが、二重封筒
 で、天星社宛の封筒の中に、更に私宛の手紙
 を密封して入れてあったが、そのことを指す
 のだろう）読者通信へは、度々鼻穴の件で出
 しておりますが、貴下は正式のお勤め以外の

趣味？ での大家と存じます。間違っており
 ましたらお詫びを致します。

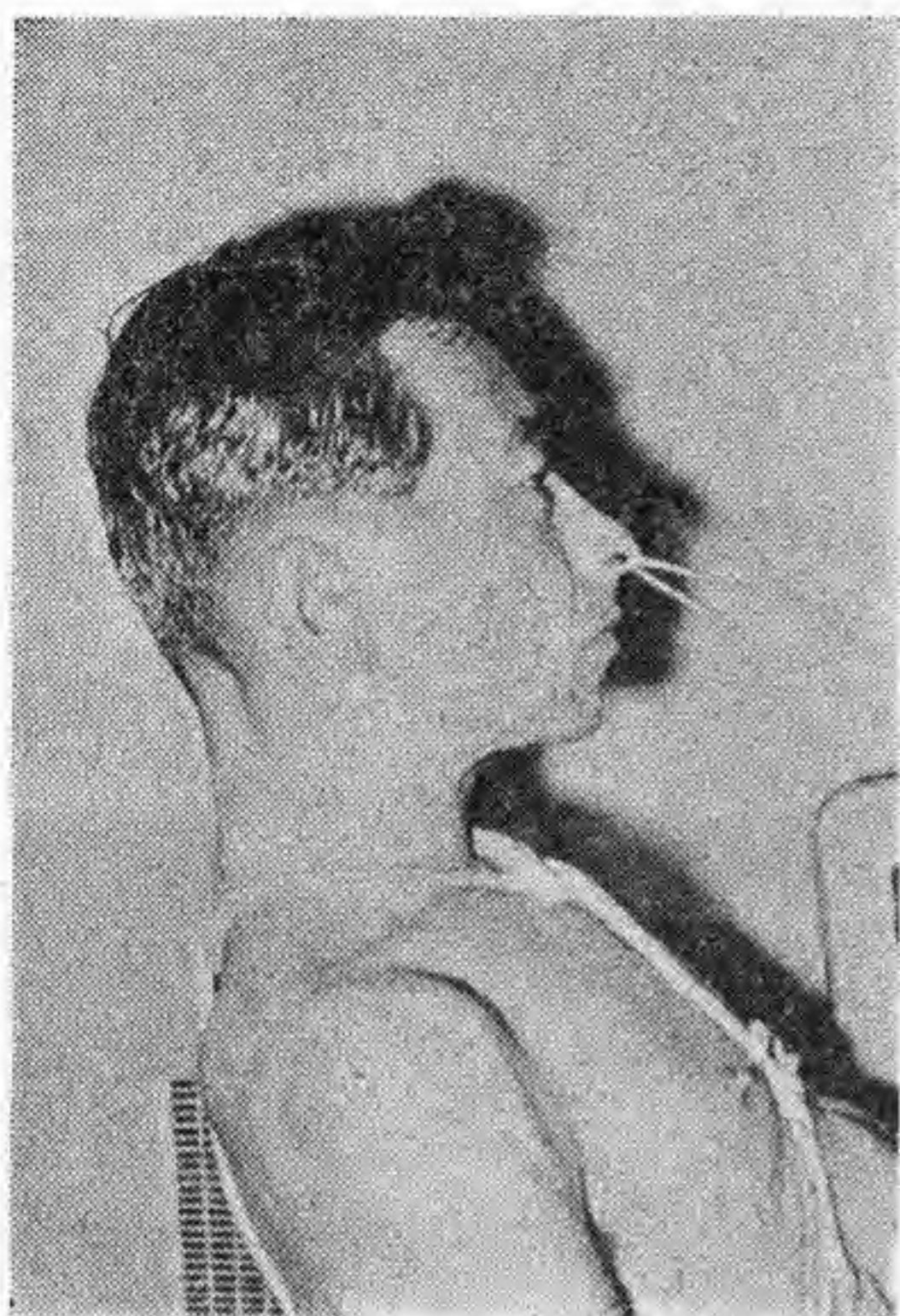
辻村隆氏にお願い申上げる事は、縛り責、
 吊し責、乳首責め、鼻責で、就中、乳首はい
 つ出頭しても立派に受け入れられますため、
 日夜乳首の拡大に努めております。首は（乳
 房を図解し、乳頭に傍線を引いて五ミリと記
 してある）直径五ミリです。尚紙挟みではさ
 み、糸を通し五百グラムの品物を吊す実験を
 しました。すると乳房（？）は四センチ許り
 伸びます。紙挟み共で約一キログラムです。
 貴下が応諾され、実験された私自身の姿の写

真を分けて頂き度いのですが。

ご返事あり次第、希望達成と判断しまして鼻栓をぬき、穴を縮小し塞ぐ心算です。(これも意味不明。私の返事があれば、どうして鼻孔を縮小するのだろう……)

十月の私の、会社での宿直日は×日、××日、××日の三日間です。貴下から万一お呼出がきましたら、早速参上致しますが、大阪駅または上六へ、遅くとも昼前に到着します。

二時間、貴下には貴重なものでしょうが、尚また、短時間にも消化は、連続的に実施



すれば可能とも判断しますが、身体の疲れなど平気です。勝手な事ばかり申上げ、申訳ございません。何卒ご容赦の程を。

万一ご返事下されますなれば、同封の切手をご遠慮なく。尚小生、中年過ぎにて、スタイルは中の下です。通称名古屋M七〇生、昭和三十九年九月三十日、辻村隆様 机下

奥田 康雄
(特に仮名)

ご返事宛先は、

名古屋市中区×××通×丁目八

株式会社 U・B 気付

× × × ×

実際の処、私は突然の便りに途迷った。私は箕田氏に電話する。

「うん、どうしようかと迷ったんだが、君宛の密封だし、送らないのも悪いと思ってネ。そうかい——。いや、最近、M男性の申込みが実に多いんだけどね。このM七〇生君

が、実際に穿孔しているか、どうか、一度騙される気で逢って見るのも面白いじゃないか——最近京都の方からも、これは大分おとしよりだが、十九ミリの鼻穴をあけ、耳穴もあけたという御人があるよ。これは一応読者通信にのせたがネ——。あんたも『三十九夜物語』の最終回で『穴に憑かれた男』の物語発表しているんだから、この際、本当か嘘か一度実地に試して見るのもいいじゃないか——何なら、上六辺りで逢うのなら、私もM七〇生に少しばかりの時間なら、逢ってもいいよ——」

箕田氏の電話の声で、大体私の決心はついた。しかし彼の第一信からは、これといった適確な面は掴みにくい。私は折返し、逢う日時、場所など冒頭に書いた上で、M七〇生の鼻穴をあけるに到る動機なり、方法を精しく知らせる様に連絡した。折返してその返事は直ちに私の手許に速達で直かに届いた。

その第二信はかなり部厚い——。

前略、辻村先生(先生はどうも恐縮だが、原文の儘なのであしからずお勘弁下さい)と呼びさせて頂きます。お忙がしい処を早速ご返事いただき、天にも昇る心地です。

十日の朝に入手致しましたので、十一日ま

でのお話はダメになり残念です。お宅でならば、失礼ですがいろいろの責具も揃っている事と思いますが、プレイの一件につきましては未経験でして、懂がれに近いものかも知れませんが、先生の専門的な立場上、果して満足が得られますやら、が第一の心配です。

第二の心配は、先生が実物を見てガッカリするのではないかと思います。過去に数知れず美しい人を見てこられました故に――。

唯私は、先生の指示に従い、忠実に行動しかなりの苦痛には耐える心算であります。尚材料につきましては、宿直の夜を利用し、会社の倉庫内のガラクタを引っ張り出してきては試した程度で、現在の手持品は最極少です。

鼻穴に使うビニール管、長さ六センチ、直径一センチ。舌貫通用の注射針、太さ一・五ミリ、長さ五センチ。乳首挟用のクリップ二ヶ、糸で吊す四百グラム位のおもり二ヶが今の処私の全部です。

今般はご指示通り、大阪市内で実施していただいて結構です。尚私は、大阪市内は不案内で、十年許り前、大阪支社に一度だけ出張したのみですので、近鉄上六の改札がよろしかろうと存じます。十月十×日の十時三十分

名古屋発の特急で上阪しますから、よろしくお願ひします。

私の人相特徴は、背は低く色黒でして、背広着用し眼鏡をかけ、右手に黒い鞆を持ち、左手に奇ク十一月号を持っております。

是非是非お見失ないなく、お目にとどまる様ご留意の程お願い致します。

さて、次に私の鼻穴開けの動機及び工程ですが、昭和二十三年頃より奇クの愛読者であった私は、昭和三十五年頃と思いますが、読者通信のある方の文に、鼻障子に穴をあける方法と、その責め方がのりました。それが私を今日にかり立てたのです。

鼻障子の穴作製の実験は、その直後から開始しました。

先ず最初に木綿針を使用して試みてみました。簡単に通りましたが、少し出血を見ましたので、化膿防止にペニシリン軟膏を塗布し妻揚子を鼻障子の厚さに小さく切って貫通した穴に挿し込みました。少し痛みますが、二十日間位、その妻揚子を動かしておりましたが、ついで製本用の太針をさしこんで、鼻障子の穴の拡大作業に努めました。かなりの苦痛をこらえて、穴に手芸用のビニール紐を通し、微少な紐の穴に太針を入れて管紐の中を

太くし、徐々に広げて、十日後にはその管に五寸釘を差し込みました。

ついでボールペンのインキの入ったビニール管を、五寸釘を焼いて差しこんで拡大し、これを小さく鼻穴に合して剪って挿入しました。勿論痛みのはげしい時もあり、その都度ペニシリン軟膏を塗りますが、焼釘を鼻穴にさしこむ時は、やはり火傷を鼻の辺りにしました。相当穴は広がりしましたが、私は穴の拡大に憑かれた様になって、日夜大きく広げる事にのみ頭を使いました。

仕事中に三ミリ位のビニールパイプを見つけ、大切に家に持帰り、これを試して見たのです。白色のビニールパイプは温めると柔軟になりますので、これを例によって穴に合せて剪り、鰻の頭をさす錐を焼いてこれをつけ、じりじりと鼻障子を焼き乍ら、冷汗を掻きつつ、必死に苦痛をこらえて、ビニールパイプの両端を出来る限り深く、太くしようと努力しました。この最大の難作業は一応成功しましたが、鼻穴は耐えられぬ激しい疼きに、私は数日、誰にも打明けられぬ痛みを懸命にこらえ続けました。

煙草を吸うために、いつしか白色パイプはニコチンで色づき、相当期間、穴を埋めたパ



イブを思いきって抜去しました。

久し振りに抜いた鼻栓に、私は鏡とにらめっこし、ふと責めを試みたくなったものです。私は四ミリ位の太さの錠前を鼻に嵌め、鍵をかけ、錠前にロープを通して扉の上部に掛け、最大限の背伸びをして、吊り上った鼻孔に灼けつく痛みを覚え乍らも、その時の苦痛が喜びに変化して行くのをこの体、いや鼻でじかに感じとりました。

鼻責めに可能な責具を、あれこれ考案しては、私は人知れず鼻責めの愉悅に耽溺していたのです。

手帖用の鉛筆を挿し込み、それにパイプを

通して穴に栓をしますが、かなり拡大しているのか、以前のパイプはするすると入ってしまいます。鉛筆をぬいて指で左右に押して見ましたが抜けませんので、安心して就寝し、朝になって妻が起しにきて、鼻から光が見えるといわれ吃驚仰天しました。妻は私のこの貫通作業を全然知らなかったのです。

しどろもどろに妻に弁解し、新たに完全な穴ふさぎの工作に専念したのです。

結局、考案に考えた末、あれこれ試作した挙句、壘用のゴム栓を削り、型に当て嵌め、

改造したのが色も保護色で、人眼にもつかず理想的でした。

こうして一応、鼻栓が出来上ったものの、私はこれで満足せざるいろのもので徐々に拡大して行きました。

ビニール電線の、被覆のビニールを剪って差し込んだり、ボールペン軸を挿入したりするうち既に穴の直径は

五ミリ近くなってきました。

細軸の万年筆も通る様になり、ついで旧陸軍歩兵銃の小銃弾頭を焼いて挿入し、非道い火傷をし乍らも、穴は一挙に倍近く大きくなってきました。私はいよいよ穴に憑かれ、鰻用錐を赤く焼いて鼻穴に押し込み、ぐるぐると廻わし、肉の焦げる臭いに、スーッと気の遠くなりそうな激痛を感じ乍ら遂にやりとげました。しかし翌日より化膿し、必死に治療に励み、十日許りで回復しました。

その頃、奇ク誌上で、或る老人が、女に小指を入れさせ、一センチの大きさになっているという記事をよみ、私も負けてなるかと軟骨に小型三角錐を曲げて作業を開始しましたが、素人の軟骨切除は危険だと判断して、この上は現状維持の俛、最大限の拡張をする決心をしました。

考えた末、ボールペンのキャップを焼いた小銃弾に入れて鼻穴に押し通し、ついでカブ（原動機付自転車）のプラグを入れて、どうやら七・五ミリに達しました。

その間にもプレイは行ない。鼻痒りをつくり、両天秤に軽いものをのせて愉しみます。プレイに耽るうち、いつしか一センチのローソクを挿しこんで通る様になりました。

一センチの蠟燭をU字型に曲げ、鼻穴を通して仰臥する時、人間燭台は完成します。

真暗闇の夜中に、唯、鼻穴を通ったローソクのみが両端に点火され、ほんのりと人体を照すなんて、なんと神秘的ではないでしょうか――。

長々と書きつづりまして、お読み苦しい個所も随分あったと思います。

私はその外、気胸用の注射針で舌を下より上へ貫通させ、また、宿直の夜、下腹部から腿、股から臀部へと針を通して、タコ糸で縫いつけました。体に針を通すことが私にとっては、さして苦痛ではないのです。むしろM的な悦びを感じるのです。『世界残酷物語』でやった様に、いつか私は体中の凡ゆる部分に針を貫通させる作業に熱中するかもしれません。『日本残酷物語』という様な映画でも出来て、私は推薦する人があれば登場してもいいと思っております。

私のこの下手な文章の一節一節が嘘でないことは、やがて先生自身の手でお試しになれば分ることです。

一時間千秋の思いで、お目にかかる時を待っております。ではくれぐれもよろしくお願い申し上げます。

M七〇生

辻村 隆 先生

× × ×

近鉄に電話で問合せ、名古屋発ノンストップ特急が、上六に到着する時間を調べて、私はその少し前、名古屋より到着するホーム側の改札で彼を待った。

特急到着と同時に、どっと吐き出された人浪を必死に私は眼で追っていたが、人混みの中程に逸早く彼らしき人物を発見してホッとしました。紛れもなく奇クを一冊、判っきり表紙を見える様にして、本の端を握ってキョロキョロしている。私は近づいて声をかけた。

「奥田さんですね――。辻村です……お待ちしましたよ――」

彼は硬わばった唇を崩し、混雑の中に逸早く自分を認めてくれた喜びに、人眼がなければ私の手をとらん許りに相好をくずした。第一印象はアイ・ジョージそっくりである。

私はとも角彼をいざなって、上六近くの箕田氏と打合せしておいた喫茶店に落付いた。

M七〇生を、箕田氏に紹介したあと、私と箕田氏は原稿の打合せ、モデルの事やら、いろいろと話合った。彼は専ら聞き役に廻った。その日は、特に大塚啓子の事について、私には思いもかけぬ出来事があった。

「前に、四馬孝君、大塚さん等と四人で、彼女を撮り損なってドライブしただろう。あの時、あんたは彼女に恋人と別れたとか何とか喋べったらしいね――」と箕田氏

「うん、そんな事いった様にも思うが、それがどうかしたの？」と私。

「どうかじゃないよ。私が彼女のプライベートルな事を、何でもあんたに喋べっている様にとったんだネ。何かすっかりお冠りを曲げてしまつて、三日後にあんたと塚本君と一緒に撮る予定だった彼女、いやだといって断わってきたよ――」

「へえ――」

私は二の句がつけない。箕田氏から彼女の恋人の件を漠然ときき、長いドライブの間「その後、恋人とはどうなったの――」

と、軽い世間話の気持で冷やかしかし半分にかいた。たったそれだけの事で、彼女が怒っているとは、夢にも考えられなかった。

「一事が万事で、私が何でも喋べっている様に思っているんでね。とも角、これからもあることだ。モデルの前じやプライバシーに関する事は絶対いわず、知ってても腹におさめておくことだね――」

箕田氏はやや渋い顔で私に忠告した。



プライバシー侵害で敗訴した三島氏の気持が分る。

私は、大塚嬢を撮る事がおナガレになったそのことよりも、彼女の誤解が残念だった。しかし、ものいえば唇寒しとはよくいったもの——。口が軽いといえはそれまでだが、何

でも腹にもてぬ私は、箕田氏へも殆んどは喋べってしまう。隔意のあるのが厭な為でもあるが、箕田氏自身、私と東浦ひかるの一秘事を彼女にうっかり喋べって、その後、私と東浦ひかるが気拙くなった事がある。お互いにモデル嬢のデリケートなハートにはよくよく注意すべきだと、私はその日つくづく思った。

閑話休題——。一時間許り喋べって箕田氏は車で帰っていった。

「いいフォト頼むよ。それから、ホンにのせていいかも聞いといてよ——」

車から首を突出して、それだけいうと、箕田氏は午後二時から塚本氏が撮る筈の、マゾ志望の読者の女性と逢う為に、梅田の方へ急いで行った。

話の間、M七〇生は、私達の話を興味あるような、ないような様子で黙ってコーヒを啜り、手持無沙汰にタバコを何本も灰にしていた。彼にとっては、これから始まるであろう、Mのプレイで頭が一杯だったに違いない。わざわざ名古屋から出てきたのだから、一分たりとも彼にとっては貴重な時間であったかもしれない。

男二人というと、アベックホテルには入り

にくいものだ。私は己むなく、同好の知友の経営するアベノのホテルに車を飛ばした。

ホテルの玄関で、物珍らしげに知人は私達をジロジロ眺めた。

「辻村さん——今日は男同志かい——」

「M七〇生なんだよ。名古屋からわざわざきてくれたんだ——」

「へえ、M何だって……?」

彼はM七〇生を知らなかった。もっとも、彼はSで、サジストプレーのそれも、女の子相手だから、男性のMには興味もないのだろう——。

「いずれ、またくわしく話すよ。部屋一つあけてくれない?」

「生憎和室は一杯なんだ。洋室なら空いてるけど——」

「まあ仕方ない。それでいいよ——」

私達はデンとダブルベッドが我物顔に占領する洋室に通った。女の人がお茶を運んでくる。私達は努めて商談の様な顔をせざるを得ない。

「ではソロソロ始めましょうか——」

手紙で先刻ご承知の上だし、とり立てて話す事もないので、私はカメラの準備にとりかかった。

「鼻栓を抜きましょうか——」

「ええ、どうぞ——」

私は準備し乍ら、横眼で彼の様子を見ていた。鏡の前に立った彼は、ジワジワと右手で鼻孔の一端を押す様にして、茶色い塊りを鼻からとり出した。蛍光灯の光が、正に鼻穴からうっすらとさしこんでくる。

「こんなものですよ——」

じんめりとしめって、薄汚れた鼻栓を彼は差出す。壘のゴム栓にボールペンのキャップを剪って、うまくかぶせてある。

「一センチ二ミリあります——」

彼はつぶやく様に、下を向いていった。

「鼻責めの過程として、緊縛のプレイはやっていいですね——」

「勿論ですとも。決して遠慮なさらないで、辻村さんの思う様に縛って下さい。大抵の事なら我慢出来るつもりですが……」

彼は私の返答を待つまでもなく衣服をぬぎパンツ一枚になっていた。

△忍耐力の限界を見てやろう。どの程度で音を挙げるか——▽

私は最近買った許りの、袋物の芯用の柔かい紐を彼の為に準備してきた。しなやかなので嵩ばらず、それでいて大量に持参出来るか

らである。全身をぎっしりと縛り上げ、彼をベッド横の柱に括りつけ、その紐を鼻に通し鼻障子がぐいと突き出して、その耐久力のぎりぎりまで引き絞って、その紐の端を胸紐に縛りつけた。

彼の顔はうっすらと蒼ざめ、つぶった眼に歴々と悦楽が浮び上った。口をあけさせ、別の紐でぐいと唇がくびれる程に深くしめつけて猿轡の代りとし、その余りを首に巻きつけて、柱に巻いた。

「苦しいかい？」

私はわざとゾンザイな口調できいた。プレイが始まると、Mの男に親切な丁寧な言葉は不要である。彼等の心理は一樣に隷属し、服従し、汚辱にまみれる事を切望しているのだから——。

彼は辛うじて首を横に振った。苦しくないというのだ。私は彼のバンドをズボンより引抜くと、右手に二つ三つ巻いて握りしめた。

「責めてやろうか——。責めてほしいのだから……」

彼はコクリとうなづく。

私は最初は軽く、そして五、六発目辺りから徐々に強く、そして弾みがつくと、勢いもついて、強烈に彼の全身に革バンドをふるっ

ていた。彼は縛られて身動き出来ぬ体をよじりくねらせ、蠢めいて蠕動し、薄赤いみみず脹れが、浅黒い筋肉質の裸身を染めて行く。深く紐の喰込んだ唇がうごいて、彼は何か呻くように叫んだ。私は手を休めて耳を傾ける。

「す、すこし気分が悪い……」

くぐもり声がそう叫んでいた。私は限界と見て縄をとき出した時、彼の顔面は蒼白に変じ、がくりと体の全重量が数センチ下落した様に思えた。恐らく私の顔色は変っていただろう。

△これは大変だ——。少しきつすぎたのだから——、もしもの事があれば……▽

不吉な予感で、私はどうして縄を解いたのか覚えていない。彼を抱きかかえて傍らのベッドにねかせた。

「しっかりしろ、しっかりしろ」

私はピチャピチャと彼の頬を平手で叩き、体をゆすった。

数十秒の失心状態を経てから、彼は正気に返った。顔面から胸にかけて、冷たい汗がにじんでいた。

「どうしたっていうの——吃驚するじゃないか——。手加減してほんの軽く、手ならしの

つもりでやったのに……」

「済みません——。何しろ生れて始めて、人に縛られ責められたものですから、昂奮と不安と期待で、ついボーウとなってしまうました。気にしないで下さい。少し休むと、すぐ気分が治ります。本当に済みません。取乱してしまつて——」

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

予約申込者月毎増加中です

毎月確実に二十五日発売!

○現在本誌はいろいろの事情で全国末端まで円滑に配本できませんので、所により非常に入手困難だと思ひます。毎月確実に御入手されるためには、是非直接予約お申込み下さるようお願い致します。

○予約御購読なさるには、予約購読料を天星社（大阪阿倍野局私書箱第十四号）宛お払込み下さればよろしいのです。

○本誌の送料、包装代などは、すべて当社にて負担いたしますから、誌代のみ御送金下さい。予約購読料は一月分一冊三〇〇円三月分三冊九〇〇円、半年分六冊一八〇〇円、一年分十二冊三六〇〇円です。

彼は気の毒なくらい私に謝まつた。しかし

私の意欲は、これですっかり消沈してしまつた。気がついたからよかつたものの、あの儘になつたら、それこそ私はどうなる。辻村隆

意欲をそがれて私は、ハッスルしたSMの炎に水をかけられた様になつた。それに引替

○予約お申込みの方には、毎月二十日頃、印刷完成と同時に、外部から見えないよう嚴重包装の上確実に発送いたします。

○予約お申込みの際は、新規、継続にかかわらず、何年何月号から何カ月分予約とはつきりお書き願ひます。

○予約金が切れましたは、封筒の上に、「本号にて前金切」の判を捺印いたしますから継続お払込み願ひます。その際でも何月号からと、お書き添え願ひます。

○送り先は、心ず楷書で、肩書（何々方又は何々社内）などがあればお忘れなくお書き願ひます。

○局留にて雑誌をお受けとりになりたい御方は、お受けとりに行かれる局を指定下されば、その局留として発送いたしますから毎月二十五日過ぎに局へお出向きの上、お受けとり下さい。局での留置期間は十日間です。その月中においでになれば、いつでもお受けとりになれます。

え、彼はこれを契機に俄然積極的になつてき

た。私は彼にいざなわれる儘に、鼻責めを主体としたポーズを、彼のやる儘に撮つた。主

導権は彼に移つた様に、彼がこうして縛つてくれといえは、易々諾々、それに応じた。

彼は確かに手紙に書いていた通り、氣胸針で彼の舌端を貫通さし、自らの肌を縫つた。太腿の附根辺りに、うっすら残る針跡は正に彼が手紙通りに、両の腿を縫いつけたに違いない痕跡を残していた。

徐々に私は、平静に復した。そうそういつまでも彼のいうなりを撮つてもおられない。

私のアイデア、構図もそろそろ顔を出し始めた。私は鼻責め用に持参した茄子環、錠前、鎖、スプリングのラセンのカーテン線等で、次々に鼻責めの実験を試みた。

鼻鎖で四ツ這いにさせて、ジュータンの上を引曳り廻し、犬の様にチンチンをさせて見た。僅かの時間の鼻穴の活用は、そうそういろいろも出来ないが、一通りは試みて、彼はこれに易々として応えてくれた。

プレイに耽溺して、ふと気付いて窓より外を見ると、すっかり暮れなづんで、ネオンが明滅する暮色が濃かつた。

「そろそろやめないと、名古屋へは帰れませ

んね。止ましようか——」

「いえ、未だ、もう少し大丈夫でしょう」

彼は三時間に亘るプレイも、未だ物足りないので、私の言葉を否定し、もう少しプレイの淵に身を沈めていたい口ぶりだった。

「人間便所なんて面白いですよ。これを一つどうですか——」

彼の提案によると、この洋室の洋式便所の壺に顔を差し入れ、蓋をしめ、手足を便所の取付けた鉄管に緊縛してほしいというのである。私は最早、奉仕の気持で、彼の願いをきき入れ、ライトの閃光を走らせた。

「最後のお願いです。私の乳首をクリップ責めにし、両手足を束縛して浴場へ転がして下さい。水でも湯でも構いません。全身にぶっかけて、バンドで力任せになぐって下さい」
時間を気にする私に、彼は哀願する様な口ぶりで頼んだ。

私はかなり疲れていたが、そうそう彼と一緒にプレイする機会もないと、カメラ抜きで浴場に彼を引曳り込んだ。彼の希望通り後手縛りで、足も揃えて縛り、乳首にクリップを挟み、仰向けにして、足を握って浴場まで引き曳っていったのである。

シャワーの下に、長く伸びた彼は、全身に

浴びるシャワーの水滴を、心地よさそうにうけていた。私も風呂に入る姿になって、浴場に降り立って、革バンドに相当の力をこめて殴った。

「ゆるい、ゆるい……。もっと強く——」

彼は喘ぐ様に叫んで、更にその打撃の強い事を希む。狭い浴場にピシリピシりとバンドの派手な音がこもって、濛々とした湯煙りの中で、彼はタイルに転げ廻り、悦楽の呻きと動物的な喚きが、ワーンと反響する。

「もう、カンベンしてくれ——」。俺はクタクタだよ——

力尽きたのは私の方である。すっかりのぼせ上り、心臓を弾ませて、私は逃げる様に、浴場を飛び出した。この倦つづけると、また最初の二の舞にならぬとも限らない。

私は心をしづめ、再び浴場に引き返して、のけぞっている彼の縛しめを手早く解いた。

× × ×

タクシーで駆けつけて、発車一分前、辛うじて彼は午後七時発名古屋行急行に飛びのつた。車内は満員。スルスルとしまった扉にへばりつく様にして彼は手を振った。

充ちたりた笑顔が流れて去っていった。

「やれやれ、どうやら無事に終った。でも随

分奉仕したものだ——

私はM男性の飽くなきマゾ性を、今日まざまざと見せつけられて、彼等の願望が、如何に激しいものか、私自身判つきりこの眼で見、この腕で確かめ得た。私のアブ遍歴の一頁に、新らしい鼻責め男性のMを加えた事は正に貴重な収穫であったかも知れない。

私は彼と別れて急に空腹を覚えた——。途端、私はM七〇生の空腹に始めて思い到った。彼は朝早く特急にゆられて、大阪へついて、私と逢い、コーヒ一杯でひる飯ぬきでホテルへ行き、今また七時に車にのるとなると、名古屋着は早くても十時——。私も彼も昼飯、夕飯を忘れて、只管にSMプレイに耽溺していたのだ。

奥田さん——。メシの事をすっかり忘れていた。小生の迂かつさをお許し下さい。でも私自身、君と別れるまで、メシの事は念頭になかったのだ。あしからず——。

いつの日にか、再び相見えた時は、先ず一番にメシを喰おうね。プレイはそれからだ。

(おわり)

×

×

×

愛読者原稿Ⅱ体験

蛇のような革帯

福田久文

わたしの知るかぎりでは、わたしの創作も読者通信も、わたしが願いをこめて書き、編集者が心配してなんども読みかえし、印刷所がそれを無関心に活字にただけに終った。それらは読者や寄稿家に読まれたのであろうが、作った者にとって、何の感想も聴けなかったら、読まれなかったのと同じである。

しかし、たまたま靴に入れていた昭和三十九年五月号が、奇クの発行所や読者層とかかわりなく、わたしの「マゾヒズムへの孤独な願望」をなかばいやす機会を与えてくれた。現実には願ったとおりに示現するものではない

が、事実には創作にない面白さがあるであろう。パートナーに出逢えずに孤独を背負っておられる同じ性癖の読者に面白く読んで頂けるなら、乏しい余暇をつぶしても惜しいとは思わない。

その日わたしの姓ではなく名前に「さん」をつけてわたしを確める低い中性的な声を受話機に聴いたとき、相手に見当がつかず奇異な感じがした。A FですVといわれても、その姓がわたしとどういう関係があるのか、すぐにはわからなかった。それは四年ばかり前

から遠縁になったFという五十近い未亡人で、親戚の葬式や結婚式で両三度顔を合わしよくわたしに話しかけてくる人だった。

紅をつけた唇は薄いやや長く、眼がかなり出ていて、広い眼と眉毛との間に眼球の丸い輪郭がはっきりと出ている。眉毛の末端をそり落して眉墨を引き、眉毛を垂れ下げている。鼻は型はいいが大きい感じが。化粧をして浅黒いのを隠したら美しく見える顔であろう。地味なパーマをかけていて、言葉と声色に気取りが感じられる。やや肥り気味で、顔も体も大きい。Fはそんな感じの婦人だ

った。

要件は自社（Fは化粧品の販売商社を営んでいた）の広告文中のフランス語がどうも正確でないようなので、みてほしいというところで、大阪の新興歓楽街十三（じゅうそう）の大きなレストランの名と時間を告げた。Fもわたしも阪急電車の神戸線の沿線にいるので、帰りに落ち逢うには、それは適当な場所だった。

レストランにはいつて席をどこにしようかと、眺め渡しているところへFがはいって来た。腕が露出し、胸に大きなリボンのようなこみいった飾りのついた黒いワンピースを着て、無帽だった。二人は立ったまま挨拶をした。軽い奇異感がまたふとわたしの胸をかすめた。二人きりで逢うのは始めてなのだが、これまでわたしを眼上の者のようにして来たFが何か敬意を欠いた親しみの素振りと言葉を現わしていたのだ。

話は簡単だった。Fが示した原稿はなるほどひどかった。わたしがホンコンシャツのポケットから万年筆を取り出して、その用紙の裏に活字体で正しいのを書いて渡すと、Fはそれをハンドバッグにたたみこんで、すぐナイフとフォークを取り上げ、わたしに食事を

すすめた。Fは語学に興味があるようだったので、わたしはそれを話題にした。

「ノンランシームレスなんていう靴下はいギリスやアメリカへ輸出したら多分売れないだろう。靴下に筋のはいるのを「走る」というものだから、それを直訳して「筋のはいらないシームレス・ストッキング」というつもりなのだろうが、英米の人が英語で読んだら、「歩くのはいいが走ったら破れる靴下」だと思ふにちがいない」といったら、Fは口にしたものを辛うじてのみこんで、声を出して笑った。

その笑顔が微笑に戻ったとき、Fがわたしの視線を避けて肉を切りながら唐突に話題を変えた。F自身やはり思い切っていたのであろう。すこし言葉のイントネーションが変っていた。

「Sさん（わたしの名前）の小説読んだわ」
「わたしの小説？ わたしは奇く以外に何を書いた？ 何もないのだ！」

わたしはナイフとフォークを動かすのをやめてFを見た。顔をあげたFはすこし品のない笑顔をつくって言葉を続けた。言葉の調子はもう普通だった。

「もっとまじめな小説お書きなさいな。大学

の先生になろうって方が……。ホ、ホ……。驚いて？」

「Nだ！ そうだったのか？ Vわたしは事情をのみこんだ。」

学会の機関誌のことで郵政局に勤めているNにいろいろ世話になったので、十日ばかりまえ、高島屋の屋上でわたしはNと生ビールを飲んだ。三杯目の大ジョッキを前にしてNは平凡でユーモラスな猥談を始めた。そうして笑いながら謹聴しているわたしを、品行方正、質実剛健だといってからかった。屋上は涼しく、ネオンの海の中に心斎橋筋の照明がひととき鮮やかで、つい飲みすぎしていたわたしは、鞆の中から五月号を取り出してしまった。まさかといっていたNは誤植のある箇所を一つ一つ雑誌を見ずに指摘していくわたしをまじまじとみつめてやっと思じた。Nは奇くを見たことがないらしく、熱心に頁をばらばらとめくっていたが、一か処をじっと読んで、こんなことを真面目な顔をしていったのを覚えてる。

「外から見えないように嚴重に包装して郵送するのなら開封の要件を欠くんだから、三種の認可のある雑誌でも一種扱いになる筈だ。一体どこの局が引受けてるのかな？」

このNが不用意にFにわたしのことを洩したのだ。

「Iさん（Nの名前）でしょ？」

「やっぱり誰にも隠してたのね、すぐわかる



ところみると」またいやな微笑がFの顔に広った。「Iちゃんとはね、わたし、おつきあ

いがあるのよ。わかって？」

「おつきあい？ Fとはわたし同様血はつな

がっていない。だが、Nは次男坊で、Fの養子になるそうだと父がいつていたではないか！ わたしの秘密以上の秘密をFは安心して打ち明けている。わたしが教育者のはしくれだから、わたしの秘密の方が致命的だと安心しているのだろうか、一体何のために、こんなことを打ち明けるのか？ わたしを誘っているのだ、これは：V

「わたし以外には絶対そんなこと洩しなさんなって、わたしからもじゅうぶんIちゃんに注意しといたわ。でも、驚いたわ」

わたしよりも先に食事をすましたFは、食事を急ぐわたしを眺めながら煙草をのんだ。

心に描き続けて来た女が眼前に坐っていたようなものであるが、わたしは比較的冷静だった。そして、ながく堕ちていた想念のマゾ地獄のなかで自分がいっしか少年の日のみずみずしさをすっかり失ってしまったことを今更のように認めないわけにはいかなかった。

へわたしの願いは心身ともにみずみずしい少年として中年の婦人の手に身を委ねることだったのだ。それなのに、その人に逢えぬままわたしの青春は過ぎていて、眩暈と激情をもって、このFを見ることができない：V

こうした感傷よりも、まわりに顔見知りの学生がいまいだらうかという懸念の方をより強く抱きながら、わたしは食事を終えて口をぬぐっていた。

「この近くで、ちょっとご一緒に帰りましょ」

Fは立ちあがりながら、低い声でさりげなくいった。きまじめな表情だった。わたしは黙って立ちあがり、Fに続いた。

繁華街の端にある、そのレストランを出ると、すぐ道は薄暗くなり、淀川の堤が見えてくる。蛍光灯を内蔵して一時間単位の使用料金を表示している小さい看板以外は照明がなく、『ホテル』が黒々と立ち並んでいた。道は広いのに人通りはない。

Fは歩きながらぼつりとういった。録音していたとしたら、多分完全に一致するだろう。

「女中なら、平手打ちの折檻ぐらいなら、したことがあるけど、わたしは何も経験ないのよ。でもこの年になると変った刺戟にひかれるわ。してほしいことは遠慮せずについて教えて頂戴。本当にわからないものね、広告まで出してたなんて……」

わたしは何も答えず、うつむいて歩いてい

た。わたし自身マゾヒストであるかどうか疑わしいのだ。だからこのFの言葉は、Fと別れるために立ちどまろうとするわたしの心に絡みついて、わたしの意志の自由を奪ってしまったのだ。

玄関にはいるとフロントも廊下も狭くて暗かった。照明が暗いから赤黒く思えたのであろう、赤い安絨毯が案内された部屋にまで続いていった。附属のトイレや浴室は電灯が点滅できたが、居間は天井に紫色の小さなシャンデリヤが下っているだけで薄暗かった。

茶菓とFが注文したビールを運んで来た女が出ると、二人は浴室にはいった。Fは見かけ以上に肥満していた。遅すぎてもとにかく与えられたこの機会を有効に使おうと、ようやく決意を固めたわたしは、奴隷のようにひざまづいてFの体を丹念に洗った。Fは満足げな表情で黙ってわたしのするがままにしていた。

ゆかたをまとった二人は、月並な会話を短く交わしながらビールを飲んだ。やがてコップを伏せたFは煙草に火をつけて深々と椅子にもたれかかった。それはわたしの創作のヒロインの仕草の一つではないか。わたしは黙って立ちあがって二人の間にあった小卓を持

ちあげた。それは思ったより軽く取り除くことができた。そして、ゆかたを脱いで自分の坐っていた椅子をうしろへ押しやり、Fの前にひざまづいて、そのゆかたの帯だけを取ったが、縛ってくれとは、やはりいいかねて、そのままそこに正坐した。

しばらくして見上げると、白っぽいゆかたのあいだに黄色い豊満な隆起がいくつも重って、その果てに煙草を吸いながらわたしを見下しているFの顔があった。それをまじまじとみたわたしは、腰をあげてFを離れた。洋服ダンスのズボンからとかげの革バンドを引き抜いてFに手渡すために。

「背中を打ってください」

浅く腰かけておおむけに横たわるように椅子の背にもたれかかったままのFは、右手で煙草をもったまま黙って左手でそれを受取ってくれた。わたしはまた坐り込んだ。

「もっと、きつく」

ものをいうのをいうのを忘れた女の前にうづくまっているような感じだった。

「もっと」

二度注意しても革バンドが背中にただ落ちてくるような力のない鞭打だった。

「もっときつく打ってくださいな」

そういつて見上げると、彼女は革バンドを左手で逆手に握り締めて、その手を胸元にあけていた。緑色のとかげの皮を張った厚い革バンドがFの胸元からくねくねと、その隆起のうえをはいさがって、生きた蛇のようだった。

Fが右手を延して片寄せた小卓のうえの灰皿に煙草をもみ消しているのを見て、わたしはまた顔を伏せた。右手にまともに持ち替えられたのであろう、改めて振りおろされた一撃はすこし痛すぎた。まをおかずにまたわたしの背中に革バンドが鳴った。Fの胸元に拝火教徒のようにささげておいた両手を思わず

宙に浮かしたほど、それは痛かった。わたしが黙っているからいいのだと思ったのか、次々と狂ったようにFは革バンドを打ちおろし始めた。

耐えきれずに革バンドを避けてFの足元にうつぶせに横ったわたしは、やめてくれとはいわずに、

「こんどは……踏みつけてください」といった。

「つぶれてしまうやないの」

もし、その顔が見られたら多分皮肉な微笑がみられたにちがいない。

代理部分譲品拡充。お申込み下さい。

○諸種の制約のため、口絵並にグラビヤ頁に於て、読者の皆様の御満足のゆく内容を盛り上げる事ができなくなりました。
○そのかわりマニヤの方々のコレクション用として、永く保存して頂けるよう、写真、絵画、グラビヤ写真集などの分譲品を大幅に拡充することにしました。
○新しいモデル嬢による新企画のフォトや新たに分譲用として描画とした責絵やM画などを豊

富に提供する外、古い分譲品で分譲打ち切りになったものも、御希望により分譲することになります。(この場合略号は以前のものも踏襲し、再分譲であることとを明記します。)

○代理部分譲品拡充をはかりました此の際、何卒皆様のコレクションをより一層豊富にして頂くため、どしどしお申込み下さるよう、お待ちしております。

Fは立ちあがって、わたしを抱き起しなから、その声をかけた。眼を閉じて手をたれさせたまま、わたしはFにかかるがると抱きあげられた。

幸福とは、好きなことに没入することである。没入できることが多ければ多いだけ、人は一層幸福なのであろうが、よりよい幸福をより数多く手に入れるためには、棄てるべき幸福もあることを知らなければならぬ。人は青春の季節にこの選択を誤って、やりなごしのきかないただ一度の人生を不幸に過してしまうことが多い。若い読者には特にこのことを考えて頂きたいと思う。あなたの人に秘めた性癖は奇くに親しむだけで癒すことができるし、できるならばそうされた方が賢明である。わたしも十台から十数年奇くに親しんで来た。

男女のいかなる情事よりも、もっとすばらしいものが世にいくつもあり、SMの情事などに没頭しては、それらをすべて失ってしまうことが分る年頃になって始めてFのよきな女に出逢ったわたしは幸運だったといえる。その後わたしはFに逢っていない。

新連載サディズム小説

心傷たむ遍歴 第五章 そのかみのこと(五) V

婦人留置場の女達

西 条 操

心傷たむ遍歴

「ジェラールの奴が憎くはないのかい？」

二日目の取り調べの時、メグレ警部は遂にジェラール・トリフォアの名を自分から口にして、ミシュリーヌを責めた。

「そうかい。じゃ、仕方ないね。五年程、入って来るんだな。」

思い定めて覚悟はして居るものの、調書にサインするミシュリーヌの手は震えた。

「手紙、書く？」

婦人警官がそう訊ねてくれたが、ミシュリーヌは淋しく首を振って、鉄檻の扉を入ったのだった。

四日に一度許されるシャワーを浴びた彼女は、衣服をまといながら悲しかった。せめて

下着だけでも替えたかった。恐らくは、もう誰も居ないアパートの室、数少いドレスを入れたタンス、そして、清潔に洗い丹念に繕いもして納めてある下着類の引き出し、それらを思って彼女は涙ぐむのだった。頼るひとなない孤独感が胸をひしひしと締めつけた。

検事の呼び出しを待って過す鉄檻の中で、ミシュリーヌは絶望に打ちひしがれ、時々忍び泣いて毎日を暮らすのだった。ラグランジュ氏からも、あれきり何の音沙汰もなく、ジ

ェラールはもとより誰からも手紙一本すら来なかった。

十二月も半ば過ぎた或る朝、ミシュリーヌは検事局へ送られた。

「二十六号ッ。送検よ。」

今日か明日かと半ば恐れ半ば待ち望んで、覚悟は出来て居るつもりだったが、いざとなると返事も震える。獣の様にあの鎖に繋がれて連れて行かれるのだ。デスクの所に立ちすくんで、彼女はわななく思いだった。送検される女囚達は左と右の二組に分けられて、片手に鉄枷を嵌められる。太さ二糎はある鋼鉄

棒を曲げて作った馬蹄形の手枷。ミシユリーヌの手首をちらっと見た婦人警官が、女性用のサイズの中でも小さ目のを選んで前に立た。鍍金もなく黒光りする其の馬蹄環の中へ、右手首を縦にしてわななく心地で入れたミシユリーヌは、其の冷たさに指を硬張らせた。婦人警官が無表情に蓋を上から閉じる。

角張った蓋の中で錠がギリギリと鳴り、手首の内側で馬蹄環の先端のギザギザが蓋の孔から上に少し飛び出した。婦人警官が手を放し忽ちずっしりした重量がミシユリーヌのふくよかな手首にもろにかかる。喘いで手を下ろすと、手枷は手首を僅かにずり落ち、ふっくらした彼女の手にせかれて止まった。鉄の蓋の角が痛い。再び手を持ち上げたミシユリーヌは、手首を抜くことはおろか、環の中で回すことも出来ないことを知った。

「並ぶのよ。並んで、並んで。」

枷の片手を内側にして二列に並ぶと、先頭から鎖の先が次々に送られて来る。手枷の鉄蓋の軸の近くにある環に、自分で鎖の先を通して、後ろの者に手渡して行くのだ。鎖を通す環は、環と云うよりむしろ穴で、鎖の動きをもろに鉄枷に伝える。

(自分で自分を鎖に繋ぐのね)

眼の昏む思いで漸く鎖を通したミシユリーヌは、後ろの女囚に手渡して忽ち悲鳴を洩らした。穴一杯の鎖が引張られて、こじれ捻れる鉄枷の痛さ。彼女は左手で枷を押えて歯を喰いしばった。泣けど喚けど受けねばならない連鎖手錠のみじめさに涙も出ないミシユリーヌだった。連鎖が端から端までずっと通り、鎖の前後両端に大きな錠がビシッと嵌められ、これで十五名の女囚達は完全に繋ぎ合わされてしまったのだ。

「さ、行くのよ。歩いて。鎖を持ったら罰よ。」

素足に布スリッパを穿き直して歩き出すと揺れる鎖が手枷を絶え間なくこじて、肘から先を持ち上げないでは居られない痛さだった。少しでもおけると、てき面に手首がこじられた。パリ警視庁の裏口は、裏とは云え賑やかなベルモント街の大通りに面して居て、建物を出ると低い階段、そしてすぐに街路の歩道だ。階段の上で、ミシユリーヌは顔を左手で掩った。朝とは云え街行くかなりの人々の姿、車道で待つ護送車、まぶしさに霞む眼にそれらが見えたのだ。屈辱の思いが全身を襲い、冬の朝風の寒さの中で、ミシユリーヌは体中が熱くなるのを感じた。隠す術も

ない鎖と枷、そして素足が何としても恥しかった。

「何してるの？ 行くのよ。」

前底のついた正式制帽を髪に載せ、制服の冬外套の肩に大きなバッグを吊った婦人警官達。護送担当の其の婦警に云われるまでもなく、連鎖手錠の身は鎖を曳かれれば行かねばならない。鉄鎖が穴を軋んで前に動き、思わす離しかける左手を辛うじて顔に当てたまま、ミシユリーヌは痛さに呻いた。其の背を後ろの女囚が押す。護送車の真黒い四角な鉄の箱、其の後端のタラップの所で、ミシユリーヌは早く中に入りたくて堪まらなかった。

すぐ前に繋がれた女はあばずれもい所らしく、平気な顔で道行く男達にウインクさえしてゆっくりと昇る。そのあばずれを突き退ける様にして夢中で這い昇ったミシユリーヌは漸く左手を顔面から離れた。小さな窓が上方にある薄暗い護送車の中で、

「何をあわててんのよ。痛いじゃないの。」

と、前のあばずれ女が嘲けり、素早く鎖を握って穴を少し滑らせた。後部の鉄扉がガチャーンと閉じて外から錠がかかる。車内の両側には木の狭いベンチ。片側の列が鎖を潜って全員一列になり、連鎖を膝から膝において

女囚達は腰掛けた。鎖が少し短かいので、最後尾あたりの席に掛けた連中は、両側とも枷の片手を突き出してブツブツ云った。

「鎖をもっと寄越してよ。窮屈じゃないの。」

端の方から鎖が順々に伸ばされていき、後尾でベンチを右から左に渡る鎖がゆるんで床に這い、その辺の女囚達も背を壁につけた。

一緒に乗り込んだ二人の婦人警官も運転室側のシートに坐って、車は走り出した。高い小さな窓からは晴れた朝空が見え、ビルの窓々や街路樹が走り過ぎる。鉄の箱の外には、朝のパリの街の気配が感じ取られた。

「あんたバスは初めてらしいのね。何をやらかしたの？」

ミシュリーヌの隣りの女が囁く様に話しかける。其の隣りのあばずれ女が

「きつく嵌めやがったものねえ。何度嵌めたら私のサイズが分るんだろ。くそったれめ。」

呟いて右手の鉄枷を忌々しげにいじった。

「警視庁のバスは詰まらないわね。女ばかりでさ。」

「ほんと。楽しみのないことだったら……。ポリ公まで女なんだものねえ、いやんなっちゃう。」

警察署からの護送車だと男女混乗で、多勢

の男達に混って女は少いのだ。

「話しないでッ」

忽ち婦警が呷鳴りつけた。規則としては、留置場内でも交話は禁止なのだが大目に見られて居る。しかし、留置場の外では交話の禁止はきびしく強制されるのだ。そう云っても、女囚達は車の音を利用して、唇を動かさずに囁き合った。キラリと眼を光らせた背の高い婦警がスラリと立ち上がり、天井の握り棒につかまり乍らやって来て、女囚達は唇をつぐんで膝の鎖を指で弾いて見たりした。

「三十四号ッ。いくら云ったら分るの？ 十二号、お前もだよッ」

職務柄とは云え婦警達は、女囚達の番号を驚ろく程によく覚えて居る。叱られた二人の女囚はそっぽを向いてふてくされた。

「何なのッ。その態度は!!」

女囚達の頬に平手打ちが二つ三つ宛激しく鳴った。

「ウッ。ち、ちくしょうッ。撲ったわねッ」

「文句は弁護士にそう云うことね。」

先回りしてピシヤリときめつけられた女囚は、豊かに肥えた腰をベンチでよじって口惜しがり、厚い唇を曲げて白い眼で婦人警官を睨み上げた。

車が停まり鉄扉の錠が外から開いた。狭い護送車の中で再び二列になる女囚達は、窮屈そうに身動きをして鎖を鳴らし、舌打ちしては時々小競合いをした。検事局の通用口も街路の歩道に接して居る。女囚達は又も其の姿を、街行く人々の視線に晒さなければならぬのだ。連鎖手錠の列が歩道を横切る間、人々は立ち止まって、嫌でも見物する恰好になってしまふ。職員用の扉が低い大理石階段の上に、そして被送検者の入口は階段の下に薄暗い。足を停めさせた男女へ笑顔で手を振った婦警達は、女囚達を地下への通路へ追い込んだ。薄暗い通路で、ミシュリーヌは布スリッパを引き摺り引き摺り、顔掩う左手を漸く離した。行き交う職員の男女は無表情に、碌に女囚の群を見もしないで、お互いに朝の挨拶を交わして通り過ぎる。

連れ込まれた大きな室には、沢山のベンチが並べてあった。ミシュリーヌ達の群は繋ぎ合わされたまま鎖を膝に、出来るだけの間隔を取って坐らされた。床に造りつけの狭いベンチには勿論背もたれもなく、既に一連の男女が腰掛けて居る。両隣りとの間隔は約三十センチ。一連、又一連と連鎖手錠の男女がやって来て、鎖をジャラつかせつつ、吐息と共

に腰を下ろした。正面の台上に監視の警官達が眼を光らせ、壁には威嚇の革鞭や嵌口具等が吊つてある。所々に肘つき回転椅子が据えてあつて、婦人警官を混えた警官連中がふんぞり返えり、時々立ち上がって歩き回つた。被送検者は毎日百五十名内外、女性はその二割程度だ。交話はもとより、横を見ることも許されない。背もたれがないのでつい前屈みになってしまうが、それも御法度だ。固いベンチに姿勢を正して坐り続けて居ると、背や腰が硬張つて来て、一分が一時間にも感じられる程に永い。片手首に鉄枷をガツシリ嵌められ鎖に繋がれたまま、いつになるか分らない呼び出しを待って坐わり続ける囚人達に、絶え間ない監視の眼と罵声が回転椅子から浴びせられるのだ。台上から見下ろし、回転椅子を楽々と回す警官達は、何れも堂々たる体軀で血色もよく、婦人警官は化粧の唇が赤い。自分達との対比感に、大抵の初犯者は打ちひしがれてしまうのだ。身動きもしないで打ちうなだれて坐わり続けるミシュリーヌは、膝の鎖を見詰めたまま、囚われの身の悲哀とみじめさを、胸にひしひしと噛みしめるのだった。ともすれば前に屈む背をあわてて立てる努力が次第に苦しくなり、背や腰が

だるくて堪まらなくなったが、じっと耐え忍ぶほかない身なのだ。叱られ唝鳴りつけられてなお姿勢を崩すと、今度は立たされる。立たされるだけならいいが、両腕を前に伸ばして水平に保たされ、額に脂汗を浮べて赦しを乞わねばならなくなるのだ。

コンクリートの床から冷氣が湧き昇って、囚人達の素足から腰が冷々として来た頃、やっと数名の男女が呼び出されて連れて行かれた。八時半には被送検者全員を集めておいて、検事が出勤して来るのは九時から九時半、最初の呼び出しは大抵十時頃になってしまう。

「監視庁二十六号。ミシュリーヌ・ダリュー」
喘えぐ思いで姿勢を正し、寒さに震えて居たミシュリーヌは久し振りに名を呼ばれてビクツとした。

「ハ、ハイ……」

手枷を押え鎖を膝からジャラジャラと落とすつち立ち上ってよろめくミシュリーヌの前に、銀色の手錠を手にした婦人警官がツカツカとやって来た。差し出す右手首の鉄枷が鍵で外され、鎖を潜って手枷をベンチにおいたミシュリーヌは、向き直って両手を揃えた。

当り前の様にかけられた手錠には、既に革ロープがつけてあった。ベンチの間を通り抜けて出入口のデスクの前に立ち、身柄を確認される。まっすぐに、云わば直立不動の姿勢で立たないと頬げたを撲りつけられて、下手をすれば広い室の周囲を手錠のまま十回位走らされてしまうのだ。何しろ、被送検者控室の警官連中と来たら、仮借もなく無慈悲冷酷で、囚人達を必要以上に恥かしめ痛めつける。これから受けさせる取調べの荒ごなしとして、心を引掻き回しておく算段なのかも知れない。

「番号札を出して見せる。」

デスクに踏んぞり返った大男の警官がミシュリーヌを睨みつけて唝鳴った。手錠をガチャガチャいわせたミシュリーヌは、ままたらぬ手で内ポケットから番号札をやっと取り出した。

「早くせんか。こらッ、踵が離れてる。ちゃんと立て。」

ミシュリーヌは情けなさに泣き喚きたくなかった。

「よし、行けッ。ふん、お前、なかなかの別嬪じゃねえか。初めてなんだな。お手数をかけねえでサッサとゲロして来るんだ。」

胸に憤怒を燃やしたミシュリーヌは思わず其の警官をキッと睨みつけたが、警官は平気な顔に薄笑いを浮べ、ミシュリーヌの体を眺め回わしながら番号札を投げ返した。

「拾うのよ。何してるの？　ぐずぐずしないで来るんだよ。」

こみ上げる口惜しさを抑えて床の番号札を拾ったミシュリーヌは、震える指で内ポケットをまさぐった。慣れぬ手錠がいつの間にかきつく締まって居て、両手首をこじる。ミシュリーヌは両手の手錠を引きちぎって叩きつけてもやりたい気持だった。ベルトのない上衣の襟を合わせる暇もなく、其の手錠の革ロープが無慈悲に引かれ、鋼鉄環が骨に喰い込んだ。何とも云えないみじめさと悲しさだ。

鉄格子の扉を出て通路を曳かれ乍ら、ミシュリーヌは両手で顔を掩うた。陰惨な感じの階段を地上に昇ると、そこは人々の足も繁い建物の中。更に力をこめて固く顔に当てた指の間から、行き交う男達のズボンや靴、女性達のコートやスカートやハイヒールが垣間見られ、微かにずり落ちた両手首の手錠から延びる革ロープも悲しく見える。ここでは、手錠の女など珍らしくもないが、部外者の男女がじろじろ眺める気配と視線が全身に針の様に

刺さった。

（こんな所に何の用で来てるのかしら。こんなに大勢……）

ミシュリーヌにとっては、制服を着て居ない男女の姿が恨めしく、体はいつしか深々と屈んで居た。

「ちゃんと歩きなさい。こっちよ。階段を昇るの。」

革ロープがぐいと曳かれ肘が擱まれて、顔から引き離されそうになる両手にミシュリーヌは悲鳴を洩らす。短い鎖がガチツと音を立て、喰い込む手錠が痛かったが、掩うた手から離すまいと必死の彼女だった。

（此の方を恨むことはないわ。お仕事なんだもの）

その通り、此の婦人警官はミシュリーヌを検事の所へ連れて行くのが職務、被疑者の気持などを思いやって居ては勤まらない。あばずれ女であろうが、しおらしい女であろうが十把一からげ一律に扱って、事故のない様に警戒しなければならぬのだ。そうは思っても人々の眼襖の中を手錠姿で曳かれて行く、その手錠を此の身に嵌めて革ロープをしっかと握る婦人警官が怨めしかった。三階の三二五号室。

「ここよ。」

背後の婦警に云われたミシュリーヌは扉の前に立った。早く中に入りたかったミシュリーヌは、思わず両手を顔から下ろして把手に触れた。鉄格子扉や鉄扉ならば決して手をかけはしなかったろうが、其の扉が塗装も美しい普通のドアだったせいもあって、ミシュリーヌは一瞬禁制を忘れてしまったのだった。

「あら、何するのッ。馬鹿。」

忽ち見咎めた婦人警官が鋭く叱りつけ、素早く手繰り寄せた革ロープを短く握って思い切り引き下ろした。両手首の骨も砕けるばかりの痛さに、ミシュリーヌはよろめいて悲鳴をあげた。

「被拘禁者よ、お前は。扉に触っちゃ駄目。

教えて貰ってるでしょ。」

「ハ、ハイ。すみません。つい……」

「ま、初めてなんだから赦したげる。」

きびしい眼で女囚を見据え乍ら扉をあけた婦人警官は背を小突いた。

衝立てを回ったミシュリーヌは、真正面の大きな窓の明るさに眼を伏せながら、デスクの前の固い丸椅子におすおすと腰を掛けた。外して貰った手錠の痕がズキズキと痛く、指先で撫でると涙が溢れた。思わず探し

かけるハンカチのないのが無性に悲しい。

「名は？ 生れた所と生年月日を云うんだ。」

窓を背にミシュリーヌと向き合ったブランシェ検事は冷たく云った。精悍そうだが、お世辞にも品があるとは云えない四十前後の男だ。

「ふん。元クーブドリユー伯爵夫人か。」

回転椅子を回して少し斜めに坐った検事は、くわえた煙草に顔をしかめつつ、警視庁から身柄と共に回わされて来た調書を読んで聞かせた。

「一応は此の通りなんだな？」

「ハ、ハイ……。申し訳ございません。」

「ふん。所で、ラグランジュ氏とはいつから深間になったんだ？ え、おい？」

危うく滑りかけた口を押えたミシュリーヌは、頬を染めて頭を振った。

「隠したって駄目だ。氏はすっかりしゃべってるんだからな。」

（そんな筈はないわ。あんなに知られるのを恐れていらしたんだもの。もし、あの方がおしゃべりになったとしても、私は隠し通すことよ）

ミシュリーヌは頑くなに否定して眉を上げたのだった。

「今日はこれまでだ。隠したって駄目だぞ。」

よく考えて今度は出て来い。」

ブランシェ検事は憎々しげにミシュリーヌを見て煙草をくわえ、取り上げたマッチ箱を忌々しげに振ってほうり出し、新しいマッチをポケットに探った。後ろに坐って居た婦人警官が革ロープの束と手錠とを一緒に握って膝から取り上げ、立ち上がったミシュリーヌの肩を叩くや腕を掴み上げる。若い女がコーヒーを運んで来て、検事と書記のデスクに茶碗をおき、事務服のポケットに指をかけて、手錠を受けて居るミシュリーヌの姿を小賢しげに眺めた。規則とは云え、泣きなくなる程にみじめなものだ。

「そんなに恥かしがっても仕方ないじゃないの。お前みたいなのも珍らしいわね。」

婦人警官は並んで歩き乍らそう云い、相変らず両手で固く顔を掩ってよろよろ歩むミシュリーヌを見やった。

再び連れ戻された地下の被疑者控室に入るや、ミシュリーヌは堪えかねて訴えた。壁際に囲いもなくむき出しの便器。無遠慮な男の警官達の視線を感じると、死んでしまいたくもなった。ベンチの男達は勿論振り向くことは許されないが、それでも横眼でちらちらと

肩越しに盗み見する者も居るのだ。白い磁器に容赦なく響く水音が消え入りたい程に恥かしく、立ち上がったミシュリーヌは声もなく吸り上げながら、衣ずれの音も憚られる心地で身繕いした。紙の一枚を与えてくれた婦人警官が、片手だけ外してやって居る手錠を黙って曳く。眼頭を押えてベンチに戻ったミシュリーヌは、再び連鎖手錠の手枷に繋がれた。

「えーと、右手だったわね？」

訊ねた婦警は、未だ此の仕事には新米らしい。今日はこれで夕方までこのまま坐って居るのだ。右隣の女囚も連れて行かれて居ると見え、黒光りする鋼鉄の手枷が其の蓋を開いたまま、戻って来る女囚の手首をベンチの上で持って居た。

検事局へ呼び出された被疑者には、原則として昼食は与えられない。寒さに震え、みじめさを胸に噛みしめ、姿勢を正して坐って居ると、暖かだった検事の室や今朝垣間見た自由な世界のことどもが泌々と思はれて来た。手首の鉄枷が氷の様に冷たく硬く、身動きする度に鎖が音を立てる。その身動きすらも自由には出来ないのだ。あまり大きく身動きすると、忽ち鋭い視線と叱責が飛んで来て、身

動きが繁いと警官が威嚇する様に睨みつけ、口汚なく罵る。痒い所も勝手には搔けない程に、みじめにもきびしい雰囲気だ。それでも、眼を掠めて囁き合う者もあった。交話した者には仮借ない制裁が加えられる。男には二つに折った革ロープを鞭にして背に、女には激しい平手打ちを頬に、堪能するまで喰らわされ、男は呻き女は悲鳴をあげた。

(こんな世界もあるのね。けど、何とひどいことをするものねえ)

ミシュリーヌは齒を喰いしばって固いベンチにひたすら坐り続けたのだった。

検事の取調べは長くてせいぜい三十分、お茶をひいて待ち呆けを喰うこともざらだ。そして、それだけのために八時間と云うものを、身動きもしないで待たされるのだ。連鎖仲間の一人でも永びくと、時には十時間位坐り続けねばならない。その上、警官達からは胸搔きむしる様な罵言雑言を浴びせられて、唯耐え忍んで居なければならぬのだ。肉体的にも精神的にも立派な拷問だ。此の辛らさみじめさを味わった被疑者は其のいとわしさの余り、早いこと取調べを終わらせて検事局通いを切り上げたいと思う様になるのだった。或いはそれが狙いなのかも知れない。

永い一日が漸く終り、連鎖手錠の群が一連又一連と連れ出され、護送車に乗せられて去って行く。職員通用口の低い階段を連れ立って降りて来た三、四人の娘が、コートの襟を立てながら夕暮の歩道に立ち、護送車へと歩道を横切るミシュリーヌ達の一連を眺めつつ明るく笑い合った。ミシュリーヌの胸が屈辱に煮え、顔を掩う手がわなないたが、彼女達は女囚の群を嘲笑して居るのではなく、近ずいたクリスマススの計画を語らって居るのだ。

女囚の一人が俄かに喚いて暴れ出した。両手を振り回すので連鎖が揺れて音を立て、近くに繋がれて居るミシュリーヌは禁制も忘れ、ままならぬ右手であわてて鎖を握った。顔に当たった左手は、死んでも離すまいとするミシュリーヌだった。

「おとなしくしなさいッ」

婦人警官が血相変えて駆け寄り、其の女囚の片腕をしたたかに背に捻じ上げて叱る。

「拾っておやり。」

と、ミシュリーヌの背をもう一人の婦警が小突いた。脱げて飛んだ布スリッパがミシュリーヌの足許に落ちたのだ。右手を諦らめたミシュリーヌは、やっこの思いで顔から離した左手でスリッパを拾い上げ、斜め前の女囚

に手渡した。自分ながら素早い動作で間髪を入れず、再び顔を掩う。停まった列にせかれた人々が眉ひそめて眺めた。

「あんなに恥かしがって……。可哀想みたい。」

ミンクのオーバーを羽織った娘がミシュリーヌを見て云った。順送りに手渡されたスリッパが、暴れかけた女囚の素足で探られ、ねじ上げられて居た腕が突き放す様に離され、列は再び動き出した。

「ここは、朝夕これで邪魔だわねえ。」

「ほんと。けど、もうじき工事を初めるそうよ。護送車の中に入れる様にするんだって。」
「そうお。そうしてやらなきゃ、第一、あのひと達だって可哀想よ。」

護送車に追い上げられる女囚達を眺めてそう云いながら、人々はそれぞれ歩き出した。

鉄扉がガチャンと閉じられて、中でうごめく女囚達は、既にネオンが遠くまたたく街とは忽ちにしてお別れだ。夕空の彼方に淡く輝くネオンはシャンゼリゼのあたりだったろうか。ミシュリーヌが育った伯父の邸も今はホテルとなって居たが、其の屋根を彩どるネオンの光も其の輝きの中に混って居たことだろう。護送車のベンチにぐったりと坐った十五名の女囚達は、言い合わした様に吸り上げ

た。しかし、昔とちがって今はまだましなのだ。一昔以前なら、自動車で五分とかからぬ警視庁からは、街なかを此の姿で歩いて往復させられたものだ。起訴されたジゼルは今日も未だ二号檻に居て、ミシユリーヌの話しを聞いて眉をひそめた。

「ブランシェ検事だって!! あんた、そりゃ又、大変な男に当っちゃったものねえ。柄の悪いツラをして、煙草ばかり吸ってる野郎だろ? ラスネール・ブランシェさ。」

「ええ、デスクの札はそんな名だったわ。」

「あんた、運が悪いねえ。あの男はね、先祖が革命の時のジャコベン党の頭株だったのさ。だもんで、コチコチの平民主義でさ、貴族だなんて云った日にゃ、忽ち齒を剥く男よ。可哀想に、あんた伯爵夫人だったんだろ? フ、フ、フ、隠してもすぐ分るさ。」

ジゼルはそう云ってミシユリーヌの金髪をやさしく撫で

「あんたみたいなのと、刑務所へ入れるのはほんとに可哀想。此の可愛い顔どうお? この体のまあ、何と柔かいこと!!」

ジゼルの手が延びて、ミシユリーヌは体を硬くした。アンジェラが眼を光らせて立ち上がる。

「ね、いいだろ? アンジェラ。あたし、今夜でこともお別れなんだからさあ。」

アンジェラは苦笑いして不承々に引き退り、ジゼルの手が更に迫って、ミシユリーヌは逃れようともがいた。

「おとなしくおし、いい子ちゃんだから。ねおとなしくしておくれよ、今夜だけだから。ね、可愛いミシユリーヌ。おお、おお、可哀想に、こんな痕がついて!! 枷、痛かったらうねえ。」

強い力で抱き寄せ引き寄せて、ジゼルはミシユリーヌの手首を舐める。

「あのブランシェって男はね、あたし達みたいな女には割といいのよ。所がさ、あたしが当ったのは、これ又えらく貴族趣味の上品ぶった奴。ほんとにうまくないわねえ、取っ替えてやりたいよ。ミシユリーヌ、あんた何故ジエラルとか云う男のこと庇うのさ? 馬鹿な子だよ、ほんとに。こうなったらもう何だね、ジエラルの奴に苛められて絞られて、辛い思いで泣きの涙だったってこと、あることないこと洗いざらいぶちまけてさ、泣きに泣いておやりよ。それしか手はないね。」
姿の見えなかったクラリスが連れ戻されて来て、ジゼルは手を止めた。

「何と乱暴な女だこと。あの閉め方は一体何よ。檻がこわれちゃうじゃないか。」

顔をしかめたジゼルが、婦警の背に毒づいた。

「あんな馴けだから、せいぜいポリ公にしかねないのよ。あれじゃ、少年係にもして貰えないわね。私達はいずれ出て行くけど、年がら年中留置場暮らしがいいところよ、あんな女ポリ公は。」

疲れ切った顔をしたクラリスは、それでも口だけは達者だ。彼女は今日一日を、実地検証とやらで引張り回わされて来たのだった。

「お起きッ。未だ寝るのは早いよッ」

夕食の盆を持って来た婦警に呶鳴られて、クラリスは渋々起き直った。

「一日中お供を連れて歩き回ると、ほんとに氣を使うものよ。おひるには、しもじもの者が食べてるのを傍で見てたけど、あんなのはスタイルによくないわ。そこへ行くと、このメニューは大した美容食よ。ありがと。デザートはいいわ。」

毒づきながらクラリスは盆を受け取った。

「ところで、これおひるのつもりだろうけど、今日は晩御飯要らないからね。コック長にそう云っていい。」

婦人警官は忌々しげにクラリスを睨みつけたが、黙って鉄格子扉を開いて女囚の一人を呼んだ。今日の午前中に入ってきた新入りで、身なりのいい細面の中年女だ。女は婦人警官に連れられて独房の方へ消えた。

「ふん。あの高慢ちきが行って、せいせいしたじゃないか。」

とアンジェラが吐き捨てる。

「ほんとよ。何よ、一言も口利かないでさ、あたい達を斜めに見下ろしてやがって。」

とステラが鉄格子を叩いた。

「ヤキ入れてやればいいのに。」

おそい夕食を頬張りながらクラリスが云った。

「私の見た所じゃあの女は、そうね、選挙違反かな。いや、今選挙はないわね。すると、汚職ね。」

「おや、クラリス。いいカンだこと。図星

よ。市会議員の令夫人さ。個室が空きましたからどうぞって、メイドがお迎えに来た訳よ。」

「あら、そんなやんごとなきお方だったの!! 私、居なくて残念だったこと。それで読めたわ、スーパなんかが出た訳が。けど、此のポタージュはわりかしイカす味だったわね。」

「そうよ、ほんとにおいしかったわ。」

と、マドレーヌがクラリスに同意して悲しげに云った。

「あーら、あれポタージュだったの? あたゝい、無理に飲んだのよ。あれ、惜しかったわも少し濃けりゃ澄まし汁になったのに。」

「ぶッ。あんなにガツついて居た癖に笑わせないでよ、アンジェラ。ところでどうだったい? クラリス。街の様子はどうか?」

「そうね。」

コーヒーを啜り乍らクラリスが答えた。

「私が居ないので殿方達淋しがってた様よ。

あーあ、疲れたこと。一日中嵌めてるとくさくさしちゃったわ。」

クラリスは両手首を代る代る揉んだ。

「どこらあたりをほつつき回ったんだね。」

と、ジゼルがミシユリーヌの肩を撫でながら重ねて訊ねる。

「体裁の悪いこと云わないでよ。護衛の三、四人を引具してシャンゼリゼを御道遥になったの。お忍びで行きたかったんだけど、しもの者だったら、ほんとうに物見高いのね。男達は勿論のこと、娘達もあこがれの眼で眺めるので、うるさくって……。新聞社がつきまとして写真とるしねえ。ここは落ち着けて

いいわ。」

「あなた、初めてだと云うのにいい度胸ね、クラリス。」

「ふん。ほんとうはどんなだったか分ったもんじゃないよ。両手を袖に突込んでさ、婦警の後ろに隠れてたんじゃないのかい。」

アンジェラが憎まれ口を叩いた。

「あら。じゃ、あそこのメイドにそう云って夕刊持って来させたらいいわ。そうね、新パリ紙なら第一面に写真が載ってるから。化粧直しも碌に出来ない位、たて続けに撮られたの。お付きの美容師が生憎風邪でねえ、どんなに写ってるか心配よ。私としたことが何とまあ、はしたないことに、少し小首をかしげ過ぎた様なの。それが心残りで舌を噛みたいくらい……」

「減らず口叩いてないでさ、どこへ行ったの?」

「ホテルを三、四軒よ。主にグランド・ホテル。一昨年のパリ祭の時に、一週間ほど泊ってシコタマ稼いだの。忘れちゃったって云ったらさ、お供するから教えてくれって云うのよ。仕方ないから精々思い出してやったわ。だって、多勢の人の前でお供の連中が大きな声出しちゃ外聞が悪いものね。」

「そう云うことね。ところで、此の冬のモードは何色？」

古顔のナナが訊ねた。永く居ると気になるらしい。

「しもじもは派手で困るのよ、ピンク系統が流行ってる様ね。けど、ほんとに退屈で疲れちゃったわ。だって、同じことばかりなんだもの。何日の何時頃に錠前をちょっとこうすると扉が勝手に開いたとか、ちょっと電話すればいいものをついっかりと黙って何万何千フラン持って行ったとか……」

「ダイヤの首飾りがマルセイユの裏町へ飛んで行っちゃったとか……」

「そうよ、そんなことばかり。詰まらないので云ってやったわ。去年のクリスマス・イブに支配人室の金庫を破ったのは私だって。ウフン、恥かし乍ら小さい方の金庫よ。大金庫はニトロでも使わなくちゃ。云ったあとで失敗ったと思ったけど、でもびっくりして感心してたわ。」

「サインしてくれて、皆からせがまれなかった？」

「そうよ。だもんで、おひる食べるひまもなかったって云う訳。けど、 Grill からの匂いで分ったけど、あのホテルの料理も落ちたよ

うよ。」

じっと聞いて居たマドレーヌが、顔色を変えてクラリスに迫った。

「あんただったのね、私に濡れ衣を着せたのは。」

「あら、どうしたの？ 血相変えちゃって。」
「私、ピガール・ホテルの室付メイドだったのよ。モンサント夫人のお金を盗んだと疑われて、三年前のパリ祭の時、警察で調べられたわ。証拠不十分で釈放されたけど、ホテルは滅よ。」

「あらまあ、それはそれは。ちっとも気が付きませんでしたことよ。」

「何云ってるのよ。私の一生を滅茶々にしといて……ちくしょうッ」

詰寄って武者振りつくマドレーヌを、アンジュラとステラがあわてて引き離れた。

「およしッ。ジャクリーヌみたいにされて、もがき回ることになるよ。おやめったら……」

……

「ちくしょうッ。それから私がどんな悲しい思いをしたか、みんなあんたのお蔭なんだよッ。恋人は冷たくなるし、神経痛のママはぶつぶつ云うし。小さな弟や妹が沢山居るのよ、私には。やっとバスの車掌になったんだ

けど、留置場に入れられたことが会社に知れたの。でも滅の理由にはならないし、居辛かったけど我慢してたわ。そしたら……」
「もう、いいじゃないか、マドレーヌ。何度も聞いたわよ。」

「云わせてよ。そしたら、身体検査の時に自分のお金を見付けられたのよ。ほんとうに私のお金だったの。でも、いくら頼んでも駄目だったわ。色眼鏡で見られたのよ。そんな口惜しい思いをするのも、みんなお前のお蔭なんだ、ああ、くやしッ。手を放してよ、ぶってやるんだから。」

「およししたら、マドレーヌ。もう諦めることよ。」

「そうよ。いくら云った所で、初まらないよね。それに何だろ、マドレーヌ。身検でバレたのは初めてじゃないんだろ？」

「そう、そう、そう。あんた、自分で云ってたじゃないか。前に二度チャージを見付かって始末書取られてたって。」

「あ、あれは嘘よ。今度が初めてなの、誓うわ。」

「まあまあ、いいからいいから。誓って貰ったって仕方がないわよ。」

ジゼルがミシュリーヌの手を放して、マド

レーヌをなだめた。

「ね、マドレーヌ。よくお聞き。あんたみたいな因縁話をした日にゃ、ここに居る者は皆お断しを持ってるんだよ、それぞれにね。聞くと涙、語るも泪のシナリオをね。でもさ、もう仕方がないじゃないか。クラリスだってお前に悪気があってやったことじゃないし。」

「そうよ、ジゼルの云う通りよ。年の甲でいいこともたまには云うわね、おばちゃん。」

「何だって!! アンジェラ。」

「フ、フ、フ。怒ったのかい。だって四十過ぎりゃ、もう小母ちゃんだわ。もう起訴されてるんだろ? それでなくとも小母ちゃんはお睨まれてるんだから、あんまり騒がない方がいいよ。あたしが許したげるから、ミシュリーヌといい子ちゃんごっこしといで。」

そう云ってアンジェラはマドレーヌの頬を両手で挟んで覗き込んだ。

「度性骨をお据え、マドレーヌ。愚痴をこぼすひまがあったら、刑を値切る算段をおし。そして、太く短かく暮らすことを考えるんだ。分った? 負けるんじゃないよッ」

ステラが其の時、アンジェラの袖を引張った。夜の点呼の時間が来て、主任の婦警が軀をゆすりゆすりやって来たのだ。

「悪いことしたわ。ごめんね、マドレーヌ。」

クラリスがマドレーヌにそっと唄やき、マドレーヌは虚脱した様な面持ちで微かにうなずいて一声啜り上げ、袖で涙を拭いながら列に並んで立ったのだった。

其の夜ミシュリーヌは、生れて此の方、考えても見なかった様な恥かしくも浅ましい目に逢わされた。ジゼルの手や脚を必死に払いのけつつ、それでもミシュリーヌは何故か婦人警官を呼んで大声をあげる気にはなれなかった。

(おお、神様。ミシュリーヌは、こんなことを。もう、とても天国へ召しては戴けませんわね)

焦れたジゼルが其の手を顔から引きはがして頬を撲りつけ、狭い寝棚の空間で二人はもつれ合った。巡視の婦警が扉の鍵を鳴らす度に、ステラが小突いて注意を与え、舌打ちしながら其の度にジゼルが離れて自分の寝棚に転がり込む。今夜は、ミシュリーヌはジゼルの隣りの最下段に寝させられて居た。最下段の方が却って見付かり難いのだ。婦警が去るや否や、待ち兼ねたジゼルが息弾ませて迫って来る。

「あの高慢ちきな女、惜しいことしたわね

え。夜になったらヤキ入れてやろうと思ってたのにさ、うまく逃げやがったこと。」

アンジェラがばやいて頭上の鉄格子を揺すった。

「ちょっとお、ジゼルったら。いい加減にしたらどう? ミシュリーヌが、こわれちゃうよ。」

「あーあ、人生がはなくなるわ。私、哲学的冥想に耽ってるんだから、もう少しエレガントに出来ない?」

とクラリスが澄まして云う。その隣りのマドレーヌが思い詰めた風情でクラリスに声をかけた。

「ねえ、私ほんとに監獄へ入れられるの? 恐ろしくて堪まらないわ。どんなにされるのかしら?」

「おや、あんた未だ眠れないのね。私だって初めてなの。でも、クヨクヨしたって初まらないわ。心配しなくても、ギロチンのお世話にはなれないわよ。」

マドレーヌはぶるっと身震いした。

「ママや弟妹達は、どうしてるかしら。ね、クラリス、私もう、あなたのこと恨まないことにしたわ。」

「それはそれは。どうもありがと。お蔭で頭

痛が治った様よ。」

「ねえ、アンジェラやジゼルはああ云うけど私やっぱり悪いことは出来ないと思うの。」

「まあ、御立派、電灯が明るくなったみたい。」

「私、赦して貰ったら、生れ変わったつもりでまじめにやるわ。何も悪いことしてないのに口惜しいけど、運が悪い女なのよ、私。小学校の先生に縋って見るわ、やさしい先生だったのよお。」

マドレーヌは、くどくどと自分の無実を訴え、不運を嘆き、そして将来のことを脈絡もなく語るのだった。

「もう、スイッチ切ってよ、マドレーヌ。私、眠くて堪まらないの。明日も猟犬を沢山連れて散歩の予定なんだから。云うことあったら紙に書いてよ、明日読むわ。」

マドレーヌは悲しげに口を嚙み、そして溜息と共に呟いた。

「聖書があったらねえ。きっと気が休まると思うんだけど……」

「聖書？ ああ、枕にするのね。それとも腰にあてがうの？」

クラリスが寝返りを打って皮肉る。

「まあ。読むのよ。こんな所で読むと、涙が

こぼれると思うわ。」

「そうね、ジンと睨が熱くなるわ、請け合うことよ。私、読んだのは五つの時で、何月号だったか忘れたけど、ほんといいこと書いてあるわ。十頁先にはちょっとばかり違ったこと書いてあって益々感心するし、二十頁読むと、今度は逆のことを教えて貰えるので感激したわね。挿絵入りだったら、感激の余り気絶しそう。ほんとにいい本よ。」

クラリスがけだるそうにそう云い、下段を覗き込むのをやめたステラが振り返って割り込む。

「ほんと。余り感心して息が詰まるので、十字を切って、胸を撫でるって仕掛になってんの。」

「まあ!! あなた達、何てこと云うの。教会へ行ったことないの？ 私、日曜がきても教会へ行けないのがほんとに悲しくて……」

マドレーヌが溜息をついて嘆息した。

「バス代をただにしてくれる？ そしたら行くわ。うう寒いこと。」

と、クラリスが毛布を固く身に巻きつけ、マドレーヌは唇を噛んで涙ぐんだ。

「あなた達、そんなことばかり云ってるけど、ほんとに淋しいのかわ、きつと。」

そう云ってマドレーヌは眼をつぶり、クラリスは何か云いかけたが、珍らしく毒舌は出なかった。

「こ、こんなことして……見付かったら、どうなるの？ ああ、もう……かんにんして……」

ミシュリーヌは、喘ぎながら切れ切れに呟き、脂切ったジゼルの顔から眼をそむけた。「大丈夫だよ。ステラが見張ってってくれるから。ね、可愛い子ちゃん」

ウトウトとしたステラの警報は遂に間に合わなくて、婦警がまっすぐにやってきた。自分の寝棚へ戻る機会を失ったジゼルが、体を縮めて覗う。靴音に覚めたクラリスが忽ち様子を察して機敏な声をあげた。

「あら、いいところへきてくれたわ。ねえ、ちょっと頼まれてくれない？」

ミシュリーヌ達にはまだ気付いていない婦人警官はクラリスの頭上に近寄った。

「ねえ、何とかしてよ。その信心深いひと、えーと何号さんだったっけ？ 神様のお許しがないからって見せてくれないのよ、番号札。そのひとが聖書を見たいって云ってるわ。何か調べ物があるんだって。」

「何を云ってるの？ おとなしく寝なさいッ」

「そりや、私だって眠りたいのよ。寝足りた晴れやかな顔をして明日のインタビューに臨みたいわ。けど、聖書聖書ってうるさいの。寝られやしないわ。聖書ってなあに？ 今月号でなくてもいいそうよ。あったら見せてやってよ。」

婦人警官はきまじめそんな顔を更に引き締めた。

「詰まらないこと云ってないで寝なさいッ、騒ぐと反則に取るわよ。」

「あーら、怖い。聖書ってそんないけないご本なのね。きっと原子爆弾の作り方でも書いてあるのねえ。このひと、読ませてくれなけりや、檻をこわして出るって云ってるわよ。いいの？」

「も、もう……いいんです。お巡りさん、私そんなこと云いはしませんわ。」

とマドレーヌがオロオロ声で云った。

「その檻のこわし方が書いてあるのよ。聖書には。」

とステラ。

「お黙りッ」

叱りつけた婦警が檻に沿って歩きかけ、クラリスが更に追討ちをかけた。

「あーらケチ。婦警さん、あんたの告別式は

いつ？ 報らせてね。参列して神様にいつけてやるわ。」

踵を返して眉吊り上げた婦人警官は、腹這って頬杖をつくクラリスを見下ろして睨みつけた。

「侮辱する気なのねッ」

婦警の手がポケットに突込まれた。

「あら、腕環つけてくれるの？」

クラリスは眼を細めて、鉄格子の外へ両手を突き出した。

「さ、はめるんなら早くしてね。けど、云々とくわ。私には種は違うけど腹違いの兄さんがあるの。腕利きの弁護士で、警視總監の奥さんとちよいちよい逢って喜ばせて上げてるようよ。あんた、せめて少年係にして欲しくない？ 捜査課には惜しいけど足が太過ぎると思うわ。」

眼をパチパチさせた婦警は、キツとして云った。

「出なさい。警察法施行細則第二十三条B項に基づき指示ですッ」

「あーら、凄いと教養!! はい、はい。」

寝棚を降りたクラリスは、婦警を横眼で見乍ら鉄格子扉の内側に行って立った。

「えーと、未だ手を後ろに組まないでもいい

んだったわね？」

檻の鍵を取りに行く婦警の背にクラリスが浴びせる。

「ご注意申し上げておきますわ。施行心得第十八条E項によれば、ひとりで檻の扉を開かないいけないのよ。誰か連れてくるのね。」

同僚を連れて足音荒く戻ってきた婦人警官は、鉄格子扉を開いてクラリスを引きずり出した。

「引張らないでも出るわよ。扉、静かに閉めてね。まともな人達は安らかにおネネの時刻よ。起きてるのは、あんた達や私みたいな……う、うッ……いたいッ」

手錠の音に混って聞えていたクラリスの憎まれ口が、途中から呻き声になった。叩き込まれた後手錠の環が一杯に締められ、更に力チツと締められたのだ。

「なんと生意気な女なこと。とても初めてだとは思えやしない。しっかり立っといで。」

鉄檻の前の通路で、往復ビンタの音が何度鳴り続け、クラリスは低く呻きながら耐えていた。

「クラリスのお蔭で助かったよ。」

ジゼルが自分の寝棚で身繕いしながら呟いた。

「さ、サッサと入りな。今度憎まれ口叩くと承知しないよ。嵌口具かけて鼻でスーパ吸わせてやるからね。お前、学があるから、どんなか知ってるだろ。」

背を突き飛ばされたクラリスは、檻の床で後手錠をもがいた。婦警達が、その姿を嘲ける。

「頬ぺたが少しはれて、細面が丁度よくなっただわ。フッフ。」

閉じられる鉄格子扉に、クラリスが噛みついた。

「これ、サイズが合わないわよ。いくらスタイルのためだと云ったって、腕に嵌めるコルセット、注文した覚えはないわ。ううッ……」

「ま、いいじゃないの。コーヒー飲んで十分したらくるわ。この仕立屋は気難しいの。セリフが気に入ったらサイズ合わせたげる。」

婦警達は立ち去り、クラリスはベンチにうずくまって身を折った。低く呻き続けるその額に、苦痛の脂汗が滲み出て来た。扉の鍵音を聞くや走り寄ったジゼルとステラが、心配そうにあちこちをさすってやる。

「ありがとクラリス。ほんとに助かったわ。痛い？ ひどいことしやがるものね。ほんと済まないねえ。」

と、ジゼルが礼を云った。

「ミシュリーヌもおいで。お礼を云うのよ。ゴムホースでぶちのめされるとこだったんだから。」

事の初まりはともあれ、ミシュリーヌも素直にお礼を云った。苦痛に呻くクラリスを眺めると、支配者達に対する憎悪がミシュリーヌの胸にも芽生えてきた。どんな悪態を吐いた所で所詮無力な女囚なのに、こんなにまだしくとも、と思えるのだった。アンジェラもマドレーヌもやってきて口々に同情していたわった。

「ジゼルとミシュリーヌは、あっちへ行つてよ。臭いから。うッ」

呻きながらもクラリスは毒ずき、ミシュリーヌは頬を染めた。

「痛いだろ？ 何とかしてやりたいけど。」

アンジェラが指を撫でてやる。

「あッ。触らないで。釘を打たれた様だわ。弱音吐きたくないけど、正直云ってこたえるわ。額拭いてくれない。」

「ね、クラリス。癪にさわるだろうけどさ、謝まった方がいいわ。口先だけでいいんだから。」

袖で拭ってやり乍らアンジェラが云って聞

かせた。

「そうね、そうするわ」

暫く黙って喘いでいったクラリスがそうだった。

「辛抱出来ないことはないのよ。でも、指がどうかなくなっちゃうと申し訳ないものね、私の指に触われたくて待ってる錠前やドアにね。」

苦痛に呻きつつも強情なクラリスだった。流石のそのクラリスも悲鳴に近い声を洩らす様になって暫くすると、先刻の婦警二人がやってきた。

「皆、何してるの？ 寝るのが嫌なら立たせとくよ。さあ、クラリス。サイズの苦情を聞いてもいいことよ。」

「ちょっとあんた達。いくらなんでもひどいじゃないか。環が半分めり込んでるなんて。骨がどうかなったら、どうしてくれるの？」

アンジェラがいきまぐ。

「お前にや関係ないの。さ、どうなの？」

婦警の言葉に顔をあげたクラリスは、頭を振って髪をはね上げた。

「気に入ったわ、名を呼んでくれて。でも番号でいいのよ」

ジゼルがあわててクラリスを小突いた。

「ねえ、担当さん。口は悪いけど心は悪い女じゃないんですよ。あたしからもよく聞いて聞かせますから勘弁してやって下さいましな。さ、クラリス。ちゃんとお詫びをいうの。」

ジゼルに助けられて泣き跪まずいたクラリスは婦警を仰いだ。

「コルセットが冷たいので、大分のほせが下ったわ。ちょっと小さ目の様だから、ほんの少しゆるめて下さらない？」

あわてたジゼルが腕を小突いた。

「痛いッ。その辺を触らないでよ。分ったわよ、ジゼル。」

唇を舐めたクラリスは口調を変えた。

「悪かったわ。もう悪態吐かないし、口答えも致しません。赦して下さいまし。」

「そう。ほんとね？」

鍵を取り出した婦警は、背を向けたクラリスの手錠に、鉄格子の間から手を伸ばした。深く喰い込んだ鋼鉄環が、引き離される時には、ゆるめられた肉と骨が音を立てた様だった。一声呻いたクラリスが、両腕をのろのろと動かして体の前に持ってきた。

「ぐずぐずしないで立つの。手をお出し」

「あッ、また嵌めるの？」

「当り前よ。今度はサイズをゆるくして上げれると思うわ。コーヒーが冷めるから、早くお出し。」

可哀想なクラリスは、今度は前に揃えた両手に手錠をかけられた。

「この位でどう？少しダブつき過ぎかしら」

「そうね、この位でいいわ。ゆったりしたのが、この頃の流行。」

「そう。じゃ仮縫いは済んだのね。」

婦警は鍵を逆に回して、ストップを利かせた。

「ご存知とは思いますが、手首がやっと回せる程度に嵌めるのが正規なの。正規のかけ方なら、何日間嵌め放しにしても、いいことになってるのよ。」

「先刻のことがあるから、手首を少し冷した方がいいわ。よく冷えるわよ、ホホホ。」

「あ、いっとくけど、少しマッサージした方がいいわね。指がどうかならないとは保証出来ないからね。その肥った女に暖めて貰うといいわ。」

二人の婦警は口々に嘲けり、鍵を見せびらかす様にしてポケットに納めた。

「ご親切にどうも、ありがと。治療法はそれだけ？」

クラリスはさも口惜しげにいつて手錠を見詰めた。

「あら、この腕環はインチキよ。鍍金がはげてプラチナの地金が見えてるじゃない？今夜は内輪だからいいけど、明日の外出の時には綺麗なのに替えてくれないこと？こんなんじや恥かしいものね。」

婦警が舌打ちして再び鍵をつまみ出した。

「未だツベコベいうのね。もう一回手をお出しッ」

「あら、メッキを直すの？それとも外してくれるの？」

婦警は荒々しく鍵を回わしてストップを解いた。

「気をつけないと締まってくるわよ。ほんとに憎らしい女だこと。」

立ち去る婦警を待ちかねて、皆はクラリスの腕や手首や指を揉んでやった。

「気をおつけ、ミシユリーヌ。環を押すんじゃないよ。」

とアンジェラが注意した。

「もう知ってるわね、ミシユリーヌ、ああ、いい気持。」

とクラリスが咽喉で笑う。

「折角ジゼルがああいつてくれるもんだから

ほだされて謝まっちゃったけど、黙ってても今頃はゆるめてくれてるのよ。あいつらだって限度は知ってるわ。ああ、忌々しいこと。」

「そりやそうだけども、クラリス。余計な痛い目に逢うこたないだろ。さあ、皆で担いで寝させてやろうよ。」

「あーら、自分で歩けるわよ。あんなに摸るなんて。ほんと、腹が立つわ、見てるがいい、びっくりさせてやるから。」

皆から念入りなマッサージを受けながら、クラリスは期する所がある様子だった。

「ジゼル。私の体に触わるんなら、手を洗ってからにしてね。ミシユリーヌもよ。」

両手が恢復してきたと見えてクラリスの憎まれ口が初まり、ミシユリーヌは消え入りたての程の恥かしさを覚えた。

「みんな、ありがと。すっかりよくなった様よ。」

クラリスは寝棚の両側の女達を眺め、指を屈伸させて工合を試みつついった。

「さてと。やって見るかな。うまく行ったらお慰さみよ。見張り頼んだわよ。」

起き直ったクラリスはいたずらそうに眼を輝やかせ、どこからか針金を取り出した。古いゼムピンだ。今日の実地検証の際、どこか

でくすねてきたらしい。両手首を灯りにかざしたクラリスは、伸ばしたピンを手錠の鍵穴に突込んだ。小首をかしげて微妙な手応えを感じ取りながら、先端を何度も曲げ直す。表情に真剣味が加わり、やがてパラリと環が開いた。

「凄いわあ!!」

見守る女囚達の感嘆の中に、もう一方の環も外れた。

「ね、教えて。お願いよ。」

アンジュエラが眼を輝やかせて乗り出した。

「フフフ。あんた、マッチ箱の中で糸を結べる? 無理ね。」

アンジュエラもジゼルも、ステラも一生懸命に試みたが駄目だった。

「一方交通ばかりで、戻ってこないじゃないの。」

クラリス笑いながら、それでも手を取って教えてやるのだったが、誰一人成功しない。

クラリスは思い切りよくピンの折れを便器に流し、手錠を持って寝棚に潜り込んだ。

「けど、あんたって大した女ね。ただのねずみじゃないよ。はなからそんなんじや、末恐ろしいわね。」

ジゼルが感に堪えた様に寝棚からいう。

「ほんとよ。あんた若い時何してたの? クラリス。法律や規則にも詳しいじゃない?」

とステラもいった。

「あら、若い時にだって? 今より若けりゃ、オッパイ飲んでる頃のことね。」

クラリスが言葉を切って、薄暗い寝棚の群に暫し沈黙が流れた。

「隠したって仕方ないことね。私こんな物をハンドバッグに入れてマルセイユの街を走り回ってたの。ハジキも持たされちゃって。」

クラリスは胸の上の手錠をカチャカチャいわせて、軽い調子で打ち明けた。

「あーら、婦警さんだったの!! おどろき」

「たまげることないわ、ステラ。恥かしくて穴へ入りたいくらい。でも、とうとう、そんな恥かしい商売はやり通せなかったというわけ。」

「美貌と教養のせいね。よかったこと」

「そう、そうなのよ。嬉しいこといってくれるわねえ。もうちょっと目方が多けりゃ、署長にしてやるっていわれてね、署長になると靴下何足買えるかしらと考えてたら、初恋の男に「ちょっときてよ」といわなきゃならぬことになっちゃったの。ハンカチーダース台なしにして、気が付くと、風と共に去りぬ

って次第。ハンカチの始末に忙しくて、探す方には手が回らなかったわ。何やかやとワイワイいってると音階が少しずれてきちゃって次は泡喰いの巻。素敵な殿方に見惚れてたら連れて歩いてた貴婦人が消えてしまったの。きつと急用を思い出したのね。それはいいけど貸してやってた腕環が惜しいものね。ハイヒールの踵を五、六本折って走り回ったわ。やっと逢えたのが翌る日の夜。磨き立てて光らせた私の腕環をこわして捨ててるの。撲りつけちゃった。」

「若き日の過ちね。無分別のなせるわざ……」
「そうなの。そのひと、あとで私の先生になったんだけど、撲り返しもしないで赦してくれたわ。おお、主よ。涙がこぼれるお話しね。遺言で聖書には触われなくなっちゃったのよ。」
「崇高なお話しだこと。映倫はフリーパス請合い。」

「何やかやで捜査課勤務はもういいって賞められちゃって、檻の番にご栄転。紙切れが私のポケットに入ってた檻の中におっことしちやうと今度は減俸。税金を皆が払ってくれないせいだったのね。勿体ない程に気を使ってくれるもんだから有難かったんだけど、署長

もスッパリ諦らめて涙ながらに勇退したわ。後進に道を拓くためにね。」

「立派ねえ。警察官の亀鑑だわ。」

「それに凄いい退職金。檻の中の女達に、ささやかな差し入れをしてやって、まだご本が買えたのよ。アルセーヌ・ルパン全集。それから……」

「それからどうなの？ メロドラマになるの？ それとも西部劇？ うらぶれたお話は嫌よ。」

「誰か私のこと書いて出版する気ない？ したら口述を続けるわ。ないのね、儲かるのに。」

クラリスは眠そうに口をつぐみ、手錠を毛布の中へかくしてあくびをした。

明け方、またぞろジゼルの襲撃を受けたミシュリーヌは疲れ果ててしまった。起きると体がフラフラし、全身の肌が内も外も汚れてしまった思いに堪え難かった。クラリスは自分で手錠をかけて澄ましていたが、ゆるくて今にも抜け落ちそうだった。昨夜の婦警が点呼の時にそれを見てあわてた。ポケットの鍵を探ってホッとした様だ。

「落っことしはしないかと心配で、昨夜は碌々眠れなかったわ。顔洗う時には除ってもい

い？ 錆びるわ。脱ぐわよ。」

鉄格子越しに眼をパチクリさせる婦警に両手を突き出したクラリスはしなやかな両手を鮮やかに手錠から抜いた。

「おかしッ」

手錠を引ったくった婦警は、入念に調べて不思議がった。クラリスが注意したので、ピン先の傷は全然ない。クラリスは引摺り出されて念入りの身体検査を受けたが何も出て来ず、ウヤムヤになってしまった。

「どうなるかと心配したわ、クラリス」

「ホホホ。大丈夫よ。あの婦警の顔見た？ ぶったまげてたわね。鍵がポケットにあった時の顔、いじらしくなっちゃった。」

クラリスにつられて皆も愉快げに笑い、ミシュリーヌまでもつい頬を綻ばせた。しかしミシュリーヌの胸は忽ち暗くなる。全身が汚辱にまみれた様な心地だった。手と顔だけではなしに、全身を冷たい水で思い切り清めたかった。恨み言は一口もいわなかったが、ミシュリーヌは責める様なまなざしでジゼルを見やった。ジゼルはなおも名残り惜しげな顔つきをして限の出来た眼をキラキラさせ舐める様な視線をミシュリーヌの体に吸い着かせたままだった。

(未完)

「最新版」 女体責写真五十粒選

A組五十集 大手札判印画紙 (9×13 種) 焼付

一組一枚	一五〇〇円
五組五枚	五〇〇〇円
十組十枚	九〇〇〇円
二十組二十枚	一、七〇〇〇円
三十組三十枚	二、五〇〇〇円
四十組四十枚	三、〇〇〇〇円
五十組五十枚	四、〇〇〇〇円

A1	フミツケ汚辱縛り (新井)
A2	手吊り乳房責め (五月)
A3	ハリツケ猿ぐつわ (新井)
A4	全裸正面柱しばり (遠藤)

A5	亀甲強烈乳房縛り (遠藤)
A6	全裸手吊りムチ打 (遠藤)
A7	豊満乳房いじめ (遠藤)
A8	乳房責め股間縛り (遠藤)
A9	鼻責鼻梁いたぶり (遠藤)
A10	全裸後手高小手 (遠藤)
A11	膨隆臀部さらし (長野)
A12	全裸正面強烈縛り (長野)
A13	うねる緊縛裸身 (長野)
A14	色禪の開股しばり (長野)
A15	正面縛蛙股ひらき (長野)
A16	裸自慢縛りヌード (長野)

A17	正面アグラしばり (長野)
A18	正面大の字開股縛 (長野)
A19	遅ましき裸しばり (長野)
A20	荒縄縛豆絞り猿轡 (大塚)
A21	両手前縛り髪首絞 (大塚)
A22	両手吊り股間吊り (桜井)
A23	両手膝下しばり (関谷)
A24	疼れんする裸身像 (関谷)
A25	両股縄掛け開股縛 (大塚)
A26	正面裸身強烈本縄 (梨花)
A27	乳房晒し肉体自慢 (長野)
A28	責衣にはみ出る肌 (東浦)
A29	投げ出し全裸縛 (長野)
A30	捕われの全裸縛 (梨花)
A31	羞らいの両股縛り (大塚)
A32	猿轡の両股縛り (遠藤)
A33	荒縄全身縛り豆絞 (大塚)

A34	盛り上る乳房縄目 (長野)
A35	亀甲本縄鼻いじめ (大塚)
A36	ムチ打悶えポーズ (関谷)
A37	椅子またぎ汚辱責 (東浦)
A38	縦縄股間縛り正面 (関谷)
A39	ゴム猿ぐつわ全身 (大塚)
A40	くさり乳房責め (長野)
A41	強制片足挙げ責め (大塚)
A42	正面乳房くびり縛 (関谷)
A43	鴨居正面ハリツケ (梨花)
A44	手吊りパンティ落 (東浦)
A45	白バンド後手吊り (梨花)
A46	豆絞高小手吊り (梨花)
A47	裸縛り鼻いじめ縛 (梨花)
A48	ガンジガラメ立縛 (愛川)
A49	亀甲本縄股間縛り (桜井)
A50	立木縛竹棒責め (桜井)

「最新版」 女体緊縛フォト五十選

B組五十集 大手札判印画紙 (9×13 種) 焼付

各組一枚一組 (送料共)

一組一枚	一〇〇〇円
五組五枚	四〇〇〇円
十組十枚	七五〇〇円
二十組二十枚	一四〇〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇〇円

B1	全裸エビ責仰向け (関谷)
B2	逆エビ責め全裸像 (水本)
B3	乳首ペンチ挟み (竹野)
B4	後手十字縛肩口上 (梨花)

B5	足の裏擦り責め (竹野)
B6	おへソいじめ大写真 (関谷)
B7	剃いだバタフライ (関谷)
B8	貴方に捧げた裸身 (大塚)
B9	乳房責め絶叫苦悶 (大塚)
B10	無防備双手吊り (絹川)
B11	豊満臀部エビ縛り (水本)
B12	糸纏わぬ股間縛 (水本)
B13	全裸亀甲股間縛 (関谷)
B14	足踏付け二つ折り (大塚)
B15	尻突出しムチ打ち (関谷)
B16	手錠にもだえる (竹野)

B17	尻突立てエビ責め (水本)
B18	椅子開股鼻責触手 (梨花)
B19	息もつがせぬ猿轡 (竹野)
B20	投げ出した全裸 (関谷)
B21	美しき尻部の露出 (絹川)
B22	猿ぐつわ悦虐境 (竹野)
B23	後手柱縛り脚線美 (竹野)
B24	強制鼻挾水吞ませ (梨花)
B25	苦悶にねじる裸身 (関谷)
B26	責めに気を失って (関谷)
B27	さアどうでもして (関谷)
B28	豊麗乳房膨隆縛り (竹野)
B29	投げだされた女体 (竹野)
B30	裸身をくびる麻縄 (梨花)
B31	強烈縛りに悦ぶ (梨花)
B32	全裸逆エビ片脚拳 (東浦)
B33	踏みつけマゾ境地 (東浦)

B34	すべてをさらけて (関谷)
B35	ムチ打ち失神寸前 (関谷)
B36	クリップ鼻挟み (絹川)
B37	台上的マゾポーズ (大塚)
B38	吊られゆく美体 (絹川)
B39	拷問に無惨な美貌 (梨花)
B40	マゾ女性の表情美 (東浦)
B41	喰い込む股間縄 (絹川)
B42	灸責めに悶える (梨花)
B43	犠牲台の人身御供 (大塚)
B44	美肌無茶苦茶縛り (絹川)
B45	裸身に立つ蠟燭 (大塚)
B46	手枷足枷大写真 (四方)
B47	鎖に悶える足首美 (柳初)
B48	蛇責めに柔肌栗然 (梨花)
B49	鼻の玩弄恍惚境 (大塚)
B50	女囚菱縄さらし (絹川)

女性鼻責考

生田二郎

最近、鼻責めに関する読者通信及びグラビアが多くなってきたので、この機会に、過去の

の本誌のグラビアの鼻責め写真をふりかえってみるのも一興かと思う。鼻責めファンは、

三十六年五月号の赤松義夫氏による読者性向分類にあらわれているとおり、一・九%にしかすぎないが、美しい女性を身動きならぬようにして、その美貌の中心である鼻をいたぶるのは、すべてのサジストにとって心踊るものであると思われるので、ここにあらためてとり上げたものである。

まず年号順に鼻責めのグラビアを上げていこう。白表紙時代のものはなく旧号に伊吹嬢の鼻つまみ桃源境などがあるが、ここでは略す。

SADO特集号第二集

麗囚（三葉）——絹川文代

上段 鼻孔を広げられ、口も大きく広かれてなかなかの傑作。

中段 苦しみをおさえ、観念した表情。

下段 鼻孔はぺしゃんこ。瞳はカッとみひらき、口からは吐息がきこえそうだ。秀作。

SADO特集号第三集

華鼻受難（七葉）——絹川文代

右側三段目、絹川嬢の鼻がややもりあがり鼻孔はひろがっている。

左側最下段、火のついた煙草を鼻孔におしこまれ、更にクリップで鼻をはさまれている。口がややひらかれているのは、苦

しさをあらわしている。

全体に美しいムードがただよっている。

スポットライト——絹川文代

両鼻孔の中間点を指でおさえられ、ぐんぐんやりとした鼻。小生の好きなものの一つ。

悦庵特集号第五集

新屋のまたたき——春丘リル

上品で美智子妃に似た顔立ちの春丘嬢の鼻孔をあらわにしたもの。グラビアの中では、これほど強く鼻を押し広げられたものはないのではないか。いかに上品な人でも鼻孔があからさまになれば、醜くなるという実例。

昭和三十五年八月号

鼻に対する責、顔面表情の変化（二葉）

——若原明子

平凡な感じのお嬢さんに対する責。鼻を責められるとどうしようありませんといった感じが全体にただよっている。標題の示す如く、たしかに責めによって、顔面は大きな変化をみせている。

昭和三十五年十月号

佳人鼻難（五葉）——絹川文代

第一頁、ドライバーで鼻の頭を押えたもの。鼻責の大写し写真の第一号。ムードというよりも、本当の責という感じ、ムードとしては、二頁目上段のピンセットで両方の鼻孔を伸ばされた写真、及び三頁目上段の片方の鼻孔を伸ばされたものがよい。

昭和三十五年十二月号

静かに動くもの——四方清美

左頁の上品なお嬢さんが鼻をおしひろげられただけで、鬼婆のような顔になっている。

昭和三十六年三月号

艶腕の像——前本妙子

失礼だが、鼻孔が美しくないので全くつまらないものになっている。

昭和三十六年四月号

弄花（二葉）——絹川文代

絹川嬢なる故の美しさをただよわしている作品。

荒療治——四方清美

猿ぐつわをかまされた上、鼻孔にドライバーをさしこまれ、更にペンチで鼻をはさまれたもの。ドライバーをさしこまれている所からみると他方の鼻孔にドライバーが喰い込んでいるはず、標題の示す如く全くの荒療治である。

昭和三十六年五月号

驚られる顔（三葉）——前本妙子

平凡。

昭和三十六年六月号

浣腸器の用途（二葉）——四方清美

浣腸器を鼻孔に差し込んだもの。実際にやると面白いだろうが、写真としてはつまらないものとなっている。

昭和三十六年七月号

サルグツワ哀歎——四方清美

サルグツワをする為に、鼻をつまんだもの。丸い形の彼女の鼻孔が細長く伸びきって、なかなかムードのあるものとなっている。

ている。

昭和三十六年八月号

虜囚の強制診断——桜井葉子

ドライバーで鼻孔をこじあけたもの。彼女の大きな鼻孔のわりにはつまらない。

昭和三十六年九月号

恐怖の塩水——梨花悠紀子

鼻をつままれて塩水を飲まされる。肉づきのよい小鼻が特徴。

鼻責め三題——東浦ひかる

共に鼻孔が見えず、興味をそがれる。

昭和三十六年十月号

私の愛読雑誌——東浦ひかる

鼻に蝶がとまっているようにクリップがとまっている。美しい。

鼻輪の引廻し（三葉）——東浦ひかる

牛の如く大きな鼻輪をつけられ両手を前に縛られ引廻される。これぞマゾの極致であろう。彼女自身も、この姿で心斎橋を歩いてみたいと言っている。尚、十一月号に辻村氏が彼女にいかにして鼻輪をはめたか、亦責めたかが「雑踏の中の孤独」と題して記載されている。

昭和三十七年一月号

美と凌辱（五葉）——梨花悠紀子

全く素晴らしいの一語につ
きる。

美しさは右頁上段、まる
で鼻孔を鉛筆かなにかで
えぞった如く、鼻孔の型
がはっきりとでている。

しかも奥の暗い穴までも
はっきりと見える。全く
彼女のかくされているも
のが、すべてさらけださ
れた感じだ。左頁下段、
グロテスクなほど鼻がも
り上り、これが人間の鼻
かと思うばかり。まるで
豚の鼻そのものようだ。
全く編集部の人達に
感謝すべき写真である。

昭和三十七年八・九月合併号

鼻に対する責、顔面表情の変化 (二葉)

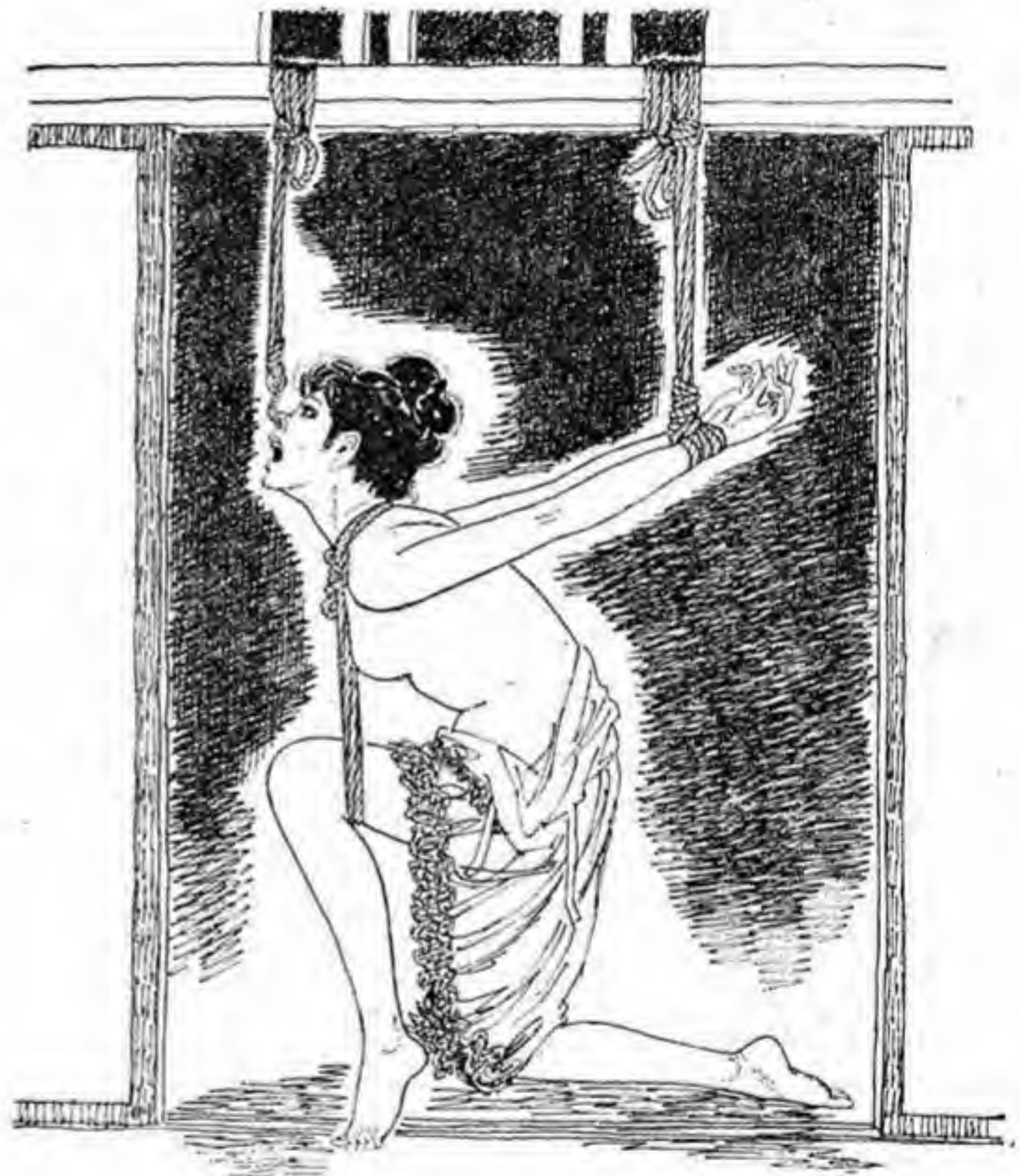
——大塚啓子

共にものたりなさを感じる。

昭和三十八年四月号

鼻を弄ばれる啓子——大塚啓子

鼻責めもこうしておこなえば有効という
ような写真。美しさはない。



昭和三十八年五月号

猿ぐつわの為の鼻なぶり (二葉) 絹川文代
美貌と美しい鼻の翻弄 (二葉)

前者は猿ぐつわの為だから、鼻孔は全く
つぶれてしまっている。後者は標題の示
す如く、鼻を美しくみせる責。下段の写
真は鼻孔の型が実に美しい。

昭和三十八年六月号

鼻のいたぶり——絹川文代

鼻責めと言うより責のプロロ
ーグといった感じ。

鼻責めの第一段階 (二葉)

——梨花悠紀子

押しつぶし型ともいうべき写
真。彼女の美しい鼻が見事に
つぶされている。

昭和三十八年七月号

凌辱料理の調理台——梨花悠紀
子平凡な作。標題ほどのよさ
はない。

昭和三十八年十月号

鼻を足にて踏みにじる (二葉)

——絹川文代

美貌の絹川嬢の鼻を足で踏み
にじれるとは、写真の男性は
何という幸福者か。

煙草責めの構想——梨花悠紀子

鼻で煙草をすわす。煙がでていけば素晴
しいのに残念。しかし構図は美しい。

斬首——新宮夫人

鼻責めではないが、鼻孔が美しくひら
いてるのをかう。

臨時増刊号〔文献〕

鼻腔測定（二葉）——大塚啓子

つっこみ不足の感。

鼻責のシーン点綴（六葉）——絹川文代

全く素晴らしい作品の数々。右最上段の瞳のひらき具合、右最下段の写真は、美貌の彼女としては許せないほどの写真であらう。

鼻料理と鼻掃除（四葉）——大塚啓子

右頁はやや平凡なものだが、左頁のものはムードとしていいものがでている。

団子鼻をいためる（二葉）——長野良子

写真でみると非常に強く鼻を押しつぶしているが、鼻孔がみえないのが残念。

昭和三十年一月号

耽美、なぶられる鼻（二葉）——大塚啓子

上段は完全に鼻をつままれており、下段は、思いきり鼻孔をひろげている。しかし鼻孔が小さいのがものたりない。

鼻孔清掃（二葉）——大塚啓子

凡作。

美しき縛しめ第三集

塩水を無理に飲ます——大塚啓子

鼻孔は完全にふさがれ、口から水がこぼれている。この種の作品ではナンバーワ

ン。

鼻孔ゼムピン責め——絹川文代

各鼻孔にゼムピンが一つづつとはなさけない。いっそ彼女の鼻孔をゼムピンだらけにすればよかったのと思われる。これだけではなんの面白味もない。

鼻孔から薬液注入——大塚啓子

平凡な作品。

昭和三十九年二月号

鼻をいじめられる——大塚啓子

共に平凡な作品。下段の鼻毛をみせているものが、やや興味をひく程度。

生首晒し（二葉）——新宮夫人

鼻責めの写真ではないが、美しい鼻孔が衆目にさらされている。首カセがはめられているのでこれからの鼻責めは随意である。本をさかさまにしてみると、一層鼻が生々してくる。

昭和三十九年四月号

鼻責めの四ポーズ——大塚啓子

右頁下段の写真は丸い彼女の鼻孔が細長く伸びきっているのがよくわかり傑作。

左頁下段もよいが、いかんせん彼女の鼻孔が小さいのが欠点となっている。

昭和三十九年五月号

縄の猿ぐつわと首縄——大塚啓子

鼻孔が見事にのびきっている、かなりよい写真。

臨時増刊号〔花と蛇〕

美貌翻弄（四葉）——大塚啓子

四葉とも平凡そのもの。鼻孔に変化がないのが欠点となっている。

昭和三十九年七月号

鼻を弄ばれて（四葉）——大塚啓子

右頁二葉は共に鼻毛が見える。左頁下段のものは逆にむけるとよいものになる。

美しい鼻の荒療治——絹川文代

コヨリを鼻孔に挿入している。いまにもクシャミがでそうだが、それも猿ぐつわの為にままならぬといった感じ。責めというよりもムード写真。

顔面翻弄四態——絹川文代

四葉とも彼女の鼻孔は見事に變形しているが彼女の顔を上むけているからには、鼻孔がよくみえるように写してほしかった。

昭和三十九年八月号

猿ぐつわと鼻責め（二葉）——大塚啓子

二葉とも鼻つまみのものだが、二つとも美しい。最近の大塚嬢の鼻責め写真も非

常に美しくなってきた。

昭和三十九年十月号

美貌を汚すもの（二葉）——絹川文代

彼女のものにしては、やや平凡。もっと思いきり鼻孔をひろげてほしいものである。

十月号迄で以上であるが、あらためて鼻責め写真の多さに驚くと同時に、編集部に感謝する次第である。そこで以上の中からベスト十五を選んでみると次の様になる。

- 1 美と凌辱（梨花悠紀子）
- 2 鼻責めのシーンの点綴（絹川文代）
- 3 新星のまたたき（春丘リル）
- 4 麗囚（絹川文代）
- 5 鼻に対する責。顔面表情の変化（若原明子）

（若原明子）

6 スポット・ライト（絹川文代）

7 華美受難（絹川文代）

8 佳人鼻難（絹川文代）

9 美貌と美しい鼻の翻弄（絹川文代）

10 弄花（絹川文代）

11 荒療治（四方清美）

12 生首晒し（新宮夫人）

13 美しい鼻の荒療治（絹川文代）

14 鼻を足にて踏にじる（絹川文代）

15 猿ぐつわと鼻責め（大塚啓子）

この選択の基準としては、美人が鼻をせめられ、あえぎ、あるいは豚の鼻の様にされ、その為に顔全体の調和がくずれ、奇妙な顔になる。しかし全体としての美しさ、及び品位は保たれている。そういう作品を上位に置いた。したがって、実際の責よりも、グラビア

としての美しさに重点を置いている。

一位には読者の反響が最も多く亦この写真が一連の悪書追放運動の最初のやり玉にあがったことから一位におした。二位の絹川嬢のものは、藤村若葉氏も述べられているように手にとって、ふるえがくるような写真であるからである。この一位、二位は他を断然リードしている。十二位の新宮夫人は、おもわずのぞきこみたくなる鼻孔の素晴しさをかう。願わくば新宮氏に夫人の鼻責め写真をとって載くことを希望する。十五位にはグラビア写真ではそれほどではないが、分譲写真「なく」「ない」「なは」での素晴らしい鼻責めをみせている大塚嬢をえらんだ。なおグラビア写真以外の鼻責め写真では絹川嬢の「はき」が素晴らしい。

四人の美女の縛られポーズの代表的作品集

女体緊縛写真のアルバム 限定版グラビア印刷写真集

豊満と清楚

一般書店には一切市販しません。是非直接発行所へお申込を！

限定版頒価一部一〇〇〇円（送共） 略号「限二」

〔モデル〕 長野 良子——大塚 啓子——五月亜紀子——新井マリ子

限定版第一号として、グラビア写真集の「美しき縛しめ」第三集、略号（美3）を——本年二月に刊行しましたところ、多数のマニヤの方々のお求めを頂き有難うございま

した。嘗て十数年前コロタイプ印刷の女体緊縛写真アルバムとして刊行いたしました「美しき縛しめ」第一集、第二集は忽ちのうちに売切れとなり、今では見ることもさへかなわぬ稀少な文献となっています。皆様の熱心な要望によりまして、ここに限定版グラビア写真集刊行に踏み切りました。本誌グラビア口絵では種々な制約のため、思いきった企画編集を遂行できませんでした。ファンの方々の期待に応えたいと思いま

今度、限定版第二号として、前集とは、いささか趣を変えた緊縛女体アルバムを作製した。若々しい豊満な肉体を誇る長野良子、大塚啓子の二人の女性の美しさを最高度に発揮した縛られポーズの大胆奔放の活躍を、画面いっぱいに、所狭まじと活躍させました。特に迫力を増すためとグラビヤ印刷の効果をフルに運用する加うるに、写真面を大きくしました。美しい肢体の持主である五月亜紀子と新井マリ子、裸身を以て誌面を飾りました。

緊縛フォト・アルバム

限定版第二号 豊満と清楚 内容

△美しき縛しめ (第四集) △

(一)、豊満をくびる……大塚 啓子
(二)、胸と胴をくびった縄にもだえる女体……長野 良子
(三)、グラママーの縄目……長野 良子
(四)、むくむくと肥った肌に縄目も埋もれて……長野 良子
(五)、豊満裸身の陶酔……長野 良子
(六)、うっとりとした表情は、縄にか紐にか……長野 良子
(七)、鼻をいためた表情……長野 良子
(八)、指にて鼻を弄ばれて恍惚とした表情……大塚 啓子
(九)、荒縄の緊縛感……大塚 啓子
(十)、とげとげとした荒縄が柔肌を痛める……大塚 啓子
(十一)、黒と白の対照……大塚 啓子
(十二)、白い晒と荒縄のケバとのコントラスト……大塚 啓子
(十三)、責めに疲れて……大塚 啓子
(十四)、責め抜かれてぐったりとなった女体……大塚 啓子
(十五)、戯れの縄プレイ……新井マリ子
(十六)、アパートの一室での緊縛プレイの一コマ……新井マリ子
(十七)、恐怖のまざなし、黒い触手が迫ってくる……新井マリ子

(一)、首締め縛り……新井マリ子
(二)、びやかな肢体が疼れんする首絞め姿……新井マリ子
(三)、猿ぐつわ非情……新井マリ子
(四)、開股しぼりの上に非情の猿ぐつわ……新井マリ子
(五)、開股棒しぼり……新井マリ子
(六)、革の口枷が頬もくびれよと締めつける……大塚 啓子
(七)、絶叫のワンカット……大塚 啓子
(八)、縄目が埋もれるような凄惨な緊縛感の味……大塚 啓子
(九)、痛みに喘ぐ……大塚 啓子
(十)、責められて急所の痛さに思わず呻めく……大塚 啓子
(十一)、首締めと足縄……大塚 啓子
(十二)、首に掛った縄と足の縄が女体を変える……大塚 啓子
(十三)、悶えても拘束された麗身は逸脱しない……大塚 啓子
(十四)、反りかえった足の指が縄目に可愛い……大塚 啓子
(十五)、二筋の縄がかくも美しい姿を現す……大塚 啓子
(十六)、誇らかな成熟の匂を十分に撒きちらす……長野 良子
(十七)、投げ出された肉づきのよい肢、足、脚……長野 良子
(十八)、はにかんで見せた美しい全身のポーズ……長野 良子
(十九)、両手両足を縛られて一本棒に晒される……五月亜紀子
(二十)、清純な美しさが、この全身に漂っている……五月亜紀子
(二十一)、晒の白布が鼻も口も一緒に掩って締める……大塚 啓子
(二十二)、荒縄への誘致……大塚 啓子
(二十三)、荒縄をさばいて次第に捉らわれる蝶々……大塚 啓子
(二十四)、珍しく完全に噛まれた猿轡……大塚 啓子
(二十五)、厳しい縄目と息づまる猿ぐつわの烈しさ……大塚 啓子

(一)、緊縛女体操縦法……大塚 啓子
(二)、縛りに変化をつけられた女体はどこへ……大塚 啓子
(三)、くねらす豊満女体……大塚 啓子
(四)、瑞々しくて柔らかな女体が縄にくねった……大塚 啓子
(五)、棒責めの序曲……新井マリ子
(六)、両足首の両端に縛られて、さて……新井マリ子
(七)、答打ちのポーズ……新井マリ子
(八)、さあ、打って、とながし目の艶なこと……新井マリ子
(九)、素晴しき美身……長野 良子
(十)、輝くような美しい裸身もあらわに……長野 良子
(十一)、縄をはねかえす素晴しい女体の重量感……長野 良子
(十二)、情容赦のない縄は巨大な乳房をへしゃぐ……長野 良子
(十三)、開股しぼりになった女の顔のアップ……大塚 啓子
(十四)、開股しぼりの全貌……大塚 啓子
(十五)、両肢を開けて縛り上げられたポーズ……大塚 啓子
(十六)、びんと一直線に伸ばして縛られた脚……大塚 啓子
(十七)、放置されて全身の痛さに耐えるシーン……大塚 啓子
(十八)、押し入った強盗は女を縛って転した……新井マリ子
(十九)、緊縛女体の鑑賞……新井マリ子
(二十)、自宅侵入した賊の目的は美体の鑑賞……新井マリ子
(二十一)、台所で縛られていたぶられるシーン……新井マリ子
(二十二)、胸、美しきトルソ……大塚 啓子
(二十三)、胸、臍、ウエストが縄によって捕捉……大塚 啓子
(二十四)、くねらせた見事な臀部を捉えたレンズ……大塚 啓子
(二十五)、後手高小手の美しさは素晴らしい……大塚 啓子
(二十六)、柔肌を喰いちぎるようにくびるコード……大塚 啓子

兄と妹の手紙……………海野美津男

娘相撲について

兄さん、その後お元気ですか？ 為替届きました。幾ら兄妹二人きりだといっても、少ない収入で私を短大にまで出してくれた事、とてもすまないと思います。

ところで……報告が遅くなって申し訳ありませんが……一ト月程前、すばらしい家が見つかりました。原田佐知子という親友が居る事は夏休みで帰った時話しましたが、彼女の叔父さんの家が急に空いて、佐知子さんと一緒にそこで暮す事になったのです。

彼女の叔父さんは、急に転勤が決まった訳ですが、「人に貸すのは嫌いだし、一、二年で帰るのだから、友達とでも一緒に住んでくれ」と言ったそうです。親友でも甘えたらいけないと思いましたが、「それなら一人で暮

せて言うの」とサッチちゃん（綽名です）が怒ったのでお世話になる事にしました。

家は、郊外の丘の上で、眺めも良いし、部屋も四間あって勿体ない位です。ですから、これから家賃も要らなくなりました。その分だけ減らして送金して下さい。

ところで今日は、兄さんに打ち明けて意見を聞いてみたい事があるのです。とっても書きにくい事だけど、今までも兄さんに全てを打ち明けて相談してきたんですから、思い切って書きます。叱られても構いません。意見を聞かせて下さい。

実は、私、サッチちゃんと毎晩お相撲のような事をしているのです。（やっぱり恥かしいな、でも……続けます）

この家に移ってから三日目だったか……お

風呂に入っている時、どっちからともなく、私達は腕の力コブの大きさを比べ合いました。「女の子が」と笑うかも知れませんが、私達は体育科の学生です。美しく思う気持は勿論ありますが、強く、という気持も無意識に働いているんですね。そのうち「腕相撲をしよう」という事になって、お風呂場にも腹這いになって腕相撲をしました。私は三回とも勝ちました。

サッチちゃんはそれが口惜しかったのでしょか、お風呂から上って寝間で蒲団を敷いている時、いきなり組みついて来ました。私も組みついていました。自分が女だなんていう事はすっかり忘れていたようです。お相撲の



ようなレスリングのような取っ組み合いが続きました。私は、腕相撲では勝ったけど、とうとう組み伏せられてしまいました。

身長は、私が一六二で、彼女より四センチ

高いのですが、体重は、彼女の方が三キロ重くて五七キロもありますから、体重で負けたようです。

私達は、両親が無いという境遇も同じだし

性格もそっくりの仲良しですから、取っ組み合っても喧嘩にはなりません。でも、その時の取っ組み合いは、人が見たら喧嘩かと思う位真剣でした。

その事がきっかけになって、私達は、毎晩のように蒲団や畳の上であばれるようになりました。最初のうちは何だか訳の分らない組打ちでしたが、そのうちに、レスリングを真似た私達だけのルールを決めました。三回投げ倒すか、十かぞえる間組み伏せた方が勝ちになります。但し、撲ったり、爪を立てたり

引っ掻いたりするような、身体を痛める事は反則にしました。

そして此頃では……パンツとブラジャーだけの姿で取っ組み合うようになりました。最初はスラックスをはいたり体操着を着たりしていましたが、夢中で組み合っていてスラックスを破いてしまったからです。体操着も汗で濡れたりして気持が悪いので……。

「女の子が！」って叱られるでしょうね。

「女性があられない恰好をして、とんでもない」といわれるかも知れません。自分達自身も「女がこんな事していいのかしら」と心配になる時があります。「私達だけがこんな事しているんじゃないか」と思ったりして。

でも、そうして精一杯あばれた後は、とても爽快な気持になるのです。一緒にお風呂に入って、汗まみれになった身体を流し合っていると、何だか清々しい気がします。上になり下になって相手を負かそうとする気持も、今まで味わった事のない、張りつめた、好きな気持です。

だから、いい事なのかいけない事なのか、いよいよ分らなくなるのです。

サッチャンも全く同じ気持で、兄さんに聞

いてみる事に賛成しました。兄さんは高校時代お相撲の選手でしたね。私はいつも兄さんの土俵を見て声援なんか送っていたものでしたが……私達女性は、兄さん達男性のように、土俵の上で精一杯闘うというような事は許されないのでしょうか？ 誰も見ていない所でも、裸になんかなって取っ組んだりするような事は許されないのでしょうか？

叱ってでもいいです。兄さんの意見を卒直に聞かせて下さい。……思い切って書いたら、気持がスツとしました。御身体大切に。

和江より

兄さんへ

手紙見た。いい家が見付かって、本当に良かったね。経済も助かる。それにのびのび暮せるのが一番だ。良い条件を生かして、うんと勉強もしていい体育教師になって欲しい。原田佐知子さんに、兄さんも感謝していると伝えてくれ。

さて……君達のやっている事を知って、少し驚いた。何と言っても兄さんは男だからね。だが兄さんは、君達の「取っ組み合い」は悪い事だとは思わない。むしろ、積極的にやれとすすめて良い事だと思っている。

何故そう言うか、兄さんなりの考えを書いてみるから、佐知子さんと一緒に考えてもらえん。

君達が、腕相撲をきっかけに、真剣な取っ組み合いを始めたという事は、人間として自然な事だと思う。そのくせ、「こんな事を女がやって……」と考える事も、至極当然な事だと思う。だから、どっちも正しいように思えて迷う。それなら何故、どちらも正しいように思えるのか？ どちらかが正しい筈だが一体どうなのか？

兄さんは面倒臭い書き方は嫌いだから、これも結論からいうと、あばれたい気持、負けるもんかと精一杯闘う気持を持つ方が正しく「女だてらに」と考える方が間違っていると思う。何故なら、もともと女性も、そういう気持は持っている訳で、「女らしく」という観念は、何百年かの歴史が作り出した誤った考えだからだ。

高校しか出ていない兄さんは、学問的な事は分らんが、いろいろな本を読み、いろんな経験を積んでみて、男と女の違いは、自分が今まで考えていたよりも、ずっと少ない事を知った。

特に、女性と自然な飾らない形で付き合っ

てみて、その事が良く分った。僕は山や海が好きだから会社の仲間を誘って良く行く。山や海は、人間をすっかり解放してくれるし、上役は誘わないから、男も女も自然に帰る。一緒に夢中になって遊んでしまうから、いつも後で気付く事だが、そう言う時の女性は僕達男性と殆ど変らない。昨年の夏だったか、海のキャンプで、或る女性が水中騎馬戦をやるうと言いだした。その女性は、或る団体でキャンプをした時やった事があるそうだ。

二組に分れた女性達は、鉢巻を取られた方が負けという事で対戦したが、どうして、どうして、男性顔負けの騎馬戦になった。僕達の係にKと言う、大人しい無口な女性が居るがその女性が相手に組みついていったのには驚いた。その時、男も女も変らないんだな、とつくづく思った。

これは一つの例だ。そんな事は幾らでもあると思う。柔道やフェンシングなども、女子のスポーツとしてどんどん行なわれている事は、君達も良く知っているだろう。

「女らしく」という観念は何百年かの歴史が作った、と書いたが、それは「何百年かの歴史」であって、それより前はそうでなかったのだ。

大昔の「母系家族制」の頃は、女性が全ての権力を握って居た。誰とでも結婚できる群婚制だから、父親は誰だか分らない。産んでくれた母親しか分らない訳だから、女が威張っていたのは当たり前かも知れないね。兄さんはその頃生まれなくて良かったなと思ってるが……。

とにかく女は強かった。そして、ずっと時代が下って、ギリシャやローマの頃になっても女性は男性と全く対等にやっていたらしい。生活の中だけではなくて、戦争になれば女も武器を取って戦った。体を鍛えるためにレスリングもやったという。

ギリシャに、仲間の男性が負けたのを口惜



しがった女性が、リングに飛び出していった相手の男に組みつき、遂に組み伏せて勝ったという話がある。それ以後、その地方では性別が分るようにと、一糸もまとわぬ姿でレスリングをさせたという記録も残っている。女性同志の裸のレスリングも、だからあった訳だ。特にスパルタでは、女と男の区別は全く無く、布で僅かに前を覆った姿で、異性との格技も行なわれていた。これは、絵としてもちゃんが残っている。

日本でも、鎌倉時代、戦国の初期までの女性は大変身体も良く、強かったという。戦国時代に女武者がいた事は知っているだろう。こう考えてくると、女性が「弱き者」になったのは、長い歴史に比べれば、割に最近の事だという事が分るだろう。君達自身、図書館か何かに行って歴史の本を読んでみれば、もっと詳しく女の歴史が分ると思う。

それなら現代はどういう時代なのだろう。兄さんは、矛盾や迷いに苦しみながら、人は、もっと人間らしくなろう（つまり、女は本来の意味で強くなろう）としている時代だと思う。人間はもっと自然に帰らなくてはいけない。或る面では、もっと昔に帰らなくて駄目だと思うな。

君達にすすめたい。女である事を忘れて構わないから、やりたいと思った事は堂々とや
って良い。幾ら女である事を忘れていても、
女で無くなる事はできないから、人間を産み
育てるという女性の神聖な仕事と、その為に
与えられている女性特有の心は失くなりはい
ない。

ともかく、自然にやる事だ。柔道でもレス
リングでも何でも良い。裸になる事も、二人
だけなら構わないじゃないか。まわしを締め
て相撲取ったって良いと思う。

兄さんは相撲部に居たから良く知っている
が、柔道やレスリングより却って相撲の方が
良いのではないかと思ったりする。柔道やレ
スリングにはそれなりの良さはある。だが、
本気になってやると、どうしても相手の身体
の一部を痛めつけたくなる。そこで、やかま
しい反則や、痛めないで勝つ技術や、痛めた
時に直す方法が必要になる。必らず優れた人
に習わなければならぬ。相撲の場合にも怪
我をする事はあるが、それは結果として起る
事だし、痛めようなどと考える余裕はない。

それから、相撲は力と重量が確かに問題だ
が、運動神経の反応と頭の働かし、そして技
が決定する場合が多い。六二キロしかない兄

さんだったが、技を鍛えて選手になる事もで
きた。

仕切りの時の緊張感、一瞬も弛められない
張りつめた気持もいいものだ。何より、相撲
は日本のスポーツだ。日本人の感覚にピッタ
リのものがある。

若しやってみようかと思うなら、思い切っ
てやってみよう。遠いから指導はできないか
ら本でも買って、基礎の稽古からしてみると
良い。必らず基本動作からやる事。モタモタ
取っ組まないで、キビキビやる事を忘れない
ように。

兄さんも、「幾ら妹でも」と迷った所もあ
ったが思い切って書いた。最後に、男の「真
似」だけはしないで欲しい、男のような女は
兄さんは嫌いだから。

元気でがんばれ。佐知子さんによろしく。

隆一より

妹へ

兄さん。おかげで、モヤモヤしていた気持
がスッキリしました。自分達は普通じゃない
のかしら、という気持もふっ飛びました。

サッチちゃんも喜んでいます。二人とも不勉
強で知らなかった「女の歴史」を始めて知り

ました。また、女性そのものについて見直す
事ができました。

二人は早速、お手紙を頂いた晩に、お相撲
を取ってみました。

兄さんの手紙で、私達は、いい意味で心も
身体も裸になる事ができましたから、パンツ
一枚になって蒲団の上で取組みました。秋も
大分深くなって肌寒い晩でしたが、二、三度
押し合っているうちに汗びっしょりになりま
した。でも、握る所がないというのは不便な
ものですね。そこで、帯をお腹に締めてやっ
てみましたが、これも上の方にずれてしまっ
て思うようにいきません。

二人は相談して、白のさらしを買って来ま
した。六尺褌の締め方は、漁港のK市の出身
であるサッチちゃんが知っていました。漁師の
人が締めるのをいつも見ていたそうです。長
さは六尺で少し足りないので長目にしてみま
した。やはり女なんですね。

褌は、思い切って素肌に締めましたが、締
め上げた時の気持は、始めて味わった、とっ
ても引きしまった感じでした。

褌姿で向き合ってみると、本当にお相撲を
取る気持になるから不思議です。サッチちゃん
の肌は海岸育ちのせいで、小麦色です。その

肌に白い禪がくつきりと締めこまれている姿は、女ながら立派だと思いました。二人はさっそうと仕切ってみました。

ぐっと腰を落として両手を下ろし、睨み合う気持は、レスリングでは味わえないものです。唇をぎゅっと結び、頬を引きしめたサッチャんの、きびしい眼を見ていたら、今までに感じなかった敵愾心のようなものを感じて、思わず身震いがしました。ぶつかり合ったあとは、もう夢中で、何も考える余裕はありません。相手の身体の動きを肌で感じるだけで、四つになって夢中でもみ合いました。

お相撲の本は次の日に買いました。それからは本を見ながら、兄さんのいう通り必らず基本動作から始め、そして押し相撲、寄り相撲、突き相撲と順序通りに稽古をする事になりました。けれども、毎晩の稽古の最後には、五回ほど試合をする事にしています。それには、どうしても勝とうとするから「できるだけ禪を取らずに稽古せよ」と書いてあるけど禪をつかんで寄っていったり、投げたりしてしまします。

さらしの禪はどうも……という事になったのは、一週間目の晩に、四つ相撲から吊り合になった時、前の方が縮まって食いこみ、

とっても痛かったからでした。

私達は、まわしを締める事にしました。本式の高いらしいので、デニムの布地を買ってきて自分で縫いました。まわしを締めこんでみると、一層お相撲らしい感じがしますね。兄さん達のまわし姿に憧れを感じた事がありました。きりっと締め上げた姿は美しくさえ感じます。

土俵も工夫してみました。お蒲団は動いてしまつて足が踏ん張れないし、畳が出てしまつて倒れて肌をすりむいた事もあったので、毛布を敷いた上から、洋間のじゅうたんを広げ、周囲には蒲団を敷いて、思い切り取組めるようにしました。部屋は十畳で天井も高いので投げられても大丈夫です。

まわしを締めるようになってもう二十日経ちます。技もずいぶん覚えたようで、何となくもつれ合つて倒れたりする事も無くなり、必らず何かの技で勝負が決まるようになりました。でも、兄さんから見れば「なっていない」と叱られるでしょうね。何しろ本だけが頼りですから。

しかし、できるだけの所までがんばつてみます。その上で、兄さんさえ良ければ、休みの時にでもサッチャんを連れて帰つて、水着

の上からまわしを締めて、稽古をつけて貰つてもいいと思います。まだ、その事はサッチャんに話していませんが、「和ちゃんの兄さんてスカッとしているわね。何でも話せそうだ」と言っているので、「そうして貰おう」という事になるかも知れません。

でも兄さん。本当に有難う。私達女性を男と同じ人間だといつてくれた事もだけど、私達に精一杯ぶつかり合う喜びを教えてください。事を感謝します。どう言うだろう？ ととても心配だったんだけど。逆に目を開かせてくれて嬉しかった。

私達は今、家の中でなくて、それから二人だけでなくて、たくさん女性達と、さんさんと降り注ぐ太陽の光を一杯に受けて、堂々とお相撲ができるようになりたいものだと話し合っています。

ギリシャの娘たちのように、明るくて逞ましい娘になりたい。

それが願いです。寒くなりますから、くれぐれもお身体を大切にしてください。最後に、兄さんのお嫁さん候補はまだですか？ 私が短大を出るまでなどと言わず、機会があったら逃さないで下さい。もう二十八だから心配です。

団鬼六先生へ

続『花と蛇』に関して

佐 土 良 志

畑藤さんの提案に刺戟されて、私も、団先生にお願いすることにしました。畑藤さんの提案には全く同感であります、ただ銀子の取り扱い方に異論があります。

言語を絶する淫靡な責め折檻に羞恥苦悶する豊満艶麗な絶世の美女静子令夫人の妖美な悩乱の肢態と、どのように責め辱かしめられ、なお常に、深窓の水々しい羞恥心と慎しみを失わぬ天女のような令夫人の気品と淑やかさに、妖しい恋慕の情を銀子が募らせるという点は、私も常々考えていたところですが私は、銀子は最後まで、飽くことを知らぬ嗜虐好色な毒婦であり、妖婦にしておきたいのです。それは次のような場面の設定を望んでいるからです。

一、静子夫人と京子は、鬼源たちの汗みどろの調教によって、いつしかそれが演技でなくなり、真実の深い同性愛の關係に結ばれるようになる。

二、秘密ショーにおいて、また秘密写真において、静子夫人と京子の二人の絶世の美女は、絶讃につぐ絶讃を浴び、いまでは森田組や葉桜団にとってかけがえのないスターであり、巨利を生む財宝となっている。

三、だから彼等も彼女達も、秘密ショーや秘密写真の撮影、またそれに要する稽古のとき以外は、二美人を大切に、充分の休養と栄養を与え心身の回復をはかっている。ショーは月二回、写真は月三回、これに要する稽古の日数はだいたい十日間ぐらいである。彼

女達の欲望はこの稽古の時に果され、それ以外の日は、二人別々に、バス、トイレづきの豪華な個室で生活させられる。もちろん縛しめを解かれ自由の身にされて、上流階級の婦人にふさわしい下着も洋服も与えられる。食事はとくに二人の輝く容色をそこなわないよう特別に留意されている。部屋にはテレビもステレオもあり、望めば雑誌でもなんでも求めることができる。

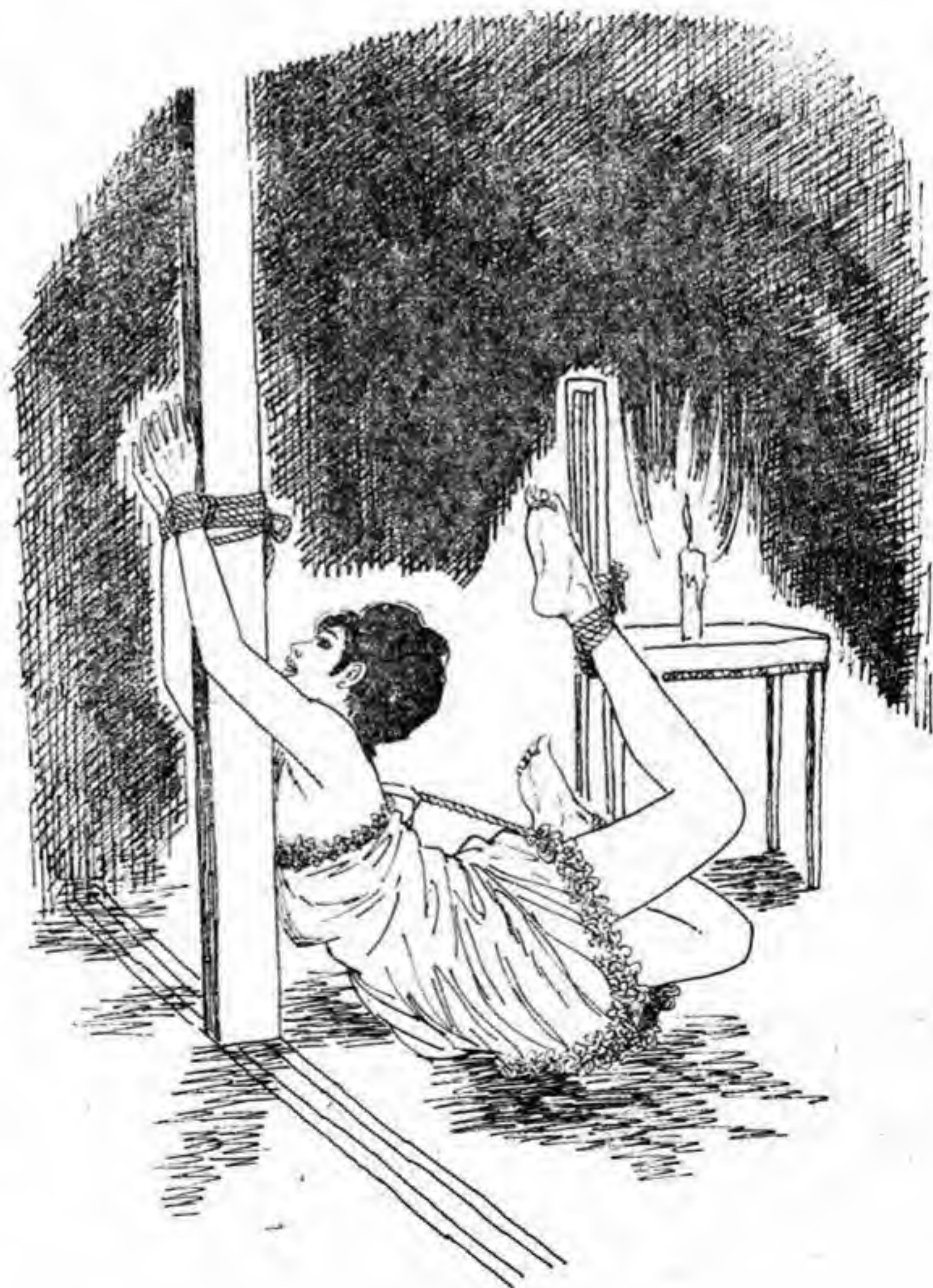
だが、これも企み深い彼等一流の計算にもとづくもので、第一が裸体にたいする羞恥心を失わせない、つぎが排泄にたいしても秘めるべき本能を呼び戻す、第三が絶世の美貌と肉体美の輝きをますますたかめることである。しかし、これだけでは二美人を地獄の魔窟で

意の如く飼育することはできない。そこで最も効果的なつぎの手段が講じられる。

四、休養日のうち月三回、夕方から朝まで静子夫人の部屋で京子との同居が許される。この時だけは部屋の内鍵をかけることができる。同性愛に深く結ばれている静子夫人と京子は、お互にこの一夜を待ち焦れている、一緒に入浴すませた後、羽根フツンのベッドの上で、神々しいまでに美しい豊艶な二人の肉体美人は、恍惚忘我の桃源境に胸酔する。この恋慕の情は、静子夫人の初妊娠とともにいよいよ深く、そして激しさを加えてゆく。

五、毒婦銀子邪恋の誘惑、静子夫人が妊娠七カ月を迎える頃になると、静子夫人を思慕して悶々としていた銀子は、もう抑制できなくなる。妖婦銀子は、一夜、静子夫人の部屋にしのびこんで脅かし、或は巧みな甘言をあやつり静子夫人を誘惑する。だが、何人も守りぬくことは不可能な暴虐の毒牙に、その身は凌辱されても、その心は天性の清らかさを失わずあくまでも気高く貞淑な令夫人静子である。

「お願いです、銀子さん。静子は、どんなにむごいご命令にも服従します。どんなに辛いお仕置も折檻も、喜んでおうけいたします。」



ですから、ね、銀子さん、そ、それだけは、ね、後生ですから、それだけは、お許しになつて……」と拒み続ける。

「奥さん、よくも、私に、赤恥をかかしてくれたわね。ふん、さんざん男にもてあそばれて、どこのだれの子かわからない胤をはら

んで、そんなにお腹を大きく膨らませているくせに、女の私が、恥も外聞も忘れて、こんなにまでまごころをつくしたというのに、よくも奥さん、ふみにじってくれたわね。こうなれば、可愛いさあまって憎さが百倍。奥さん、銀子のこのうらみがどんなものか、明日

のお稽古で、その浅間しい妊娠女の骨の随ま
で、存分に思い知らせてあげるから、よく性
根を据えておくといいわい！」

銀子の嗜虐感情には、さらに嫉妬の復讐心
が加わる。

六、こうして迎えた翌日は、淫乱な妊娠貴
婦人の痴態ショーの稽古日。

葉桜団の勢揃いしている調教室に朝から連
れ込まれた初妊娠七カ月の哀れな令夫人静
子。そして華々しく展開される女だけの、女
だけが知る、女体羞恥の淫靡な地獄の調教。

① 妊婦全身検めの観賞

両手を吊られ、足を開いて固定された静子
夫人の周囲に陣取ったズベ公達。妊娠前とど
こが違うか、よく調べて教えてくれるよ
う、銀子に言われる。乳房の批判からはじま
って、

「しかし、驚いたわね。女のお腹ってよく膨
れるものね……」

「もともと、この奥さん。お尻が人一倍大き
かったけど、孕んでから、また一段とでっか
くなったわね。ずいぶん重そうじゃない」

そして最後は、ああ……。

「だけど、問題は、このみにくいほど大きく
膨れたお腹の中よね。社長、親分、それとも

川田さんかしら……」

「お客さんのなかにもあるんじゃない？」

「京子は、女だから、関係はないし……」

「奥さんの口から直接、その辺のことは、く
わしく聞こうよ」

死んでも白状できないことにたいする破廉
恥きわまる拷問。

② 踵の飛び切り高く細い黒パンプスを
はかされ、スネークダンスを踊らされる。踊
る前に、今日の調教はとて汗の出ることだ
から、塩分をとっておかなければ」という口
実で、それでなくてさえ小用の近い妊娠後期
の身に塩水を膣腹のまざれている。

本当に彼女達のいうとおり、重い大きなお
尻を前後上下左右にと激しくふり、或は急テ
ンポで廻すのだからたまらない。うまく出来
なければ出来ないだけに、それが責めの口実
となる。やがてスネークダンスの途中で催す
想像も及ばないほどの猛烈な尿意。

③ 苛酷きわまる羞恥の哀願

銀子と朱実の強要ではじまる放尿の哀願。

④ 放水演技

入念きわまる検査の後、静子夫人吊り縄か
ら解かれ、後手縛りにされて台上にのぼる。
下方約一米余のところに十本の太いローソク

が立てられ点火される。必死の努力にもかか
わらず、ついに消火することのできなかった
四本のローソク。爆笑、哄笑、罵倒、揶揄。

⑤ 女体燭台

大小二本のローソクを使つての女体燭台。

⑥ 浣腸、オシメカバーの休憩

ベッドの台で排便ポーズをとらされ、オシ
メカバーのなかに排泄する静子夫人。

⑦ 銀子の報復

汚れたオシメを口にくわえさせられ、後手
錠を施されて、重そうな大きいお尻を中心に
汚物をベットリとつけたまま京子の部屋へと
引き立てられる静子夫人。京子の驚愕と悲
嘆。

銀子達の立ち去った後、自由の利かぬ静子
夫人を優しくいたわりながら、甲斐甲斐しく
汚物を洗い清めてやる京子。

⑧ 臨月妊娠美人の時代物ショー

早くも出産日を旬日に迎えた臨月妊婦の静
子令夫人は、吉田御殿の腰元お万にさせられ
る。

不義密通の妊娠腰元お万を責め折檻する嗜
虐好色の妖姫千姫には、銀子の発案により京
子がさせられる。

銀子は千姫をそそのかす毒婦お藤の方に。

注文殺到！
お申込みはお早く

(定価一五〇円分在庫若干あり、売切れ近し)

本誌既刊号在庫案内

○本誌の既刊号は、非常な人気で毎日注文が殺到しておりますので在庫が非常に少なくなっており、売切れの号も続出しております。

別号第一弾から第四弾まで、サデイズム特集号第一集から第四集まで、「美しき縛しめ」第一集、第二集。いずれも在庫ありません。○送料は当社にて負担いたします故、誌代のみお送り下さい。

在庫雑誌及び定価

○最近倉庫を整理しましたところ昭和36年度の定価一五〇円の分が出てまいりましたので、左記一覧表に掲げましたから、御入用の向きは至急お申込み願います。

○左記一覧表のうち、定価の記してあります分は、只今でしたら在庫しておりますから、御送金次第急送申し上げます。

○昭和35年5月号以前の号は、全部売切れとなりました。限定版特

昭和36年1月号	昭和35年12月号	昭和35年11月号	昭和35年10月号	昭和35年9月号	昭和35年8月号	昭和35年7月号	昭和35年6月号
(売切)	(売切)	(売切)	(売切)	(定価三〇〇円)	(売切)	(定価三〇〇円)	(定価三〇〇円)

昭和38年5月号	昭和38年4月号	昭和38年3月号	昭和38年2月号	昭和38年新年号	昭和37年12月号	昭和37年11月号	昭和37年10月号	昭和37年9月号	昭和37年7月号	昭和37年6月号	昭和37年5月号	昭和37年4月号	昭和37年3月号	昭和37年2月号	昭和37年新年号	昭和36年12月号	昭和36年11月号	昭和36年10月号	昭和36年9月号	昭和36年8月号	昭和36年7月号	昭和36年6月号	昭和36年5月号	昭和36年4月号	昭和36年3月号	昭和36年2月号
(売切)	(売切)	(売切)	(売切)	(売切)	(売切)	(売切)	(定価二〇〇円)	(売切)	(定価二〇〇円)	(定価二〇〇円)	(売切)	(売切)	(定価二〇〇円)	(定価二〇〇円)	(売切)	(売切)	(定価二〇〇円)	(定価二〇〇円)	(定価一五〇円)	(売切)	(定価一五〇円)	(定価一五〇円)	(定価一五〇円)	(定価一五〇円)	(定価一五〇円)	(売切)

昭和38年6月号	(定価二〇〇円)
昭和38年7月号	(売切)
昭和38年8月号	(売切)
昭和38年9月号	(定価二〇〇円)
昭和38年10月号	(定価二〇〇円)
昭和38年11月号	(定価二五〇円)
昭和38年12月号	(定価二五〇円)
昭和39年1月号	(定価二五〇円)
昭和39年2月号	(定価二五〇円)
昭和39年3月号	(定価二五〇円)
昭和39年4月号	(定価二五〇円)
昭和39年5月号	(定価二五〇円)
昭和39年6月号	(定価二五〇円)
昭和39年7月号	(定価三〇〇円)
昭和39年8月号	(定価三〇〇円)
昭和39年9月号	(定価三〇〇円)
昭和39年10月号	(定価三〇〇円)
昭和39年11月号	(定価三〇〇円)
昭和39年12月号	(定価三〇〇円)
悦特第一集 (売切)	
悦特第二集 (定価三〇〇円)	
悦特第三集 (定価三〇〇円)	
悦特第四集 (定価三〇〇円)	
悦特第五集 (売切)	

○極めて在庫の僅少な分がございます。
ますので、第二希望品があります。
たら、お書き添え願います。

その他朱実お菊をはじめズベ公達は勝手な名前を名乗り、お万の容色を羨望し嫉妬する意地の悪い朋輩腰元となる。

絵図となる。

最初は羞恥責め。これまで好評だったもののくりかえし。

静子夫人の流産も計画されているこの秘密
ショーは空前にして絶後の淫靡きわまる地獄

官能責め。羽毛、山芋、コケシ人形などが使用される。

庄卷は逆さ吊り鞭打ち。逆さに吊られ、臨
 月腹とお尻を弓の折れで百叩きにされる。臨
 月腹百叩きのうち五〇回目から七〇回目まで
 は千姫直々の折檻となる。
 最後は悶絶するまでの木馬責め。(以上)

濡れにぞ濡れし

△芳野眉美▽

ガン作・マニヤのノート

A 初心者用

トルコでマッサージをしてもらう。

脚、腰、背中と足で踏んでくれる。別におかしくはない。

そこまでは容易だが、首から上はそう簡単にはいかない。

「頭も踏んでくれないかな」

さりげなく云う。勇気のいることだ。

「顔を踏んでくれないか」

この一言、なかなか云えるものではない。ようやく云ったとしても、変な顔をされるだけである。

S的男性よりM的男性のほうが心臓が強いのはこういう逆境にソウレツな戦いをいどんでいる結果だと思われる。

私の知っているとこでは、対M的男性の為にベテラン用と初心者用の二人の美女がひえている。

トルコさんの中には、一人や二人、こうしたS的女性がいるのかもしれない。そんな客は、キミが悪いからまとめてめんどうみようというのだろう。M的男性は多いのだ。

M的男性であることが判明すると、途中からでもバトンタッチすることがあるらしい。

「助けて、おねえさん」

ということになる。この場合、二人分のチップをはずまないといけないから、やはり奇妙な遊びは高くつく。

初心者用の美女の話だと、メニューは

(1) つねる。

(2) スリッパかバンドで打つ。

(3) 足で顔を踏みつける。

(4) ローソクの火をたらす。

(5) 六尺か洗濯用ロープで縛る。

ということだそう。ホント。

「(洗ってやるからこっちへ来い) って云ったら、四っ這いで床を歩くんじゃない。おかしくて(犬だと思ってくれ) だって」

バンドで打つときは短かく持つのがコツだそう。音が個室の外まで響かないし、肌にあたる衝激は強いそう。研究しているね。

「傷は」

「真赤になるだけよ」

平気である。そこまてかまってはいられないというわけである。その調子。

「口を足で踏んでくれ」

というのが意外に多いらしく、床に寝た男

の目と口のところに乗り

「ぎゅうぎゅう足で踏んじやった」

ということになる。美女の足を舐めたがる

男の潜在意識なんだろう。

「床にひれ伏して（お姫さま）なんて変な声を出すからおかしくなっちゃうわよ」

その結果、停電用のローソクに火をつけてたらしたらり……。

「傷は大丈夫かよ」

そのほうが心配である。

「真赤になるわ」

傷はつかない。実験の結果だそうです。

「そしてね（お茶を下さい）って云うのよ」

「わかるよ、その意味」

「まさか、顔じゃね。でないわよ」

「でないかね、それは残念だ」

「残念ね」

「自由に出るようになればベテランだよ」

「そうよね」

やれやれ、こっちまでおかしくなる。

「味をすっかりおぼえちゃったな」

「本当ね」

「ストレス解消にいいだろう」

ねえ、と私に云った。いじめ方教えて頂戴よ、ベテランなんでしょう。

「よせよ、俺はお茶だけだ」

ベテラン用の美女だと、ベッドに腰をかけたバコを吸い、

「勝手に洗え」

ということになる。

「洗ったら、ローソクを突っ込んでやるからこっちへ来い」

少しシヨツキングすぎるよ。

「熱っぽくて身体がだるかったんだけど、飲ませちゃった」

こうなると自由自在である。

「また飲ませてやるから来い」

てなことになる。

それにしても高価な美女の神酒であることよ。ホント。

「内緒で俺にも飲ませろよ」

とベテラン用の美女に云ったら

「だめ」

親しすぎるというのである。そんなことないよ。初心者用の美女は帰りに、早く正常になるように説教するから泣かせるね。ウン。

道徳教育の見本みたいなものだ。

B 舐めてもいいわよ

南仏はカンヌの写真を見ると、ふくよかな

曲線美を惜しげもなくさらけだしたビキニスタイルの女群が、砂丘に寝そべてこんがり肌を焼いている。

都内のホテルのプールでも、デッキチェアにおお向けになった観賞用ビキニスタイルのハイティーンがオリブ油をぬりたくった肌を焼いているこの頃である。

その中の一人の美女が、突然

「どこを舐めてもいいわよ」

と私に云ったとおぼしめせ。ホント。

「舐める」

サングラスで顔の表情はわからない。

「舐めるの、好きだけど」

「だから、舐めてもいいって云うのよ」

「――」

「首から下はどこを舐めてもいいわ」

「首から下」

「唇は、いや」

「――」

「早く」

「弱ったな」

「弱ることなんかないじゃない」

「二人きりならね」

日曜でプールは満員だった。

「勇気ないのね」

その言葉できまった。

はなやかなレースの花模様のビキニだから彼女人目につきすぎる。

だが、そこまで云われては、だよな。

ブラジャーをずらして産毛もまばゆい小さな固い乳房を吸うのは勇気がいる。一瞬の動作でごまかすより外に手は無い。とにかくプールに入らないでデッキチェアに寝ている人種が多すぎる。成功。

反応無し。

彼女の気持がさっぱりわからない。

それならば――

デッキチェアの陰になって人目をさけ、彼女の足の指を口に含んでみた。

と、すんなりした型の良い脚をちぢめて擦ったがった。まさか足を舐めるとは思っていなかったのだろう。びっくりしたらしい。

おもわず片方の足の裏で私の顔を踏んまえた。

そのまま動かない。

彼女は私のバーの客の連れである。

ペアで来ると、私はペッティングの話しかないことにしている。処女教育は大切である。だから彼女が、

「舐めてもいいわよ」

などという神もおそれぬ大胆な言葉を私に投げ掛けた理由は、すべて私の責任になる。

故に、その責任を感じて、彼女に対して義務を遂行したわけである。

彼女の露出している愛らしいおへソにキスをしたなら、

「くすぐったい」

サングラスをとり、私の顔を見てげらげら笑った。

バーの常連が集ってホテルのプールで遊んだ夏の日の出来事である。

こんなこともあるんだなあ。

C サディスト・ギャラリー

伊映画『ショック』の中でパリのサディスト陳列館が紹介されている。

中世紀の残酷な拷問や死刑の模様をモデルを雇って（雇うんだからね）再現したものである。

木の鳥籠に入れられた女の顔に、観客が生卵やトマトをぶつけるシーンがあったでしょう。このモデル一回二千五百円で、一日四回観客のお遊びの相手をつとめる。

観客がサディストってわけなんだな。

針の椅子に緊縛された裸の男に、タイマツ

の火を近づけるショーもある。案内人からタイマツを受け取って、裸の男を火であぶったのは女性の観客だった。

首をつられた女の仮死状態の表情のクロトスアップ有り。この絞首刑の実演を最も喜ぶのは、やはり、女性の観客だそうです。

Mでないところのモデルはつとまらない。マゾヒスト・ギャラリーですね。

人間には、だれでも秘密にしているものの皮むけば潜在意識として恐ろしい本能の世界がある。

ガベラ監督は、映画で精神分析を試みたつもりらしい。あまり面白い映画ではないけれど。

『ショック』の公開は、世界中日本だけで、製作したイタリアでも教会の猛反対で上映禁止になっているそうだ（五月十三日東京新聞夕刊）

日本ってすばらしい国だと思わない。

D 御湯殿上日記

七月末日、單車より落下。

困ったのは湯に行けないことである。顔見知りのトルコさんにたのんで洗ってもらったことにした。

「どうしたの」

「單車から落ちたんだ」

「カタイモノに乗るからよ」

「すみません」

「乗るならヤワラカイモノにしなさい」

「そうします」

浴室に万才して仁王

立ちとあいなった。両

腕と背中中の傷を濡らさ

ないように洗うのだから

時間がかかる。その

間約五十分。

しかし、下半身は健

康そのものである。

「どうにかしてくれ

よ」

と云ったら、

「病人のくせに何を云

うの」

「病人じゃない、ケガ

をしてるだけだ」

「同じことよ」

やんわりとことわら

れた。そう、やさしく

やんわりと。わかる？



その時、彼女は私の身体のドコを洗っていたか。

日本の古典文学に『御湯殿上日記』というのがあるらしい。

中世日本の天子のお風呂番の女官の日記である。御湯殿上とは女官名を云う。

即ち、天子がお風呂の中で女官に何をしたら、失礼、女官より如何にして洗われたか、それこそ精密に書きしるしたものだそうだが。これだから日本古典文学は優雅で好きなんだ。

トルコの個室で仁王立ちながら、御湯殿上日記を思い出したとしても、中世の天子に失礼ではないだろう。

「せめてキスぐらいしてくれよ」

「洗い終るまでだまっ

ていられないの」

「何も、することがない

い」

「あきれた」

軽く唇を触れてくれた。

「それじゃいやだ」

「しょうがないひと

ね」

「せめて五分ぐらい」

「馬鹿」

少し離れて立って、

接吻した。

私は両腕を高く揚げ、彼女は下にだらりと下げている。へんな恰好。

彼女の手が私の背中を抱こうとして、とまった。背中には傷がある。

五分間って長いね。両腕がくたびれちゃった。

E 日記抄

八月五日（水）

S氏とM氏来訪（註、九月号「贋作・悩ましのサディズム」参照）

森山美歌夫人の作品を勝手に贋作してしまったことを許していただく。S氏「えんりよなく書いて下さい」S氏の好意ある申し出に感謝す。

S氏が奉仕している婦人の写真を拝見。和服のよく似合う豊麗な美女なり。S氏のお話をもっとくわしくお聞きしたかったが、バーに客有り、中絶せざるは残念。またの機会を待つ。

明け方、豊満な吉祥天女の夢を見る。天女より残酷な凌辱を受けている夢なり。その顔が写真の……嗚呼。

八月六日（木）

とやまかつひこ氏に会い、とやま氏の作詠を勝手に贋作したことをおわびす（註、七月号「強精飲食直接採集法」参照）

とやま氏と連れだってM氏訪問。三人で談笑。女性の神酒が飲みたいという話。女神の協力を乞う。

性傾向が世間に発表できるものでないだけに、本名秘密にされる人は多い。もしかしたら、アブノーマルなレッテルをはられて、社会的地位が抹殺される可能性があるから当然のこととは思ふ。

しかし、同傾向の人が集って交際する時、秘密主義の人はそれだけ相手を信用していないことで、これでは長い交際が出来ないのも無理はない。

その点、S氏やM氏と私の場合、オープンすぎるほどオープンだし、御二方は社会的地位やプライバシーな問題も秘密にしないし、それだけ信用されていると思うと、くすぐったいけれど幸福なことだと感謝している。それだからこそ、十年来も交際していただけるのだと確信している（註、M氏の作品と私のK Kでの処女作は昭和二十七年）数多くのお手紙をいただいたなかで、若輩の私に本名で会って下さったとやま氏は、その人柄がうかが

われてうれしかった。さっそくM氏を紹介し三人、すっかり意気投合したわけである。

読者通信にお礼を云わなければならぬ。

三人の先輩とも、私からみればずっと先輩だし、社会的地位にしろプライバシーな問題にしろ私より複雑だろうが、ひまをみてはオシカケ、いろいろ教えていただこうと思っている。年下のわがままはきいて下さるものと勝手にきめている。失礼。

三人の会話の一例――

「彼、直接でないとだめなんだ」とM氏。

「ぜいたくですからね」と私

「茶腕の中にしてくれたんですよ」

と、とやま氏。

「何処で」

「旅館なんです。飲んだら（匂うわね）って彼女（女中さんにみつかる困るわ）ってその茶腕を水でゆすいだんです」

「ほう」

「その水をね（飲め）って」

「それはいい」

「飲んだの」

「飲みましたよ」

「いい話ですね」

「ゆすいだ水を捨てないで、飲めということこ

ろがいい」

「彼女の神酒を飲んだときより興奮しましたよ」

「そうですね」

「茶碗でもいいや」と私。

「これだからいやになる」とM氏。

八月七日（金）

午後三時、理紗より神酒拝受。

「水ほいでしよう」

「うむ」

「こう暑くぢゃね。朝から水ばかり飲んでい

るのよ」

「うむ」

「水割りね」

「起きぬけのがほしいな」

「だめ、そう云ったって、アパートに泊めてあげないわよ」

「バレたか」

午後九時、バーにて。

常連の美女、ハンドバッグより生きた虫を数匹取り出し、

「たべなさい」

と云う。

「なんです、これは」

「九竜虫」

「ホンコン産ですか」

「そうらしいわ」

ホテルとも米の虫とも似ている。

「強精剤よ、たべなさい」

「結構」

「だめ」

「たべないとだめですか」

「もう来ない」

「たべますよ」

黒い生きた虫を一匹口に入れた。

「いいでしょう」

「あと二匹」

「苦いですよ」

「油があるからよ」

ビールに二匹浮かせてぐいと飲んだ。

「許してあげるわ」

「有難う」

美女には弱いよ。

本当に九竜虫なのかしらねえ……。疑わしいもんだよ。実際！。

（この項おわり）

△愛読者の皆様へ▽

○読者通信をはじめ編集部への便り、並びに御注文の手紙など、すべてタテ書きにお願い致します。

○切手を貼らずに投函されますと、入手に手間どり遅延のもとになりますし、場合によっては「受取拒絶」することがありますから、御留意願います。

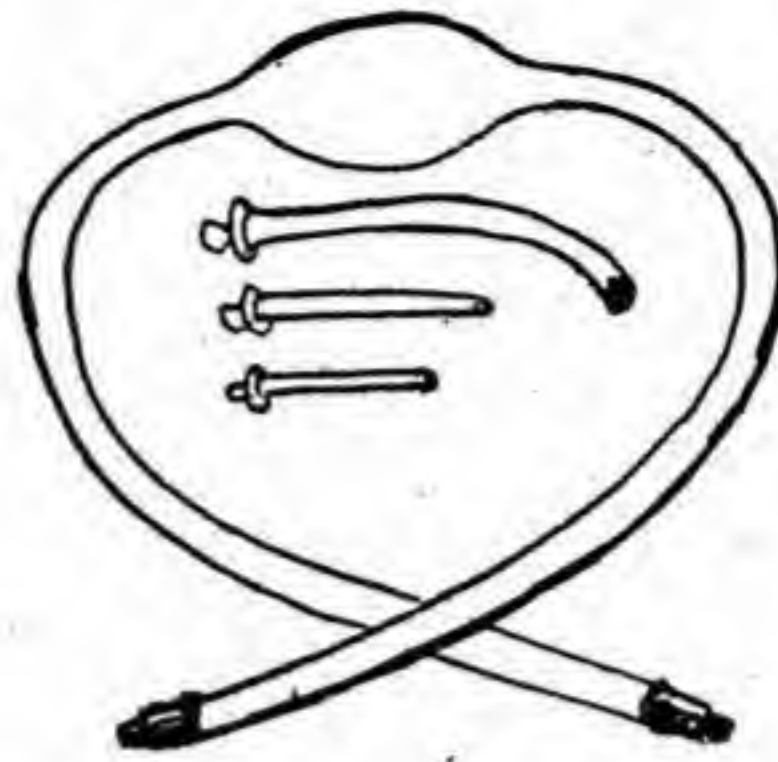
○電話にてのお問合せや照会並に直接の御訪問は固くお断り致します。ご連絡はすべ

て書面にてお願い致します。必要のある方は編集部から、電話連絡或は面会の日時などをお知らせ致します。面識のない方の直接のご連絡は御容赦願います。

○若し編集部に対して、御依頼又は御相談などがございましたら、事前に通信にてその旨お申出下されば、時間の余裕ある限りつとめてお逢いするよう致しておりますからご遠慮なくお便りを下さい。

○分譲品のお問合せも、必ず通信にてお寄せ下さるよう、お願い致します。

睡眠薬浣腸



金融引締めがこう強力になってくると、私には頭の痛い毎日である。どうしても精神的にストレスが多くなり、やや不眠の気味になるのも止むを得ない。

そこで、必然的にイソミタールのご厄介になる訳だ。日本新薬の話によれば、一錠の含有量は〇・一グラム、そして致死量は三グラムという。従って、若し三十錠をのめば、永久にあの世行きとなる筈である。それが一般

に何の制限もなく市販されているのだから、考えようによれば危険な話だが、今日の本題から外れる話故、医薬行政の批判はよしにしよう。

さて、私には一錠で充分だ。書類の整理など終って十一時、そろそろテレビもお休み番組に近づいてあたりも静かになる頃、一錠服用する。

二十分も経つ頃、そこはかたなく体がだる

長瀬 栗

くなると共に、軽微ではあるが、ずきん、ずきんと頭が痛くなってくる。これがないと甚だ心地よいのだがなどと考えている程に、それも、だるさにかき消されて、横になるのと思考が薄れるのと、殆ど同時、やがて、遠くを走る深夜タクシーの音も夢うつつとなって深い眠りに沈んでゆくのである。

夜明け。特に爽快とはいかないが、先ず普通の寝ざめであるが、何か胃のあたりに不快感が残っているようで、朝食がすすまない。香り高き朝のコーヒーも何か味気ないように思われるのも、神経作用だけであろうか。

頭痛と、胃の重苦しさ、これを何とか解決する方法はないだろうか。服用する以上、胃で融けるから、そして胃壁から吸収されるから胃に負担がかかるのに違いない。とすれば胃以外で吸収させればよい訳だ。

ところで、ものの本によれば、最近、欧州特にフランス方面では、圧倒的に座薬がふえているという。吸収のよい直腸粘膜を通して吸収させるので、風邪薬など口経錠は過去の物語といえそうだというのである。どうも日本人は、座薬というすぐ、肛門、便、と連想して不浄なものとの観念が強く、忌避する傾向があるのではなからうか。座薬といえ

痔の薬位しかなく、座薬の本命とも考えられる浣腸代用のリスリン座薬さえ姿を消してしまっている現状だ。

そこで私は、イソミタールを座薬として用いることを発案したのである。ここにその経過を報告してみたい。

一夜、横になった私は、イソミタール一錠をとり、僅かにワセリンを塗り、静かに深く直腸内に挿入してみた。十分、二十分、何時もなら当然起るべき頭痛も、だるさも起らない。今か今かと待つ神経は愈々さえ渡るばかり、遂に四十分、一時間、如何なる変化も起らないではないか。

若しやと思い、肛門内に指を挿入してみれば、指先に当るのは、そのままのイソミタール一粒。溶解していないのだ。これでは効果のある筈がない。要するに、そのままでは直腸内で溶けないという訳である。恐らく胃酸か酵素の力を借りなければ溶けないのである。これが口経剤と、座剤の違いなのであるか。

それならば、水に溶かして浣腸器で注腸すればよいだろうと考えた。コップに十グラム程の微温湯を入れ——二十グラムでは、浣腸効果を起してしまう可能性があるから——

一錠をほうり込む。溶けない、指でかき廻す。コップの底をすいすいと泳ぎまわるのみで、全然溶けない。そこで考えたのは削ることである。安全カミソリを持ち出し、少しずつ表面からこそいだのである。

随分固い、それだけに、微粒子となって、沈んでゆく、コップの底一面に白く淡雪が降ったよう、それでも溶けることはなかった。ガラス浣腸器に吸い上げられたイソミタール粉末液は、白濁浮遊の状態のまま、浣腸器で直腸奥深く注入されていた。

日頃、浣腸に馴れている私には、十グラムの水などは問題にならない。十分、二十分、今度はきいてきた。服用した時と同じ、けだるさと、ほのかな頭痛、それが快い刺戟となつて、今日も私は、浣腸器をほうり出したまま深い眠りに落ちてゆくのであった。

そして翌朝、何とも気分爽快である。胃に負担をかけていないだけに、胃の不快感が全くないのである。而も、たった十グラムの水ではあったが、直腸に適當の湿り気を与えたためであろうか、何時になくすんなりと自然便が排泄された。胃の不快感なく、且つ良好なる排便、正に一石二鳥とは、このことである。私はすっかりこのイソミタール浣腸——

浣腸といつては意味が違う、イソミタール注腸といわねばならない——が気に入ってしまった。若し睡眠薬を常用されている方があったら、敢えてお薦めしたい所以である。

と同時に、もっと広く他方面にも活用出来るのではないだろうか。遺憾ながら、小生この所、やや不眠ということを除いては、甚だ無病息災にて、あまり薬の御厄介にならないので実験が出来ないのが残念だが、例えば風邪薬、飲んでなかなかきかない時、注腸してみたら、どんなものだろう。腸の吸収力が案外効を奏するのではなからうか。

若し、注腸効果がよかったら、注腸薬を座剤と共に、注入器付きで売り出してみたら面白いと思う。丁度痔の薬によくある注入器付きという訳だ。

風邪薬もよい、保健薬もよいだろう。店頭冷蔵庫の中にずらりと並んでいるやつ、ポンと切ってストローでチューというあれだ。ああは簡単にゆくまいが、店頭で買って、トイレへ駆け込んで、老いも若きも、男性も女性も、お尻をめくって注入器でチュー。そうなればトイレの中に、空の注入器を棄てる容器を備えねばなどと、あらぬ方へ空想は発展してゆくのであった。

切腹研究夜話

清水正二郎氏の作品における
切腹のモチーフ効果について

中 康 弘 通

一
大正十四年生れというから齢ようやく不惑ながら、ジャーナリズムには虚談実談さまざまの話題の主、清水正二郎氏は「精力絶倫物語」の著者にふさわしく、週刊、月刊、書きおろしと、目覚ましい活躍ぶりである。

氏の近業を思うと、当るを幸わいパッタパッタと群がる雑兵どもをなぎ倒す荒武者の概がある。ところが写真などでご風貌に接すると、失礼な申しあげようながら、内に鋭気を秘めた大人風の倅があり、必ずや純日本的ならざる大河小説の傑作をものされるのではないかと、近い将来が期待される。

氏の作風は、週刊誌や書きおろしの場合、し

ばしばエロティシズムに志向する如くに見える。とすると、拙文の取りあげようとする、「切腹のモチーフ効果」なるものと至って縁遠いかに見える。しかしジョルジュ・バタイユの「エロスの涙」に見る如く、生と死とエロスとは常に相表裏し相錯綜して、三位一体以てその実在感を高め合い深め合うようである。従って、氏の作品の狙いが単なる好色趣味から少しでも昇華した相を見せるとき、切腹というモチーフは、生と死とエロスとの接点に於て氏に捕捉されるかのようである。

切腹のモチーフ効果と一言に事っても、氏の作品の場合、ほとんど切腹は文字通りには

遂行されない。かつて週刊誌に発表された三つの作品は何れもが連作の一断章として、切腹をモチーフに書かれたものであるが、そのすべてが、切腹の行為ではなく、擬態を以て描かれている。では発表された時期を追って述べてみよう。(註八 Vは原文引用箇所)

二

「ハラキリ、淑女ザムライ」

(週刊実話特報昭35・6・16)

アメリカ情痴物語第五十五話「IIポーツマス市II」として書かれたこの読切連載の一章は、主人公内田洋生が「アメリカの恥部を、そしてまた、情痴の真髓を探索している」遍歴の一とこまでである。FBIの女、アイリー



ンと連絡しつつポーツマスに入った洋生は、
 ハプハラ国の女大使のアメリカに対する諜報
 活動を探知しようとV活躍している。

たまたま日本開国百年祭でショウを見に来
 た女大使の動静を、洋生はアイリーンに通報
 する。そこには珍奇なショウが開演されてい
 た。以下、百年祭、ハラキリ会、珍アトラク
 ション、刀のカラクリ、と四節に分った「ハ
 ラキリ会」以後の部分を、原文を引用しつ
 つ詳述してみよう。

△日本、レディサムライ、ハラキリ会Vつま
 り△ハラキリ・レディ・ショウVは、(地方
 回りの三流レビュー団の、ほんの田舎公演)
 にすぎず、△ニューヨークの大宝石商の夫人
 で、同時に同性愛好家Vという触れ込みで女
 大使が、△数人の花のような美女Vと△用心
 棒の少年Vつまり洋生を連れたので、劇団の
 方がびっくりした。田舎廻りの劇団が、百年
 祭にひっかけてハラキリショウを計画したに
 すぎないからである。

小さな漁港にすぎないポーツマスで、場末
 の小さい映画館にショウはかかっていた。映
 画が二本終るとショウである。司会者は、開
 国百年の日本に、今も男女のサムライがいる
 と述べ、

ハサムライたちは、特別に保護された身分であるだけに、責任も又、人一倍重んじます。

彼等は、何か僅かに間違ったことがあっても、すぐ申しわけのため、ハラキリをするのです。

観衆がハ僅かなことで腹を切るハ日本のサムライに対するショックで、感嘆の叫びを上げたとき、

ハ当アトランティック舞踊団のハラキリショウと声を上げた司会につれて幕が上がった。

舞台には花模様の着物を着たハ金髪や栗色のアメリカ娘達が、十人ばかり並んでいゝた。

勿論恰好になっていないのに洋生は驚いたが、アメリカ人は、着物の前が合わず、坐ると膝前が割れて見える白い肌と、赤い花模様との妖しいコントラストに酔っていた。

劇は、彼女らの問答で進められた。一人の女の弟が不良に傷つけられた。弟はそれを恥じて腹を切って死んだ。そこでその姉やその友達も、恥をそそぐため、ハラキリすべきだというのである。ところが、女の中の一人が生命を捨てる愚を説くのであるが、観客の弥次や罵倒の中で、舞台の彼女は卑怯未練とされ、まずこの女からハラキリさせることに決まった。他の四人の女が彼女の手足をしっか

り押さえつけ、着物を取り赤い腰巻一枚になったとき、手を後手にされ彼女は全裸にされた。やがてその腹の前に、キラリと光る刀が差出された。彼女は涙ながらに訴えた。

ハ申しわけない、こうなった以上は立派に、日本のレディサムライらしく、私自らの手で腹を切りたい。

彼女の健気な申し出に、手は自由にされ、娘は、観客に一礼してから、立ったまま、その刀をとり、ズブリと腹につきあてた。とたんに真赤な血が流れ、呻いて娘は膝をつき、やがて倒れた。

昂奮した場内を更に沸き立たせるように、残った女たちも観客に向って正座してから、両肌を脱ぎすてた。ハ赤い着物から、抜けるように白い肌が浮き出た。ハ豊かな乳房がいずれもつき出し、腋からは、金色や亜麻色の腋毛がはみ出している。ハ女達は今はあらわな己が腹へ、一人一人短刀を突き立てた。

ハ短刀はするりと滑り込むように腹の中へ埋もり、同時に、女たちの白い腹に真ッ赤な血が溢れた。ハ人々はその激しく強い印象に拍手を送った。ハ夫や恋人の手前、わざと失神したふりをしている女達も、時々薄眼をあけ

てはこの凄惨なショウの続きを見ていた。ハ並んだ九人の女の中でも、一人の美しい女だけは、目立って、演技がうまかった。苦しみのおまわり、虚空を擲んだ彼女は、胸をかきむしり、すべてを脱ぎ捨てハ腹を血で汚しながら、苦斗の表情を表現した。

死のうとしても、なかなか死なない彼女の苦しみ方に、人々は心から拍手を送った。

彼女が死んで幕が静かにおり、しめやかな音楽が暫らく流れていたが、一転して華やかな音楽になると、死んだはずの娘たちが、短いパンツとブラジャーだけの姿で、一斉にラインダンスをはじめた。この明るい結末に、観客はまた沸いた。

その夜、女大使のホテルに、パトロンを受ける女が一人呼ばれた。それは先ほど情熱的な死に方を見せた女である。それがアイリーンであった。洋生はハッとしたが女大使は気づかず、

「月に一度くらい私の邸へ来て、あの情熱的なハラキリ・ショウを見せておくれ」と云う。アイリーンは

「畏まりました。今日もお礼にお見せしましょう」

その場でドレスを脱ぐと、ハンドバッグの

中からショウ用の短刀を取出した。

△なだらかな裸の下腹にぐっとそれをつきたてると、短刀の刃の部分は柄の中に滑りこみ同時に柄の中にしかけた袋が破けるらしく、そこから赤い血がどくどくと溢れ出た。▽

アイリーンは、しきりに苦悶のさまをくり返し、女大使やその侍女たちにも激しい昂奮をもたらすのであった。

是だけのフィクションであるが、さすがにショウの場面は、エキゾテックなハラキリショウが、眼で見ると描かれている。

よく発達した美女の裸身と、純日本的な切腹のポーズとの対照が、白い肌と赤い血のりとのコントラストを伴って、妖異美効果を發揮している。一種裏返しの国粹主義と異国情緒との接点にハラキリショウがあり、それを支えているものは、FBIという設定が支える今日的感觉である。

三

こうした国粹主義が更に濃厚になるのは、「愛国レクリエーション」

(土曜漫画昭37・2・23)

東京秘密地図第五話である。尽忠報国、BG間の流行、剣の舞い、切腹の訓練、新団

員、の五節に分たれているこの文章のヒロイン高山彦枝は、愛国の至情に燃え、国のためならこの十九の乙女の身体を、いつ捧げても悔いない気持でいる。彼女の残念なのは、愛国グループに若い女性のないことで、左翼のようなたごえ運動のないのが、若い娘を引きつけないのだ、と割り切った。父の高山彦右衛門は、天真陽明流の道場主で、一人一党の愛忠党総裁である。時代に則して娘たちを引きつけければ、若い男は自然ついてくると父に提案した彦枝は、勤めている丸の内の商事会社で、恋人も居ず労働運動にも熱のないBGたちを、愛忠党女子部に勧誘しはじめた。

近ごろのBGは物好きなのがが多く、初めは見学という約束でやって来て、やがて黨員になっってしまうのである。

塾生は、勤めの終わった五時半には道場集合する。一日十人づつの組に分れ、夏冬問わず団員は、白絹の褌を締め、教育主任である彦枝の合図で、みそぎの水浴びからはじめる。

うたごえに対抗して、剣舞を彼女らは習う。一糸まとわぬ身に稽古着と袴をつけ、板の間に正坐した彼女らは、彦右衛門の指導で、白鉢巻を締め、一人一人立って吟じつつ

木刀を振って舞う。全員が汗びっしょりになったころ、一息ついて、道場主は「切腹の訓練」を課する。

△武士道とは、死ぬことである。大和撫子はいざという時は、いさぎよく散ることが大事である。いかにして見苦しくなく死ぬか、その訓練をする。▽

古式に則した、切腹の作法を教えるのである。

まず二人づつが一組になり、切腹人、介錯人に分れる。切腹人は、目の前におかれた三宝の上の小刀を静かに一礼して取りあげる。△これは練習だから刃がついてないが、いつでも本当の切腹のつもりでやらなくちゃいかん。▽

彦右衛門はきびしく訓示する。切腹人の背後で介錯人が片肌を脱ぐと乳房が露われる。

それにも構わず木刀を大きくふりかぶって切腹人に、「いざや」と声をかけると、切腹人は襟を開いて、白い丸い腹をすっきり出ししてしまう。そして静かにプラスチックの刃をあて、左から右へ一文字に切り、返す刀で臍から縦に切りあげる。

苦しみの呻きをもらす。真剣な訓練だからである。

真面目に習練を終えると、少女たちは稽古着を脱ぎすて、白絹を腰にあてて井戸水をかぶる。やがて元のBGスタイルにもどると、頬を紅潮させた少女たちは

「ああサッパリしたわ、身も心も引きしまるようよ」

週一回のレクリエーションを、心から楽しんで帰って行く。

見学のBGは、突然まず同じBGの一人が白絹一枚で水を浴びるのを見る。娘たちのマゾヒズム的感情は、ここで妖しい行動の魅力を感じてしまう。やがて、白鉢巻もりりしく袴の割れ目から太腿を覗かせて、剣舞に打ち込む娘たちを見て、胸をワクワクさせる。

最後に古式床しい切腹の作法……見ていると、どんな娘も、その一員になってきびしい習練で女武士道を磨きたい、そんな気持が生まれる。今や美しく潑刺としたBGたちの間に愛忠党は空前の人気をまき起しているのである。

このストーリーも全くの創作であり、今日のBGたちにとっては凡そナンセンスであるにしても、ファシズムと切腹の相関関係を捉えた作者の眼は、マゾヒズムに焦点を結ぶと

ころに異論はあるにしても、意図として一応首肯された。筆者は、切腹に憧れる女性心理を、マゾヒズムよりもナルシズムを以て分析して来たので、マゾヒズムの濾紙を透すことには可成り抵抗を感じるが、必ずしもカリチュアライズされてはいないファシズムの扱い方には、アイデアとして可成り興味をも感じたのは事実である。

四

モチーフの補助としての国粹主義は、更に国に殉ぜん

(週刊特報昭38・5・16)

「破花物語」第五十八話、畠山八重の場合に於て明確に描かれている。

国粹主義者、主義に生きる、全裸の修行、切腹の儀式、という小見出しからも、この間の構成は汲みとれる。

二十才になったばかりの少女畠山八重は、悠久の大義に生きんとして特攻隊で戦没した長兄の遺品の、国粹的な図書を耽読して、今日の欧米化した日本に痛憤していたが、たまに悠久塾の看板をみつけた。

古びた榎の茂る門のうしろに、瓦ぶきの粗末な家を訪ねると、すり板と木槌が玄関にある。三度叩いたとき、五十才くらいの、稽古

代理部分譲品御注文の葉

○代理部の分譲品及び雑誌は、すべて前金にて御注文願います。直接の販売並に代金引換、後払い等は取扱っておりません。
○御注文品はご注文書到着と同時に発送申し上げますが、品切れの時は二、三日の猶予をお願い致します。

○ご送金は、現金書留(現金書留の封筒は一枚三円にて郵便局で売っています)小為替、定額小為替(小額のときは御便利です)振替(指替用紙は郵便局にあります。当社の振替口座番号は大阪五〇〇四二番です)切手代用(四円、十円、二十円、三十円、四十円などの小額切手で、絶対に紙にはりつけないで下さい)等を御利用願います。

○御注文品は、雑誌では何年何月号、或いは略号の附してあるものは略号。フォトの類はすべて略号にてお申込下さい。品名を記されますと間違いが起り易く、且つ発送に手間どりますから、必ず略号願います。

○送料は日本国内に限り、すべて当方にて負担いたします。但し速達或は書留にての発送を御希望される向きは、実費御負担願います。外国便は飛行便苦しくは船便の実費送料を御加算願います。

○御注文の宛先は、大阪阿倍野局私書箱第十四号、天星社です。(局よりの通知で郵便物の宛書きは私書箱番号に統一するよう依頼されましたのでお願い致します)

○分譲品の新しいものは、毎月の新刊誌上

着、袴の男が出て来た。用向きが、塾に賛同してのことと知ると、彼は慨世の辞を述べ、喜んで彼女を門下生とした。

彼の名は天道一羽。第一課はみそぎである「どんな修行にも必ず耐えてみせます」

と明言する彼女に、

「へすぐ裸になりたまえ」

と彼は言った。恥しさをも忘れる切羽つまった感情に、彼女はすぐ思い切って着衣を脱いだ。その裸身を平然と見て、一羽は八重を井戸端へ導いた。一羽の教え通り、八重は片膝をついて合掌し、皇国のいやさかを祈念するのであった。美しい裸身であった。

みそぎ、国体学、詩吟、古武道と修業を重ねるうち、一羽は後継者になってくれと八重に云った。しみじみとした言葉である。

「不束ながら勤めさせて頂きます」

感激の顔を挙げた、八重に一羽は云い切った。

「それでは切腹の作法を覚えてもらおう」

「え？」

さすがに八重は驚いた。

「一朝ことあるときは卒先して皇国に殉ずる覚悟がいる。正しい切腹の作法を覚えてもらわなくては……」

「ハイ、わかりました、いさぎよく切腹する作法を覚えます」

みそぎののち、白装束を着て、三方を前に八重の身はひきました。うやうやしく三方を左手にとり、短刀を右手に、そして三方を後ろに廻した一羽を真似、彼女は短刀を腹に突き立てる型を示した。

「見事」

「先生」

言葉は要らなかった。厳肅な儀式は終り、二人は激しい師弟の愛情に抱き合うのであった。

ストーリーは「破花物語」の題名にふさわしく、同志愛ゆえに八重が処女を捧げるまでを描いているが、ここでも国粋主義の感動を切腹に象徴させて、生と死とエロスの相関図を構成している。

五

清水氏は、更に氏の訳になるという。

放蕩殿下物語 II ユージン・アポリネー

ル原作 (世界秘密文学選書)

に於ても日本娘の切腹を扱っている。日露役旅順攻防戦の裏面にあるこの、サディズムとマゾヒズムの物語は、フィクションとして

で『新版案内』として発表しておりますから、その目録にて御注文願います。又古くなりましたものは漸次打切りにします。

○尚、御注文の際、もし品切れのときの代品として第二希望品がございましたら、お書き添え願えましたら幸いです。

○御注文品の送り先は必ず楷書ではっきりとお書き願います。肩書き(何々方、何々社内など)がございましたら、それもお忘れなくお書き添え下さい。

○発送者の名前を個人名で御希望の方は、その旨お申添え下さい。

○御注文者の御氏名は絶対に他へ洩らすようなことは致しません故御安心下さい。封筒注文票は用済後は焼却いたします。

○局留にて郵便物をお受取りになられた方は、御注文の際、お受取りに行かれる郵便局名(正式の名前)とお名前とを御連絡下さい。郵便局は特定郵便局でも集配局でもどちらでも結構です。別に局からは通知

がありませんから、局へ到着している日頃を見はからって、局の窓口へ出向かれて受取人の名前を言ってお受取り下さい。その際認印を必要としたり、差出人の名前を尋ねる所があるかもしれません。(受取人に間違いのないかを確認するため)局留郵便物の局での留置期間は十日間です。十日間を過ぎても受取人が出頭しないときは、差出人に返戻されます。一旦返戻された郵便物を再送する際の郵送料は御注文主にて御負担願います。未到着の際は、日を改めて受取りにおいで下さい。

も可成り神経を傷めつけるような極端さがあるが、その刺激的な数多いエピソード群の中で旅順要塞内の慰安婦キリエムの項だけは、暗愁の内にも一抹の哀美を感じしめる。

キリエムは稚い容貌と厳肅な美しさの持主である。小柄ながら均整のとれた体付き、肌は柔らかに乳房は締まっていた。

主人公、ルーマニヤのモニーヴィベスク殿下は、彼女を愛し身の上を尋ねた。劇場の三味線弾きの娘であった彼女は、数奇な運命の変転で、今は春婦として流浪の旅に就いている。未だ娘とも云えない彼女を初めて愛した従兄は、己れの愛の責めを負うてその場にハラキリを遂げた。その日から孤独な彼女の放浪がはじまった。やがて、ドイツ人エゴンを愛したが、彼女は上海へ売られた。

もう一度彼に会うのがキリエムの希望であった。

「そして、それが無事終えたら、日本の桜の花を思い浮かべながら、ハラキリをして、死んで行きたいと思います。」

静かに語り終え、少女は影のように去った。

モニーは、この東洋の少女の神秘的言動に

思わず涙を覚えた。そのとき、戸外で騒ぎが起った。一人のドイツ人が、スパイとして連行されて来たのである。

エゴン、ミューラー、彼の名を耳にして、モニーはキリエムを思い出した。エゴンの罪状をあばき私刑を加える一方、モニーはキリエムを呼び寄せると、苦しむエゴンにキリエムは涙を流した。

キリエムの願いをかなえてやろう、モニーは本心に考えた。彼女の願い、それは今一度エゴンを愛し、そしてハラキリをして静かに死んで行くことであつたからである。

エゴンの息が絶えたとき、放心しているキリエムに、モニーは自分のサーベルをうやうやしく捧げて言った。

「私は、あなたが一番願っていた希望をかなえてやった。今、この時間には、日本では、桜の花が開き、雪のように降りかかる落花の下を、恋人等はそぞろ歩きをしていることであらう。どうぞ、ここで心おきなくハラキリをしていただきたい」

何のためらいもなく彼女は、その場に膝を合せて坐った。それから東の方を向き、ミカドにはるかに別れを告げてから、頭に鉢巻をした。そしてサーベルを受けとると、

へたとえわれ 異国の人に この操
汚していても 死ぬはハラキリ

日本人がその最期に残す三十一文字からなる短詩を唱え終ると、悪びれず刃を、ズブリと己が腹に突き入れるのであつた。それからキリリと右へ引き廻し、一文字に掻切った。兵士らは初めて見る日本人の凄烈なハラキリに唖然としている間も、女の体は見る見る血に染まって行つたのである。

キリエムに於て愛慾と愛国心とは矛盾なく調和し、切腹に焦点を結ぶのである。そこにこの文章の美意識がある。春婦は切腹という触媒を経てレディと化するのである。

清水氏における国粹主義は、奔放不羈を以てする氏の性格に反して、必ずしもヤリカチユアライブされずに、たとえそれが裏返しであらうと、一種の美意識を以て描かれる。そしてそのエネルギーは結局、人間の生の本能を形成する一要素であるエロスの發現を、精神的感動と結び付けようとする努力の接点として描かれている。そこに、近業において、時に慰安婦という下層断面に捉えた女性像の昇華的美化意識の象徴としての設定で、切腹

は効果あるモチーフとなる意義がある。

さればこそまた、先述の三つの擬態としての切腹が、ここではじめて、模擬されるものでなく、実行されるものとして描かれるに至る道程の必然性が、筆者には首肯出来るよう

に思う。

日本人にとって、生と死と愛の接点は容易に国粹主義と結び付いて、自己を日本人の象徴的行為者と見るとき、武士道を象徴する切腹という行為が、容易に受け容れられるもの

であることを、この四つの作品の道程が、証するかのようなからである。

(昭39・9・21)

〔新版〕 女体悦虐フォト七十選

Z組七十集 大手札印画紙 (9×13 ㎝) 焼付各組一枚一組 (送料共)

一組 一枚	一〇〇〇円
五組 五枚	四〇〇〇円
十組 十枚	七五〇〇円
二十組 二十枚	一四〇〇〇円
三十組 三十枚	二〇〇〇〇円
四十組 四十枚	二五〇〇〇円
五十組 五十枚	三〇〇〇〇円
六十組 六十枚	三五〇〇〇円
七十組 七十枚	四〇〇〇〇円

Z1 ゴムの猿ぐつわ	(梨花)
Z2 囚女第六十三号	(柳)
Z3 猪型手足吊り	(梨花)
Z4 逆エビ強烈縛り	(大塚)
Z5 ローソク責め	(四浦)
Z6 豊臀への珍責め	(絹川)
Z7 淫らな変型縛り	(愛川)
Z8 ザリガニしばり	(梨花)

Z9 引き回しシーン	(東浦)
Z10 全裸後手高手小手	(加茂)
Z11 豊満な肌の被虐	(大井)
Z12 黒髪いたぶり	(大塚)
Z13 足吊り媚態責め	(絹川)
Z14 黒縄高手小手縛り	(四方)
Z15 強烈荒縄しばり	(梨花)
Z16 肌に喰込む白い縄	(東浦)
Z17 くこの足の指苦悶	(桜井)
Z18 裸身にいどむ縄	(前本)
Z19 無茶な猿ぐつわ	(竹野)
Z20 ハリツケの女体	(梨花)
Z21 おへソなぶり	(大塚)
Z22 逆手足吊り	(竹野)
Z23 美肌のいたぶり	(絹川)
Z24 仰向きの鼻いじめ	(加茂)
Z25 恐怖の表情一瞬間	(若原)
Z26 火箸で責める乳房	(梨花)

Z27 全裸の海老責め	(熱海)
Z28 ベッド上の痴態	(絹川)
Z29 足の裏の擦り責め	(大塚)
Z30 閨の女体飾り縛り	(竹野)
Z31 首絞め晒しもの	(大塚)
Z32 鼻孔に加虐	(若原)
Z33 悦虐責放心状態	(梨花)
Z34 手枷足ぐさり	(四方)
Z35 寝室でのプレイ	(花本)
Z36 猿ぐつわの妙味	(梨花)
Z37 首縄、柱しばり	(絹川)
Z38 巻煙草責め	(大塚)
Z39 尻立て縛りポーズ	(桜井)
Z40 厳しきエビ責め	(東浦)
Z41 ゴムのカバール縛り	(竹野)
Z42 ワンピースの縛り	(花本)
Z43 荒縄縛り竹棒責め	(梨花)
Z44 尻を突っ立てて	(大塚)
Z45 鏡に映す縛り裸像	(山路)
Z46 苦悶に喘ぐ柔肌	(大塚)
Z47 酔後の淫らしばり	(絹川)
Z48 逆十字エビ縛り	(大塚)

Z49 全裸縛り猿ぐつわ	(東浦)
Z50 欄間に宙吊り	(梨花)
Z51 全裸逆エビ縛り	(絹川)
Z52 荒縄のお仕置室	(梨花)
Z53 庭園の惨酷風景	(館)
Z54 被虐の果て	(大塚)
Z55 痛められた裸身	(大塚)
Z56 鏡の中の全裸像	(愛川)
Z57 セーラー服縛り	(梨花)
Z58 檻の中の緊縛裸身	(愛川)
Z59 全裸の股間縛り	(絹川)
Z60 オムツ逆エビ責め	(田中)
Z61 胴縄に膨らむ腹部	(桜井)
Z62 ゴム人形の女	(竹野)
Z63 荒縄のトゲ責め	(梨花)
Z64 女子大生恥態責め	(田中)
Z65 白肌露出の全裸縛	(絹川)
Z66 強要する開股縛り	(絹川)
Z67 強烈縛り全裸の晒	(愛川)
Z68 亀甲縛り乳房責め	(梨花)
Z69 ベッド上のもだえ	(愛川)
Z70 恥しさに耐えて	(館)

「女子寮とテープレコーダー」

高 木 紀 久 枝

女子寮とテープレコーダー

私等の女子寮で背丈だけは高いのに、一番のやせっぱは先ず満十九才の鶴代でしょう。身長は一六〇センチありますが、体重はたった四〇キロしかありません。手も脚もすんなりと、というよりは、ヒョロヒョロに細く其の上、肌の色がすき通る様に青白いのですから、一寸見ると病身なのかと思う程ですが、それでも意外に病気は全然しませんから、至極健康なんでしょう。彼女がナイロンのストッキングを用いると、脚が細すぎるせいで、どんなにつり上げていても脚に密着せず、ふかふかになるものですから、皆に笑われてからは、冬でもストッキングは、はかないことにしている様ですから私等は彼女に「線香」という仇名をつけている位です。

鶴代とは全く対称的にヘビー級のトップは何といってもデブちゃんの満子でしょう。彼女は、私と同じく満二十才、最近ますますふとって、丸々と体重は六〇キロを数キロオーバーしたらしく、まるで女のお相撲さんの様な感じですよ。彼女はそれをひどく気に病んで、やせたいやせたいと思っているらしいのですが、人一倍元氣な満子のことですから、食い氣も相当に旺盛で、あれでは、スマートになれる道理はありません。それでも肥えているといわれるのが余程いやなのでしょう。うっかりして「デブちゃん」とでもいわうものなら、むきになって文句をいったりするのです。

此の二人が一緒に居るのをはたから見ていると、

ますと、あまりにも体格で正反対なのに、奇妙なコッケイ味を覚えて、思わず吹き出したくなる位です。それに二人は、不思議に気が合うらしく可成りの仲良しで、よくおしゃべりをしたり、冗談をいい合ったりでキャーキャーはしゃいでいるのを見かけます。

或る晩、私はふと思いついて二人に「ねえ、今から二人で降参ごつこの試合をして見ない？ 勝った方には賞品に、実況を録音したテープを進呈するわよ」

と突飛な提案をして見ました。其の頃の私はお小使いを節約して真新しいピカピカのテープレコーダーを買ったばかりでしたし、何か奇抜なものを録音して見たかったのです。すると其の場に居合わせた数名のおてんば連

中は、ワッと喊声を上げて賛成しました。

「まあ面白いわ、降参ごっここの録音って、初めてね！」

「イヤー傑作よ、満ちゃんに鶴ちゃん、頼んだわ」

「ああら素敵っ！ 何んな録音が出来るでしょう？」

彼女等も素人のど自慢の真似をして、下手くそな唄などは数度テープに入れて見たものの、もうそろそろ倦きて来た矢先でしたし、手を叩いて大喜びでした。

驚いたのは満子に鶴代です。

「まあ！」

「イヤー」

と眼を丸くして顔を見合せていましたが、やがて鶴代の方から抗議が出ました。

「まあ、ひどいわよ。私弱いから、満ちゃんに負けるにきまつてるじゃないの。いやだわそんなの！」

と唇をとがらせ乍ら不服そうです。

「そうね」

「それも、そうね」

皆も六〇キロ以上の満子と四〇キロそこそこの鶴代では、体力も力量も違いすぎることを知っていますから、鶴代のいい分にも道理

があると思えないわけには行きません。私はしばらく考えてから

「じゃあ、最初にハンディキャップを付けるといいわよ」

といました。

「あら、ハンディキャップって、何うするの？」

「聞いたことないわね、何なの？」

と不審そうに私に問い返すのです。

「あのね、初めに満ちゃんが仰向けに寝転んで鶴ちゃんが押え込みするのよ。それから用意ドンで試合を始めるの。満ちゃんが跳ね返せなくて、降参をいったら鶴ちゃんの勝ち。」

跳ね返して逆に鶴ちゃんを降参させたら、満ちゃんの勝になるの、どう？ 名案でしょう」

「ワッ！ ほんと名案よ。それにきめたわ」

「イヤー、傑作？ 素敵よ！」

「そうよ、そうよ」

皆は黄色い声をはり上げて、大喜びです。

「いやねー、私が押え込みされるの？ ひどいわ」

今度は満子が些か不服そうですが、此れ程やいやいいわれては、彼女もむげにいやともいえません。とうとう私の提案通り、ハンディキャップ付きの降参ごっこをすることにき

まりました。

「一寸待って、用意するわ」

私はそういって、テープレコーダー蓋を開きテープをかけてスイッチを入れました。同時に透明なリールが音もなく静かに廻りはじめます。

「さあ！ いいわよ、満ちゃん寝ころんで！」

「いやねー！」

といい乍ら満子は、それでも部屋の真中に腰を下すと、そのままころっと仰向けに寝そべりました。

「さあ鶴ちゃん、遠慮しなで押え込みするのよ」

「イヤー恥しいわ」

「バカね、恥しがらじゃないわよ」

「まあ、ひどい！」

鶴代は一瞬、青白い頬をぱっと赤らめ乍ら「いいかしら？」

とおそろおそろ満子に近よって、ふっくりと小高く盛り上った胸の上へ、そうっと馬乗りに跨るのです。ワンピースの裾が割れて、やせて細い両脚がもものあたりからのぞいています。

「鶴ちゃん、押え込みしなくちゃだめよ。直き跳ね返されるわ」

「そうよ、もっと上に乗らなくちゃ」

「えっ、分ってるわ」

鶴代もこうなつては、今更ためらつてはいられません。横に開いている満子のふくよかな二の腕の上に、骨ばった膝頭をのせかけてぐぐぐとにじり上ると、次の瞬間には、満子の太く短い首の上にべたっとまともに跨っていました。満子の丸い大きい顔が、スカートのたくれた鶴代の細い内股の間に、きっちりとはさまれています。

「鶴ちゃん、もういいの？　しっかりしなくちゃ、満ちゃん強いから跳ね起きられるわよ！」

といわれて鶴代は、

「一寸待って、まだよ」

と念には念を入れる様に上体をやや前にかがめ乍ら、満子の両方の手首をしっかりと両手で畳の上に押え付けるのです。

「もう、いいの？」

鶴代は、私等の方へ顔を向けて、こっくりとうなづきました。

「じゃ、いよいよ、試合開始ね」

誰かが立って行って鶴代の肩と組み敷かれ、満子のおなかのあたりをポンと軽く叩き乍ら、

「さあ！　始めッ！」

と大声で叫びました。

「鶴ちゃん！　起こしちゃだめよ。しっかりねッ！」

「満ちゃん、がんばってッ！」

皆は、思い思いに二人に声援を送っています。

「ようしッ！　負けないわよ」

デブちゃんの満子は、身体が大きいだけにやせっぽの鶴代に負かされたとおつては、コケンにかかわるとでも思ったのでしょうか、試合開始の声を聞くと同時に、脚をばたつかせて抵抗をはじめました。其の度に水色のタイトスカートが、少しづつたくれ上って鶴代の脚の二倍もありそうな太いむちむちと肥えた両脚が大きい太もものあたりまで、あらわになって来ます。満子に見れば、細くて弱々しい鶴代を跳ね返すのは、さしてむつかしいことではないと内心高をくくっていたのかも知れませんが、いざとなると、そう簡単には行きません。四〇キロそこそこの鶴代にでも此れ程までに完全に押え込まれては、流石の満子もたじたじの態。せめて両腕の自由でもきけば、何とかなるのかも知れませんが、鶴代の膝頭と両脚にしっかりと押えられては、

それも思うにまかせません。

「ああら、くやしいわ」

鶴代の青白い内股にはさまれている満子の丸い顔が、次第に真赤に上気して来ました。

それにしても何とまあ、珍妙な光景なのでしょう。細くて弱そうな鶴代が肥えふとった満子に組み敷かれ、押え込まれているのならそれ程おかしくもないでしょうが、今の場合は全くあべこべで、お相撲さんの様なデブちゃんの満子が、やせっぽの鶴代に下敷かれて、いるのですから、そのコッケイさといったらありません。

「まあ！　満ちゃん、跳ね返せないわよ」

「イヤー、ほんと、鶴ちゃんも強いわね」

「だって押え込みされちゃ、満ちゃんだって簡単に起きられるはずないわよ」

「それもそうね、でも未だ分らないわ。勝負は未だ今からよ」

「そうね！」

皆は得手勝手なことをいい乍ら、どうなることかと手に汗をにぎる思いで、まばたきもせずに二人を見つめています。見れば満子が身をもがくにつれて、たくれていた鶴代のワンピースのスカートがずり下って来たのでしよう。何時しか唇から鼻のあたりまでがかく



されて、眼から上だけが鶴代の股の間からのぞいていました。

「鶴ちゃん、満ちゃんを押え込んでいい気持ちでしょう？」

と声をかけて見ますと、彼女は両手で満子の大きい手首をぐいと押え付けたまま、ちらっと顔だけを振り向かせて

「いやよ、からかわないで！」

「でも貴女が、大きい満ちゃんを押え付けてると、すごく勇ましくって魅力的よ！」

「あら、そう？」

鶴代は嬉しそうに、にっこり唇をほころばせています。するとおせっかいな一人がテープレコーダーのマイクに顔を近付けて小声で実況放送の真似をし始めました。

「只今体重僅か四〇キロの鶴ちゃんが、六〇キロの満ちゃんを完全に押え込んでいます。満ちゃんは懸命にはね返そうとしたが、出ていきませんが、未だ跳ね返すことが出来ません。満ちゃんのタイトスカートはすっかりめくれ上りました。むちむちと肉付いた太い素足が太ももの付け根まであらわになっていきます。満ちゃんの顔は真赤になりました。スカートが口の上にかぶさって上半分しか見えていません。さあ鶴ちゃんが勝つでしょうか、

それとも満ちゃんが跳ね返すでしょうか。息づまる様な一瞬です。誰しもどうなることかと、はらはらする思いで見つめています。鶴ちゃん、がんばって！ 満ちゃん、負けないで！」

皆はキヤツキヤツと笑い乍ら、

「あつら、此の人放送が巧いのね」

「ほんと、放送係のアナウンサーをしてよ」

彼女はおどけて胸を叩き乍ら

「いいわ、引き受けた。まかしとき！」

「じゃ、今度は満ちゃんに、インタービューよ」

マイクを伸ばして組み敷かれている満子の方へ近付け乍ら、

「満ちゃん、押え込みをされた感想は？ ど
う？」

と尋ねたりします。

「まあ、ひどいわ、よしてよ」

「ね、ひどく苦しい？」

「あら、それ程でもないわ」

「じゃ、未だ降参はしないわね」

「ええ降参はいやよ」

「跳ね起きる自信あって？」

「ええ、あるつもり」

「イヤー、たのもしいわ、しっかりねッ！」

テープは音もなく静かに廻転を続けています。思いがけもない傑作な録音が出来ることでしょう。

「今度は鶴ちゃんよ、何う？ 押え込みは？」

「まあ、いやよ」

「あら、かくさなくてもいいの、悪くないでしょう？」

「ひやかさないで！」

「満ちゃん、跳ね返すって云ってるわよ。大丈夫？」

「とっても、私だめよ」

「あらまあ、自信ないのね。じゃ、がんばって！」

二人へのインタービューも一段落ついた様です。

すると急に満子が烈しく身をくねらせて力一ぱい抵抗を始めました。太く逞しいあらわな両脚が、ボタンボタンと荒つぽく畳を蹴り乍ら中に躍り上るのです。手首を押えられているふくよかな両腕が幾分浮き上っては、くりくりと動きます。

「ワーツ、満ちゃんが、すごく暴れ出したわ」

「まあ！ ほんと、鶴ちゃん危いわねッ！」

「イヤーツ、すごいッ！ 矢張り満ちゃんだけあるわよ」

鶴子は鶴子でじっとしてはいられません。「ああッ！ いやッ！」

小さい叫声を出し乍ら、前かがみになった上体の重味を両腕にかけると、やっきになって、満子の手首を動かすまいと押え付けるのです。

「うッ！」

「ああッ！」

二人ともハアー、ハアー息をはずませて、すさまじい争いになりました。でも二人は体重がまるで違うだけに、力量も可成りの差があるらしく、ともすれば馬乗りに跨っている鶴代の方が逆に押されている感じがします。しばらくすると案の定、満子の右腕が鶴代の腕の下からすり抜けて自由になりました。続いて左腕までも鶴代の手を振り放そうとします。

「ああッ！」

鶴代はすっかりあわてて、もう一度満子の手首をとらえようとするのですが、その思い通りにはなりません。やがて満子の丸々した両手が、両方からしっかりと頬をはさんでいる鶴代の細っそりした両ももの骨ばった頬頭

へかかりました。

「私だって負けないわよ」

満子は得たりとばかりに太い両腕に力を入れてぐいっと鶴代の膝頭を下から烈しく突き上げるのです。こうなれば鶴代は体重が軽いだけに忽ち不利な立場に追いこまれるのを、どうすることも出来ません。あっという間もなく膝頭を押し上げられ、そのはずみで、満子の首の上に跨っていたヒップまで、ついっ

「うむッ！」

満子はすかさず、その隙に乗じてパッと脚で畳を蹴り乍ら大きい肢体を横にひねりました。

「あっ！」

とうとう鶴代は満子の首の上からずり落ちて、細い上体を傾け乍らストーンと畳の上に尻もちをつくのです。

「さあ、今度は、私が押え付ける番よ」

満子は声をはずませて、いきなりがばと鶴代の上にのしかかって行きます。四〇キロの細く弱々しい鶴代を六〇キロ以上もある小山の様な満子の豊満な肉体が組み敷くのですから、今度は、まるで問題になりません。次の瞬間には鶴代は、あわれにも畳の上に、うつ

ぶせに押しつぶされて其の背中の上に、満子が脚を開いてどっかと馬乗りに跨っています。

「さあどうだ。もう私の勝ちよ」

満子は、ハンディキャップで押え込まれていたのを首尾よく跳ね返すことが出来て余程嬉しかったのでしょう。丸く大きい顔をほころばせて、太い右腕で組み敷いた鶴代の細い首筋を、さも誇らしそうに押えつけるのです。

「ワーツ、苦しいわ」

鶴代はくしゃくしゃに髪が乱れた細長い顔を横に捻じ向けたまま、片頬をギューッと畳にこすりつけられ身動き一つ出来ません。ワンスのスカートの裾は、とっくにばあっと飄って可愛そうな程、やせて青白い素足がパンティー一枚のヒップのあたりまであらわになっていきます。又さっきのアナウンサーの声が聞えて来ました。

「遂に満ちゃんは鶴ちゃんを見事に跳ね返しました。只今鶴ちゃんは、まるで平ぐもの様にうつぶせに畳の上に押し伏せられ満ちゃんが背中の上に、どっしりと馬乗りに跨った所です。鶴ちゃんは頬を床に押し付けられて全く動きがとれません。ああ、鶴ちゃんは、可

哀そうに押しつぶされそうです。スカートがめくられて細い線香の様な素足がむき出しになっています。鶴ちゃん、がんばれ」

聞いていた皆は思わずプーツと吹き出ししました。

「やっぱり満ちゃん、強いわね」

「とうとう跳ね返してしまったわ」

「もう鶴ちゃん、勝てっこないわよ」

「あたりまえよ、満ちゃんに乘られちゃ、おしまいだわ」

「鶴ちゃんも、おだぶつね」

等と得手勝手なことをいっています。すると満子が顔を上げて

「いやねエー、私が肥ってるからって、皮肉をいわないでよ」

と苦情をいいます。

「ああら、ごめん、ごめん」

「ひどい人！」

「ね、満ちゃん。同じ押え付けるんなら、押え込みをした方がいいんじゃない？」

「そうよ、さっきまで鶴ちゃんに押え込みされてたんだから、今度は満ちゃんが押え込みしなくちゃ」

「賛成、矢張り押え込みが一番よ」

なみ居る連中は私と同じく押え込みが大好

きですから、口々に満子をけしかけて鶴代を押え込ませようとしています。

「そうね、じゃそうするわよ」

勿論満子とて異存のあらうはずはありません。

「鶴ちゃん、仰向けになるのよ」

首筋を押えていた右手をゆるめると今度は肩え手をかけてぐっと引き起します。其の勢で鶴代の肢体は、満子の膝の間で、くるっと半転して仰向けになりました。

「さあ、押え込みするんだから観念してよ」

満子はすかさず鶴代のやせた二の腕のあたりへ、太い大きい膝頭をのせかけると、ぐっぐっと横に張ったヒップをずらせて上の方ににじり上って行きます。鶴代のおごの尖った細長い顔が、むっちりと盛り上った満子の太ももの間にはさまれて来ます。

「まあッ！ くやしいわ」

といったものの鶴代は体格の相違で、まるで抵抗も出来ません。唯細い足だけが畳をドスンドスンいわせて、中に泳ぐばかりでした。

そうしている内に、満子は鶴代の細くくびれた喉首の真上に、まともに、ずっしりと跨って完全な押え込みの姿勢をとっています。

「さあ！ もう動けっこないわよ」

見れば鶴代の顔は、肉付きのよい満子の内股の間に深くはさみ込まれて頬を両方からギューッと絞められています。

それだけでなく鶴代の顔は細長いのに、両方から満子の太い太ももで絞められてはたまりません。青白い双頬が弾力のある内股に、ぐいっと食い込んで、その間からのぞいている彼女の顔は、あわれな位に細く見えるのです。それでも、鶴代は何うしようもありません。六〇キロの全身の重味で喉首を絞められる苦しさを彼女は、眉をしかめ唇を食いしばって我まんしています。

二人の姿をかたずを呑む思いで見つめていた私は、一種異様ないい様もない魅力を感じて、全身がふるえる程の感興に身をまかせるばかりでした。体力的に強く逞しい若い女性が弱々しい非力な同性を力づくで屈服させる光景の何とまあ素ばらしいことでしょう。女同志の弱い者いじめには、あやしい程の美しさがあふれている様です。

やがて鶴代は、完全な敗北を認めたのでしようか

「降参よ、あたし負けたわ」

といいました、あわてた私は大声で

「あらだめよ、未だテープが残ってるから、なくなるまで続けるのよ」

録音テープは回転を続けていますが、未だ約三分の一位は残っています。

「そうよ、そうよ折角録音してるんだから、おしまいまで続けてよ」

「もう、しばらくのしんぼうだわ」

「いいわね、それまで降参はおあづけよ」

皆にそうまでやいやいいわれては、満子は鶴代を放してやるわけにも行きません。

「もう一度インタービューしましょうか？」

アナウンサーの彼女は又もマイクを満子に差し出しました。

「満ちゃん、跳ね返した気持はどう？ 嬉しいでしょう」

「えっ」

「さっきと、今の押え込みと、どっちがいい気持？」

「矢張り押え込みがいいわね」

「そうね、女は押え込みが大好きよ。もう満ちゃんの勝ちだわ！」

「ええ、私ふとってるから此んな時は得よ」

「ハハ……」

皆は声を立てて笑っています。

「ねえ鶴ちゃん、思い切って跳ね返す元気な



い？」

「あら私だめよ」

「あらあら、元気なのね」

「だって……」

そこで私は勝った満子にいました。

「ね、満ちゃん、いいこと教えて上げようか？」

「あら、いいことって何なの？」

満子は顔を上げて、瞳を輝かせています。

「鶴ちゃんをギュッといわせる手よ」

「まあ！ 教えて！」

満子とて弱いものいじめには人一倍興味がありますから、嬉しそうに促しました。

「じゃあ教えて上るから、私のいう通りにするのよ」

「いいわ、分ったわ」

「そう、じゃあ、先ず両手を前にのばして！」

私が真似をして見せると、満子もいわれた通りに腕を伸ばしました。

「両手を鶴ちゃんの頭の後ろへかけて、指と指を組み合わせるのよ」

「こうですよ？」

「そうそう、それでいいわ」

「それから」

「それから身体を真すぐに起こして鶴ちゃんの頭をうんと持ち上げるのよ！」

「あら、こう？」

満子は、私のいう通り素直に鶴代の後頭部をぐいっと持ち上げるのです。すると内股の間にきっちりとはさみ込まれていた鶴代の顔は、首のあたりは全然動けませんから、うつむき加減になり、尖った顎から唇、鼻の辺までがいやおうなしに、たくれたスカートの下で、満子の下腹部のあたりへギュッと押しつけられてしまいます。

「ううっ！ ああッ！」

びつくりしたのは鶴代です。唇と鼻を下腹部で蔽われては第一呼吸も出来ないばかりか声を出すことも思うにまかせません。忽ち眼を白黒させて、苦しそうな呻き声を出すのがやっとでした。

「あっ！」

満子は満子で鶴代に劣らず、きもをつぶす思いだったでしょう。短く叫んで、あっという間に相手の頭から両手を放しました。

「ハハ……もう止したの？ だめね、もっとギュッとというまで続けるのよ、さあもう一度よ」

「だってびつくりしたわ、くすぐったいじゃないの」

「それ位我まんするのよ、バカね！ 馴れれ

ばすごくいい気持ちだわ？ さあもう一度！」

「そう？ じゃやって見るわ」

満子はこりた様子もなく、又も両手を伸ばして鶴代の頭をぐいと持ち上げるのです。ひどい目に会ったのは鶴代でした。唇から鼻のあたりまで、顔の下半分を満子の弾力のある下腹部でびったりと押しつけられて、息は出来ず声も出せず散々の状態です。

「う……うっ！」

かすかな呻き声と共にスカートの下から僅かにはみ出している鶴代の細い顔が、普断の青白さとは逆に真赤になりました。もう彼女は居ても立っても居られない程の苦しさに耐えられなくなったのでしょう。細く長い脚がドタンバタン烈しい音を立て乍らのた打っています。心なしか鶴代の大きい瞳は血走って涙ぐみ、こめかみのあたりには青い静脈がぶつくりとすけて見えている様です。やっと満子は鶴代の頭を放しました。見れば鶴代はあわれにも顔全体をべったりと脂汗に濡らせ乍ら

「ハア、ハア、ハア」

肩を喘がせて早い呼吸をくりかえしています。もう鶴代も半ばグロッキーの様です。録音テープも残り少なになって来ました。

「ね、満ちゃん、今度はいいよ、最後のとどめをしておしまいにしない？」

「あら！ 最後のとどめって顔に乗るの？」

「きまってるわよ！」

「だって私そんなこと初めてよ。いいかしら？」

「いいわよ、ものはついでよ。やっちゃえ、やっちゃえ」

「まあ！ あきれた」

「私だってしたんだから貴女だって出来るはずよ。さあ、もう一步前へ出るの」

「そう？」

満子は、いわれるままに、こわごわヒップを浮かせると膝をずらせてにじり上りました。

「そうそう、それでぺたっと跨るのよ！」

「ええ、いいわ」

満子は意を決した様に眼をつぶって、ドシッと鶴代の顔の上に跨りました。タイトスカートの裾が落ちかかって来ましたから、満子の巨大なヒップに下敷かれた鶴代の細い顔は全く見えません。それでもスカートの下からくしゃくしゃに乱れた髪だけがのぞいている所を見ると、何も見えないスカートの奥の方で可哀そうに非力な鶴代が顔を大きい満子の

ヒップにびったりと敷きつぶされ、口と鼻を薄いパンティー一枚の柔い肌にギュッと押しつけていることは間違いありません。今度は呻き声すら聞えない様です。満子はと見ればせっぱつまった世にも悲壮な表情で仰向いています。二秒、三秒、四秒……。

「う……むっ！」

苦しきまぎれの呻き声もれた所で満子はハッとした様にパッと鶴代の顔の上から飛びのきました。もう此れて完全に二人の勝敗はきまりました。ハンディキャップを付けても、デブちゃんの満子が細い鶴代を負かしたのです。見ていた連中も、二人のすさまじさに些か圧倒されて、しばらくは酔った様に声が出ませんでした。鶴代は、可成り参ったらしく乱れたスカートをなおす気力もなく、しばらくはうつぶせたまま肩で息をしています。

「とうとう満ちゃんが勝ったわね」

「ほんと最後のとどめって、すごかったわ」「すごいわ、あれじゃ鶴ちゃんだって負けるわね」

「いやよ、もうそんなこといいっこなしよ」

満子は赤くなってスカートをかき合せて、太い脚の上にかぶせるのです。そこで丁度録音テープが終わりました。

皆は巻きもどすのもどかしく、早々に再生に切りかえるのです。サーッというかすかな音につづいて

「さあ、いいわよ、満ちゃん寝ころんで！」

と私の声が飛び出して来ます。

「いやね」

と満ちゃんの声、仰向けになるかすかな物音まで聞きとれて、目には見えませんが、さっきの出来事が、そのまま手に取る様に聞えて来るではありませんか。さあ！ 皆は、キヤー、キヤー嬌声を上げて大喜び

「ワッ！傑作！」

「まあ、すごいじゃないの？」

「イヤーッ、すてき！」

まるでちの巣をつついた様に大騒ぎでした。此のテープは初めの約束通り賞品として満子が持って行き今でもそのまま保管しています。

私も後になってからは同じ録音はもう二度と出来ないのですから、満子に進呈したことが悔しくてたまらない気がしました。出来ることなら、女子寮の思い出に私が後々までとって置きたかったのですが、残念乍ら後の祭りです。

そんなことから、私は私で例の絹子を誘っ

て来て押え込みの録音を取ることにきめました。成る可くならはたからやいやいやいわれたり、ひやかされたりされなくて絹子と二人だけの方がよいと思いましたので、そうしたチャンスを待っていました。私等の女子寮では何時も共同生活をしていますから、そんな機会は殆どありません。それでも気長に待つたかいがあつて、或る日のこと遂に念願の録音をテープにおさめることに成功しました。でも絹子が恥しがりますので、此ればかりは誰にも聞かせたことはありませんし私と絹子以外は誰も知らないのです。今度の場合は最初からハンディキャップなどは付けず、尋常に組み打ちを行ったのですから、終始体力的に優れた私が腕力の劣った絹子を一方的に組み敷いて弱い者いじめをしている恰好になっています。初めから終りまで約三十分間、殆どが私の大好きな押え込みの録音ですから、誰も居ない折を見はからって、こっそり音量をしばらく乍ら聞いていますが、私の声、絹子の声、脚で畳を蹴る物音、短かい悲鳴、苦しそうな呻き声などが入りまじって、それだけでも思わず興奮してしまいます。

若し出来ることなら皆様にもお聞かせしたい気がします。

(終)

女体解剖異聞

高野原美

皮下脂肪が女体特有の豊かな肉体の曲線を描き、輝くような全裸の女性の美しさを形づくっている。宇野さんの告白でもみられるように、その女体は誇りであり、異性の眼前にその姿を曝しつつ、特に、その女性の特質である下腹部を切り開かれ究められたいという願いは、自己の肉体を愛する女性にありては自然な姿であろうと思うのです。

私は、今日まで『切腹』と云うかたちをかき、女性のマゾを追求し、悲愴美を愛してきたのですが、受け身の性としての女性の本性を考える時、その肉体を傷付け汚すことによる異常美は女体解剖という形を取るのが、最も自然な姿であると思うに至ったのです。

生体で、またある時は、死体として、好奇の眼で見られながら、女として何ら抵抗することとも出来ず、男の非情な手によって、脂肪によって形成された、神秘の美が破壊され、次第に異常美がকাশし出されて来る。無抵抗と云うところに女体解剖の異常美の特質があり、女性のやるせなさ、ただ男の手に、その肉体切開の全ての主導権が握られている点が、より女性のマゾ心理を馳きたてているように思われる。

私は、今日まで学問という立場で多くの女体解剖をみ、内臓をしらべてきました。しかし、腹部マゾを満足させ、自分自身が楽しむ解剖プレイや空想は学問の世界にない楽しみ

があります。

さきに女体解剖マニアのため、資料の一部を発表したが、その後、面白い文章を読む機会をえたのでマニアのため発表し、その楽しみをともに味わいたいと思うものである。廻廊から廻って来て、果心はふいに供の法師を制し、じぶんも立ちどまった。庭上の言語を絶する光景を見たからである。

広い庭の白洲は、朱色に染まっていた。それは夕焼けの色ばかりでなく、血のせいであった。

七つの巨大な俎様の板が置かれ、そこに一糸まとわぬ女があおむけに大の字になっていた。四肢は朱の紐で、板にゆわえつけてあ

た。そのうち四人が、のどぶえから下腹部まで切り裂かれて、真っ赤な腹腔をひらいていた。あとの三人はまだ五体完全であったが、しかし、二人は、すでに死んだよううにうごかなかったし、もうひとり、たしかに正気を失った虚ろな眼を、赤い夕焼けに見ひらいていた。

凄惨なる壮観である。……

関白秀次は、すぐに唇をひきつらせて笑った。庭をあででさした。

「女の腹の中のややを見とうてな」

果心居士は、もういちど庭を見た。腹を裂かれた四人の女の蛆のまわりには、血と臓物がぶちまけられていたが、その中にたしかに胎児らしいかたちが見えた。そういえば、ほかの三人の腹部は、むっちりと盛りあがっている。

……おそらく合図のあるまで制せられているのである。その向うには、この虐殺を行うのに大袈裟というべきか、当然というべきか、具足をつけた武士が二人、血まみれの陣刀をたてたまま、黒い死神のごとくひかえていた。

(山田風太郎「忍法おだまき」)

オール読物十月号)



豊臣秀次の有名な妊婦の腹を裂いた故事を題材に、心憎いほど、その悲惨な妖美を描いている。腹をすでに断ち割られた女性と、未だ美しい裸身を蛆に縛られ、運命の刃が深々

と腹に突っ立つのを待つ女性を並べ錦絵のような状景を描写している。

私達としては、開腹を待つ妊婦の生贄としての心理が少しでも、描写されていれば、どれ程たのしかったことだろうと思われる。

また秀次の妊婦腹裂きの心理を

「ふたたびと来ぬ人生に、わしは人間というものゝの極限、ぎりぎりの魔相をみておきたいのだ」と語らせている。これとてもなかなか味わいのある文章であると思う。

中国古代の書物を読んでいるとよく妻が、また女性が、自分の肉体を食前に供するとう話が出てくるのに驚く。女体解剖の進んだかたちとして取り上げてみたい。

奇ク誌上の「十三人の女死刑囚」でもグラマの美女が食卓にのぼり驚いたのですが、一種の女体解剖として今後の面白い素材になると思うのです。

北川靖「新・性の残酷物語」に、『食用に供された女』という章がある。その中から、一、二拾いだしてみたい。

明の末、河北五省が大飢饉にみまわれた時自分の亭主のために、自分の若々しい肉体をこともあろうに、食用に供するため料理店に売った。ある旅人が、その料理店の前まで来

ると、大きな組の上に、一人の美しい若い女が、素裸で大の字にしばらくいられた。それで事情をきき、あわれに思ったので解放してやろうとしたが、女は何をカン違いしたのか、操を売ろうとは思っていない。私は食用に身体を売ったのだからと喜ばない。そこで主人は、烈火のごとく怒り、原文は次の様にかかれていた。

「旅人をおしのけ、つきとばし、手にもった包丁をふりかざし、力まかせにつかまで通れとばかりに女の腹につきたてた。恐怖で氣を失っているならとも角、生きてびんぴんしている生身だから、いくら強いことをいつていても、包丁をつきたてられてはたまったものではない。思わず、ギャーツノとひと声さけんだが、それでも、苦痛に顔をゆがめながらも、口を真一文字に閉じて堪えている。お

やじは、なさけ容赦もなく包丁を動かしてゆく。女は腰をくねらし、腹をねじり、血しぶきをあげて女もおやじも血だるまである。女は時々悲鳴をあげて、断末魔のさけびをあげるが、最後まで、助けてくれとはいわなかった」

その他、『食用として客前に運ばれた妻』と題して、客に無礼をはたらいた妻妾を、即刻化粧して飾らせ食用として台にのせて運ばせたと云う話等を記している。

又、三国志に、玄德が呂布に攻められ逃げのびる時、獵人の劉安が食前に供するものがなく、妻の肉を狼の肉と称して食べさせもてなしたという話がでている。

古代の中国においては、女性は一箇の人格として認められず、心身ともに夫に捧げることを道としたようである。妻妾が自分の肉体を食前

に供する話が随所に見られる。

数年前だったが、某フオート・グラフに銀の盆に野菜とともに屈んで伏せたグラマーが、腰に大きいフォークを突き立てられている写真がのつてたのを記憶している。

好奇の多くの男性の眼の前に全裸の姿を横たえ、この肉感的なバラ色の肌にフォークを突き立てられ、どこから食べようかとナイフは、皮膚の上を探りながら移動する。生きたまま銀の皿の上に縛りつけられ、未だ明瞭な意識は生贄とされる自分の肉体をあわれむとともに、サディスティックな眼を、今から料理しようとする女体の上に投げかけている男を見つつ、神秘的な女体を誇る心理は、マゾ女性最高のものではなからうか。解剖台でなく花やかな飾られた白布の食卓を背景にしているだけに面白さが感じられる。

〔代理部新版分譲品一覽〕

全裸脚拳姿態

大手札三枚一組 三〇〇円
長野良子 略号 (てい)

全裸アグラ縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
長野良子 略号 (てへ)

全裸屈伸縛り

六尺禪の変形姿態

大手札三枚一組 三〇〇円
長野良子 略号 (てほ)

蹲踞と拍手

大手札二枚一組 二〇〇円
長野良子 略号 (てり)

鬼面と接吻する

強烈エビ責め

大手札三枚一組 三〇〇円
松本アサ子 略号 (まと)

裸身に羞らう

大手札三枚一組 三〇〇円
松本アサ子 略号 (まつ)

女賊捕縛

女賊処刑

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号 (へい)

全裸緊縛姿態開陳

大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号 (ゆり)

鼻をいたぶる

遠藤百合子	略号(ゆは)	三〇〇円
大手札三枚一組	略号(ゆは)	三〇〇円
浣腸をする女		
遠藤百合子	略号(ゆか)	三〇〇円
大手札三枚一組	略号(ゆか)	三〇〇円
バンドを脱ぐ女		
遠藤百合子	略号(ゆお)	三〇〇円
大手札三枚一組	略号(ゆお)	三〇〇円
月経帯のまま縛り		
遠藤百合子	略号(ゆす)	三〇〇円
大手札三枚一組	略号(ゆす)	三〇〇円
豊満を切り裂く刃		
長野良子	略号(ほふ)	三〇〇円
大手札三枚一組	略号(ほふ)	三〇〇円
鎌腹を切られる女		
愛川悦子、田中芳代	略号(らく)	三〇〇円
大手札二枚一組	略号(らく)	三〇〇円
咽喉笛を刺される女		
愛川悦子、田中芳代	略号(らみ)	三〇〇円
大手札二枚一組	略号(らみ)	三〇〇円
血紅使用 斬られる女		
絹川文代	略号(らふ)	七〇〇円
大手札七枚一組	略号(らふ)	七〇〇円
雲斎の相撲フンドシ姿		
東浦ひかる	略号(ろみ)	三〇〇円
大手札三枚一組	略号(ろみ)	三〇〇円
凄んだ女賊スタイル		
大塚啓子	略号(へに)	三〇〇円
大手札三枚一組	略号(へに)	三〇〇円
バンド、ゴム見せ		
東浦ひかる	略号(へみ)	五〇〇円
大手札五枚一組	略号(へみ)	五〇〇円
浣腸を施される女		
大塚啓子	略号(ちら)	三〇〇円
大手札三枚一組	略号(ちら)	三〇〇円
煙草責めの裸身		
大塚啓子	略号(たく)	三〇〇円
大手札三枚一組	略号(たく)	三〇〇円
淫らな長髪の流れ		
長野良子	略号(ろも)	三〇〇円
大手札三枚一組	略号(ろも)	三〇〇円
ふり乱す長髪の悶え		
長野良子	略号(ろめ)	三〇〇円
大手札三枚一組	略号(ろめ)	三〇〇円
縄目に悶える夫人		
関谷富佐子	略号(ほく)	三〇〇円
大手札三枚一組	略号(ほく)	三〇〇円
髪を引き回される夫人		
関谷富佐子	略号(ほむ)	三〇〇円
大手札三枚一組	略号(ほむ)	三〇〇円
自ら施す浣腸		
大塚啓子	略号(ちぬ)	三〇〇円
大手札三枚一組	略号(ちぬ)	三〇〇円
浣腸器を弄ぶ女		
大塚啓子	略号(ちり)	三〇〇円
写真の中に悶える		
大塚啓子	略号(けよ)	四〇〇円
写真に埋れた裸女		
大塚啓子	略号(けお)	四〇〇円
大塚啓子	略号(けお)	四〇〇円
フンドシ姿の魅力		
栗本ミチ	略号(ふの)	三〇〇円
大塚啓子	略号(ふの)	三〇〇円
フンドシ姿の羞らい		
栗本ミチ	略号(ふへ)	三〇〇円
大塚啓子	略号(ふへ)	三〇〇円
フンドシの前後左右		
栗本ミチ	略号(ふな)	四〇〇円
大塚啓子	略号(ふな)	四〇〇円
フンドシの変った姿		
栗本ミチ	略号(ふに)	三〇〇円
前開き、ゴムオシメカバー		
大塚啓子	略号(しま)	一〇〇〇円
前開き布製防水オシメカバー		
大塚啓子	略号(しな)	一〇〇〇円
全裸の切腹悦楽(1)		
大塚啓子	略号(ひと)	四〇〇円
全裸切腹悦楽(2)		
大塚啓子	略号(ひと)	四〇〇円
乳房 しぼり		
鼻責めと緊縛		
木馬 責三態		
椅子責めの果て		
哀婉 血紅切腹		
双胸の強調縛り		
動感海老責地獄		
色禪の開股縛り		
鼻責めのアップ		
膨満正面縛り		
血紅切腹絶命態		
血紅美女の切腹		
オムツ着用フォト		
マニヤ全裸緊縛フォト		



虫宅

淹れい子画
寸 鬼 六 作

続篇〔第三回〕

悪魔の二次会

地獄屋敷の密室内での静子夫人と京子によるすさまじいショウは
ようやく終った。

ぎっしり埋めつくしているやくざとズベ公の間に、その強烈な刺
戟による吐息と興奮が渦巻きあがる。

川田が村瀬宝石店の息子と娘をワナにかけるべく出かけているの
で、川田のかわりに、森田が鬼源と組んで、人形使いの役をやり、
すこぶる御機嫌であった。

静子夫人と京子は、柔かい絹布団の上で、折り重なるようにして
ぐったりと倒れ、揃って失心したよう身動きもしなかった。後手に
縛りあげられたままの二人の美女は今までの心臓もはりさけるばか
りの屈辱の演技に、もう身も心も、ズタズタに引きさかれた気分な
のであろう。切なげに白い柔軟な肩と乳房で息づいている。

そんな哀れな二人の美女に向かって、やくざとズベ公は大声で擲
揃しつづける。

「すばらしかったわ。あたい達も、何だか、身体がカーと熱くなっ

「ちやった」

「奥さんも京子嬢も、全くうまいもんじやないの。身体の動かしがたなんて、なかなか大したものだわ」

田代もあまりにも真に迫ったショウに、ただ舌を巻き、痴呆のような顔つきになってしまっている。

「すごいショウだ。なるほどな。こいつは客がたまげるぞ」

と、一日で、ここまで二人の美女を調教した鬼源を田代はほめる。

鬼源は田代にほめられて、ほくほくした気分になり、

「何しろ、二人とも、飛びきり上等の玉ですからね。わっしとしても、仕込み甲斐があるというもんですよ。ところで、これから、どうします。床を汚したお仕置を致しましょうか」

鬼源は、へっへっへ、といやらしく口を曲げ、もみ手するようにいう。

「まあ、今夜は、それ位にしておこう。あまり一度に遊び過ぎて、大切な商売ものをガタガタにしちゃ大変だからな。とにかく、遠山夫人を俺の寢室に、京子嬢は親分の寢室に、今夜は、そういう事にしようじゃないか。ど

うだい、親分」

森田も、満足した表情で、

「今度は本物で責めようというわけですね。

へっへへ、たしかに、こんなすげえショウを見せられて、このまま一人寝するわけにやいきませんや」

と笑い出す。

じゃ、頼んだぜ、と田代と森田は、寢室へ二人の美女を運ぶようズベ公達に含めて、ウイスキーを一息に飲みこみ、ふらふらと立上り、鼻唄をうたいながら外へ出て行く。

銀子と朱美が、立上り、布団の上にぐったり身を倒している静子夫人と京子の肉づきのいい乳白色の肩に手をかけて、ひっぺ返すようにぐいと上体を起させる。

悦子の手で、美しくセツトされた艶々しい黒髪も、今は、しどろに乱れ、静子夫人は、銀子の腕の中で、放心したように小さく口をあけ、ぐったりとなっている。

その美しい静子夫人の忘我放心の表情を銀子は、しげしげと眺めながら、

「ふふふ、奥様、大分、参ったらしいわね。

しっかりしなきゃだめよ。社長さんが親切にも、今夜のとどめをさして下さるそうよ。さあ、立って立って——」

銀子は、静子夫人の腰に両手を廻すようにして、立上らせるのであった。

朱美も、ぐったりなっている京子の肩を揺さぶりながら、

「親分がお待ちかねよ。さ、元気を出して」と引き起しにかかり、

「おっと、そうそう、こいつを取ってあげるのを忘れていたわ」

その途端、京子は、ふと我に返ったようにパツと顔が朱に染まり、泣きじゃくる。

「今度は男役じゃなく、女として、森田親分と対抗出来るのよ。嬉しいでしょう。さあ、早く立つんだよ」

朱美は、京子の縄尻をとって、無操作に引き起した。

「さ、歩きな」

静子夫人と京子は、銀子と朱美に縄尻を取られ、背を押されて、よろよろと土蔵の入口に向かって歩き出すのだったが、二、三歩歩くと、腰がぐぐぐと、ふらふらと、その場にくずれかかってしまう。

「何をもたもたしているんだよ。しっかり、お歩きたら」

銀子と朱美がうしろから、手きびしくどなり、二人の美女の盛り上った丸尻を足で蹴

りあげるのだった。

再び、立上って歩む静子夫人と京子は、途中でハッとして立止る。

その辺に腰を下ろして飲んでゐるやくざ達の中に、美津子と桂子があぐら縛りにされて坐らされている。二人とも、鼻まで隠れる猿ぐつわをかまさまされて、涙のにじんだキラキラする黒眼で悲しげに静子夫人と京子を見ているのだった。

「あつ、桂子さん」

「美、美っちゃん！」

夫人と京子は思わず叫んだものの、次にはハッと顔を横へ伏せてしまう。

今まで悪鬼達の手で演じられていた血も凍るような演技を、この二人の乙女に目撃されていたという情なさ。

「美っちゃん。お、姉さんを許して、許してああ」

京子は、真赤になった顔を横に伏せながらのどをつまらせるようにしている。

「ブツブツいわず、早くお歩きたら」

朱美に、どんと背中を突かれ、京子は、つんのめるようにして歩き出す。

美津子の横に坐って、ウイスキーを飲んでいた吉沢は、口元を歪めて立上り京子の傍へ

近寄つた。

「へっへへ、美津子の事はすべて俺に任しておきな。今夜、優しくすませてやるからな。それより森田親分に充分サービスする事を考えるがいいぜ」

京子は、卑劣な吉沢の顔に唾でも吐きかけたいような衝動にかられたが、すぐに朱美に背をつかれ、よろよろと土蔵の入口に押し立てられて行く。

吉沢は、笑いながら、あぐら縛りにされている美津子のもとへ戻り、

「さて、お嬢さん。俺達も、そろそろ寝室へ行く事にしようか」

狂乱の静子夫人

静子夫人は、田代の寝室へ、京子は、その隣の森田の寝室へと、ズベ公達に引き立てられて行く。

田代の部屋は、優雅なつくりの日本間である。十帖の間の中央に、豪華な絹布団が敷かれてあり、真新しい青色と赤色の枕が、ぴったりと寄り添うようにして布団の上に並び、それが、ピンク色の蛍光灯に映えて、妙に艶めかしい。

田代は、花梨の卓の前で、あぐらを組み、

チビリチビリ、ウイスキーをなめつつ、そうした光景を眺め、静子夫人の到着を待っていたが、銀子と悦子に、静子夫人が引き立てられて来ると、

「待ちかねていたよ」

と、うきうきして立上り、これは、チップだ何枚かの千円札を銀子に渡す。

こりゃ、どうも、と銀子は、ペコリと頭を下げ、

「この奥さん、どのへんにつないどきましようか」

と、まるで、犬か猫を連れて来たような口調でいうのだった。

田代の指示を受けて、銀子と悦子は、ともすれば、その場に身を沈めようとする静子夫人を追い立てるようにして、床の間に押し上げ、ペタリと尻モチをつかせるや、なれた手つきで左右から夫人の両肢を曲げさせ、あぐらに組ませる。交錯させた両足首を縛りながら銀子は、静子夫人の美しい体をまじまじと見て、

「ふふふ、だけど、全く上手に剃りあげたものね。」

その言葉に、夫人は反射的に顔をそむけ、耳たぶまで赤くするのだった。

左右に割れた太腿の筋肉が、たまらない羞しさと口惜しさに、時折、ピクピクとケイレンするようである。

静子夫人をがっちりとおぐら縛りにしてしまった銀子と悦子は、二人がかりで、夫人の顔に寝化粧をほどこし、乱れた黒髪を櫛ですきあげる。

美しく化粧された静子夫人を悦子は満足げに眺めて、夫人のあごに手をかけ、ぐいと顔を上へ持ちあげるようにして、ピンクの口紅を舌でしめしつつ、夫人の唇にひき始める。

静子夫人は、まつ毛の長い切長の瞳を固く閉ざし、悦子や銀子にされるがまま、もう悪あがきはせず、一切を放棄した妙に色めかしい美しさがそこにあった。

悦子は、静子夫人の頬に、つけぼくろまで描いて、

「はい、お待ち遠さま。あとは、社長にお任せするわ」

銀子と悦子は、田代の肩をたたくようにして、

「じゃ、社長、充分、お楽しみ下さい。」

と笑いながら、ドアを開け、外へ出ようとして、

「そうそう社長、さっき鬼源さんがいった

のですけど、明日からの奥さんと京子の調教は、朝の九時からという事になってます。シヨウの日まであと何日もないから、ピッチをあげるそうですよ。じゃ、明日、あたいた達、九時前には、奥さんをお迎えに参りますからね、どうぞ、よろしく」

銀子と悦子が姿を消すと、田代は、ほっとしたように、ウイスキーびんとグラスを持ち床の間の柱を背に、あられもないあぐら縛りにされている静子夫人の前へ、自分も、どっかとあぐらを組み、夫人の豊満な肉体をギラギラした眼で眺めつつ、ウイスキーを飲み始めるのであった。

その酒ににこった田代のいやらしい蛇のよな眼つきを身体のスミズミに突きささるように感じ、たまらない気持になった夫人は、思わず、両腿を閉ざそうとしたが、口惜しくも、銀子の手で、固くあぐらに縛り合わされている両肢は微動する事さえも許さない。たまらないみじめさに、膝頭のみが、空しく、ぶるぶると震えるだけだった。

「ふっふふ。遠山夫人、何も今更、そんなに羞しが事はないじゃないか。よし、じゃ、僕も、奥さんのように、生まれたままの姿になつてあげよう。そうすりや、少しは気が楽

になるだろう」

田代は、そんな事をいい、ついと立上ると口笛を吹きながら、洋服を脱ぎ始める。ついで、下着もかなぐり捨てた田代は、禪一丁で再び、夫人の前にどっかと坐るのだった。

静子夫人は、田代が裸になった事で、よけいに羞恥心をかきたてられたのか、首を深く落し、嫌々と首を振っている。

「奥さん、ちよっと見てごらんよ。僕の胸毛は大したもんだと思わないかい」

しかし、静子夫人は、消え入るように首を垂れて、小さく、すすり上げている。

田代は、舌打ちして、

「見たり、見られたりするより、すぐにプレイがしたいというのだね。よく、わかった、わかった。」

田代は、卓の上にある丸味を帯びた酒びんを取って来ると、

「奥さん、この赤い酒はね、支那の有名な秘薬なんだ。赤マムシや数種の薬草が溶け合っで出来ている精力酒で、こいつを一杯、ひっかけるとモリモリとスタミナがつく。さあ、遠慮せず飲みたまえ。これは奥さんのためにわざわざ取り寄せた酒なんだから」

田代は、コップになみなみと奇妙な酒を注

ぎ、静子夫人の口元へ持って行く。

静子夫人は、身体全体を硬化させ、かたくなに、口をつぐんで、激しく首を振ったが、田代は意地になって飲ませようとする。夫人の背後へ廻ると田代は、うしろから夫人の首筋を羽交いじめにするようにして、夫人の唇の間へ、コップを押しつける。

もう静子夫人は、抵抗するすべもなく、観念して、半分、捨鉢になって、田代の押しつける赤い酒を飲むのだった。ゴクゴクとのどを鳴らして、苦しげに酒を飲む静子夫人の表情を、田代は舌なめづりをするように眺めている。

静子夫人の艶やかな白いのどを伝わって、赤い酒のしずくが一筋二筋、縄にしめあげられている豊満な乳房の上にまで流れ落ちていく。

田代は、ぞくぞくした気持で、自分も一杯赤い酒を飲み乾し、じっと、静子夫人の表情の変化を観察するのだった。

夫人の熱れ切った肉体は、次第に桃色に色づき始め、縄に固く縛しめられている両乳房は波打つように息ずき始める。

静子夫人は、間もなく、眉を寄せ、白いうなじを大きく見せて、ああ、と溜息に似た切

なげな声をあげ、狂おしく首を振り出した。

田代は、そうした夫人の微妙な変化をニヤニヤして見ていたが、

「なるほど、この赤酒は高価なものだけに、なかなかききめもあるようだ。ずいぶんとい色になったよ。奥さん」

田代は、ゆっくりと煙草をすいながら、なおも意地悪く、身悶えしている静子夫人を凝視する。

一体、どういう秘薬を使った酒なのであるうか。静子夫人は、キリキリ歯を噛み鳴らし白い背を柱に押しつけ、こすりつけして、身悶えしているのである。

甘い、陶然としたものが、身体全体をふんわりと包み出す、と同時に、熱くはてったこの肉体を、ズタズタに引きさかれないといった欲求が、身体の奥からこみ上って来るのである。眼の前であぐらを組み、ニヤニヤと眺めているだけの田代が、じれったくさえなってくる。そんな自分の気持に、ふと自意識がよみがえり、バカ、バカ、と自分の心を叱った夫人は、再び狂おしげに首を振って、激しく泣きじゃくる。

——ほんとに、私は、こんな悪魔のような男達に、本当に女の悦びを教えられたのだろう

か——

静子夫人は、口惜しく、悲しく、もう自分が何だかわからなくなってくるのだった。

田代は、ふと何かに気づいたように、傍に脱ぎ捨ててあった自分の服のポケットから、チューブ入りのクリームを取り出す。

「奥さん、これに見覚えがあるだろう。密室の中で、川田にこれを使われて、すごく喜んでじやないか。支那の赤酒で、熱くなってるその美しい身体に、こいつをすりこめば、全く鬼に金棒でやつさ」

田代は、チューブを押し、指先にたっぷりクリームを受けると、身をよじり続けている静子夫人の顔を、楽しくてたまらぬよう眺める。

「嫌っ嫌よ、お願い、田代さん、も、もうこれ以上、わたしをいじめないで！、お願いですっ」

静子夫人は、あぐらに縛り合わされている両肢をガタガタ揺すって哀願しつつけるのだったが、

「何も遠慮する事はないよ。今夜は、女の悦びというやつを骨身にこたえる程、知らせてあげるからね。そら、布団の枕元を見てごらん。テープレコーダの用意がしてあるだろ

う。今夜は、お前さんの声を、しっかり録音しておく予定なんだ。そのために、こいつは、どうしても使わせてもらおうよ」

如何に哀願したとて、許される筈はなく、如何に身悶えたところで、がっちり縛られている身、田代のするがままになるより仕方ない静子夫人であった。

「あつ、嫌、うっ、うっ、あ——」

田代は、してやったりとほくそ笑み、狂ったように身悶える静子夫人の前より立上って、テープレコーダのコードをコンセントに挿し込む。

「さあ、奥様、お布団の上へどうぞ」

田代は、夫人の足縄と柱につないである縄尻だけを解いてやる。

その途端、静子夫人は、後手に縛られたまま、ごろごろと畳の上へ転がり、のたうち回るのがだった。

「——ああ、た、たすけてっ、ああ——」

夫人は、あちらこちらへ転がり回り、気の狂いそうな全身のかゆみと戦っている。

田代は、脂汗を流して、悶え泣く静子夫人の肩を抱くようにして起すと、布団の上へ乗せ上げた。その布団の枕元には、冷たい、不気味なテープレコーダが、静かにゆっくりと

回転し始めていた。

鬼女の計画

吉沢の寝室は、小じんまりとした洋間である。奥に古風なダブルベッドがあり、すぐその横の壁にそった柱に、美津子は、吉沢の手で、一旦、立縛りにつながれていた。

「少し、飲み過ぎちゃったよ。一寸、トイレへ行ってくるからな。おとなしく待っているのだぜ」

吉沢は、そういうながら、美津子を柱に縛りつけ、口を押さえるようにして、トイレへ走って行ったのだ。

美津子は、もう一切をあきらめきった表情で、うなだれている。身にある布は、髪をしめている水玉模様のアバンドだけという白磁の裸身を、柱を背に麻縄で縛りつけられ、吉沢の毒牙にかけられるのを、このまま待つだけの運命に追いこまれたのだった。

「ああ、お姉さん」

美津子は心の中で、姉を呼び、好色な森田達の手で残忍な責めを受けているであろう姉を想像し、ハラハラと涙を流すのである。だが、寸時のうちに、自分も、姉と同じく、鬼畜のような吉沢の馴れものにならなければならぬのだと思うと、一そ、天地がひっくりかえってしまったわぬものかとさえ思う美津子であった。

五分たち、十分たったが、吉沢はもどつてこない。泥酔して、どこかで寝てしまったのだろうか、そう思うと、死刑の執行が一日のびたような、ほっとした気持ちに美津子はなった。何とかして、ここから逃げ出し、姉や、あの美しい奥様を救い出さなくては、と美津子は自分を励ますようにして、何とか縄目を脱しようとして、必死になって身体をよじり始める。だが、いくら悶えても、縄目は空しく柱にこすれて、ギイギイ音をきしませるだけだ。

「何をしてるんだよ」

いきなり、外の廊下で声がし、銀子と朱美それにマリ、悦子の四人がけわしい顔をして入って来た。

「まだ、性こりもなく、逃げ出そうとしてるんだね。そんな細腕で、吉沢兄貴のかけた縄が解けると思ふのかい」

朱美が、白眼をむいていい、ぴしゃり、と美津子の頬を平手打ちした。

美津子は悲鳴をあげて、顔を伏せる。

「吉沢兄貴が悪酔して、トイレでのびてしま

「たんだよ。一人ぼっちじゃ可哀そうだと思
って、こうして遊びに来てやったのに、また
逃げようとしているのには驚いたわ。姐さん
小娘だと思って、甘やかしちゃ駄目よ。再教
育してやろうじゃないの」

マリが銀子に向かっていった。

「そうね、と銀子は、残忍なものをキラリと
眼の中で光らせる。

この女達の恐しさを骨身にこたえるほど知
った美津子は、おろおろして、

「か、かんにんして下さい、もう決っして、
決っして逃げようとは致しません」

男達より、むしろ、こうした女達の方が残
忍で、恐ろしい人間である事のわかった美津
子は、半分、ベソをかきながら、謝るのだっ
た。

「ほんとだね。二度と逃げようなんて気は起
さないね」

「——は、はい」

美津子は、涙にうるんだ瞳を銀子に向けな
がら、うなづく。

つづいて、朱美がいった。

「吉沢さんに女にしてもらったら、一生懸命
森田組と葉桜団のために働くね」

美津子は、顔を伏せて、すすり上げる。

「どうなんだよ、返事しな」

「——は、はたります」

美津子は、身体を小刻みに震わせながら、
いうのであった。

「よし、その言葉を忘れるんじゃないよ。じ
や、朱美、明日の美津子のスケジュールを聞
かしてやんな」

銀子は、傍の椅子に坐って、煙草を口にす
る。マリがライターの火を近づけた。

朱美は、手帖を見ながら、

「えーと、美津子の予定は、午後から、桂子
と一緒に、鬼源さんの身体検査、サイズを計
るわけよ。静子夫人と京子嬢に何か支障が起
った時、あんたと桂子は、その代役を務めな
きゃならないでしょう。だから、一応、小道
具も作っておかなきゃあね」

朱美が、そういうと、銀子は、ほっほほ、
と笑いながら、

「ねえ、お嬢さん、貴女どちらがいい。男役
それとも、女役？」

美津子は、そんな言葉を、気が遠くなる思
いで聞いている。何という恐しい女達であろ
う。美津子は、両手が自由ならば耳を覆いた
い気分であった。

朱美は、手帖に眼をやりながら、更につづ

ける。

「それがすむとね、ふふふ、可哀そうだけど
お嬢さん、貴女も一旦、お姉さんと同じよう
な身体になってもうわ」

銀子が、へえーと、頓狂な声を出し、

「どうしてまた、そんな手数のかかる事をす
るんだい。せつかく、きれいに揃っているの
に、可哀そうじゃないか」

「だけど、客の中には、新鮮な乙女のそれを
欲しがるのが案外多いと鬼源さんはいうので
すよ」

朱美にそういわれて、なるほど、と銀子は
うなづく、

「それなら、なまじ、男に抱かれない前に、
つま取った方が値打ちがあるってわけだろ。
じゃ、マリ、どこか行って、よく切れそうな
剃刃を持っといで」

あいよ、とマリが出て行こうとすると、朱
美がそれを止めた。

「姐さん、勝手にそんな事してしまっちゃ、
やっぱり吉沢兄貴に悪いよ。事情を話して、
吉沢兄貴の手でハサミを入れさせるのが筋じ
ゃないか。この娘は、吉沢兄貴のスケに決っ
たんだし」

朱美にいわれて、銀子は、もっともだとう



なすく。

「じゃ、明日の朝、吉沢兄貴の気分が治ったところで断髪式だ。それから、鬼源さんの測定とこういう順序にしようじゃないか」

銀子は、事務的に、魚のように冷たい表情でペラペラしゃべり出す。マリが急に、キャツキヤツと陽気にはしゃぎ出し、

「それで、明日の夜は、そうだった美津子と姉の京子を並ばせて観賞会を開こうじゃないの」

美津子は、身

体全体を火柱のように赤くして身も世もあらず、すすり泣いている。

「どう、美津子、貴女の明日のスケジュールは今いった通りの事よ、わかったわね」

悦子は、美津子のあごに手をかけて、ぐいと美しい顔をこじ上げる。

「泣いていちゃ、わからないじゃないの、わかったわね」

悦子に頬をつねられ、美津子は、泣きじゃくりながら、

「——わ、わ、わかりました」

ズベ公四人は、そんな美津子を満足げに眺める。

「ところで、今夜は、吉沢兄貴が悪酔いなんかしてしまって、あいにくだったわね。静子夫人も京子嬢も桂子も、今頃は楽しいプレイの最中だというのに、一人ぼっちじゃ、つまらないでしょう。今夜は、あたい達が貴女のお相手をしてあげるわ」

急に、朱美が何か意味ありげな眼つきになっていい出した。

美津子は、泣き濡れた瞳を朱美に向けて、「お願いです、今夜は、今夜は美津子を一人だけにして下さい。」

美津子は、精神的な責めに、くたくたにな

って、とにかく一人になって、さめざめ泣きたいといった気分なのである。

「駄目、駄目、貴女を一人にしておく、ろくな事は考えない。私達と楽しい事して遊ぼうじゃないの」

朱美は、せせら笑うようにして、そんな事をいう。

「一体、なにをするのです」

美津子は、ぞっとするような薄気味悪さを感じながら、恐る恐る朱美の顔を見る。

「貴女、たしか、年は十八だったわね」

朱美は、相変らずニヤニヤしながらいうのだった。

美津子が、うなづくと、朱美は、

「じゃ、経験はあるでしょう。なかなかいい身体をしているし、絶対、経験ありと私は覗んでいるのよ」

何の事か、わけがわからず、美津子は、おろおろした顔つきであったが、朱美は、次に含み笑いしながら、美津子の耳もとに口を寄せ、何かささやく。

やっと、意味のわかった美津子は、けがらわしいものを耳の中へ吹きこめたような、不快な顔つきになって、のけぞるようにして顔をそむける。

「ね、した事があるでしょう。ある本によると、百人の女学生のうち、六十人は経験者だというわよ。ね、隠さずおっしゃいな」

美津子は、激しく首を振る。

「そ、そんな事、した事はありませんっ、絶対にありませんっ」

美津子は、半泣きになって、叫ぶようにいうのだった。

マリが、へへえ、と驚いた顔をつくり、

「今どき、めずらしい女学生ね。あたいなんか、十一か十二ぐらいの時に覚えてさ。家の者に見つかって、大恥かいた事があるわ」と、いったので、銀子も朱美も、声を立て笑った。

朱美は、再び、美津子に向かっていう。

「そう、貴女、本当に知らないの、なら、好都合だわ、あたい達が教えてあげるわ」

ズベ公達の考えていた美津子に対する責めは、やっぱりそれであったのだ。美津子は、

のど元に熱っぽくこみあがってくる口惜しさと目まいが起こりそうな羞しさに、全く、氣持が顛倒してしまう。

「別に、こわがる事はないよ。あたい達に任せていいのさ。葉桜団のスペッシェルサービスってわけよ」

銀子とマリは、ベッドの方へ行き、何か、ガタガタと細工を始めている。

「やめて下さい、嫌っ、そんな事、美津子、絶体に嫌っ」

泣き呼ぶ美津子におかまいなしで、朱美はくすくす笑いながら、

「何いってんのよ。貴女を、より美しく、女らしくしてあげようというのじゃないの。あたい達に任しておけばいいの。」

支度はOKよ、とベッドの方のマリが声をかけた。四本のベッドの足につながれた麻縄が、それぞれ、ベッドの四隅にとぐろを巻いている。つまり、ベッドの上に乗った者を大の字に固定するための計画であった。

「さ、皆んな、手をかして」

朱美は、美津子の足にかけられた縄を解き柱より縄尻を外す。有無をいわさず、銀子、

マリ、悦子が、美津子の身体を抱きこむようにして、ベッドの方へ引きずって行くのだ。

「嫌っ嫌っ、かんにんしてえッ」

美津子は後手に縛しめられた身でありながら、駄々っ子のように腰をひいて悶えるのだったが、四人のズベ公にかかっては、どうしようもない。ズベ公達は遂に美津子を横抱きにして、ベッドの上へほうり投げ、素早く、

後手の縄を解くと、両手を開けさせて、左右の縄につなぎ止める。

両手をバンザイした恰好に固定されてしまった美津子は、もう抵抗する氣力を失ったように、おとなしくなっていました。

「あたい達がしようとする事に、いくらさかっても無駄よ。これ以上、手数をかけると只じやおかないわよ」

銀子は、ハアハアと肩で息をしながら、いまいましげにそういい、ポケットから、白い封筒を出して、これを美津子に見せてやんと朱美に渡す。封筒の中には、二十葉ばかりの小型の写真が入っていた。昔、森田組の若い者が資金かせぎに街角で酔客相手に売りつけていたものである。

鼻先へ、それを押しつけられた美津子、ふと、それに眼をやるや、あっと小さい声をあげ、顔面真っ赤にして、視線をそらせた。

「大きく眼を開いて、はっきり見るんだよ。いう事を聞かないと、こうだからね」

銀子は、パチリとガスライターをつけ、美津子の尻のありに、それを近づける。

悲鳴をあげて、美津子はのたうち、銀子に命令されるまま、美しい瞳を開いて、朱美が差し出す写真を一枚一枚眺めるのであった。

「どう、すばらしい写真でしょう。氣に入ったのがあればいいわ。吉沢の兄さんに頼んで、そういうポーズをつけてもらってあげるから」

朱美は、写真を眺める美津子の美しい横顔をまじまじと眺めながら、楽しそうにいう。

清純な乙女の正視出来る写真ではない。耐えられなくなり、思わず、眼を伏せてしまうと、朱美は、わざとらしく、

「まあ、このポーズがいいの。貴女、中々、眼が高いわ。じゃ、これ、早速、吉沢の兄さんをお願いする事にしましょうね」

と、美津子の正視出来なかった写真を一枚一枚、銀子に手渡していくのである。

そんな風にして、二十葉あまりの写真を、

ゆっくり美津子に眺めさせた朱美は、白日夢でも見たように、ぼんやりと眼を開き、切なげに息ずき始めた美津子をしたり顔で眺めて「ふふふ、大分、お気に召したようね。これで、気分も落ち着いたでしょう。気分が落ちついた所で、そろそろ、プレイに入りましょうね。さあ、お嬢さん。」

美津子は、魔術師に催眠術をかけられたよう魂を宙に飛ばせてしまった表情で、ぼんやり天井を見つめたまま、マリと悦子の手が、

左右から両肢にかかる、今まで、必死になつて入れていた力を嘘のように抜いてしまうのだった。

「まあ、いい子なこと。そんなに素直になつていたら、あたい達も意地になつて痛めつけやしないんだよ。」

朱美は、おかしくてたまらぬように、一人でしゃべりつづけている。

マリと悦子は、美津子の足首に素早く縄を巻きつけ、がっちり固定してしまった。

ほっと息をつき、四人のズベ公は、汗をぬぐって、木製のベッドの上に、堂々という言葉がぴったり当てはまるように、大の字になつて仰臥している美しい少女を息をのむようにして凝視するのだった。

朱美は、再び、そつと美津子の耳もとに顔を近づけ、天然真珠のような新鮮な美しさを持つ美津子の横顔を眺めつつ、

「それじゃ、お嬢さん、いよいよプレイを開始するけど、覚悟は出来ているわね」

朱美に頬をつつかれた美津子、静かに眼を閉じて、かすかにうなづくのだった。

「あのおしとやかな遠山令夫人が、大声で泣き出したクリームがあるんだけど、どう、使ってみる？」

美津子は、神々しいばかりの冷静な表情になって、固く眼を閉じたまま、小さく唇を開く。

「ど、どうとも、お好きなように、なさって下さい」

閉じた美津子のまつ毛から、涙が一筋二筋美しい頬を伝わって流れ落ちる。

「そう。さすがに京子の妹だけあって、頼もしい事をしてくれるわね」

朱美は、舌を出して笑い、うしろの銀子に

向かって、

「早く、プレイをしてよ、そこのお嬢さん、やかましく催促してるのよ」

銀子は、心得た、とばかり、手のひらの中へクリームをたっぷり落とし、ゆっくりとかきまぜながら、美津子に近づく。

「お望み通り、たっぷり使ってあげるけど、こいつは外国製の高価なものだからね。こいつを使うからにや、一度や二度、スパークしたからって、責めは中止しないわよ。覚悟は

いいわね」

銀子は、そんな事をいい、朱美、マリ、悦子の三人に眼くばせして、朱美は乳房、マリは腋の下、悦子は足の裏と、責め手を配置させる。

「じゃ、始めようか」

銀子の声に、美津子は、血の出るほど固く唇をかみ、身体を石のように硬くし、天の守護を念じるように、しっかりと眼を閉じるのであった。

(未完)

私のゴム・プレイ

嵐の中のゴムマント

梅 川 幸 子

九月二十五日午前二時。

台風二十号の風雨の音を聞きながら、鏡台に奇妙な姿を写して冥想にふけている女。真紅のゴム引きレインコート。魔法使いの

ようなそのフード。鼻孔を出して口から顎を隠したゴムマスク、オレンジ色のゴム手袋、裾からちよっぴりのぞいたゴム長（農家の人がはいている表裏共茶色いゴム製の、爪先が

足袋のようになったもので、腰までとどくゴム長）をはいた足。今日は久し振りに雨が降り、それも激しい風雨になるというので、プレイを楽しみに身支度している私の姿です。雨戸を打つ激しい風雨の音を聞いているとゴムマニヤになった私の身の上を振り返って過ぎし日の事が想い出されます。

私とても突然ゴムマニヤになった訳ではありません。私は少女時代から悪い習慣がありまして、普通の人なら、それに溺れ切る事はないでしょうが、私は病的に全くそれに耽溺しました。自室で一人でいる時は、書間でさえもそれに夢中になったのです。ある日、それを母親代りの姉に見つけられ、姉は私にそ



の害毒をさしました。私は初めのうちは、姉のお説教を聞いて大人しくしていました。なかなか、その習慣をやめることはできませんでした。

ある雨の激しい夜でした。いきなり隣室から姉が入ってきて私の蒲団をはねのけ、私を引きずり起こしました。お説教されたり、叱られたりするのは慣れていますが今夜は現場を見られたのですから、どんな事になるか、私は少なからず不安でしたが、果たして体罰

れてしまいました。姉は能面のように無表情に私を折かんするのです。

それから玄関へ連れて行かれて、下駄箱を開けると私の足に大きなゴム長をはかせました。どうやら雨の中へ連れ出して何かするらしいのです。そして、たたずんでいる私の背中からすっぽりとゴムマントを着せました。

このゴムマントに就いて書きましょう。皆さん、近頃のようにゴム引雨具の全く見られなくなった現在では、よほどのゴムマニヤで

を加えられるのでした。私は不安のうちにも、何か未知のものへの期待する気持ちが、あった事はたしかでした。誓いを破って嘘をついた罰に、口には大きなマスクをはめられねまきの上から後手に縛られ、大きなマントにぐるまって、フードをまぶかにかぶり、フードのひさしを立てた私を、無表情に眺めながら、姉は高下駄をはき、番傘をさすと、私をまつ暗な雨の激しく降る庭に連れ出しました。

私が着せられたのは、このゴムマントでした。ねまきの上から後手に縛られ、大きなマスクをはめられ、大きなゴム長をはき、ゴムマントにぐるまって、フードをまぶかにかぶり、フードのひさしを立てた私を、無表情に眺めながら、姉は高下駄をはき、番傘をさすと、私をまつ暗な雨の激しく降る庭に連れ出しました。

激しい雨が音を立ててゴムマントを叩いて流れています。私は庭の真中の、物干しの柱に、ゴムマントの上から縛られてしまいました。しとどに降る雨の夜、私はこのようにして折かんを受けました。まっ暗な天地、激し

い雨、ゴムマントを打つ雨の音、猿ぐつわとしてマスクをはめられた息苦しさは、息もつまるばかりでした。

私はこうして雨に打たれて何分、いや何時間でしょうか。時のたつのを忘れていました。この夜から私はゴム引き雨具に執着を感じ、いわゆるゴムマニヤになったのです。

その後一度結婚しましたがまもなく離婚し、何年か秘密の楽しみとも縁が切れましたが、少女時代の赤いゴムマントは何時も行李の底にしまって、何処へでも私と共にいつてまわりました。時々これを出して鏡に写して着て見ましたが、小柄な私には、肩のあたりが少しきゅうくつに感じた位で、裾もひざの上までかくれ、少女時代を想い出していました。

それから、二十六、七年頃でしょうか、ゴム引レインコートが流行をはじめました。街を行く女の人の殆どが、これを着るようにな



り、早速買い求める事にしました。専門店であちこちと訪れ、赤、ピンク、茶、ねずみ、緑と五着も買いました。大きさは特大の46サイズ（普通「44」です）で、胴まわりも丈け

も非常に大きくゆったりしています。

それからゴム長。レインシューズやブーツは物足らず、農家の人が田植仕事にはいているのを二足、そしてゴムマントを買い求めました。自転車に乗っている男の人が着ているのを、よく見かける黒いゴム引きのを二着。お台所用のゴム手袋、ゴムマスク等。これらの品を身にまとい、秘密の楽しみに我を忘れるようになりました。

色々と考えていると時間がたちました。私はゴムマントを肩からすっぽり羽織り、フードをまぶかにかぶり、フードに付いている小さいベルトを締めました。鏡に写った私の姿を見ますと、私は完全にゴムマントに包み隠されています。いつもの事ながらボタンを全部行儀よくきちんとはめ、玄関に降り、戸をそっと開けて台風の荒れ狂う戸外へ出て行きました。

台風の激しい雨と横なぐりの風はゴムマン

トを激しく打ち、ばたばたと音をたてて一層歩きにくくしました。まるでホースで水を浴びせられるように、又バケツの水を頭から浴びるように、豪雨と風の中を田圃道をいつものように歩き続けました。今夜はさすがに涼しくゴム引レインコートもヒヤリと肌に冷たく、両足を包んだゴム長も冷たく感じ、ゴムマントを打つ雨の音と息をはずませる度に口にニチャニチャと吸いついたりふくらんだりするゴムマスクが、いつもの通りでした。

何度もしゃがんだり、風に体の向きを変えながらせせと田圃道を歩き、小川のはとりの草の背高く生い茂った所に着きました。今夜は背高い草がまるで生き物のように風に揺れ騒ぎ、小川の流れの音が高く聞こえています。私はいつもの様に股を少し開き、ひざを曲げ上体を少し前に屈めました。ゴムマントを打つ雨と風の音を聞きながら次第に体を奇妙にくねらせ、へなへたと雨の降りしぶく草むらの中にしゃがみ、そして寝ころんでしまいました。ゴムマントの中ではほてる体を冷たいゴム引レインコートとゴム長に包んで秘密のプレイに耽溺して、身も心も歓喜に身もだえしているのです。その度にマントが異様に起伏し、ゴムマスクが唾液で濡れ、次第に全

身汗まみれになりました。

激情のひとつきが終りました。そして、ほてって汗ばんだ体を冷やし、又次の楽しみみの為に草をふみわけて小川に入りました。ズブズブと冷たい水が次第に体をひたし、ゴム長に流れこみ、この豪雨で水かさが増したためいつもなら胸のあたりまでの深さのはずですが、気がついたらあごまで水につかっています。私は水の中で手足を動かし、バレーを踊っているようなポーズをしたり、色々と体を動かします。一度、こうして浣腸をやってみようかしら等と想像して小川の中につかっていると知らないうちに時間が過ぎてゆきました。

雨と風は依然として激しく水面を波立たせています。そして私は、今夜もいつも通りにさっき草むらの中で行なった様に、水の中で股を開いてしっかりと立ちはだかりました。いつもならひざを曲げて体をかがめると、あご迄の深さの所が、今夜は立っていてあご迄に増水しているので、うっかり体をへなへなとかがめるとズブズブと沈んでしまい、あわてて元通りに真直ぐ体を起こして立ちはだかった位でした。でも、一番深い所で私のあご迄です（今夜のように増水して）この川

幅三メートル程の小川は私のプレイにもって来いの場所なのです。それからぬれねずみの姿で小川から上り、家に帰りました。

そのままの姿でお風呂場に行き、泥水で汚れたゴム引雨具を全部脱ぎ捨てて、お風呂に入り、体を洗い、ゴム引雨具を陰干しにして蒲団に入りました。台風は夜通し荒れ狂い仲々寝つかれませんでした。

朝七時頃に、さっきの嵐の中のプレイを夢に見て、雨戸を打つ風雨の音に目を覚ました。何となくじっとして居られなくなった私は、起きるとすぐ寝衣を着かえて、またゴムづくめの姿になりました。（日に二回もプレイをする事があるので、着替えのゴム引雨具を多く持っている訳です）

お部屋の中で鏡に黒いゴムマント姿を写しながらプレイに耽溺し、それからお風呂場へ行ってぬるくなったお湯の中へ入り、首までつかってプレイに身も心も天国に遊びながら荒れ狂う台風の音を聞き、時のたつのを忘れました。

（終）

×

×

×

×

×

×

×

△かずひこのノートから▽

私はこの味覚に屈伏する

とやま・かずひこ



立党宣言

八月六日は私にとって近來における最良の日となった。

この炎暑の日の午後のひとときを、本誌の寄稿家であり、若々しく華麗な文章では第一人者のM・Y氏と銀座で歓談、つづいて、これまたかつて本誌で活躍されたY・N氏を二

人で訪問、夕刻まで同好談義に花を咲かせたのだった。

私は昭和四年秋、いわゆる『コプロ』の魅力にとりつかれて以来三十数年、つねに孤独だった。

あまりムヤミな人には語れない性質のモノだけに、このたのしみをソツとひとり胸に秘めるしかなかったからである。

しかし、現在はちがう。

K・K氏、T・A氏、K・H氏と、これに加えてきょうのお二人、いずれも過去現在、本誌で活躍した先輩ばかりだ。

私の知るかぎりでは女性のそれを美酒として崇拜する人が、これで私をいれて六人。

みな社会的には、りっぱな職業人であり、家庭人であり、それぞれ一人前以上の経済力ももっている。地位もある。

「コプロ恥づるに足らず」これからも深く静かにわが道をゆこう。

——近々に、六人でなんとなく会いましょう——と、私は音頭取りを買ってでた。

『日本コプロ党』の立党宣言だ。

音イレ

土一升、金一升といわれる銀座のビルではトイレのような金を生まない設備には、余分なスペースは割けない。

したがって、トイレは男女共用である。おまけにドア一枚こちらは水道のジャ口で、ハイスツの方も、口に入れるほうもタタミ一枚のせまさのなかで行なわれる。

マニアにとってこれは好都合だ。

六階建の貸ビルだから、数多くの事務所が

並んでいる。そのなかのひとつ、『田口パール』という真珠貿易会社は、商売柄外人客の出入も多い。

ここで、過日こんなことがあった。長身金髪のミセスではあろうか、アメリカ人らしい女性が、時々所用でやってくる。

のどがかわいたので、水を呑もうと、このトイレのドアをあけたら、ちょうどその女性もうひとつおくのトイレにはいるところだった。

それを見送りさりげなく、コックをひねって備付のコップに水を充たしていたら、やがてドアの奥からすさまじい水の音――。

その女性のご用の音であることは間違いない。

夢みる心地で、その水音にテンポを合わせこちらも水を含む。

じつにタイミングよく彼女の水の音にあわせてこちらも、のどに流し込む。よい感じだ。

リズムカルで、大胆、さわやかな彼女の水の音を伴奏に、その姿体を思い浮べながらのむ水のうまさよ！

目をつぶれば、まるで直接にそれを飲まされているような心地さえする。

『外人女性のを、いちど飲んでみたい』と畏友Y・N氏は、しみじみいったが、はからずもここで、『代用尿』で満足を得て、私はしあわせだった。

四 (おとり)

流行作家、梶山秀之の長編推理小説『四―おとり』は、我々にとって、すばらしい作品だ。

混血児をおもわせるヒロインの原田福子が二十五才の男性を一夜二万円で買い、ドレイ奉仕を楽しむ。

男を女装させ、密室で思うままの奉仕をさせるのである。

命令一下眼をつぶらせ、口をあけさせ、甘酸っぱい唾液を吞ませ、おのれの浴衣の裾をまくって、匂いを発散させながら、いきおいよく顔の上に――というのだからすごい。ドレイを攻める様子も、きわめてリアルで迫力に富んでいる。

女装のドレイ、ムチ、密室でおのれの快楽のために男の顔に乗る美しいドミナ。道具はそろっている。ことに一七七頁上段の描写に至っては、このような書物ではかつてみられなかった細かいもので、しかも直接的であ

る。同好のかたの必読をすすめたい。(興文社刊二六〇円)

ビタミン

『ヘンな趣味ね。あげてもいいけど、恥づかしいな、やっぱりやめるわ』

さっきからようやく吞ませてくれようとして、またイヤといったり、手こずらせるコ

だ。

どういうわけか私は、雨の晩というとしようにそれが吞みたくなる。

酒ではない。酒なんか足もとにも及ばないすばらしいものをだ。

今夜はめずらしい豪雨。
雨やどりのつもりで飛び込んだ新開店の新宿Oトルコで、初対面のそのコにさっきから求めつつける。

けっきよくシツコイ私の説得に負けて吞ませてくださるという。

『恥づかしいから、目をつぶってて……』

といいながら、私の顔にバスタオルをふわりとかけてしまった。

プラスチックの洗いおけを片手に、むこうのすみに消えた。

別れしなに、何気なく彼女はいった。

「疲れたので、ビタミン打ったのよ、あなたにも効くかもしれないわ」
泣かせますね。このコトバ。

渇 水

七十年来とかの渇水で、東京はサバクとなった。

水不足はいろいろの話題を生んだ。

喫茶店では、おひやお代りはお断りという。

銀座一流の喫茶店でもそれなのだ。
いつも人一倍水を呑む私は、この水攻めには弱り果てた。

商談で、T観光会社の女専務と会って、食事のあとのおひやに、じぶんの分はとっくに呑みほしていた。

お代りはできない。

ふと見れば、専務のコップには呑みかけの水が半分以上も残されている。

グイ！ と黙ってそのコップを引きよせ勝手に呑んでみせる。

「アラ！ いいんですの？」

専務は美しく笑う。

じぶんの呑みかけ。常識からいえばフケツと彼女はいいたいのであろう。

（フケツどころか、ボクはあなたの汗だってなんだってのみたいですよ）

私は無言の微笑で答えながら、彼女の呑み残しを、のこさず飲んでやった。

（これをキッカケに、いつの日か呑ませてもらうぞ）

胸のなかでつぶやく。

渇水騒ぎを利用した私の小知能犯罪だ。

ネクター

ある食品業界紙の片すみに、こんなニュースがのっていた。

菓子メーカーの「F家」では、ちかく特殊強化飲料「ネクター」を発売の模様――。

そして、そのニュースはつづけて、ネクターの名の由来についてもふれている。

ネクターは、つまりネクターールなのだそう
だ。もちろん一流メーカーのF家が我々のア
コガレのネクターールを売りだすわけではな
い。正しいイミでの神酒――から軽くヒント
を得たものにはちがいないが、スネにキズを
もつ（？）私にとってはネクターという名の
飲料の出現はショックだ。

つけ加えれば、私はF家の社長あてに我々
のいうネクターールの尊厳なる理由を参考まで

に申し出て、その大胆なネーミングに敬意を表そうかとも考えたが、間接ながらF家の系列会社にいささかコネのある私は、つまらない誤解を招くことを考えれ、いまだにその具申は差し控えている。

イミテーション

インスタント日本茶を試作したが、この宣伝企画に参画してほしいと、あるメーカーから依頼された。

こういうときは、まず試飲してアイデアをまとめることになっている。さっそくオフィスに届けられたその「粉末茶」をスタッフが集まって試飲する。

――だが、みんなの感想はかんばしくない。香りがとんで、ニガミがないのでは商品としての価値はゼロだ。

これでは、売りようがないではないか。

「まるで、馬のオシッコね」

ことし二十三になるコピーライターの京子がピシリといった。

さすがに、コピーライターだけあって表現は適切だ。

（きみのオシッコとくらべてどうだい）

私は、心のなかでそうつぶやきながら、な

にげないフリをして、卓上の食塩をパラパラと振りながら、彼女のいう『馬のオシッコ』を飲む。さも、新しい用い方を探りあてるようなフリでだ。

生ぬるさ、塩からさ、わけてもその色。

妙なもので、彼女からオシッコと命名されたそれが、さながら本物のような感じで私ののどをおりてゆく。

草むらにて

自室で原稿にペンを走らせていると、ベランダの下を、なじみの石ヤキいものおぼさんが、

「イシヤキイモオ」

と美声をあげて通る。

オバサンといってもまだ若い。

三十を少し出たくらいか、イモなど売らせておくのは惜しいくらいのイキな女性だ。

みるともなくみていると、窓のむこうの草むらに、小走りに近づいたかの女、ひよいとしやがんで姿をかくす。こうなれば、なぜ姿をかくしたかは今更くどくいうまでもないであろう。

なにげなく、散歩のフリをして、オバさんと入れちがいに、その草むらに近づく。

しかし、人目のうるさい団地のことだ。気を許してはならない。どこに、どんな目が光っているか知れたものじゃない。

野良犬のごとく、耳をすませ、声を殺してソロリと近づく。

そのスリル。

あった！ あった！

まだ、ま新しいその山！

石ヤキイモを思わせる物体は、生々しい表情で私を招く。

しかし、と、私の心のなかの理性が、これ以上の行動をゆるさない。

（一と思いに食べてやろうか）

（イヤ待てよ、あまりにそれは！）

私は迷った。

文字通り宝の山を前にして、私の眼には火花が散る。食べたか食べなかったかは読者の判断に任せよう――。

ソバのツユ

「アラ、イヤだわ、あのソバ屋さん」

S夫人が、奇声をあげた。

仕事の打合せで訪問した渋谷のAマンション六階にあるS印刷会社の社長自宅で、ちょうど時間だからとザルソバをとってくれた。

出前されてきたソバを、スグ受け取ればよいのにと、マンションぐらしの気楽さで、

『そこへ置いていってちょうだい』

と、少し不精をしたら、出前クンはおくさんのいいつけ通り、玄関のテーブルに置いていってしまった。

よくみたら、かんじんのソバツユを忘れてきている。

『困ったわ、相にくお醤油もきらして、これじゃ食べられやしない』

おくさんは困っている。マンションという名のデラックスアパートでは、ちよっとお向いからお醤油を借りて――という庶民的な気軽さはないのである。

『どうしましょう、困ったわ』

夫人は、困った、困ったの連発。

なあに、困ることはないですよ。私の知る同好の某氏は、ツユの代りに女性にたのんで器に放水してもらい、それで舌づつみを打つとか。

『いいモンですよ』

と、一度賞味するようすすめられていた。夫人さえよければここで、このチャンスを生かしてみたい。

まさか、これまでで三度しか会っていない

アイデア募集

本誌のグラビヤ写真並に口絵、代理部の分譲品等に出来る限り広い範囲の趣向を取り入れたいと思いますので、御希望のアイデアは、御遠慮なく、どしどしと御申出下さい。採用の分は写真又は原画を贈呈いたします。詳細な説明又は略画を添布して下されば一層結構です。

(編集部)

夫人に、こんなことをたのんだら、それこそキチガイか、痴漢扱いをされることだろう。致方なく、再度ソバ屋に電話して大至急タレを届けさせたが、平凡なツユなんかより美しい夫人の自らつくった貴重なタレのほうがどんなにうまかろう——と心のなかでタメ息をついたのだった。

マ
メ

『マメが痛くて』

久子は、さも痛そうに顔をしかめて、私のウデにすがる。

右足のウラにマメができて、どうしようも

ないという。

『ヨシ、ボクが治してやろう』

フェミニストNO1を自認する私は、恥づかしがる彼女の足から無理矢理、クツ下をはぎ取り、ぬい針をライターで焼き、マーキエロのフタを取って用意する。

約束の月曜日、映画の約束をしてあったので、彼女のアパートを訪れたらこの始末。

強引に上り込んで、遊び半分にマメをつぶしてやろうというわけだ。

マメは、大きくふくらんで今やパンク寸前だ。

『プスリ!』

思いきりよく、針を突きさす、わが胸の心の底に、一しゅんSの血がたぎる。

『痛タタタ……』

顔をしかめる彼女。

『ここだ……』

私は、再び、Mの心をよみがえらせ、思い切って首をタタミに近づけ、針をぬいたあとの足のウラに唇をよせる。

——決心して吸いつく、肌の異様な感触、少量ながら、マメのなかの水のようなものが、かすかな苦がみとともに、舌をはしる。

力をこめて吸ってやる。それでいくらか痛

みがやわらいだらしく、

『治ったわ』

と、やっと笑う。

思いがけなく、人間の皮の下で、くさった体液を蜂蜜のように呑んだ。それだけじやない、若い女性の足のウラまで、心ゆくまで唇で撫でてやった。

『きたないわ、ウガイをしてらっしゃい』

と、恥づかしそうに顔を赤らめる彼女に、

『ウウン、いいんだよ、それよか、赤チンぬってやろう』

舌の上にかすかにのこされた、苦がっぱさと、塩っぱさを、ソツとかみしめながら答える。

八月十六日暑い月曜日の午さがりのできごと——。



四馬孝画廊

浣腸美媚態

大中判(13×19) 印画紙焼付
三枚一組 六〇〇円

略号(のゆ)

新しい狙いによる四馬孝画伯による浣腸美の極致を最高度に描写した女性の美しさを女体浣腸に求めた芸術的作品

一、令嬢の浣腸

美しい令嬢、二人の看護婦に腕をとられて身動きできぬようにつかまえられる、真白な逞ましいお尻をあらわにされて、百CCの巨大なガラス製浣腸器が医師の手によって迫ってくる。美に対する汚辱のスリル。

二、BGの浣腸

診療所の治療室にて、花恥しきビジュネスガールが、羞らいつながら、医師の目の前に臀部をつき出して浣腸ポイズをとるという、医療という目的のために、やむにやまれぬ緊縛をうけて、浣腸の祭壇に立たされる美しい女性。

三、女学生の浣腸

セーラー服の可憐な少女が、ズベ公とチンピラ達に、よってたかかって浣腸される。華々しい美の断層の一場面。

女体切腹図絵

△時代物女性切腹▽

大中判(13×19) 印画紙焼付
五枚一組 一〇〇〇円

略号(しせ)

一、姫君切腹

美しき姫君、豊満な上半身をくつろげて、短刀をたたかた下に下腹に刺す。鮮血あふれる膝の上。

二、介錯寸前

覚悟の切腹。白裳束の娘くつろげた前をきりと九寸五分にて斬る。ふり上げた大刀まさに首筋へ

三、娘子軍切腹

城を目前にして、力及ばざるを殿にお詫びして、いさぎよく腹を切る娘子軍の娘二人。

四、早まるな

屏風をめぐらした一室で白衣の胸もあらわに腹を切る若妻。帰宅した夫の止めるのもきかず。

五、恋人の介錯

さあ早くお討ち下さい。と下腹をかき切った娘は、首さしのべて恋人の刃を待つのであった。

浣腸責め図譜

△強制浣腸五態▽

大中判(13×19) 印画紙焼付
五枚一組 一〇〇〇円

略号(しき)

一、片足吊り浣腸

片足を高々と吊られて、逆さ吊りの女の臀部に対してイルリガートルの嘴管が非情に迫ってくる。

二、いちじくの恐怖

革紐で身動きもできない女を抱えあげて、露出した尻へイチジクの怪便浣腸が挿し込まれる。

三、高圧浣腸

後手に縛られてタイルの上にころがされた女体の口には、高圧ポンプのゴム管が挿入されている。

四、五十cc硝子ポンプ

カウンタに麻縄で縛られたホステスの盛り上った双丘に狙いをつけガラス浣腸器のあくどさ。

五、大量浣腸

医局のテーブルに手足を縛られた看護婦が医師の手でイルリガートルから浣腸を施されている。

浣腸責め図譜

△浣腸緊縛五態▽

大中判(13×19) 印画紙焼付
五枚一組 一〇〇〇円

略号(しえ)

一、踊子の浣腸

両手と片足を天井から吊られて奇妙な恰好のままイルリガートルから浣腸される踊子。

二、ヒマシ油

足をバタつかせても縛られた上にヒマシ油を無理に飲まされて、このあとに来るものが恐ろしい。

三、逆さ吊る浣腸液

ガラスポンプからグリセリンの原液が腸内へ送り込まれると、激しい便意が身をさいなむ。

四、浣腸用責衣

お尻のところだけが、ぼっかりと口の開いた奇妙な責衣。液を流しつつゴムが尻に近づく。

五、両足吊り浣腸

このポーズだったら、イルリガートルの液は、もういくらでも体内に流れ込むだろう。

羞恥責め絵巻

△異色責め五態▽

大中判(13×19) 印画紙焼付
五枚一組 一〇〇〇円

略号(しい)

一、人工妊婦

女の腹はもう臨月に近いくらい膨れ上っているが、まだ水はどんどん送られてゆく。ああ。

二、浴槽の女神

後手を括った皮は、湯を吸って喰いちぎれるように痛い。男は荒縄タワシで柔肌をさいなむのだ。

三、三角木馬の責

荒縄で乳房の上下を縛られた女が三角木馬に跨がられて、呻めきながらムチ打たれている。

四、全裸の柱抱き

真白な豊満な背中から臀部にかけて、むごたらしいミミズ脹れが女に対する激しい責を物語る。

五、女体洗滌

二つ折りの奇妙な形に縛られた女体に、汚れを洗う水が手荒く注ぎかけられる。

緊縛フォト撮影の実際

塚本鉄三

K氏邸での撮影

愛読者の皆さん、御無沙汰しました。私のこの「緊縛フォト撮影の実際」というのを、本誌に発表させて貰ったのは、いつの頃か、

私自身でも、はっきりと何年の何月号からというのは、忘れてしまいました。只今手元にあります昭和三十六年十月号、新装一周年記念特大号と題した三年前の雑誌のトップブラビヤに引続いて、青刷りにて、△緊縛フォト撮影の実際▽ゴムの感触とフェチ好み—という愛川悦子さんをモデルにした一文が載っている。少くとも昭和三十六年はじめ頃から始まったのでしよう。

それ以来、事ある毎に掲載して貰い、私も下手なペンながら、この文章を書くのを秘かな楽しみにしていたのですが、関谷富佐子夫

人の撮影記事を中絶してからは、なんとなく筆を執るのが、億劫になってつい御無沙汰してしまいました。

ところが、今度はからずも、編集部から新しいモデルの都合がついたので撮ってみないかと勧められ、場所も「奇譚三十九夜物語」完結記念の座談会に使ったK氏別荘を借りれるという好条件で、お膳立てがすんでいるなど、何ら文句のつけようもなく、ようやく重い腰をあげることにした私でした。

殊に、座談会で知り合った長田実氏が、わざわざ自家用車を出して、往復のアシの確保を約してくれた上、撮影の際のライト係や道具運搬などのアシスタントの役を果たしてくれということなので大助かりでした。

あとで聞いてみると、このモデルさんは、十二月号の「SMカメラ・ハント」で辻村隆氏が「刺青の美女を縛る」めぐり合った謎の女」と題して紹介された人だそうで、期せずして、競演という恰好になってしまいました。だが、私の方は「刺青」ということに捉らわれず、山原清子というモデル嬢を一つの被写体として、虚心坦懐に緊縛写真の撮影を進行させてゆきましたので、その撮影の記録として見ていただけたらと思います。

撮影の要領

- モデル……………山原清子
- 撮影……………塚本鉄三
- 助手……………長田 実



荒縄で後手に縛られて庭石に
引き据えられた山原清子

○カメラ……マミヤレフC3型・C2型
○レンズ……セコール一〇五ミリ、八〇
ミリ、六五ミリ使用
○フィルム……ネオパンSS及び3S
○現像液……D76とD72
○印画紙……フジプロと月光
○照明器具……リフレクター・ランプ、
フラッド三〇〇W四個、スポット三〇〇W
一個、クリップ六個、コード十本。
○小道具……荒縄二本、麻縄一本、綿ロ

ープ数本。長襦袢、パンティ等。
○月 日……十月十七日午後一時より
○場 所……K氏別荘の庭園と十帖の間

○
午前十一時、喫茶オリオンに集結した私達
は、長田実氏の運転するブルーバードで和歌
山へ向いました。途中、淡輪近くのモーター
で昼食。三人ともまだお腹はすいていなかっ
たのですが、K氏邸では食事の準備ができな
いので、やむなくサンドイッチで軽く腹ごし

らえをして、目的地のK邸には〇時三十分す
ぎに着きました。

今日の天候は曇り日といったところです。

太平洋の黒潮暖流に洗われるこの和歌浦の
岬一帯は、明るくて暖かい南国的ムードが漂
っているのですが、今日は雲が低くたれこめ
ていて、心なしか吹く風も冷たく感じます。

時折り薄日が射しますが、それも長くは続
かず、樹の繁ったあたりは特に光りのまわり
が鈍いようです。室内のコンセントから十数
米のコード三本を継いで、その先に二個のラ
ンプ、フラット三〇〇Wを補助光として準備
して暗部の潰れるのを防ぎました。

この庭園は、八月二十三日の「緊縛野外撮
影会」のとき使用しましたので、大体の様子
がわかっていましたから、二千坪の庭園をあ
れこれと右横左横して探しまわる手間もなく
スムーズに撮影に入ることができました。

あの頃のいささかドギツイ太陽光線が高か
った当時と違って、今日は直射日光もなく、
やわらかい斜光線が、撮影条件をよくしてい
ます。しかし、古墳あと大岩のある洞穴附近
は極度に光線が不足していますし、それに、
そこまではコードがとても伸びそうにもあり
ませんので今日はやめにして、専ら十帖の間



梧桐に縛られた山原清子

の周辺ということに限りました。

私の見たところでは、泉水に注ぐ小川の畔にある落着いた茶室、それに重厚な感じの洋室なんか、撮影場所としては面白いと思ったのですが、時間の都合で残念ながら、割愛せざるを得ませんでした。

モデルの山原清子さんは、背は余り高くはないのですが、ぼってりとした肉づきの愛嬌のある可愛い顔立ちで好感が持てます。そして、何よりも本誌の愛読者であるという気易さが、初対面でありながら遠慮なく手加減

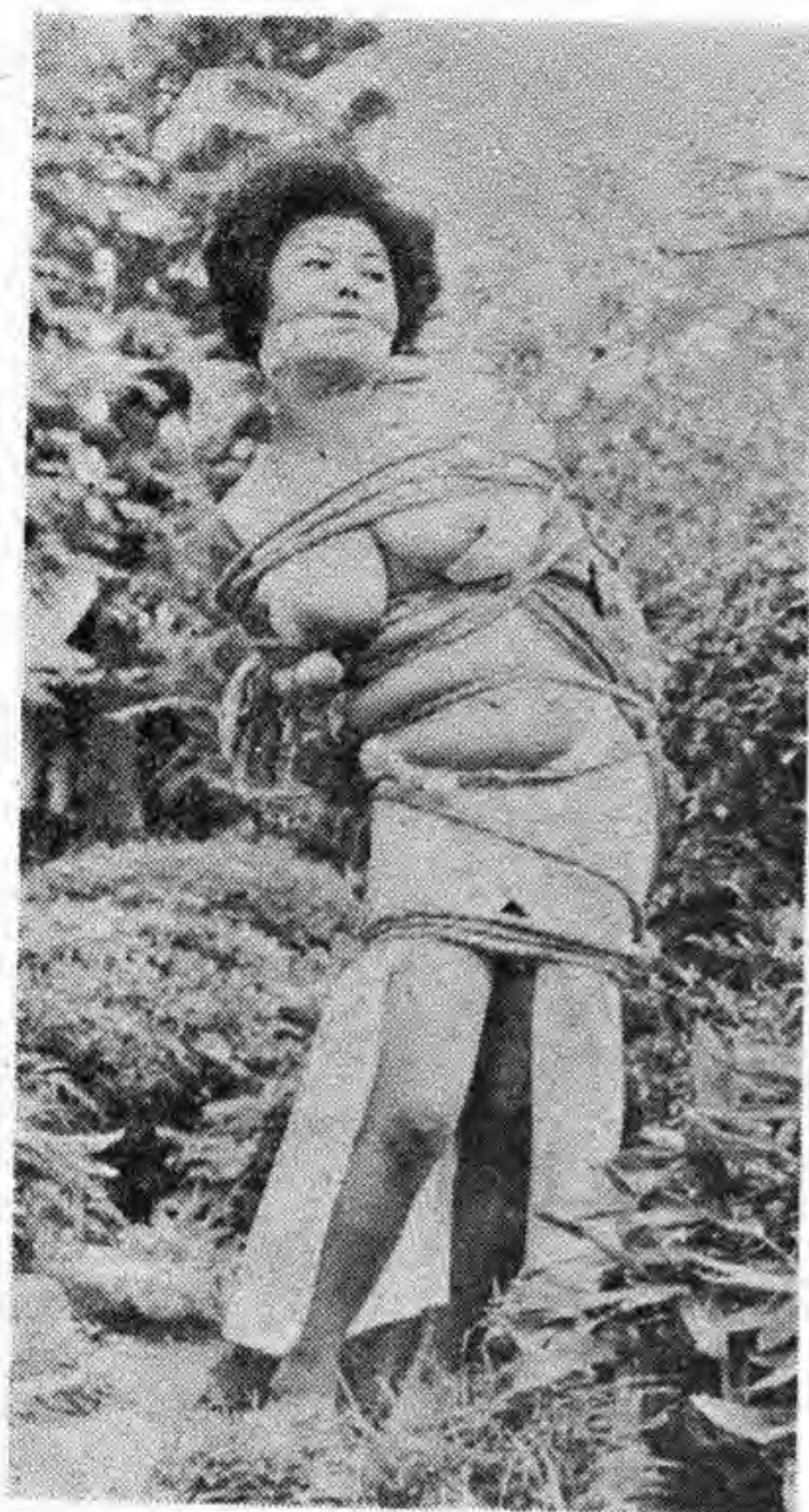
せずに縛り上げられ、そしてポーズをつけることが出来て大助かりでした。

留守番のおばさんが運んでくれたお茶を飲んで一ぶくすると、素足のままで庭石づたいに庭園の中の光量をあちこち露出計で計ってまわりました。自然光のままでは3SでF5・6の百二十五分一秒といったところです。今日は勿論全部手持ちで撮る予定です。レンズは六五ミリの広角を主体に、八〇ミ리를補助に使い、庭園でのロングに一〇五ミリの標準レンズを使うことに決めました。

縛りに使う縄は私の持ってきた荒縄、それに長田氏の持参した白の綿ロープ。それから使い古した綿縄といったものです。先ずモデルの着てきたままの和服で草履をはいて庭へ出て貰いました。だんだんに脱いでいって貰うつもりですが、編集長から余り露出させないで撮るのだぞ、と呉々も言われてきましたので、先ず手初めは完全着衣からということになったのです。後手に縛り上げての引回しから、立木の枝への後手吊り、ここで周囲から数枚撮って、一旦枝から放し、長田氏が縄尻をとって、庭園の中を追い立て追い立てぐるぐると回ってゆきました。私はあと追ってスナップ。しかし、この引回しのワンカットも大した収穫もなく一先ず中止します。

次は長襦袢一枚に剥いで、楓の木に後手に縛ったり、その下に坐らせたり、この時補助光二灯を顔面に照らして貰いました。縁側のポーズが終ってから、軒下へ移って、いろいろに立たしてポーズをとらしてみました。モデルは従順にこちらの指示通り唯々と動いてくれますので、極めてスムーズに進行してゆきます。

荒縄で力いっぱい胸を締めつけても、一向にへこたれた気配さえ見せないモデルに、縛



庭園の樹立に晒した山原清子

り役の長田氏は、大分気合が入ってきて、額に汗さえ浮かべながら大活躍です。お蔭で私の方は大助かりです。しかし、余り念いりに時間をかけて、まるで楽しくって仕方がないという風に縄を捌く長田氏に、そのくらいでいいから、早く早く、と督促しなければいけないのは、やはり彼がマニヤなのからでしょう。両手首のきびしい荒縄の締めつけで、最初のうちは赤く紅潮していたモデルの両手が次第に色を失って、蒼白になってきた頃、私はシャッターを押す手を止め一応休憩を宜しました。長田氏は心残りの表情でためらって

いましたが、渋々縄を解きました。

モデルは手が痺れて痛い痛いと言っていました。私が、私は知らぬ顔でカメラのフィルムを入れ替えると、露出計で光量を計ってみました。先刻の約半分です。長田氏はモデルの痺れた手を盛んにさすってやっているようです。痺れが戻ってくるときは、皮膚を針で刺されるように痛いといっていました。そのうち、擦りたいといって、きやっきやっ派手に騒いでいます。きっと彼が何か悪戯でもしたのでしょう。私が「さあ、始めるぞ」と呼んでも、二人とも中々来ません。仕方がない

ので、休憩時間を延長して、その間に次に行う室内撮影に備えて、ライトの配置をしました。スポットを一灯にして、あとの三灯をフラッドにしました。

午後四時——、曇り空のこととて、樹立の中は薄暗いという感じさえます。自然光での撮影は手持ちでは、もう限界のようです。補助光の三〇〇W二灯を点灯して、私は長田氏とモデルを呼びました。扱て、庭園を背景にしての最後の撮影です。長田氏の両手にそれぞれランプを持ってもらいます。背景がつぶれるのを防ぐため、レンズをF4に開き、ランプを遠ざけました。

私は今日のはじめての縄を握りました。手荒にしかも手早く縛り上げ、邪慥なくらいにこづき回して押し倒すようにしたり、倒れたところを再び縄を持って引き起したりしてポーズをつけてみました。その度に彼女の表情には、素晴らしい瞬間がありました。倒れてしまったり、立ってしまったりした時には、その好い表情が消えてしまうのです。ポーズにしても、今まさに倒れようとするところとか或は、倒れまいとして耐えているといったところに絶妙のものがあるのです。私は数回同じことを繰り返して諦め、シャッターを切



りました。荒縄の肩が長襦袢の衿元から、胸に入り、真白い乳房の肌に赤い斑点やスリ傷さえ作っています。さぞ、痒いことだろうと思うのですが、モデルは辛抱よく耐えています。あたりも藁屑だらけです。

庭園での撮影はこれで終わりました。荒縄を解き、身繕いをすまして部屋へ上り、外を眺めると、はや黄昏の気配が濃厚です。さあ、これから、愈々室内での撮影です。室内での撮影は長襦袢を脱いで、腰巻一枚から始めます。使い古した滑りのよい綿ロープが、肉づきのよい肌に喰い込んでゆきます。大きく膨

らんでいる乳房が縄に締めつけられて、縄の間から、むっくりと盛り上ってきます。

後手高手小手、両の後手首が水平より上になるくらい、吊り上げます。二の腕のそのために一層きつく締まって、ふくれ上った縄目の肉塊が赤く色づきはじめます。若い女のむちむちとした肌を、じかに縛り上げていくのは、やはり凄い緊縛感があります。

ライトの電光に映えて、白い肌が小気味よく輝いています。縛り終えた長田氏は、如何にも感にたえぬように、背中一面の刺青に見惚れています。二三步歩かせてから縄尻を引

いて畳の上に転がし、腰巻の裾を乱して足で空を蹴ったところをパチリパチリ……。

後手首の縄を掴んで引き起こし、俯伏せに二つ折りにして苦痛に足をかかめたところを狙う。よく肉のついたお腹が圧迫されるので苦しいのだろう。シャッターを切るまでは、じっとしていたが、シャッターの音がするなり、勢よく仰向けに倒れてしまう。前に倒したときは、苦しげな表情がよく出ていましたが、さすがのこのモデルも、これだけ厳しく力いっぱい縛られていては、二つ折りのポーズには耐えられないのでしょう。胸、お腹が激しく息づいています。

しかし、こんなことで休息はしてはいられません。外はすでに陽が落ちています。雨戸を閉め、モデルを引き起して柱のところへ連れてゆきます。長田氏が柱へモデルを縛りつけているところを連続でシャッターを切ってきます。室内ではライトの加減で三十分の1か3Sでせいぜい六十分の1しか切れないので、余り動きの激しいものは無理でした。それでも、手足のブレを画面に入れてみようと思ひ、意識的に、そういう場面のシャッターも切りました。連続でシャッターを切つてゆくと、二眼レフの十二枚撮りでは、忽ちのうちにフ

イルムがなくなってしまう。

えてして、よい表情が出たとき、絶好のポーズが出来たとき等、フィルムが切れることが多いのです。そんなときは予備のカメラで間がはずれるのを防いでいます。熱のはいったところで、ストップというのは、どうも気が抜けてしまい勝ちです。

柱縛りのひとときが終ると、今度は床の間を背景に股間縛りの後手吊り、といっても完全に吊り上げてしまうには鴨居がもちそうにもありませんので、爪先立つ程度に引きあげその縄尻を長田氏に引っ張って貰います。縄を引いたり緩めたりする度に、彼女は爪先立ったまま、不安定にゆらゆらと全身を揺すり、ちょっと面白いポーズが撮れました。長田氏はこの遊びが愉しいらしく、撮影が終わってから、縄を解かずに繰り返えし繰り返えし操り人形を弄んでいました。

次は床柱を利用しての強度の責めをやるという長田氏の提案で、今までズロースをはいたことのないというモデルに、私が持参したパンネットをはかせました。というのは、これから行おうという責めは、いささかあられもないポーズになるかもしれないので、腰巻では不適當だと判断したからです。

床柱を両肢で挟むようにして俯伏せにしたモデル（勿論後手高手にされている）の両足首を床柱の根元に固定し、上半身をじりじりと縄で床柱へ引きつけて、あたかも逆エビの恰好にしようというのです。しかし、結局は二人の多大の努力とモデルの脂汗を浮かべての協力も空しく、写真撮影には失敗してしまいました。その過程ではモデルの素晴らしい表情も出ていましたが、なにしろ二人でモデルの介添えに専心していましたからシャッターは切れず、完成の逆エビの態勢で固定するということとは、モデルの激しい苦痛のために果すことは出来ませんでした。

三人とも、口をきくのも大儀なくらい疲れ果て、ぐったりとしてしまいました。これ大体の本日の撮影コースの一巡はしたようです。しかし、長田氏の方は、今の強烈な逆エビ責めで大分エンジンがかかったようです。

一呼吸いれたところで、ライトを部屋の中央に集中して、全裸の緊縛ポーズを撮ろうというのです。私は編集長から露出度の多いものを撮ってきたら駄目だぞと注意された言葉を思いうかべていました。まあ、いいや、着物姿や長襦袢のものをあれだけ撮ったのだからよもや、帰ってから叱られるしないだろう。これから撮るやつは、まあ余興ということこ

ろだ、という軽い気持で長田氏の意見に賛成していました。庭園で撮影していた折は、何かお義理のように少々手伝っていったという恰好の長田氏も、ここに至って全く水を得た魚といった元気で、てきぱきと手伝ってくれました。ライトの熱気のもった十帖の部的中央に転ったモデルの足の爪先から頭のとっぺんまで、カメラのレンズは執拗に追いつけ、数十枚のフィルムにシャッターが切られてゆきました。

長篇ドラマを見終ったあとのように、ホッとして窓外に眼をやりますと、すでに陽はとっぷりと落ちてしまっていて、庭の笹の葉がさやさやと風に鳴っています。道具を仕舞い車のトランクへ運び込むまで三十分とはかかりませんでした。展望台の灯が次第に小さくなるのを見ながらK氏邸をあとにしたのでした。駆歩の撮影での数時間は、私を快い疲れの中に包んでいました。

光の渦の中を疾走する車の中で、私は奇妙な夢を見ていました。私の傍では美しく若い女性がやすやすと寝息を立てています。それは健康な寝息でした。甘美な夢は、とりとめもなく私を包んでいます。

気がついたとき、車は岸和田城の見える街道を走っていました。

代理部分讓品一覽

○妊婦女体資料の部○

臨月腹ヌード	大手札二枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「りく」
臨月腹アップ	大手札二枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「りと」
臨月妊婦の全身	大手札二枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「りせ」
臨月腹の側面	大手札三枚一組 四〇〇円 安原さゆり 略号「りそ」
臨月腹の背面	大手札二枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「りも」
臨月垂れ腹	大手札三枚一組 四〇〇円 安原さゆり 略号「りみ」
妊婦ヌード	大手札三枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「やま」
妊婦しぼり	大手札三枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「やむ」
臨月妊婦三態	大手札三枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「よむ」
産み月のお腹	大手札三枚一組 三〇〇円 安原さゆり 略号「よま」
動物的な腹部	大手札三枚一組 三〇〇円

安原さゆり 略号「よみ」	妊婦の股間縛り
大手札三枚一組 四〇〇円 児玉 昌子 略号「には」	妊娠八カ月の緊縛
大手札三枚一組 四〇〇円 児玉 昌子 略号「にあ」	妊娠五カ月の緊縛
大手札三枚一組 三〇〇円 児玉 昌子 略号「にこ」	妊娠前裸縛り
大手札三枚一組 三〇〇円 児玉 昌子 略号「まさ」	妊娠初期の緊縛
大手札三枚一組 四〇〇円 児玉 昌子 略号「めろ」	妊婦の股間縛り
大手札三枚一組 三〇〇円 児玉 昌子 略号「にふ」	妊婦の股間縛り
大手札三枚一組 三〇〇円 児玉 昌子 略号「にと」	分娩後縛り
大手札三枚一組 三〇〇円 児玉 昌子 略号「につ」	分娩後股間縛り

○女体緊縛資料の部○

鼻の穴責め	大手札三枚一組 三〇〇円 大塚 啓子 略号「なく」
鼻なぶり	大手札三枚一組 三〇〇円 大塚 啓子 略号「ない」
鼻責めの陶醉	大手札三枚一組 三〇〇円 大塚 啓子 略号「なは」
苦悶の裸身	大手札四枚一組 四〇〇円 関谷富佐子 略号「くせ」
裸身の晒し	大手札三枚一組 三〇〇円 関谷富佐子 略号「わあ」
全裸股間縛り	大手札四枚一組 四〇〇円 関谷富佐子 略号「せら」
強烈エビ責め	大手札三枚一組 三〇〇円 大塚 啓子 略号「えり」
蒲団に悶ゆ	大手札三枚一組 三〇〇円 関谷富佐子 略号「なき」
悦虐の果て	大手札三枚一組 三〇〇円 関谷富佐子 略号「なみ」
椅子エビ責め	大手札三枚一組 三〇〇円 東浦ひかる 略号「おき」
六尺縛り	大手札三枚一組 三〇〇円 東浦ひかる 略号「ろは」
弓吊り責め	大手札二枚一組 二五〇円 梨花悠紀子 略号「つき」
手足宙吊り	大手札三枚一組 三〇〇円 梨花悠紀子 略号「つた」
オムツの股間縛り	大手札四枚一組 四〇〇円 東浦ひかる 略号「むく」
強烈責、被虐の果	大手札五枚一組 五〇〇円 梨花悠紀子 略号「りお」
乳房いじめ	大手札二枚一組 二五〇円 大塚 啓子 略号「とお」
激痛逆エビ責め	大手札四枚一組 四〇〇円 大塚 啓子 略号「きえ」
美貌の裸身に縄目	大手札三枚一組 三〇〇円 絹川 文代 略号「きん」
腰元吊り責め	大手札二枚一組 二五〇円 村井知可子 略号「こり」
腰元間諜の拷問	大手札四枚一組 四〇〇円 村井知可子 略号「こく」
強烈エビ縛り	大手札三枚一組 三〇〇円 関谷富佐子 略号「もい」
乳房責の苦悶	大手札二枚一組 二〇〇円 関谷富佐子 略号「もろ」
全裸ムチ打ち	大手札四枚一組 四〇〇円 関谷富佐子 略号「もた」
強打に泣く裸身	大手札四枚一組 四〇〇円 関谷富佐子 略号「むち」

狙われた和装の娘		大手札十二枚一組 一〇〇〇円
愛川 悦子		略号「ねい」
強烈エビ責め		大手札三枚一組 三〇〇円
水本 茂美		略号「えひ」
ゴム衣緊縛		大手札三枚一組 三〇〇円
水本 茂美		略号「みす」
バンド開股		大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる		略号「はこ」
バンド責め		大手札五枚一組 五〇〇円
東浦ひかる		略号「はん」
夫人の表情		大手札三枚一組 三〇〇円
関谷富佐子		略号「せや」
後手吊り足挙縛り		大手札五枚一組 五〇〇円
東浦ひかる		略号「うら」
二つ折りエビ責め		大手札五枚一組 五〇〇円
東浦ひかる		略号「うり」
足挙げ椅子責め		大手札五枚一組 五〇〇円
東浦ひかる		略号「うる」
吊り打ち		大手札三枚一組 三〇〇円
関谷富佐子		略号「やり」
股間縛法悦境		大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代		略号「ぬこ」
踊り子緊縛		大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代		略号「りこ」
責め衣		大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子		略号「せめ」
猪 吊り		大手札三枚一組 三〇〇円
梨花悠紀子		略号「いの」
足挙開股責		大手札三枚一組 三〇〇円
梨花悠紀子		略号「あけ」
緊縛女体撮影風景		大手札四枚一組 四〇〇円
大塚 啓子		略号「むら」
〇フェチ資料の部〇		
白晒六尺褌 (正面)		大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子		略号「しは」
白晒六尺褌 (背面)		大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子		略号「しろ」
黒褌の女 (正面)		大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子		略号「くま」
黒褌の女 (背面)		大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子		略号「くう」
相撲褌を締め込む		大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子		略号「すい」
変形六尺褌		大手札三枚一組 三〇〇円
細川アヤ子		略号「ふい」
六尺褌開股		大手札三枚一組 三〇〇円
細川アヤ子		略号「ふは」
六尺フンドシ		大手札五枚一組 四〇〇円
東浦ひかる		略号「ろい」
六尺褌の女性像		大手札四枚一組 四〇〇円
関谷富佐子		略号「くろ」
レインコートの拘束		大手札四枚一組 四〇〇円
大塚 啓子		略号「いろ」
ゴムフェチ		大手札四枚一組 四〇〇円
梨花悠紀子		略号「こま」
バンドを脱ぐ女		大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子		略号「ゆお」
月経帯縛り		大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子		略号「ゆす」
相撲褌着用		大手札十一枚一組 一〇〇〇円
大塚 啓子		略号「すま」
股に喰い込む黒フンドシ		大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる		略号「とし」
股を開いた黒フンドシ		大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる		略号「とひ」
バンド晒し		大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる		略号「はと」
バンド足挙げ		大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる		略号「はそ」
バンド見せ		大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる		略号「はぬ」
白フンドシ		大手札四枚一組 四〇〇円
大塚 啓子		略号「ふん」
黒フンドシ		大手札四枚一組 四〇〇円
大塚 啓子		略号「くふ」
ゴムぐるみ人形		大手札四枚一組 四〇〇円
東浦ひかる		略号「こみ」
ゴム包みの束縛		大手札四枚一組 四〇〇円
東浦ひかる		略号「こは」
ゴムと女体アップ		大手札四枚一組 四〇〇円
東浦ひかる		略号「こあ」
パリスバンド前開き		大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる		略号「おい」
パリスバンド縛り		大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる		略号「おは」
携帯用白バンド		大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる		略号「おか」
サカエ軽便型バンド		大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる		略号「おた」
パリスSSSバンド		大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる		略号「おこ」
パピアバンド		大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる		略号「おし」
サカエバンド		大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる		略号「おえ」

臨月腹妊婦フォト

田中弘氏特別提供
モデル 田中美佐子

六月号の読者通信にて便りを寄せられた福岡市の田中弘氏の特別の御厚意によって、ここに妊婦フォトの方々のために、貴重な資料を提供して頂きました。

モデルの田中美佐子夫人は、本年満二十二才の初産婦で、このフォトの撮影は予定日の十日程前で文字通り出産寸前の臨月腹の写真ということがいえます。

臨月妊婦緊縛

大手札印画紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号(にち)

診察を受ける妊婦

大手札印画紙焼付
四枚一組 五〇〇円
略号(にし)

臨月腹開陳(座位)

大手札印画紙焼付
四枚一組 五〇〇円
略号(にり)

臨月腹開陳(立位)

大手札印画紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号(にす)

柱縛りの妊婦

臨月のヌード

大手札印画紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号(にわ)

妊婦の裸身立像

大手札印画紙焼付
二枚一組 三〇〇円
略号(にた)

縛られた妊婦

大手札印画紙焼付
二枚一組 三〇〇円
略号(にる)

臨月の裸身像 立位

大手札印画紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号(にお)

臨月の裸身像 座位

大手札印画紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号(にぬ)

突き出た臨月腹

大手札印画紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号(にい)

最新Mフォトシリーズ決定版分譲

読者通信をはじめとして、投稿原稿や編集部に対する通信などによって、Mフォト分譲について熱心な要望がありました。もとよりSフォトとは違い、注文の多きは期待してありませんが、少数とはいえ、Mフォトを要望されるファンのために、ここに最新撮影の分譲品を発表いたします。

犬男の訓練風景

大手札印画紙焼付
十枚一組 二〇〇〇円
略号(みら)

男を刺し殺す美女

大手札印画紙焼付
十枚一組 二〇〇〇円
略号(みむ)

男を尻の下に敷く

大手札印画紙焼付
十枚一組 二〇〇〇円
略号(みう)

足下にうごめく顔

大手札印画紙焼付
六枚一組 一四〇〇円
略号(みれ)

汚物を受ける男

男を馬にする女性

大手札印画紙焼付
五枚一組 一二〇〇円
略号(みか)

人間椅子の御褒美

大手札印画紙焼付
五枚一組 一二〇〇円
略号(みお)

飼犬に餌を与える

大手札印画紙焼付
四枚一組 一〇〇〇円
略号(みた)

浣腸器で弄ぶ女

大手札印画紙焼付
三枚一組 八〇〇円
略号(みつ)

股に絞められる首

大手札印画紙焼付
三枚一組 八〇〇円
略号(みね)

芳香を嗅がす尻

大手札印画紙焼付
二枚一組 六〇〇円
略号(みな)

女体切腹資料 分譲品

血紅使用、腸露出

女体切腹シリーズ

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
大塚 啓子 略号(せい12)

血紅切腹絶命ポーズ

大手札四枚一組 四〇〇円
梨花悠紀子 略号(せん)

血紅切腹祭壇の女体切腹

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(せぬ)

禪裸女血紅切腹

大写真連続迫力フォト

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(おお)

血紅使用苦悶表情悦楽

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(くえ)

肉体美裸身切腹写真

大手札五枚一組 五〇〇円
長野 良子 略号(なせ)

女体切腹態

大手札二枚一組 三〇〇円
細川アヤ子 略号(ねは)

女体自刃態

大手札三枚一組 三〇〇円
細川アヤ子 略号(ねに)

血紅使用血塗れ下腹

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(わい)

殿中の自決

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(わこ)

切腹美態から絶命へ

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(わは)

豊満に挑戦

大手札五枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(えん)

介添切腹

大手札四枚一組 四〇〇円
甘木 春子 略号(あか)

腹を切り裂く

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(やい)

下腹に刺す刃

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(やお)

柔肌を切り裂く

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(やえ)

浣腸関連フォト

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かみ)

強制空気浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かく)

百CCの浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かな)

浣腸責の極

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かむ)

浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号(れち)

強制浣腸三態

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(きか)

イルリガートル

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号(いるり)

太い浣腸器

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かふ)

浣腸をする女

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

浣腸器と女

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号「るい」

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(るは)

浣腸プレイ

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ほは)

進ばしる液

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ほい)

浣腸後排便

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(へき)

便意苦悶像

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(へか)



私の友人に、面白いのがおられます。面白いといったら彼におられるかも知れませんが最初の内は確かにそう思ったのです。しかしだんだんとき合ってゆくうちに彼がうらやましくなり、次には自分まで彼と同じような気持ちになったのです。彼は、奇クの愛読者です。だんだん読ませてもらううちに私もすっかり夢中になり、もう彼に借りて読むだけではもの足りなくなり今では自分で買っています。

す。面白い彼だと思ったのに今は彼にあやまるのです。私は、団鬼六氏の書かれた『花と蛇』が大好きだった。自分の心の中にああして女性をせめたいという欲望があることをもうかくしようがないのです。流腸ノそれは私にとって世界で一番美しいものだと思じています。してみたい、してみたい、と思いつつも、今日までそれを口にするに出来ず、毎日一人で悩んでいます。私は二十三才。独身で安サラリーマン。その日暮らしてはありますがだれにも増して誠実な男だと信じています。広島市内にお住まいの女性で、私の友達になって下さる人はいないでしょうか。どうか私の願いを聞いて下さい。助けて下さい。一日も早く今の境遇からのがれたいのです。私は身長一・七三メートル、五五キロ、顔は人から良い男だとも云われる……ことがあるんです。私は下宿生活です。年令はといません。奇クの愛読者で団鬼六氏のファンの女性なら結構です。遠方の方でも文通したいと思っています。尚返事は編集部から転送して下さい。よろしくお願い致します。(広島市A・S・Z)

生V)

小島寿子さん。あなたのような方にお近づき願えれば大変偉せだと思ひ筆をとりました。準ミス当選の経歴をお持ちの恵まれた容姿をお持ちのあなたをプレイを通じて思いきり泣かさせる自信が私にはありますが、この『夢』が実現したら、長年の奇クの愛読者である事が誇りのように思えてくるでしょう。続々と悦虐フォトが新しく奇クに発表されますが、十月号誌上のフォトを例にとると、大塚啓子さんの、「屑所に曳かれる婦人」「誇らかな肢体美の点綴」のようなプレイなら抵抗なくあなたも緊縛を受けるだろうと思います。が、猿ぐつわが大変お気に入りなのので、お逢いする時、名刺代りに自作の特製猿ぐつわを謹呈する事としましょう。夏の日、太陽の下で悦びを包んだ水着——貴女にはそれが「囚衣」にふさわしく利用出来るでしょう。それなら美しい体の線をくっきりとあらわにして、しかも「全裸はいや」というあなたの希望に沿ったプレイが可能です。私は、十一月に約一ト月滞在の予定で大阪に出張します。あまりひまのないたて混んだ

スケジュールなので、余程運がよくないとあなたにお逢い出来そうにもありませんが、その機会に極力出会って様々なプレイを実行しようではありませんか。また、一ト月の滞在の宿も今から心がけておかなくてはならず、そちらの事にあかるいあなたの紹介が頂けてそれが二人のプレイの場所でもあるようになれば一挙両得ですが、——その上で楽しさと明るい親しい友情を築けたらと願っております。御一報下さい。なお、小生は三十三才。デザイナーで、カメラマニアです。(東京都高田馬場郵便局止八高橋まさとしV)

京都市右京区西院の梅川幸子さん、あなたの読者通信へのお便りを読んで矢も楯もたまらずペンを取りました。私も小さい時からゴムマニアです。今も羽二重ゴム引レインコートの茶色の女物と灰色の男物を持って居ます。この様なレインコートは最近全く見られなくなりましたが、偶然にも大阪のある店で見かけて飛び立つ思いで買い求めたものです。男物の方は毎晩素肌の上に着て大いに楽しんでおりますが、女物の方は全く宝の持ちぐさです。如何でしょ

う、私と一緒にこのレインコートを着てプレイして戴けませんでしょうか。又私はその他に作業用の黒のゴム上衣とゴムズボンも買い求めました。私は身体が人並み外れて大きいので皆特大寸です。又ゴム上衣の袖口は鉛ゴムで絞ってあるゴム口という形のものです。今年の真夏、桁はずれの暑い夜に部屋の戸障子を全部締め切り、裸で居てさえ汗が吹き出るその上へゴムレインコートを着て鉛ゴムの手袋をはめ、ゴム上衣を着てその上へゴムズボンをはき、最後にゴム長靴をはいて、完全武装をします。袖口が鉛ゴムでピッタリ締めつけてあるので吹き出た汗はダラダラと下へつたわって長靴の中へたまり、歩くとグチャグチャと音

がして全く息もつまる程の快感を味わいました。しかしこの様な遊びも貴方様の様な同じマニヤの方と一緒に心ゆくまで楽しめたらどんなに嬉しいことでしょう。お互にゴムレインコートで身を包み、身体中汗にまみれ乍ら浣腸をし合ったり、オシメカバトをあて合ったり、ゴム布でくるんだりして大いにプレイを楽しみたいと思ひます。どうか編集局を通じて連絡方法をお知らせ下さい。都合で私も編集局の方へ連絡場所を通知いたします。次号より貴方様の読者通信欄のお便りを心待ちにいたしております（尼崎市八平川晴雄）

大変気持ちの良い時候になりました。貴社益々御発展御慶び申し上げます。

美しき縛しめ (第四集) 予告 II

愈々十二月中旬堂々刊行。直接申込者に分譲

頒価一部 一〇〇〇円 (送共) 略号「美4」

新人モデルの山原清子嬢、玉田美佐子嬢、木村良子嬢、それにベテラン大塚啓子嬢などの演じた強烈な逆さ吊り、エビ責め等をはじめとした緊縛フォトを集大成してここに「美しき縛し

め」の第四集を企画しました。詳細は次号二月号に発表いたしますが、十二月中旬には発送できる予定ですから、お急ぎの方は予約お申込下さい。出来次第お送りいたします。

す。扱て過日御送付頂きました大塚さんの「みむ」は素晴らしいものでした。その真剣な表情、メイキヤップ等今迄に見られない迫力のある作品です。それに付て愚見を二、三申し上げ御参考にして頂き度いと思ひます。一、禪の後ろで結んだ処が肌が見えて非常に見苦しい。腹に巻いた晒はきっちり厚く肌が見えない様に、つめて巻いた方がよろしいと思ひます。禪の魅力は後姿であり、遅しく盛り上った臀部の谷間に白いさらしが細くくくい込んだ姿はなんとも申上げ様もない魅力です。縦に割ったさらしはなるべく細めにしめて下さい。一、短刀は少し長いもの「刃渡り九寸五分」位を使用し親指は必ず柄頭にかけて下さい。力が這入った様に見えます。一、縛った男を跨って短刀逆手に凄んだ場面なんか、姐御の貴録充分ですが左手がダラリと下って居るのが物足りません。ぐっと握って居らなければムードが生まれません。前面の場合、禪のたれはあった方がよろしい。(男は意味が無い様です。一人の方がよろしい) 一、ヘアースタイルが悪いと思ひます。まげにかんざしを差すとぐっと姐御のムードが出ます。禪一本のスタイル

にはピッタリだと思ひます。以上御参考とされ今後も短刀を持った禪一本の凄く姐御のものを次々と御作成の程御願ひ申上ます。若い娘が素肌になり女だてにさらしの禪を締め込み短刀を振り廻すのですから相当の勇気がないと出来ません。大塚さんの真剣に取組んだ態度、表情は全く素晴らしいものでした。今後共宜敷御願ひ申上ます。(倉敷市中庄八山上寿一)

私は三十一才の女性です。通信欄で拝見しますと、私が以前悩み苦しんでいたことを訴えて居られるお方、最近号では、小島寿子さん、中川芳子さん、その外にも誰にも云えず唯一人やるせない日々をおすごしの方々が沢山居られるようです。心からご同情申し上げます。それに引替え私だけが良きご主人さまに可愛がられ、幸せな生活を送っていることがないのか申訳ないような気がしてなりません。私は昼は普通のお手伝いさんと変わりありません。プレイはほとんど夜にかざられています。エビ責め、宙吊り、手も足もがんにがために縛られたまま一晩中寝かされたり、少し変ったプレイでは後手に高手小手に縛られ、別の縄

で両膝の上を揃えて括られその縄尻を二つに分け首の両側から後手首に通し引きしぼられて結ばれます。膝と顔とは十センチと離れていません。二重になった不安定な体で立たされます。そして両足首を十五センチ位しか開かない様に連結され、長い廊下をヨチヨチ歩かされるのです。首輪にクサリで引づられながら、「早く歩け、なにをぐずぐずしている」と巾広いバンドが後に突出たお尻にピシリと鳴る。いくら早く歩くと云われても歩幅は固定されています。あせればあせる程ひよるずき一步足を踏みしめる度に腰から太ももにかけウズク様に痛み初めます。口にかまされた猿ぐつわはきつく呼吸がはずみ、目はくらんでヘタヘタとくずれるように前のめりに倒れてしまいます。ピシッと鞭が鳴ります。もう体を動かす力はありません。鞭をさけることさえも。ご主人さまは「お前と同じようなのが二、三人いると競争させたり、我慢くらべをさせたり色々変ったプレイが出来るのだ」とおっしゃっています。私のように縛られ、いじめられることに生がいをお持ちの女性の方お写真同封の上お便り下さい。共に悩

みを解消しましょう。住所は編集部にお知らせしてあります。(浜田市八島根みち子)

○
クリスタル・マニアの皆様お元気ですか。浣好生です。今日はマニアの皆様にお願ひがあるのです。私各種の浣腸器具の他に軽便浣腸も集めているのですが、イチジク浣腸・オロナイン浣腸・ハート十字浣腸しか手元にありません。アイデアアルとか明治・ウサギ・薬局等他にも種々軽便浣腸があるらしいのですが、それ等を買っている薬局の場所を教えてください。又、地方の場合是一个でも二個でも送って頂けたら幸いです。実費はお払います。又お望みなら私持参のガラス・シリンドーをお譲りしてもよろしいです。お願いします。その他高砂の浣好生、京都の飢えたる者様始めマニアの皆様よりのお便りをお待ちしています。尚本誌発行日より一カ月以内にお願ひします。(大阪住吉郵便局気付八浜浣好)

○
東京の有光令子様。十一月号本欄でのおよびかけ拝見致しました。小生マゾ男として貴女様からさんざんいじめられ、恥ずかしめ

刺青女体関連写真

華麗なる玉取姫の刺青を背中から臀部、太股に至るまで一面に施した山原清子さんの文庫的価値豊かなフォトを、好事家、文庫蒐集家、マニヤの方々に分譲いたします。時節柄誌上グラビヤ掲載を憚かられますので、何卒印画紙焼付にてお求め願います。

黒ふんどし入墨姿

大手札印画紙焼付 三枚一組 略号(くの) 三〇〇円

日本髪のお全裸体に細身の黒ふんどしをきりりと締め込んだお嬢さんが、ぐつと黒ふんどしの喰い入った双丘を突き出して、その魅力的なポリウムのある肉体を誇示しています。日本髪と入墨の肌と黒ふんの三つの要素の美しさ。

黒フン媚態の魅力

大手札印画紙焼付 五枚一組 略号(く) 五〇〇円

これも又日本髪にて、すっきり着物を脱ぎ去り、きりりと締めつけた黒フンドシ一本の豊満な肉体で背中や臀部の入墨や股に喰い込んだ黒フンドシを十分見せながら演じる婀娜なしどけないポーズ。

黒禪背面模様

大手札印画紙焼付

三枚一組 略号(くこ) 三〇〇円

洋髪で黒フンドシをきっちり締め込んだ清子嬢の入墨の美しい背面をふんだんに見せています。

黒フン手吊り責め

大手札印画紙焼付 三枚一組 略号(くり) 三〇〇円

両手首を揃えて鴨居に吊られた黒フンドシ一本の女体が爪先立つてくるりと回転するところを、前後、後側面の三つのアングルで見事な肢体をごろんにいれる。

全裸入墨姿態

大手札印画紙焼付 三枚一組 略号(いれ) 三〇〇円

刺青マニヤの方々と並に文庫的にコレクションしておられる方のため、清子さんに素裸になってもとらて入墨の隅から隅まで、とくとごろんにいれます。

晒六尺フンドシ

大手札印画紙焼付 三枚一組 略号(ろと) 三〇〇円

日本髪——清潔な白のふんどしが殊の外、朱と青の墨に美しいコントラストを示しています。

白六尺一本の姿

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円

られんことを切望する者であります。小生の願いとしては、貴女様に穿き汚されたパンティを頭からかぶせられ、その一番汚れた所の臭いを嗅がされたり、仰向けにねかされた顔の上に貴女様の偉大なるオヒップがのせられ、息もとまらんばかりに敷き潰されたいことです。スカートをたくし上げ、パンティ一枚の貴女様のたくましくも豊満なお尻の下に顔を敷かれ、パンティを通してお尻と股の下の臭気をいやというほど嗅がされたものです。若く健康な貴女様のお尻の下すばらしい芳香に小生は酔いしれ、それになるでしょう。貴女様にとって男の顔の上に馬のりにまたがり、顔をお尻の下敷にし、思いきりくさい目に合わせることを最上の快楽ではないでしょうか。更に小生は貴女様が御使用済みになったチリ紙をなめさせられることを夢みます。よじれ、破れたチリ紙をおし頂き、その臭気にむせび、神酒のかぐわしい味にうっとりなることこそ小生の夢であります。そして最後に小生の鼻、唇、舌がチリ紙の代りにされることを願いつつこの一文をわが女王、令子様捧げます。

(京都ハS・T生V)

奇く愛好者の皆様、秋もようやく遠ざかりつつあるこのごろですが、いかががお過ごしでございますか。実は奇くの読者になってから三年になります。自分の性向を分析するのに大なる役割をはたしてくれたのが奇くでございますが、性の悩みに耐えることが出来なく投書した次第でございます。僕はサジスチンの女性に憧れてあらゆる機会に捜し求めてまいりましたが、それはなかなかわけのいいところであることを知りました。あこがれる女性グラマーであり残酷な遊びを好むことです。平常には虫も殺さない高貴の美女でありながら、男責めを好み女王として君臨する方なのです。恐れたり、挑戦的であったり、抵抗したりする男性を肉体的に精神的に徹底的に征服し意のままに振舞うことを求める美人はいないものでしょうか？プレイは浣腸や、激しいムチ打ち、縛りは嫌いですが、その他はすべて女王のするところに不服はありません。女王と奴隷の関係なのだから忠実を誓うことは言うまでもなく、またどんな強烈なプレイにも負けずにやりぬく決心でございます。ぼくは体には自信があ

略号(ろに)
洋髪——坐り、中腰、立ち、いづれも入墨の背面と白いフンドシの尻への喰い込みを中心素晴しい美しさを狙いました。

白禪後手高手小手

大手札印画紙焼付

三枚一組

略号(ろし) 三〇〇円

ぎゅうぎゅうと力まかせに縛り上げた二の腕から後手首、首繩、只でさえ大きな乳房がむくれたようにくびれている。

日本髪全裸強烈縛

大手札印画紙焼付

三枚一組

略号(いら) 四〇〇円

可憐な高島田で可愛い顔の清子嬢だが、背面一ぱいには見事な入墨。そのアンパランスに蛇の全身にぎりぎり巻きついていた蛇のような縄。両の足首にまた蛇のように入墨。真白い肌が紅を刷いたように美しい。身動きのできない身体を蹴倒せば、海老のように全身を曲げて喘ぎ、呻めき、そして恍惚とした表情になる。

洋髪全裸強烈縛

大手札印画紙焼付

三枚一組

略号(いこ) 四〇〇円

豆絞りの猿ぐつわをかまされた清子嬢の全裸身に、きびしく捌か

れる高手小手の縄目。入墨の美と緊縛姿態の美を最高に発揮しつつ女体責めのムードをむんむんと発散させ、写真の中から香わしい女臭と吐息の洩れだしそんな緊迫感あふれる傑作です。

日本髪全裸股間縛

大手札印画紙焼付

三枚一組

略号(いさ) 四〇〇円

入墨に映える全裸身に、乳房も潰れよとばかり強烈な縄が二の腕と胸、後手を締めつけている。更に胸もくびれる腰繩、股間縛りとS的ムード溢れる素晴らしい緊縛姿態が、この三枚のフォトに結集しています。殊に、島田鬻の全裸身は、稀少価値も満点です。

可憐島田鬻全裸縛

大手札印画紙焼付

三枚一組

略号(いみ) 四〇〇円

これは又まことに可愛い島田鬻のよく似合うお嬢さんです。可憐な、餅肌の麗しさはよくわかって貰えると思います。全く美しい裸身です。でも、その豊満な裸身には刺青が見事に彫られていて、お添えものまでついでに下着も下さい。トリックをだらんと下して

るのです。女の一人ぐらい何をしても簡単に参ったなどと言いませんにから安心していただきたいのです。僕は二十三才を数えたばかりですが、プレイではきつと貴女を満足させることができると思ひてゐるものです。どうか僕を試みにして下さるようお願いしておきます。ぼくは年令や、職業に理想を持ちません。いうまでもなくお互いの秘密事項を厳守し、理解の上であればプレイも出来ると思ひます。貴女に対して如何なる迷惑をもかけないことを約束致します。どうかMSプレイを貴女のお選びになるもの、その他を知らせくださるようお願い致します。

(東京都文京区八柴田勝利)

私は「女相撲」のファンです。この広い日本の沢山雑誌が出てゐる中で、貴誌だけが真剣に「女相撲」にとり組んでゐられるのは私達ファンにとって大の感激です。私は女相撲の中でも、特にむくむくと肥った逞ましい肉体の女性がマワシ一本で力のかぎり取り組んでゐる光景が好きです。といつて玄人の興行では興ざめで、やはり素人の女性の相撲が好きなのです。例えば、郊外の秋祭りで、新

しく出来た団地夫人対地元のおさん対抗の「奥さま相撲大会」といったレポート風の物語を豊富なさし絵入りで描いたら、きつと素晴らしいものになると思ひます。主役は、むちむちと太った夫人や、はつらつとした若夫人達。主人は見物側。まわしは、それぞれ博多帯、名古屋帯等の色とりどり、広巾、小巾のまわし。しめ込み方も各人いろいろ。中には真白のまわしや真黒のまわしをつけている奥さまもいる。相撲前の支度部屋でしめ込みをつけあつてゐる所の描写など、さし絵としても大変面白と思ひます。それに取り組みの終つたあとのまわしをほどこいてゐる土のついた体などの風景も絵になると思ひます。今まで取り組み中の絵は沢山ありましたが、こういった取り組み前後のナマな感じのポーズも魅力的です。勿論土俵上の描写は中心ですから詳細に絵入りで、特に肉体に及ぼす影響を心理的に推定した心理描写。くい込むまわし等のこと、是非実現させていただきたいと思ひます。(北海道滝本和男)

○ 奇クは一体どこへ行つたのでしよう。今年の春、奴れい募集を投

水野弘氏提供

女体切腹フオート

今般水野弘氏の御厚意により二十数葉の貴重なネガを拝借することが出来ました。その中、誌上公開を憚るものを特に分譲品として頒布することにいたしました。

女体切腹の介錯

大手札三枚一組 三〇〇円

略号(せは)

上半身肌ぬぎとなつた豊麗な美女が、白布を敷きつめた上に正坐して覚悟の切腹を敢行する。背後にまわつたフンドシ一本の介錯人大刀一閃、女の細首に打ちおろされんとする介錯の瞬間を、三枚の連続写真にてごらんいただけます。

妻の切腹プレイ

大手札三枚一組 三〇〇円

略号(せは)

稿してたのしみにしてましたのに、その翌月いつもの本屋さんに行つてみたら、奇クはどこにも見当りません。びっくりして、その後あちこちの本屋をさがして見ますが、まだ奇クをさがしだすことはできません。でも女の身で奇クはありませんか、と聞いてまわる

畳の上には白布を敷きつめ、傍には自分の生首を入れる首桶、前に三宝、白紙の上には短刀を置いて正坐した覚悟の切腹の座。いとし妻の最期を飾るべく、涙をふるって背後にまわつて介錯の刃をふるう夫。果ては苦しむ妻の手に介添えしてジリジリとその真白にも豊かな下腹を鋭い短刀の刃先で切りさばいてゆくさま。

首桶に落ちる首

大手札三枚一組 三〇〇円

略号(せは)

大きく八首桶と書いた桶を前にして、いさぎよく死の坐についた美女。この豊満な裸身も幾許もなくして、身首を異にして果てるのである。介錯人の大刀はか細い首に押当てられ、女は健気にも自らの下腹に刃を押し当てる。うう、と苦痛にあえいで、前に首をさし伸べるや、白刃は首筋に振り下ろされ、哀れ美女の生首は首桶の中へ……。

のものはずかしく、本当にどうしたらいいのでしょうか。悪書追放とかでなくなつてしまったのでしょうか。思いきりすごいことかいて全国の本屋に出せばいいのに、せっかく明るくなりかけていたのに私またゆううつになりそうです。活字になつた私の文章は、もう見ら

れないのでしょうか。でもかかずにいられない私の気持。ゴムマニヤって案外たくさんいるのじゃないかしら。結婚なんてつまらない。私にはゴムの生活があります。今年の春、浴室つきのアパートにうつってから考え出した浴室

春川ナミ才画

分譲用

力作M画決定版

大中判印画紙鮮明焼付

七枚一組 三〇〇〇円

略号(ぬけ)

豊麗なる美女の巨大なる臀部に押し潰される男を描いて大好評の春川ナミ才氏が特に分譲用として十分に腕を揮って、まことに奔放きわまりない凄いM画をここに完成しました。これこそMファン待望のM画の決定版です。座右の宝物として末永く御保存下さる価値が十二分にあります。

一、股間で圧死

美しくも逞ましい女の股間に押しつぶされ窒息する男の恍惚境。

二、行水の美女

タライの中でデンと坐った美女の大きなお尻の下にある男の

の乗馬プレイを御紹介しましょう。お道具は風呂桶の外、ゴム浮輪、(なるべく大きいもの方がいいのです。私の持っていますのは、六十センチサイズの青いゴム製です。このごろはビニール全盛ですが、シーズン始めの六、七月ごろ

顔は法悦に満ち満ちている。

三、臀部の首絞め

柱に縛られた男の咽喉元には女の巨大な臀部が締めつけて絶命寸前の喜びの疼れんが始まる。

四、ハンモック

手と足を四方から吊られた男の腹の上には、豊満な女がのっかってゐる。男はいつまで耐えられるだろうか。

五、人間椅子

マダムの巨臀がどっかりと背にのって、その重さに喘ぐ男。

六、ローソク責

逆エビに反った背の下には火のついた蠟燭がある。逞ましい美女の尻を腹にのせて脂汗を流す男。

七、股間沈潜

太い股間で顔を挟まれ、女体の下に埋もれてしまった男は果していつまで生きているやら。

津田亜紀子V

ですとゴムのもでています。とくに東京の三越では八月末まででていました。〜ゴム前掛(魚屋さん)のしている黒いゴムの前掛です。でも別にこれでなくとも、ゴム布で三十センチ巾のあるものなら何でもいいです。これだけあればいいのですが、ゴム長ぐつ(もちろんオールゴム製の太ももまでの長いもの、せめてひざまでのものに限りです。内側に布をはったブーツはダメです)ゴム帽子もあればなおいいでしょう。風呂桶の湯はぬるま湯にしておきます。ゴム浮輪に七分目ほど空気を入れ、二つに折りまげ半月形にし、ひもでゆわえます。これでゴムのお鞍ができて上ります。ゴム長ぐつをはきゴム帽子をかぶります。これが乗馬スタイルです。湯に浮かんだ鞍の上にはまたがりますと、ゴボゴボと長ぐつの中へ湯が流れこみ重くなります。これはゴム長ぐつの接しよくを良くすると同時に、おもしろの役をします。風呂桶のふちに両手をかけ、上体を浮かせるようにしながら、ハイドー、ハイドーとお馬のけいこです。お道具もかんたんです。ゴムマニヤの皆さんぜひ一度ためしてみられるようおすすめします。(東京都太田区八

梅川幸子様

〇 梅川幸子様、十月号の御通信嬉しく拝読致しました。貴女様の記事はこれで三回拝読致し何日もうらやましく思っております。私はまだ二十八才の独身で家族と一緒に生活しております関係上、プレイらしいプレイはまだした事がなく、毎夜ゴムの事ばかり考え寝れない事さえあります。梅川様ぜひ一度私と会って下さいませんか。もしプレイがだめなら、ゴムプレ

イに関する話など、いろいろお話しが出来ますれば幸いと存じます。私は特に女性用のものに興味を持っております。(ゴム引レインコート又はレインシューズ、ゴムの海水帽)など、これらを着せられ、ゴムせめにされ、貴女様になんじがために縛られ一日中ほっておかれたり、休みの時など二人共、ゴム製品を身にまとい一日中いろいろのプレイをしたり、二人で相談し合っているいろいろのゴム製品を集めようじゃありませんか。まだ書きたい事はたくさんありますがお逢いしてからのお楽しみにしておきます。まことに勝手なお願いですが、私毎週金曜日午後七時半から八時まで四条中学前に両手に週刊紙を持って立っておりますのでかならずおいで下さい。編集部の方へ。もっとゴムに関する記事をして下さいますようお願いいたします。(京都市八服部有三)

秋も深まって来ました昨今、編集部の方へ、愛読者の皆様お元気ですか。読者通信十一月号の有光令子様、八月号の東雪枝様、七月号の横溝とみ子様、いかがおすごしですか。初めてお便りいたします。私は満二十二才になる男性で

す。上京しての下宿生活は私を完全な愛読者にしてしまいました。私はM的な性格の強い者です。平素は慎んでおりますが内面は二重人格なのです。(Mと申しましても時には少しS的な性格ものぞきます)浣腸責め、舌奉仕等、羞恥的なものと肉体的な激苦とがミックスされたプレイが私の理想とする処です。身長五尺五寸体重十五貫どちらかというとやせ型で色は黒い方です。都内、近県のサドの女性の方、どなたか私を奴隷として思いきり責めて下さる方はいないでしょうか。かなり残忍な事でもきつと耐えぬいて見せます。私は露出的な願望も強い方です。巫女の装束等持っておりますので、女王様にそれを着ていただいてムチ打ちしていただいたら素晴らしいと思います。どんな激しいムチ打ちでも私を征服する事は出来ません。征服の宣言は貴女が私を便器とする時です。そしたら私ははじめて自らがドレイに落ちたことと認めます。あとは貴女の御意志のままに飼育なさって下さい。種々の責には時には抵抗を感じ素直に従わない(又従えない)事もあるでしょう。そんな時、私を教育する最上の手段は強制的にアヌスを

「新しい分譲品」

女子斗争場面写真

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

大塚啓子、玉田美佐子 略号(のわ)

二女格闘場面写真

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

大塚啓子、玉田美佐子 略号(のか)

全裸正面切腹姿態

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

大塚啓子 略号(のみ)

切腹に悶える裸身

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

大塚啓子 略号(のそ)

浣腸と便意の苦悶

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

遠藤百合子 略号(のけ)

強烈エビ責め

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

玉田美佐子 略号(ねむ)

後手首の高縛り

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

玉田美佐子 略号(ねへ)

椅子またぎの責め

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

玉田美佐子 略号(ねと)

血紅切腹決定版

大手札印画紙焼付

十枚一組 一〇〇〇円

大塚啓子 略号(れは)

血紅切腹凄惨姿態

大手札印画紙焼付

十枚一組 一〇〇〇円

大塚啓子 略号(れみ)

黒フンドシを誇る

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

達藤百合子 略号(くわ)

高压空気浣腸

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

大塚啓子 略号(むい)

浣腸場面大写真

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

大塚啓子 略号(むは)

施される浣腸

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

大塚啓子 略号(むろ)

責める事です。アヌスは最も屈辱的だ。便器とともに（あるいはそれ以上に）征服されたみじめさを身にしてみるのです。そのようにアヌス責めのアクセントを処々に入れていただければ、どのような責めにも耐えぬける自信を持っています。都内のサド女性の方、私をいじめぬいて下さる女王様の出現をお待ちしております。と申しましたが、私はいままでも一度もサド女性との経験のない未熟者で

す。でもどのような責めにもきつと耐えぬいてみせます。女王様には絶対服従を誓います。このような私ですがどうか飼ひ馴らして下さるサジスチンの出現を心からお待ちいたします。唯、私としてはプライベートの秘密の厳守と危険な、不具になるような事はさけていただきたいという事が条件です。一人で考えている種々のアイディアもありますが、それはお会いした時うちあけましょう。

四馬孝画

時代風女体切腹画

大中判印画紙焼付
五枚一組 一〇〇〇円
略号（ゆい）

一、座敷牢の美女

無実の罪によって座敷牢に押し込められた美女が、男の見ている前で牢内に白布を敷きつめ双肌ぬきになるや、短刀で下腹を切りさばき左の乳下に止めの一刺し。

二、介錯される美女

上半身の豊かな肉づきもあらわに庭に端坐して、左脇腹から臍下にかけて、脇差できりりと切れれば介錯の刃が一閃、麗わしの細首にさっと散る血しぶき。

三、駕籠の中の姫君

駕籠で送られる美女が氣にそまぬ縁談をいとい、腰巻一つの裸身となつて覚悟の切腹。守刀で臍下を十分に切つた上、更に鳩尾へかけて凄絶な十文字切腹。

四、果てる男装の美女

小姓姿に身を変えた男装の美女が、豊かな乳房もむきだしに前をくつろげて、その下腹に突き刺す小刀の切先。深夜の御殿にくりひろげられた倒錯美の絵巻。

五、裸身の切腹

も早や逃れぬと覚悟した美しい腰元は死んで操を守りぬこうと、輝くように白い肌をすべてさらけだし、守刀の短刀で下腹を一文字に切つた上、咽喉笛にひと突き。

有光様、東様、横溝様、そして都内のかくれた女王様、私は今飼ひ主を求めてさまよっています。どうかお手紙下さい。お待ちしております。ります（神奈川県八寺田定明）

十二月号並びに分譲フォト「く

の」「くな」「ろと」拝見しました。全くすばらしいモデルを発掘されたものです。日本髪、刺青それにふんどしと全くすばらしい妖美の極です。背中の美事な刺青もさること乍ら、肉体美もよろしい。ふんどしはやはり白より黒の方がよいようです。もう少し上にしめた方がよいかと思ひます。刺青の背を誇らし気に晒した肉体を黒ふんどしがひきしめていて、全くすばらしい魅力を発散し、凄艶な色香を漂わせているフォトは近來にない興奮を覚えさせてくれます。水々しい島田の髷もさること乍ら、髪と櫛巻きにし、さんごのかんざしを一本さし、ふんどしにヒ首をたばさんだ刺青の姐御姿の方が、このモデルにはピッタリと思います。此の種のものも企画して下さい。その他、十二月号の娘相撲の記事、並にマニア各位の座談会も楽しませていただきました。日本髪の女性のふんどし一本

の姿にあこがれている私にとって今回のフォトはカラーでないだけが残念ですが、その色彩は充分想像出来ます。今後の編集各位の努力を期待します。（室井英山）

今回の刺青モデルの発掘は、並びにそのふんどし姿のフォトの発表に全く素晴らしい。女の刺青とふんどし、正に到錯美の極致ではないか。モデルの体格もよく、ことにふんどしをきりりとしめた豊腰の周囲の量感はいくらもその美を讃仰する言葉もない位だった。手にした時余りの美しさにすぐ通信のペンをとったのであるが、それでも足りず、私をして又ペンをとらしめた。背の刺青も美事な出来で若い女性がその痛さに耐えて彫り上げ、完成せしめる心根は私にとって天晴れと云う他はない。色彩は知らないが、さぞ美事なものである。今まで女の刺青はよく書物で接したがそれも余り出来のよくない写真であったので物足りぬ思を抱いていたが、今回は生の鮮明なフォトに接してよろこびにたえない。更にうれしいことは、日本髪姿であった。日本の女性のふんどし一丁のりりしい素ッ裸に強いあこがれを抱いて

女性禪マニヤ(愛読者)

禪美フォト 分譲

フンドシ姿の魅力

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本 ミチ 略号(ふの)

フンドシ姿の差らい

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本 ミチ 略号(ふへ)

フンドシの前後左右

大手札四枚一組 四〇〇円
栗本 ミチ 略号(ふな)

フンドシの変った姿

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本 ミチ 略号(ふに)

いた私にとっては、更に刺青までのオマケのついた贈り物は近來、味わったことのない強烈な印象を与えてくれた。白ふんどしもよかったが、やはり女のふんどしとしては黒の方がより強烈なパンチを与え、美事な女体をいやが上にもひきしめている。女性のふんどしはやはり女性なるが故に色物がよいだろう。それも黒を筆頭に紫等

色の濃いものがよい。それにもえるような紅のふんどしのような赤系統なものもよいことは勿論である。フォトのポーズの中ではやはり動きのある片ひざをつき、片ひざを立て、顔を斜めに見せたものがよかった。ふんどしをきゅーっとした豊腰、きりりと臀部の美事な双丘をわって入るふんどしの状は筆舌にもつく難い妖艶さを、みずみずしい島田醬と相まってみごとに醸し出している。次にこのフォトから私の頭に浮んでくるのは、やはりふんどし一つの裸女の血斗模様である。刺青の姐御がふんどし一丁で長脇差を構えて同じく刺青をしたふんどし一つの相手の姐御、子分共とわたり合っている。はでな悲鳴と共に血しぶきあげてのけぞるふんどし一つの女子分。そして最後に相手の姐御を斬り倒してその屍の上に足をかけて見得を切る姿は全くすばらしいだろう。多くの子分共を相手にして超人的な立ち回りの末に姐御はふんどし一つの女子分、それに姐御の屍が累々と斃れ伏す中での大見得は、大奥裸女血斗の回想と共に私のあこがれているふんどし裸女血斗の一場面でもある。得がたいモデルを発掘された編集部は努力

に感謝すると共に、今後とも吾々マニアの胸のすくような企画と次々と立てられるようお願いする。同好各位の通信を待つこととや切。
(女斗彦)

秋風のすがすがしい今日この頃ですが、いかがお暮しですか。中川芳子さんのお元気な姿が目についてくるようです。中川さんの顔も知らないのに、こんな事を書いてごめんなさい。ぼくは毎日元気に仕事にはげんでいます。ぼくは今、東京にあるパチンコ店に勤めているおとなしい男です。芳子さんを後手に縛り、ころがして乳房を責めます。それから一度縄をとき両手吊りにします。それからくすぐり責めます。やわらかい羽根で芳子さんの腋の下をくすぐります。芳子さんは責めをさげようとするが、両手を上に吊られているのでさげることが出来ない。芳子さんはひめいをあげてもだえまします。そのうち芳子さんはぐったりします。芳子さんの体を下におろして縛りなおしエビ責めにします。芳子さんは苦しみの余り身をもだえます。どうも下手な文章でごめんなさい。そんな事を考えていると夜もねむれません。どうか

芳子さん、よろしくおねがいします。芳子さんが良いと言うならど、いつでも大阪に行きます。では今日はこのへんでペンをおきます。芳子さん、お体に気をつけて元氣にお過ごし下さい。あなたにあえる日を楽しみに待っています(東京都大田区八下田三郎V)

貴誌毎月楽しみに拝見しております。貴誌が殊に親しみが持て続けられて愛読したいという気持ちにさそわれるのは、読者の方々の告白や身近かな体験記などが豊富なのは勿論のこと、奇クサロンのような欄があることです。十一月号では編集部子の「四面楚歌をうたう」や「世相診断室」など、風俗誌編集者の態度がうかがわれ、うれしく思いました。十二月号では「座談会」の記事がよかったです。実際に、各人思い思いに発言させる、まとまりのつかないものになり勝ちだとは思いますが、又それだけ真実味があって、ほほえましいです。十二月号誌上では辻村隆氏と芳野眉美氏の両ベテランが活躍ですが、こういった方が次々とあらわれて誌上を賑わして下さることを期待します。(静岡県三島市八金子忍V)

はじめはお便り差し上げます。

ここ一年半ばかり前からの読者で
ございます。この欄でも時折り女
性の方からの通信がのっているの
に励まされ、ほんとうに胸の高鳴
る思いでペンを走らせておりま
す。もしかしたら、この手紙が読
者欄にのるかも知れないと字を書
く手もふるえるようです。私、ほ
んとうにこのような内気な娘でこ
ざいます。でもこんな手紙を書く
んだから、ほんとうは心臓なんだ
わと、ひとりでベロツと舌を出し
たりしています。只今、洋裁学校
へ週のうち三日は通っています
が、その他の日は、お茶やお花や
と花嫁修業中です。夜は外出させ
てもらえませんが、日中はなか
なかとこれでも忙しいのです。と
ころで私一つのアバンチュールの
プランをもっているのです。こん
な私が誰にも知られず緊縛のモデ
ルになってみたら、と考えてひと
り愉快になっています。私、お化
粧すると素顔とところと変ってし
まうのです。これは学校の演芸会
で証明済みなので自信がありま
す。口絵の第一頁に載っている私
の緊縛ポーズを誰も私だと知らな
い。私だけの秘密。考えただけで

も愉快じゃない。でもちよつと危
険かな。読者の三、四人で私をモ
デルにしてくれないかしら。私、
踊りのときの服装やお化粧で行っ
てもよろしいです。これでしたら
厚化粧ですから顔もいくらでも変
えられます。未来のハズにこれ私
よ、といっても信用しないなんて
愉快じゃございませんこと。一度
辻村先生のモデルになって飼育さ
れてみたいけど、先生のご都合如
何でしょうか。もしおよろしけれ
ばご連絡下さい。家は商売をして
いますので両親は忙しくてうるさ
くないいせんから、お便り直接下
さって結構です。(神戸市長田区
△志村善子△)

「日曜工作室」を歓迎して下さ
った水野弘さん、有難う。あのサロ
ン記事を奇クが採り上げて下さ
ったお蔭で、私の許にも直接反響が
あって喜んでいます。読者の中に
は記憶力の強い方があって、六三
年度十二月号に掲載された小生の
拙文「マニヤ通信」願いの叶った
百合子嬢へ」に記載した電話連絡
方法によって小生の所在をつきと
め、是非器具一式を作ってほしい
と頼まれたり、プレイの出来るチ
ャンスを待っていたという方とお

女相撲と女斗美

女相撲組打ち

相撲マワシ着用
大手札印画紙焼付

八枚一組 八〇〇円
略号(すか)

女相撲投げ業

相撲マワシ着用
大手札印画紙焼付

八枚一組 八〇〇円
略号(すね)

禪裸女の争斗

白晒六尺フンドシ着用
大手札印画紙焼付

五枚一組 五〇〇円
略号(めん)

禪裸女の寝業

白晒六尺フンドシ着用
大手札印画紙焼付

五枚一組 五〇〇円
略号(めき)

裸女相搏つ

白晒六尺フンドシ着用
大手札印画紙焼付

八枚一組 八〇〇円
略号(えく)

女相撲四十八手 (1)

大手札印画紙焼付

六枚一組 八〇〇円
略号(すは)

モデル 木村洋子、大塚啓子

女相撲四十八手 (2)

大手札印画紙焼付

六枚一組 八〇〇円
略号(すむ)

女斗立術の応酬

大手札印画紙焼付

六枚一組 八〇〇円
略号(すち)

立術の攻撃場面

大手札印画紙焼付

六枚一組 八〇〇円
略号(すた)

寝業の女レス

大手札印画紙焼付

六枚一組 八〇〇円
略号(すほ)

女斗連続場面

大手札印画紙焼付

九枚一組 一〇〇〇円
略号(すく)

木村洋子 完全逆さ吊りフォト 分譲

大中判印画紙焼付三枚一組 一〇〇〇円 略号(さつり)

話合いする事も出来ました。「日曜工作室」の二回目は、「Mベル」の作り方というものでしたが投稿前に嵐が近づいたために当方で自粛した方が無難と判断し、そのまま机の引出しの中にしまい込まれたままです。続く原稿としては「枷」の作り方が出来上っており、これは日曜大工のお好きな方なら訳なく仕上げる小道具を並べてみたものです。材料はデパートの「日曜大工コーナー」で簡単に入手出来る棚板や角材を使っただけの本格的刑具ですが、出来上りが形々しく余程プレイの進んだ方ではないと実用されないし、感興が湧かぬでしょう。また、プランとしては映画「ショック」を見て以来、ギロチン、絞首台、拷問椅子、晒台などを計画していますが、やはり場所やパートナーの関係で実現させる事は目下のところ不可能です。プランだけの発表では無価値なような気がして発表する機会はないプレイ用の小道具なら、津田

亜紀子嬢へ寄せた一文の中から数種類の器物の使用が発展的に考案されるところに思ひます。自転車店の店頭にある荷懸縄は刺戟的です。金物屋に売っている犬の首環や鎖の類いはプレイへの憧憬をおおります。続々とそれらの利用法が考案されるのですが、どうも発表出来るようになりません。しかし、話し合うだけでもサジスチックな血を抑え、マゾの悩みを慰める事が出来るなら信頼し合える友が寄り合っただけ有意義に過ぎないかと常々考えております。また、積極的にマゾヒズムの立場で女性が作業に参加して下さるなら、新しい器具の考案を実行に移して資料として発表出来るのですが、そうした好機に恵まれないのが残念です。小生と云うのはどうぞご連絡下さい。お待ちしております。

(東京都新宿局区内下落合郵便局止八中田明)

総合雑誌「世界」十月号掲載の

「信じ、服従し働らく」(向坂唯雄)総評文学賞第一回受賞作品は、はっと息をのむ様な描字がリアルにえがきだされています。中学時代の回想、美しい少女がブルマを脱がされ先生と看護婦に無理矢理浣腸される場合。少年がベッドの上で姉と母親に懲罰の浣腸をされる場面。貴誌でもせめて、この程度までのせてほしいと希望します。自粛の態度は結構ですが、何となく物足りない時があります。同封のさし絵、公開がはばかられる様でしたなら、先にお送りしたものとまとめ、同好の方の眼にふれる様な形でのご紹介いただきたく存じます。(東京八原由貴子)

△編集部へ同封されました絵は、別に公開を憚るものではありませんが、うすい鉛筆がきです。で、このままでは製版できません。故、描き直してもらってから、発表したいと思ひます。

私は便秘症で悩んでおり食物など充分気を使っていますが、時々病院へ行って看護婦さんにイルリガートルで浣腸してもらって宿便を出してすっきりした気分になりたいと思うことがあります。病氣

新宮明夫氏提供

処刑場面写真

絞首刑

大手札二枚一組 三〇〇円 略号(るく)

引廻しと晒

大手札二枚一組 三〇〇円 略号(るに)

磔(はりつけ)

大手札三枚一組 三〇〇円 略号(はみ)

晒(さらし)

大手札三枚一組 三〇〇円 略号(さら)

絞首刑

大手札三枚一組 三〇〇円 略号(こけ)

晒台の生首

大手札三枚一組 三〇〇円 略号(のく)

斬首の瞬間

大手札三枚一組 三〇〇円 略号(のき)

斬首処刑場面

大手札二枚一組 三〇〇円 略号(くし)

でもないのに、病院へ行って受付で浣腸して下さいといひ出す勇氣もないので、浣腸に理解がある看護婦さんがいる病院が何処かにあればほんとに良いと思つています。看護婦さんなら医療的に適切な浣腸処置をしてくれるでしょうし、排泄まで充分がまんさせて、トイレへ行く間に洩らす心配などなくおまるも用意してくれるでしょうから、東京、大阪などへも用事でいきますが、滞在中便秘で悩まされますが、イルリガートルで浣腸おねがいしますと気安く頼める病院の看護婦さんいらっしやらないでしょうか。(名古屋市中清水次郎)

初めて当読者通信に筆をとる二十七才の青年です。どうぞよろしく。さっそくですが、十一月号での通信のページにおられた門田澄子さん。私は貴女に興味が持てます。失礼ない方でどうも、というのも私が貴誌を愛読しはじめて(六年以上)北九州市から(以前は北九州五市)の通信者は数えるほどこしいのです。貴女のような女性が通信している事に意を得て一度貴女とお合してプレーをして見たいと思いますので十一月の

第一土曜日七時に戸畑新駅上り乗車券発売口前の所で右手に週間誌、左手にハンカチ(白色)を巻いて待つて下さい。私も貴女と同じ様な恰好で行きます。きつと楽しいプレーができるかと今から楽しみにしています。(北九州市八立本幸治)

「奇ク」昭和三十五年六月号を先日入手しました。小生は三十五年末からずっと購読しています。でも三十七年頃までの本はみんな古本屋へ売り、殆どありません。三十八年からの本は尊く保存して、暇をみて繰り返し読んでいます。他からの制約が有り現在の「奇ク」は内容に物たりなさがあります。でも今月号から「花と蛇」の続篇が掲載され喜んでいきます。これから特に載せて貰いたいのは、男性が女性の前で恥しめを受ける。またその逆という様な場面を多く出るよう編集部の方々にお願いいたします。写真はあまり縛りの多いのは嫌いで、出来れば日本髪のはり、着物をずらし、自由を奪われ恥しめを受けているようなシーンがあれば……と思つています。また読者通信十一月号の三重県の橋本和江さん、お便り頂けた

ら幸いと思つています。(静岡八藤井正義)

○ 全国の鼻フェチシズムの女性の皆様。私は女性の鼻に強烈な性的執着を感じます。理想の鼻というのは梨花様のような肉付きのいい高慢そうにすまして鼻です。電車の中で彼女に良く似た鼻の女性に会うと興奮してしまいます。許されるなら(いっそ無理にでも)彼女の鼻の穴に舌を奥深くさし込んで甘い鼻汁を吸い取ってしまいたいくらいです。さらに彼女の鼻に鼻環をつけて責めてみたいと思います。鼻環を引っ張ると高い鼻は上を向いたり、横を向いたり、あるいは鼻孔が細長く伸びたり、鼻障子が見えたり色々な形に変化することでしょう。長い責めの後で彼女の鼻にしびれるような鼻キッスを繰り返します。彼女の鼻をまるでアメ玉でも舐めるような口の中に入れて愛撫するのです。時々歯で噛んでやるほどに……。そんな鼻責め、鼻虐め、鼻キッスの愛撫を求めている女性の方はご一報下さい。ご満足のいくまで責めて虐め抜く自信があります。また鼻フェチシズムに興味のある女性との文通を望みます。その他い

新作マゾ・フォト

(新人モデル)

人間馬の調教プレイ

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まの)

足舐めの奉仕と強制

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まわ)

股責めにあう顔面

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(また)

縛られて翻弄される

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まひ)

踏みにじられる顔面

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まな)

肩車に奉仕する青年

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まは)

玩具にする縛り人形

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まて)

首を太股にて絞あげる

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まや)

ろいろの企画がありますが今回はこの辺で。(東京都小金井市八石原道夫V)

十二月号読者通信欄に投稿いたしました「大阪の井手雅子さん」彼女との文通を切望するものです。奇クを愛読し始めてから数年になります。私の秘密の楽しみの一つです。実際に緊縛をした経験などはありません。あくまでも空想の世界にいるものです。私のイメージとどうやら通ずる所があるようですが、これは「プレイ」であって苦痛を伴うものであったり、肉体的にも精神的にも傷くものであってはならないと思います。同号にありました竹野ひろ子さんのように緊縛した身体にコートを纏って散歩をするとか、あるいはマスク(下に猿轡)、手で映画を見るとか、緊縛姿で夜のドライブをするとか、または後手のまま数時間一人で放置するなど、異常な刺激を求める次第です。それは美的感覚を加味したものであること、あくまでも優雅さを欠かないこと、ですからキラビヤかな着衣に合理的緊縛方法を望むものです。緊縛以外のSMには興味がありません。可憐なること

を文通いたしたく思う次第です。なお居所は編集部にお問合せ下さい。(東京都八関正V)

十二月号で「看護技術」をご紹介された佐東雅枝様早速拝見しましたところ種々と目新しいことばかりでとても参考になりました。中でも二立米で回盲部を過ぎて小腸内に入る恐れがあるという記事にはとても驚きました。何放って水道から直接注入するときなど、三立米近くまで無理に入れたことがしばしばでしたから。そんなときあと暫らく腹痛が起るのはそのせいだったのです。怖くなりましたので今後は自重することになります。二人がかりで患者の肛門から、指で宿便を掘り出す話も面白いナと思いました。少しものたりなかったのは臨床例が皆無なこと、で、浣腸を受けた患者の例が沢山上げられていたならお素晴らしかった事と思います。法律専門書に判例集があるように、便秘や浣腸の症例を集めた医学書はないものでしょうか。ナースさんの貴女はご経験も豊富にお持ちでしょう。出来ましたらご文通願いたいと存じます。この通信掲載されましたら、翌月十日までに下谷上根岸局

〔今月の新版〕Mフォト 新人S女性出現

Mフォト・フアンの要望に応えて今月の新しいMフォトを提供いたします。これは十日程前に撮影したもので、口絵に掲載不能のため特に分譲品としました。モデルは全身刺青の嗜虐女性山原清子。彼女が今まで操ってきたM男性に對する豊富な経験をもとにして演じた肉迫的場面をマニヤの方々にごらんに入れます。

股挟み

女の逞ましい股に、がっちり挟まれた男の顔。

大手札印画紙焼付
四枚一組 一〇〇〇円
略号(あと)

素足の脂

女の美しい素足をべっとり顔の上にのせられた男。

大手札印画紙焼付
五枚一組 一〇〇〇円
略号(あて)

ムチの威力

縛った男をムチを揮って意のままに料理する高慢な女。

大手札印画紙焼付
十枚一組 二〇〇〇円

人間便器の男

トイレの中で女の便器の代用なり下った男の顔。

大手札印画紙焼付
十枚一組 二〇〇〇円
略号(あす)

蠟涙の洗礼

女の手蠟涙を全身に浴びせられて悶えている縛られ男

大手札印画紙焼付
四枚一組 一〇〇〇円
略号(あせ)

尻の下顔

女の尻の下に押しつぶされて、うごめいている男の顔

大手札印画紙焼付
二枚一組 六〇〇円
略号(あた)

海老しばり

エビ縛りで苦しんでいる男を思いのままに弄ぶ女。

大手札印画紙焼付
六枚一組 一四〇〇円
略号(あそ)

神酒授与

ネクタールを直接の手から口へ与えられている男の幸福

止でご連絡頂ければ幸いです。
(台東区八北沢操)

新しい希望の年を迎え奇ク同好の諸氏とともに益々発展と躍進の一年であることを祈ります。私事過去何回かに渉り女斗、肥大美追及の同志へ呼びかけの通信を当欄を借りていたしましたところ、計らずも全国多数の方々から色々な便りを戴き誠に有難うございました。その都度ご返事やらお便りなどを書いて参りましたが、万一連絡もれの方々がありませんら改めてここでおわびとお礼を申し上げます。今後とも女斗や黒ふん美への追慕研究を皆様とともに進めて行きたいものと考えております。なおこの方面の参考資料や見聞などを本誌へ発表して下さい。また私宛直接お便り戴ければなお感謝の至りです。何分にも唯今では女子の相撲などは世上に公開される事はなく一部好事家の願望のイメージが本誌奇クを通じて発表されるのみにて全く淋しい限りではあります。またそれだけにその存続の意味も重要なポイントだと存じます。このような理由のもとにメトミ愛好家ならびに女体黒ふん追美の諸氏とともに一そう本誌の

育成に協力してゆこうではありませんか。私は奇ク発刊当時から女体相撲の同好者の一人で、ことにメトミなる好適な語句を掲載した宗始A氏の足跡を省みて興味しんしんたる者ですが、他日メトミ発祥語源とそれにまつわる研究の過程など改めて発表したいと思っております。毎号色々な記事や絵画などにより各々のイメージを発表され感激です。ことに芦浦氏を初め東京の岡平氏、浜松の柳田氏らとは是非ご文通出来れば幸いです。お差支えなくばご住所お知らせ下さいお願い申し上げます。私事のみ書きましたが、今後益々研究の限界を深め奇クへも発表したいものと思っておりますので、同好諸氏のご援助とご交誼をお願いいたします。(神戸市長田区八増田トシロー)

十二月号を拝見いたしました。グラビア写真で衣類のまま縛ったのは、あまり望ましくないと思っております。やはりパンティ、ブラジャー、メンスバンド、パタフラ、水着、オシメカパーなどの上から縛った方法が、よいと思っております。私達の間では、浣腸責め、乳房責め、全裸を後ろから取

股責極楽

女の股でがっちり咽喉輪を押さえられている男。

大手札印画紙焼付
四枚一組 一〇〇〇円
略号(あつ)

足舐と嗅香

女の素足を舐めさせられ、尻の香を嗅がされる男。

大手札印画紙焼付
五枚一組 一二〇〇円
略号(あこ)

顔面騎乗

男の顔の上に、どっかと豊満なお尻を据えた女。

大手札印画紙焼付
七枚一組 一五〇〇円
略号(あう)

人間犬の調教

首輪とくさりとムチとで厳しく芸を仕込まれる犬男。

大手札印画紙焼付
十枚一組 二〇〇〇円
略号(あえ)

尻で潰れた顔

女の巨大な尻によって押しつぶされた男の顔。

大手札印画紙焼付
三枚一組 八〇〇円
略号(あく)

足指の饗宴

女の足の指に挟んだお菓子をお口でいただく緊縛男。

大手札印画紙焼付
二枚一組 六〇〇円
略号(あの)

男を縛る女

男を縛り上げて自由を奪い恣に弄った末屈伏させる女。

大手札印画紙焼付
十枚一組 二〇〇〇円
略号(あに)

尻責股責

女性の最大の武器尻と股とで男の顔をむちゃに責める。

大手札印画紙焼付
十枚一組 二〇〇〇円
略号(あに)

以上、十六組のマゾフォトは、前回発表のMフォトシリーズの好評により新しく制作した新しいモデルによる新作品です。分譲専用ですから口絵や本文にも絶対発表いたしません。

◎ 女性モデル

◎ を募ります

○本誌では、口絵写真並に限定版用或は分譲写真用の女性モデルの方を募っております。

○誌上発表支障の方は、限定版又は分譲用フォトに出演していただきます。又、助手介添若しくはプレイのみ出演御希望の方でも結構です。

○出演或は参加御希望の方は、編集部宛御照会下されば、報酬その他詳細お返事の上、お打合せいたします。応募の方の秘密は厳守いたしますから御安心の

うえ応募下さい。

○緊縛写真御希望者は勿論のこと女相撲、女斗美、切腹、浣腸などを初めとして、Mフォトのサジスチンとして出演ご希望の方など特に歓迎します。

○本誌の充実のため何卒奮ってご応募下さい。余暇を利用してのご参加でも差支えありません。特に妊婦フォト撮影可能の方は遠近に拘らずご連絡下さい。

天星社編集部

った写真なども望んでおります。近ごろのS小説は「S小説らしくなくなった」というような感じがします。その中で最もよいS責めを感じさせるのは「花と蛇」以外にはありません。これからは、「花と蛇」のようなS小説が雑誌となつて出てくるのがまちどおしくらいであります。また、「花と蛇」の別冊を期待しております。(初めから「続編が終る」までのことを、もう一度別冊として書店に提供して下さることを願っております。少々高くても(五百円〜七百

円まで)なら買いたい、という人も全国にいらしやうと思ひますので、よろしくおねがい申し上げます。(岐阜八ーぼたんーV)

○ 編集部の皆様始め奇ク愛読者諸姉様ご各位へ愛読者通信欄の紙上を拝借いたしましたこと挨拶ならびにご懇願申し上げる次第でございます。さて不肖私奴も数年間(来より)貴誌の地方愛読者の一人として毎月街の書店に貴誌発刊されるのを唯々一つの心の糧としてお待ちしております。が、最近殆んど

誌を見受けず一沫の淋しさと不安を抱く今日この頃ですが、今月は幸せにも購入が出来嬉しく拝読させて戴きました。暫くぶりに編集部の方達のご健闘の跡や愛読者諸姉様方の活発なご意見発表を拝見し、拙筆駄文を忘れ勇気を鼓して私の夢や渴望を述べさせて戴きます。愛読者諸姉様方の内で、私を奴隷として飼育し残酷陰険に総ての権利や希望を剥奪し、威厳ある女ご主人様として私の上に君臨下さる方がございましたら、私如何なる羞恥責や鞭打緊縛責の凌辱をお受けしても辛抱申し上げます。また精神的責苦やご主人様の心のペットとして執拗に翻弄されても結構でございます。私のこの被虐性劣等感をご理解下さる県内または近隣の県内にご在住していらっしゃるSの女ご主人様、私の夢や希望を叶えて下さいませ。勿論ご諸姉様方達の年令、職業、その他一切の条件は私の方にはございません。またSに関するご趣味(責ご奉仕のお好みに従います)に絶体服従をお誓いいたします。大変申し遅れましたが、私の簡単なプロフィールをお紹介申し上げます。今後のご参考資料にして下されば幸いです。私は現在名古屋地方の無線

関係のオペレーターをしている三十五才の男ですが、若き頃硬派のS女学生達の下で酷使されていた時命令に背いた理由で彼女達の激怒の逆鱗に触れ、その時受けた私刑の傷が原因で男として生る資格を剥奪され総て望を諦め生涯独身生活觉悟しているものです。そんなわけですので諸姉様方の同性ともお考え下さって下女としてのご奉仕をもういたします。どうか遠慮なくご自由に飼育して下さいますよう心からご懇願申し上げます。醜男身長一・六三米、体重六〇瓩、強度なM傾向のもので、S諸姉様方々のご返信をお待ちいたします。なお住所は編集部宛お問合せ下さいませ確実ご返事申し上げます。(愛知県知多郡八M・亮介V)

○ 読者の皆様。新しく愛読させて頂きましてからすでに五カ月立ちました。その間に女王様になる方を望んでおりましたが、奇クの十一月号読者通信によりまして同好の方を得て嬉しく存じます。この度始めて下原八重子様のお召しを受け感謝いたしております。今までの経験に基づき馬や犬でも椅子にでもなり、ご命令通り奉仕いたし

ます。女王様の命令に絶対服従します。特に選んで頂きました女王様に最高のプレーとなるように飼育に馴らして下さい。お願いいたします。ご連絡は通信欄にのった日から毎週日曜日午後七時から七時半まで渋谷駅忠犬八公銅像前に左手に白いハンカチを巻き、右手に週刊誌を持ち待っておりますから「清水」と声を掛けて下さい。女王様のお越しをお待ち申し上げます。最後に奇巧のご発展と読者の皆様のご健康をお祈り申し上げます。

(東京都世田谷区八早川二郎)

初めて「読者通信」の仲間入りをさせていただきます。考えて見ますと、私がKK誌の読者になって、十年以上たちますが、やっと大人の仲間入りをして以来、私の性格にぴったりと密着したように、貴誌が発展を重ねていることをまず慶賀したいと思います。そうして私も貴誌から与えられるだけではなく、全国の同好の方々とともにKK誌のもつファンタスティックな世界に実際に遊べるものならばと思ひ筆をとりました。私は

幼児の時からアヌスに異常な関心があり、長じるに従って自虐的な遊びにふけるようになり、また自分から進んでホモの世界で受身に立ったりしましたが、純粋のホモでない私は、何かピントのずれたような気分がして満足が得られないのです。貴誌の影響でM・Sの人達ともプレイをしたことも一度ありますが、アヌスに興味のない方で失敗でした。全国の浣腸ファンの皆さん、それからA感覚を楽しむ皆さん、是非ご交誼を願えないでしょうか。そうして手をたずさえて、「責任ある」楽しみの世界に耽溺したいものです。私は都内の商社に勤めるサラリーマンで、大人としての責任はわきまえていけるつもりです。是非お便りを下さい。手紙は初回は編集部から回送して下さい。重ねて全国のA感覚を求める士よ団結せよと呼びかけたい気持です。(東京八ANUS生)

倉区内に住む今年二十五才になる男性です。奇巧を愛読し二年間、ずっと貴女のような女性とめぐり会い一緒にプレイする日を夢みておりました。ぜひお会いしてお話しなり、縄のプレイを楽しみたいと思います。十一月一日午後六時小倉駅前祇園太鼓像のそばでお会いしましょう。貴女は左手に白のハンカチをまいて下さい。その日都合がわるい時は三日の同時刻にお会いしましょう。奇巧を通じて、お互いに誠実なお友達になりたいと思います。ぜひきて下さるよう祈っております。(北九州市小倉区八藤井正志)

他で本誌ファンに合うものを上映上演しているものを併せて載せて貰うと非常に楽しいです。是非お願いいたします。(東京の貴誌の熱心なファンより)

八編集部から青木順子ショウについて、十月中旬、仙台市定禅寺通二、ミュージック・シャター・リド劇場にて上演するという連絡がご本人からあったとき、その後連絡なく、上演の予定は先々まで定っていないようでした。従って残念ながら掲載できませんでした。

十二月号の山原清子さんの刺青姿のグラビヤには全く魅せられてしまいました。平常から若くて肉体的女性の刺青姿を見たいと思っていました。辻村先生がうらやましくさえなりました。十二月号のグラビヤも辻村先生のカメラ・ハントによって一層映えました。文章が、またグラビヤによって、文章の方も一段と引き立ちました。早速代理部の刺青フォトの分譲品三組を求め、刺青女性の美しさを堪能しました。カラー写真かスライドでもあれば最高なのですが、撮られなかったとは誠に残念です。(千葉市八守山生)

次号(二月号)は十二月二十五日に発売いたします

五十万円懸賞原稿募集

先月号で五十万円懸賞の原稿を募集しましたところ、いち早く数篇の応募原稿が送稿されてまいりましたが、残念ながら入選作品として掲載するに耐えるものは見当りませんでした。引続いて募集を継続いたします故、秋の増刊にふさわしい佳作をお寄せ下さるようお願いいたします。

賞　金

一	席	各	拾	万	円	一	名
二	席	各	五	万	円	二	名
三	席	各	参	万	円	五	名
四	席	各	壹	万	円	十	名
五	席	各	五	千	円	十	名

愛読者原稿募集

△体験、告白、手記△

どなたにも一つや二つの思い出とか、体験とかいったものが必ずあるものです。物言わざるは腹ふくるるのたとえどうか皆様の真実の叫びをどしどし文字にしてお寄せ下さい。採用篇には本誌三月分乃至一年分贈呈します。

△創作、小説、物語△

御自分の描く夢をまとめて

規　定

- 一、本誌の読者に提供するに相当したS・Mを中心とした創作、小説などのフィクション。告白、体験、手記、或は論説、意見など形式は問いません。S・Mの他、フェチ切腹、浣腸その他特異な趣向のものも大いに歓迎いたします。
- 一、すべて未発表の自作に限ります。
- 一、枚数は原稿用紙五十枚以上のこと。
- 一、締切は別に定めませんが、入選作品は翌月号に発表の上、賞金を呈します。
- 一、応募原稿には「懸賞作品」と赤エンピツにて肩書きして下さい。

天星社編集部

下さい。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。

△(映画、雑誌)通信△

映画や既刊雑誌の中で、特に興味をお持ちになった事項を通信下さるようお願いいたします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。

△レポートマニヤ通信△

新聞記事等で関心をお持ちの事項或はマニヤ各傾向の本誌に対する通信をお寄せ下さい。本誌二月分贈呈します。

◎尚、以上の五項目の採用原

稿には御希望により編集部作成の各種フォトを贈呈いたします。

△読者通信△

編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、本誌に対する希望や御意見、感想、思ひ出話、或いは読者相互の交歓文通、応答などをお寄せ下さい。

△奇クサロン△

奇クサロン向きの短文、マニヤ通信、写真絵画などを募ります。文章は原稿用紙三枚まで。採用篇には薄謝進呈します。

☆本誌御購読の栞☆

一月分(1冊) 三〇〇円△送共△
三月分(3冊) 九〇〇円△送共△
半年分(6冊) 一八〇〇円△送共△

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価三〇〇円

一月号 (第十九巻第一号)
(通刊第一九八号)

昭和三十九年十二月二十日 印刷
昭和四十年一月一日 発行

編集印刷兼発行人 箕田京二
大阪阿倍野局私書函第十四号

発行所 天星社

(振替口座大阪五〇〇四二番)
(昭和三年四月三日第三種郵便物認可)
(国鉄大局特別扱承認雑誌第一二二二号)

☆代理部分譲品について☆

○代理部分譲品は本誌に広告してある分は全部在庫しておりますから、略号明記の上お申込み下さい。尚、分譲品の詳細は、目錄を御請求の上ごらん願います。
○既刊雑誌の旧号は別項の通り在庫してありますから、売切れぬ中御注文願います。
○口絵写真の複写転載は固く禁じます。